山形県埋蔵文化財センター調査報告書第179集

加藤屋敷遺跡第1・2次発掘調査報告書

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

加藤屋敷遺跡

第1・2次発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 179 集

2009

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

加藤屋敷遺跡

第1・2次発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第179集

平成21年

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

遺跡全景（北東から）

ＳＧ 23 河川遺物出土状況（ 西から）

墨書土器

511
494
448
457
483
454
484
482
541

木製品

巻頭写真 4

序

本書は財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、加藤屋敷遺跡の調査成果をまとめたものです。

加藤屋敷遺跡は山形県南部の置賜盆地の東北部に位置する南陽市にあります。南陽市は、果樹栽培が盛んで、県内でも有数の「果樹栽培のまち」で知られています。また、湧き出る温泉と豊かな自然に恵まれ四季折々の彩りが美しいまちでもあり、明治時代に地域有志の力で作られた公園で日本さくらの名所100選の地に選ばれた烏帽子山公園も有名です。

市内には、蒲生田古墳群や、県内最大で東北でも６番目の大きさを誇る前方後円墳の国指定稲荷森古墳があり、また近隣には、国の重要文化財に指定されている彩漆土器とクッキー状の炭化物が出土した押出遺跡などがあります。

この度、一般国道13号上山バイパス改築事業にかかわり、加藤屋敷遺跡の発掘調査を実施しました。調査では、縄文時代と奈良・平安時代の竪穴住居、井戸、河川などが確認されました。河川からは多くの土器や木製品が出土し、土器には、「物」、「主」、「子鷹」などの文字が墨で書かれた墨書土器もあり多大な成果を得ることができました。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産と言えます。この祖先から伝えられた文化財を保護するとともに、祖先の歴史を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちに課せられた重要な責務と考えます。その意味で本書が文化財保護活動の啓蒙や普及、学術研究や教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりますが、調査において御支援、御協力いただいた関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

平成21年３月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

理事長　山口常夫

凡　　例

1　本書は、一般国道13号上山バイパス改築事業（中川工区）に係る「加藤屋敷遺跡」の発掘調査報告書である。

2　既刊の年報、現地調査説明資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。

3　調査は国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

4　本書の執筆は氏家信行（第Ⅰ・Ⅳ・Ⅵ章）、伊藤純子（第Ⅱ・Ⅲ章）が担当し、柏倉俊夫、小笠原正道、佐東秀行、安部実、長橋至、伊藤邦弘、黒坂雅人が監修した。

5　遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第Ｘ系（世界測地系）により、高さは海抜高で表す。方位は座標北を表す。

6　本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

ＳＴ…竪穴住居	ＳＭ…祭祀遺構	ＳＥ…井戸	ＳＨ…墓坑
ＳＫ…土坑	ＳＧ…河川	ＳＤ…周溝・溝	ＳＸ…性格不明遺構
ＥＬ…カマド・炉	ＥＰ…遺構内柱穴	ＲＰ…登録土器	ＲＱ…登録石器

7　遺構実測図の縮尺などは各図に示し、各々スケールを付した。図中のスクリーントーンは下記を表している。なお、遺構実測図中の石器は1/4、土器・石製品は1/6の縮尺で採録した。

礫…　土器…　木炭…　焼土範囲…　炭範囲…

8　遺物実測図は遺構毎に掲載し、各図に遺構名を明記し、各々スケールを付した。なお、土器実測図の断面を黒く塗りつぶしたものは須恵器を、スクリーントーンを入れたものは黒色処理を表している。また、木製品・石製品実測図のスクリーントーンは下記を表している。

焼焦…　樺皮…　漆…　媒・膠（にかわ）？…

9　墨書・刻書土器の「□」は解読不明文字を示す。

10　遺物観察表は観察項目の違いから、遺物観察表（木製品を除く）と木製品観察表として掲載した。なお、遺物観察表・木製品観察表中の（　）内の数値は、図上復元による推計値、[　] 内の数値は残存値を示し、出土地点のＹは床面を示す。

11　写真図版は任意の縮尺で採録した。

12　基本層序および遺構覆土の色調記載については、1997年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版基準土色帖」によった。

13　発掘調査及び本書を作成するにあたり、山形大学三上喜孝からご協力、ご助言をいただいた。（敬称略）

調 査 要 項

遺　跡　名	加藤屋敷（かとうやしき）遺跡					
遺 跡 番 号	平成 17 年度登録					
所　在　地	山形県南陽市大字川樋字加藤屋敷					
調査委託者	国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所					
調査受託者	財団法人山形県埋蔵文化財センター					
受 託 期 間	平成 18 年 4 月 1 日～平成 21 年 3 月 31 日					
現 地 調 査	第 1 次調査　平成 18 年 5 月 17 日～平成 18 年 11 月 24 日					
	第 2 次調査　平成 19 年 7 月 17 日～平成 19 年 9 月 28 日					
調査担当者	平成18年度	調査第一課長	野尻侃			
		調査研究主幹	長橋至			
		主任調査研究員	齊藤主税（調査・整理主任）			
		調査研究員	佐藤学			
	平成19年度	調査課長	長橋至			
		専門調査研究員	伊藤邦弘			
		主任調査研究員	氏家信行（調査・整理主任）			
		調査員	伊藤純子			
	平成20年度	整理課長	安部実			
		調査課長	長橋至			
		課長補佐	黒坂雅人			
		主任調査研究員	氏家信行（整理主任）			
		主任調査研究員	佐竹弘嗣			
		調査員	伊藤純子			
調 査 指 導	山形県教育庁教育やまがた振興課文化財保護室（平成 18 ～ 19 年度）					
	山形県教育庁文化遺産課（平成 20 年度）					
調 査 協 力	南陽市教育委員会					
	山形県教育庁置賜教育事務所					
委 託 業 務	基準点測量業務	株式会社ケンコン				
	遺構写真実測業務	株式会社シン技術コンサル				
	自然科学分析業務	パリノ・サーヴェイ株式会社				
		株式会社パレオ・ラボ				
		株式会社加速器分析研究所				
		株式会社吉田生物研究所				
	遺物保存処理業務	財団法人山梨文化財研究所				
		株式会社吉田生物研究所				
発掘作業員	安達勤	阿部悦子	安部孝	板垣牧子	今井絹子	大木千恵子
	小沼孝	鏡広子	柏倉賢助	川合昭一	木村弘一	草刈多喜

	草刈利男	小沼末子	小林宏	今野孝一	齋藤峰子	酒井秀雄
	寒河江美代子	佐藤茂	佐藤武彦	佐藤昌一	佐藤由美子	澤口與助
	斯波久一郎	神保清治	鈴木晴夫	高橋敏子	高橋仁人	武田一彦
	武田武夫	戸田よし子	奈良崎都美子	藤丸ますみ	古頭宏純	丸山いち
	三澤国昭	皆川泰	百瀬桂治	山川章衛	山口秀男	山野辺冨美枝
	吉田重夫	渡辺勇	渡邊みゆき	（五十音順）		
整理作業員	粟野元子	大泉智恵子	金沢美由紀	小沼末子	境孝浩	椎名喜久子
	菅原仁美	鈴木登美子	高瀬泉	高橋明美	永井利子	中嶋美恵子
	新関英一	古内とき子	（五十音順）			

目　　次

Ⅰ　調査の経緯……1
Ⅱ　遺跡の位置と環境……4
Ⅲ　遺構と遺物の分布……8
Ⅳ　遺構と遺物……9
Ⅴ　自然科学分析……21
Ⅵ　まとめと考察……54
付編
「加藤屋敷遺跡の墨書土器について」　山形大学　三上喜孝
報告書抄録……巻末
加藤屋敷遺跡遺構配置図……付図

表

表１　遺物観察表（１）…… 165
表２　遺物観察表（２）…… 166
表３　遺物観察表（３）…… 167
表４　遺物観察表（４）…… 168
表５　遺物観察表（５）…… 169
表６　遺物観察表（６）…… 170
表７　遺物観察表（７）…… 171
表８　遺物観察表（８）…… 172
表９　遺物観察表（９）…… 173
表 10　遺物観察表（10）…… 174
表 11　遺物観察表（11）…… 175
表 12　遺物観察表（12）…… 176
表 13　遺物観察表（13）…… 177
表 14　遺物観察表（14）…… 178
表 15　遺物観察表（15）…… 179
表 16　遺物観察表（16）…… 180
表 17　遺物観察表（17）…… 181
表 18　木製品観察表（１）…… 182
表 19　木製品観察表（２）…… 183
表 20　木製品観察表（３）…… 184
表 21　木製品観察表（４）…… 185
表 22　木製品観察表（５）…… 186

図　版

第１図　調査区概要図 …… 3
第２図　地形分類図 …… 5
第３図　遺跡位置図 …… 6
第４図　遺構配置図の割付図 …… 56
第５図　遺構配置図１ …… 57
第６図　遺構配置図２ …… 58
第７図　遺構配置図３ …… 59
第８図　遺構配置図４ …… 60
第９図　遺構配置図５ …… 61
第 10 図　遺構配置図６ …… 62
第 11 図　遺構配置図７ …… 63
第 12 図　遺構配置図８ …… 64
第 13 図　ＳＴ 36 竪穴住居 …… 65
第 14 図　ＳＴ５竪穴住居 …… 66
第 15 図　ＳＴ７竪穴住居 …… 67
第 16 図　ＳＴ 13 竪穴住居 …… 68
第 17 図　ＳＴ 20 竪穴住居、ＳＫ 19 土坑 …… 69
第 18 図　ＳＴ 14・21 竪穴住居 …… 70

第19図　ＳＤ４周溝 …… 71
第20図　ＳＭ24祭祀遺構、ＳＨ67墓坑、
ＳＥ１井戸、ＳＫ18・37土坑 …… 72
第21図　ＳＫ38・41・43・45・49・85土坑 …… 73
第22図　ＳＫ78・88・89・93・95・96土坑 …… 74
第23図　ＳＸ６・15・16性格不明遺構 …… 75
第24図　ＳＤ２溝 …… 76
第25図　ＳＤ64・65・66・72・73溝 …… 77
第26図　ＳＤ86・87・91・92溝 …… 78
第27図　ＳＧ23河川（１）…… 79
第28図　ＳＧ23河川（２）…… 80
第29図　ＳＧ23河川（３）…… 81
第30図　ＳＧ23河川（４）、ＳＫ109土坑 …… 82
第31図　遺物実測図ＳＴ36（１）…… 83
第32図　遺物実測図ＳＴ36（２）…… 84
第33図　遺物実測図ＳＴ５（１）…… 85
第34図　遺物実測図ＳＴ５（２）…… 86
第35図　遺物実測図ＳＴ７（１）…… 87
第36図　遺物実測図ＳＴ７（２）・ＳＴ13 …… 88
第37図　遺物実測図ＳＴ20（１）…… 89
第38図　遺物実測図ＳＴ20（２）…… 90
第39図　遺物実測図ＳＴ20（３）…… 91
第40図　遺物実測図ＳＴ20（４）…… 92
第41図　遺物実測図ＳＴ20（５）、ＳＫ19 …… 93
第42図　遺物実測図ＳＴ14 …… 94
第43図　遺物実測図ＳＴ21、ＳＤ４ …… 95
第44図　遺物実測図ＳＭ24 …… 96
第45図　遺物実測図ＳＥ１、ＳＫ41・49・85・
88・89・93・95・96 …… 97
第46図　遺物実測図ＳＸ６・15・16 …… 98
第47図　遺物実測図ＳＤ２（１）…… 99
第48図　遺物実測図ＳＤ２（２）、ＳＤ66・
87・92 …… 100
第49図　遺物実測図ＳＧ23（１）…… 101
第50図　遺物実測図ＳＧ23（２）…… 102
第51図　遺物実測図ＳＧ23（３）…… 103
第52図　遺物実測図ＳＧ23（４）…… 104
第53図　遺物実測図ＳＧ23（５）…… 105
第54図　遺物実測図ＳＧ23（６）…… 106
第55図　遺物実測図ＳＧ23（７）…… 107
第56図　遺物実測図ＳＧ23（８）…… 108
第57図　遺物実測図ＳＧ23（９）…… 109
第58図　遺物実測図ＳＧ23（10）…… 110
第59図　遺物実測図ＳＧ23（11）…… 111
第60図　遺物実測図ＳＧ23（12）…… 112
第61図　遺物実測図ＳＧ23（13）…… 113
第62図　遺物実測図ＳＧ23（14）…… 114
第63図　遺物実測図ＳＧ23（15）…… 115
第64図　遺物実測図ＳＧ23（16）…… 116
第65図　遺物実測図ＳＧ23（17）…… 117
第66図　遺物実測図ＳＧ23（18）…… 118
第67図　遺物実測図ＳＧ23（19）…… 119
第68図　遺物実測図ＳＧ23（20）…… 120
第69図　遺物実測図ＳＧ23（21）…… 121
第70図　遺物実測図ＳＧ23（22）…… 122
第71図　遺物実測図ＳＧ23（23）…… 123
第72図　遺物実測図ＳＧ23（24）…… 124
第73図　遺物実測図ＳＧ23（25）…… 125
第74図　遺物実測図ＳＧ23（26）…… 126
第75図　遺物実測図ＳＧ23（27）…… 127
第76図　遺物実測図ＳＧ23（28）…… 128
第77図　遺物実測図ＳＧ23（29）…… 129
第78図　遺物実測図ＳＧ23（30）…… 130
第79図　遺物実測図ＳＧ23（31）…… 131
第80図　遺物実測図ＳＧ23（32）…… 132
第81図　遺物実測図ＳＧ23（33）…… 133
第82図　遺物実測図ＳＧ23（34）…… 134
第83図　遺物実測図ＳＧ23（35）…… 135
第84図　遺物実測図ＳＧ23（36）…… 136
第85図　遺物実測図ＳＧ23（37）…… 137
第86図　遺物実測図ＳＧ23（38）…… 138
第87図　遺物実測図ＳＧ23（39）…… 139
第88図　遺物実測図ＳＧ23（40）…… 140
第89図　遺物実測図ＳＧ23（41）…… 141
第90図　遺物実測図ＳＧ23（42）…… 142
第91図　遺物実測図ＳＧ23（43）…… 143
第92図　遺物実測図ＳＧ23（44）…… 144
第93図　遺物実測図ＳＧ23（45）…… 145
第94図　遺物実測図ＳＧ23（46）…… 146
第95図　遺物実測図ＳＧ23（47）…… 147
第96図　遺物実測図ＳＧ23（48）…… 148
第97図　遺物実測図　遺構外出土（１）…… 149
第98図　遺物実測図　遺構外出土（２）…… 150
第99図　遺物実測図　遺構外出土（３）…… 151
第100図　遺物実測図　遺構外出土（４）…… 152
第101図　遺物実測図　遺構外出土（５）…… 153

第 102 図　遺物実測図　遺構外出土（６）…… 154
第 103 図　遺物実測図　遺構外出土（７）…… 155
第 104 図　遺物実測図　遺構外出土（８）…… 156
第 105 図　遺物実測図　遺構外出土（９）…… 157
第 106 図　遺物実測図　遺構外出土（10）…… 158
第 107 図　遺物実測図　遺構外出土（11）…… 159
第 108 図　墨書・刻書土器集成図（１）…… 160
第 109 図　墨書・刻書土器集成図（２）…… 161
第 110 図　墨書・刻書土器集成図（３）…… 162
第 111 図　遺物分類図（１）…… 163
第 112 図　遺物分類図（２）…… 164

写真図版

巻頭写真１　遺跡全景
巻頭写真２　ＳＧ 23 河川遺物出土状況
巻頭写真３　墨書土器
巻頭写真４　木製品
写真図版１　第２次調査区遠景
写真図版２　Ａ・Ｂ・Ｃ区完掘状況
写真図版３　Ｄ･Ｅ区完掘状況
写真図版４　Ｆ･Ｇ区完掘状況
写真図版５　ＳＴ 36 竪穴住居
写真図版６　ＳＴ５竪穴住居
写真図版７　ＳＴ７竪穴住居
写真図版８　ＳＴ 13 竪穴住居
写真図版９　ＳＴ 20 竪穴住居、ＳＫ 19 土坑
写真図版 10　ＳＴ 14 竪穴住居
写真図版 11　ＳＴ 21 竪穴住居
写真図版 12　ＳＤ４周溝
写真図版 13　ＳＭ 24 祭祀遺構、ＳＥ１井戸、ＳＨ 67 墓坑
写真図版 14　ＳＫ 18・37・38・41・43・45 土坑
写真図版 15　ＳＫ 49・78・85・88・89 土坑
写真図版 16　ＳＫ 93・95・96 土坑、ＳＸ６・15 性格不明遺構
写真図版 17　ＳＤ２溝
写真図版 18　ＳＤ３・11・64・65・66・73・86・87・91 溝
写真図版 19　ＳＧ 23 河川完掘状況
写真図版 20　ＳＧ 23 河川
写真図版 21　ＳＴ 36 竪穴住居出土土器（１）
写真図版 22　ＳＴ 36 竪穴住居出土土器（２）
写真図版 23　ＳＴ５竪穴住居出土土器（１）
写真図版 24　ＳＴ５竪穴住居出土土器（２）
写真図版 25　ＳＴ７竪穴住居出土土器（１）
写真図版 26　ＳＴ７竪穴住居出土土器（２）・ＳＴ13竪穴住居出土土器（１）
写真図版 27　ＳＴ 13 竪穴住居出土土器（２）
写真図版 28　ＳＴ 20 竪穴住居出土土器（１）
写真図版 29　ＳＴ 20 竪穴住居出土土器（２）
写真図版 30　ＳＴ 20 竪穴住居出土土器（３）
写真図版 31　ＳＴ 20 竪穴住居出土土器（４）
写真図版 32　ＳＴ 20 竪穴住居出土土器（５）
写真図版 33　ＳＫ 19 土坑出土土器
写真図版 34　ＳＴ 14 竪穴住居出土土器
写真図版 35　ＳＴ 21 竪穴住居出土土器、ＳＤ４周溝出土土器
写真図版 36　ＳＭ 24 祭祀遺構出土土器
写真図版 37　ＳＫ土坑、ＳＸ性格不明遺構、ＳＤ溝出土土器（１）
写真図版 38　ＳＫ土坑、ＳＸ性格不明遺構、ＳＤ溝出土土器（２）
写真図版 39　ＳＫ土坑、ＳＸ性格不明遺構、ＳＤ溝出土土器（３）
写真図版 40　ＳＧ 23 河川出土土器（１）
写真図版 41　ＳＧ 23 河川出土土器（２）
写真図版 42　ＳＧ 23 河川出土土器（３）
写真図版 43　ＳＧ 23 河川出土土器（４）
写真図版 44　ＳＧ 23 河川出土土器（５）
写真図版 45　ＳＧ 23 河川出土土器（６）
写真図版 46　ＳＧ 23 河川出土土器（７）
写真図版 47　ＳＧ 23 河川出土土器（８）
写真図版 48　ＳＧ 23 河川出土土器（９）
写真図版 49　ＳＧ 23 河川出土土器（10）
写真図版 50　ＳＧ 23 河川出土土器（11）
写真図版 51　ＳＧ 23 河川出土土器（12）
写真図版 52　ＳＧ 23 河川出土土器（13）
写真図版 53　ＳＧ 23 河川出土土器（14）
写真図版 54　ＳＧ 23 河川出土土器（15）
写真図版 55　ＳＧ 23 河川出土土器（16）
写真図版 56　ＳＧ 23 河川出土土器（17）
写真図版 57　ＳＧ 23 河川出土土器（18）
写真図版 58　ＳＧ 23 河川出土土器（19）
写真図版 59　ＳＧ 23 河川出土土器（20）

写真図版 60　ＳＧ 23 河川出土土器（21）
写真図版 61　ＳＧ 23 河川出土土器（22）
写真図版 62　ＳＧ 23 河川出土土器（23）
写真図版 63　ＳＧ 23 河川出土土器（24）
写真図版 64　ＳＧ 23 河川出土土器（25）
写真図版 65　ＳＧ 23 河川出土土器（26）
写真図版 66　ＳＧ 23 河川出土土器（27）
写真図版 67　ＳＧ 23 河川出土土器（28）
写真図版 68　ＳＧ 23 河川出土土器（29）
写真図版 69　ＳＧ 23 河川出土土器（30）
写真図版 70　ＳＧ 23 河川出土土器（31）
写真図版 71　ＳＧ 23 河川出土土器（32）
写真図版 72　ＳＧ 23 河川出土土器（33）
写真図版 73　遺構外出土土器（１）
写真図版 74　遺構外出土土器（２）
写真図版 75　遺構外出土土器（３）
写真図版 76　遺構外出土土器（４）
写真図版 77　遺構外出土土器（５）
写真図版 78　遺構外出土土器（６）
写真図版 79　遺構外出土土器（７）
写真図版 80　遺構外出土土器（８）
写真図版 81　石器（１）
写真図版 82　石器（２）
写真図版 83　石器（３）
写真図版 84　石皿、石棒
写真図版 85　土偶
写真図版 86　木製品（１）
写真図版 87　木製品（２）
写真図版 88　木製品（３）
写真図版 89　木製品（４）
写真図版 90　木製品（５）
写真図版 91　木製品（６）
写真図版 92　木製品（７）
写真図版 93　木製品（８）
写真図版 94　木製品（９）
写真図版 95　木製品（10）
写真図版 96　木製品（11）
写真図版 97　木製品（12）
写真図版 98　木製品（13）
写真図版 99　木製品（14）
写真図版 100　木製品（15）
写真図版 101　木製品（16）
写真図版 102　木製品（17）
写真図版 103　土製品、石製品
写真図版 104　石臼、砥石（１）
写真図版 105　砥石（２）
写真図版 106　陶磁器、金属製品、古銭

Ⅰ　調査の経緯

1　調査に至る経過

加藤屋敷遺跡は、南陽市北東部の川樋地区に所在し、鷹戸山と岩部山に囲まれた緩やかな傾斜地に立地する。

今回の調査は、一般国道13号上山バイパス改築事業に伴う緊急発掘調査として実施された。

一般国道13号は、福島市を起点として秋田市に至る総延長約347kmの主要幹線道路である。このうち、上山バイパスは、山形県南陽市川樋～山形市半郷間に至る延長17.2kmの道路であり、この改築事業により国道13号の狭小区間における交通混雑の解消、事故発生時の代替路線の確保、住宅地の交通量の減少による住民の安全と生活環境の向上などの効果が期待される。

事業計画に先行し平成17年度に計画路線内における、遺跡の所在確認と保存状況を把握するための試掘調査が山形県教育委員会によって実施された。

試掘調査では、事業計画区域内に7本のトレンチを設定して、重機による試掘をした後、層序及び遺構検出面の精査を行ったところ、6本のトレンチから平安時代の土器が出土すると共に溝跡や柱穴が確認された。

この結果、遺跡範囲が南北160m以上と推測される平安時代の集落跡の存在が判明し、加藤屋敷遺跡として新規登録され、事業に係る遺跡の範囲内について記録保存が必要であると判断された。

この試掘調査の結果を受け、記録保存を目的とする緊急発掘調査を行うことで協議が整い、山形県教育委員会・国土交通省山形河川国道事務所・財団法人山形県埋蔵文化財センターの三者による協議の結果、山形県埋蔵文化財センターが調査を受託することで合意した。

その後、山形県埋蔵文化財センターと国土交通省山形河川国道事務所の間で協議が行われ、工事の工程から、平成18年度に工事用道路を除く西側の調査を行い、その結果を基に、平成19年度に工事用道路部分の調査をすることとした。

平成18年度は、工事用道路を除いた約4,400㎡の発掘調査を実施し、その結果を踏まえ、平成19年度は工事用道路部分の遺構・遺物が密と推測される約1,600㎡について発掘調査を行った。

2　調査の概要

〈第1次調査〉

調査に先立って、平成18年4月25日に国土交通省山形河川国道事務所と山形県埋蔵文化財センターによる、平成18年度一般国道13号上山バイパス関係遺跡の発掘調査に関する調整及び打ち合わせを行った。

この結果、調査区内に現在使用中の工事用道路があることが判明し、その部分は次年度に調査することで合意した。これにより、当初の調査予定面積6,750㎡が4,400㎡に変更された。

現地での調査は5月17日から開始し、調査区を水路に分断される所で区切り、南からA～E区と設定した。

遺構確認面までの深さを調べる線掘りを行うと同時に重機による表土除去を5月25日から6月15日の期間で行った。表土除去後の面削り作業により、C・D区に遺物の包含層があることが明らかになった。その深さと広がりを確認するためのトレンチを設定し、6月22日から7月11日の期間で手掘りにより掘り下げた。

A・B区の遺構検出と遺構精査作業を進めると共に、重機を使用してC・D区の遺物包含層の除去を、7月18日から8月17日の期間で行った。

7月31日、8月1日、8月7日、8月17・18日に委託業務による3点の基準点設置及び10m×10mの方眼単位のグリッドの設置を行った。グリッドは、世界測地系をもとに平面直角座標系第X系：X＝-211853.000、Y＝-55883.000をX＝2G、Y＝3Gとし、東西軸（X軸）は西から東へ、南北軸（Y軸）は南から北へ、昇順でアラビア数字による番号を割り当てた。

その後、A・B区の遺構精査とC～E区の包含層の掘り下げや、人手により土を丁寧に削り遺構を検出する作業を進めた。検出された遺構は登録番号を付け、覆土をベルト状に残し、または半截に掘り下げ、土層観察後に完掘した。

遺物は、完形品及び一括土器について登録番号を付し、他は遺構毎またはグリッド毎に取り上げた。また、遺構の精査と併行して、遺構平面図や土層断面図の作成と記録保存のための写真撮影などの諸記録作業を行った。

10月27日には、調査の成果を広く公表する現地調査説明会を開催し、多くの参加者を得た。その際、当初の予定を大幅に上まわる遺物が出土したことから、国土交通省山形河川国道事務所と協議を行い、調査終了日を当初の11月２日から11月24日に延長することで合意した。

11月１・２日にＡ～Ｃ区、11月21日にＤ・Ｅ区の遺構測量図化のための空中写真撮影と補足作業の委託業務を行った。11月24日に機材撤収を行い、現地調査を終了した。現地調査は５月17日から11月24日までの実働128日間実施した。

〈第２次調査〉

調査に先立ち平成19年４月24日に国土交通省山形河川国道事務所と山形県埋蔵文化財センターにより、平成19年度の加藤屋敷遺跡発掘調査打ち合わせを行った。

現地調査は当初、６月29日に開始予定であったが、隣り合う天矢場遺跡の期間延長と、トンネル掘削工事の工程から７月17日に開始した。

調査区域は、工事用道路として使用されていた部分の遺構・遺物が密と推定される南側と北側の部分で面積約1,600㎡である。第１次調査区のＡ～Ｅ区に続き、南側をＦ区、北側をＧ区と調査区を設定した。

最初に、遺構確認面までの深さを調べる線掘りを行うと同時に、重機による表土除去を７月18日から７月26日の期間で行った。

７月30・31日に、委託業務による２点の基準点設置と10ｍ×10ｍの方眼単位のグリッドの設置を行った。グリッドは、第１次調査のグリッド番号を踏襲して世界測地系をもとに東西軸（X軸）は西から東へ、南北軸（Y軸）は南から北へ、昇順でアラビア数字の番号を付した。

その後、人手により土を丁寧に削り遺構を検出する作業を行い、検出された遺構に登録番号を付した。遺構の掘り下げは、覆土をベルト状に残し、あるいは半截して土層観察後に完掘した。

遺物は、完形品及び一括土器について登録番号を付し、他は遺構毎またはグリッド毎に取り上げた。また、遺構の精査と併行して、遺構平面図、土層断面図の作成、記録保存のための写真撮影などの諸記録作業を行った。

調査も終盤に近づいた９月21日に調査の成果を広く公表する現地調査説明会を開催し、多くの参加者を得た。

委託業務のよる遺構測量図化のための空中写真撮影を９月26日に実施し、９月28日に調査を終了した。

現地調査は、７月17日から９月28日までの実働47日間実施した。

〈整理作業〉

整理作業は、平成18年度～20年度に行った。

平成18年度は図面、写真等の記録類の整理と遺物の基礎整理（洗浄・注記）を行った。

図面整理は、遺構測量業務委託の遺構平面図の校正と手取り図面の修正等をした。

遺物の基礎整理は、出土遺物の洗浄をした後に注記作業をした。注記は遺跡名「カトウヤシキ」と出土地点を明記し、現場で登録したものには登録番号を付した。

平成19年度は、第１次調査出土遺物の復元作業を行い、状態の良いものを抽出した。抽出した土器と木製品の実測作業も一部について行った。

第２次調査終了後は、２次調査の出土遺物の基礎整理を行い、その後に第１・２次調査を合わせた出土遺物の復元作業を行った。

復元作業は遺構ごとに接合を行い、遺構周辺のグリッド出土遺物、その他の出土遺物の復元を実施した。

復元終了後、遺構出土遺物を中心に、状態の良いものについて抽出を行った。抽出した遺物について一部実測作業を実施した。

平成20年度は、遺物の復元作業、実測、拓本、トレースなどの遺物整理と、遺構図版作成、版組み、原稿執筆など報告書作成作業を行った。

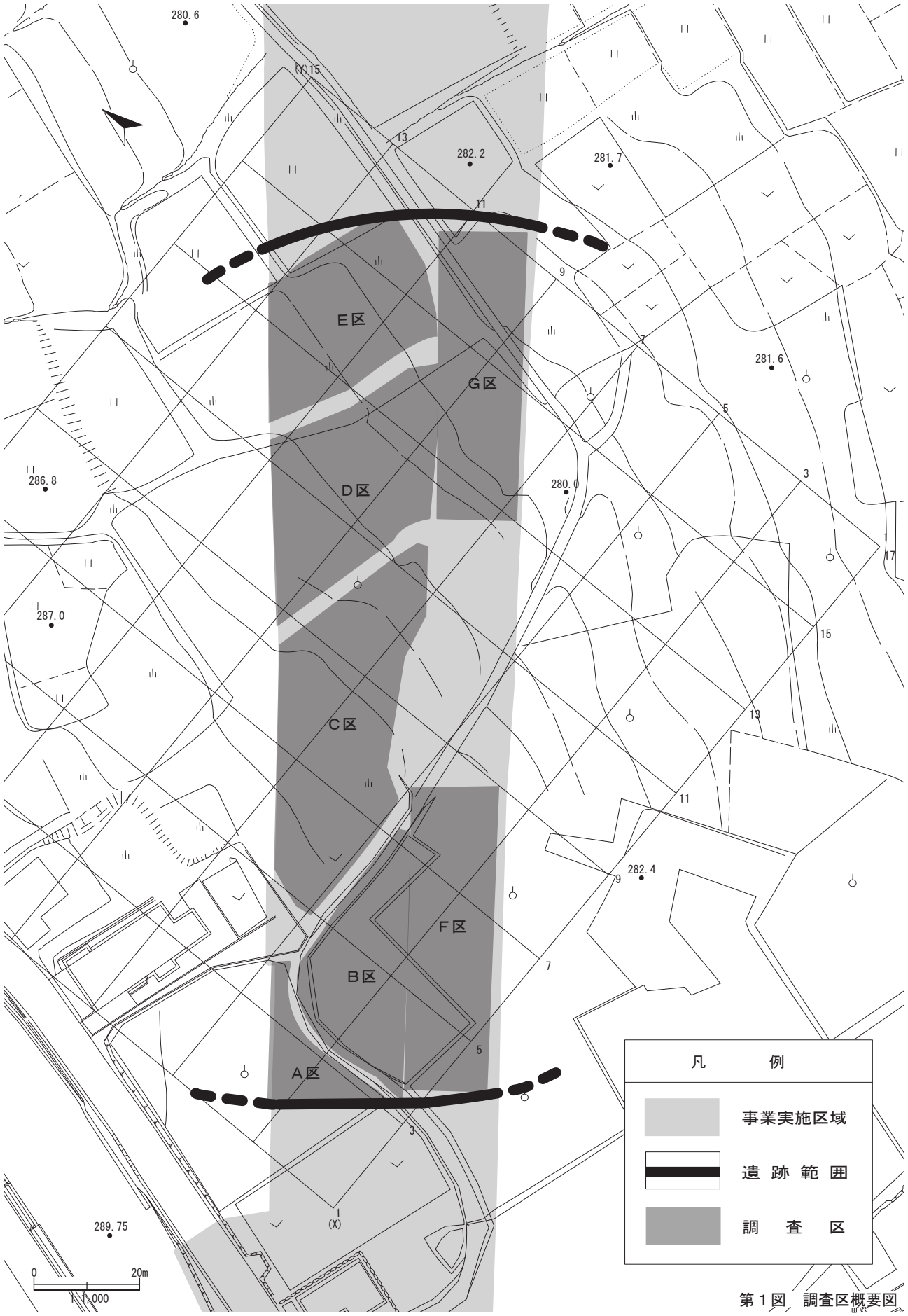
遺構全体図及び遺構個別図は遺構測量業務委託のデジタルデータから作成した。

遺物は前年度に引き続き、復元、実測を行い、その後に拓本、トレース作業及び写真撮影を実施した。

墨書・刻書土器については、山形大学人文学部三上准教授に鑑定と解読を依頼した。

報告書の版組み作業と並行して本文執筆を行った。

平成19・20年度に木製品の保存処理、土壌分析、樹種同定、年代測定などの自然科学分析を業務委託した。


280.6
282.2
281.7
281.6
286.8
280.0
287.0
282.4
289.75
E区
G区
D区
C区
F区
B区
A区
凡　例
事業実施区域
遺 跡 範 囲
調　査　区
0
20m
1:1,000

第１図　調査区概要図

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1　地理的環境

南陽市は、山形県の南東部、米沢盆地の東北端に位置し、市域は、東西 15km、南北 24km の三角形状を呈する。

周囲は東に奥羽山脈、南に吾妻連峰、南西に飯豊連峰、北西には朝日連峰などの峰々が連なっている。

気候は内陸性気候を示し、平均気温は低いが夏冬の気温差は大きい。

市の北部は山地や丘陵地域であるが、南部は約６分の１が低地で、東側には泥炭層が堆積する大谷地低湿地が形成され、西側には宮内扇状地が広がる。

遺跡は、南陽市東部に位置する中川地区の南陽市大字川樋に所在する。中川地区は、最上川支流の須川よりさらに上流にある前川水系に属する。

西側に白鷹山丘陵、東側に奥羽山脈に連なる大洞山等の丘陵群がそびえ、その間を前川が北流して小盆地を形成し、丘陵群によって南陽市中心部から隔絶される様相を示す。しかし、この地域は昔より交通の要衝として機能していたと推測され、戦国時代から周辺の山々に多くの城館が造られていた。江戸時代以降は米沢街道の宿駅として、人々の往来も増えたと考えられ、現在は地域の中央に山形県を縦断する国道 13 号線とＪＲ奥羽本線が南北に走っている。

加藤屋敷遺跡は、国道 13 号線沿いにあるＪＲ中川駅から西へ約 0.5km の地点に位置する。標高は 228 m を測り、鷹戸山と岩部山に囲まれた緩やかな傾斜地に立地する。

川樋地区は、南陽市東部に位置し、東の大洞山、西の鷹戸山・秋葉山に挟まれた平地と市道川樋新田線に沿って集落が展開している。東には国道 13 号線と伴にＪＲ奥羽本線が走り、稲作と果樹栽培が盛んな農業地域である。周辺には、中川小学校があり、学校の裏山には江戸時代につくられた三十三観音が祀られる岩部山がある。

この地区の諏訪神社境内の清水は茶水・硯水として優れ、飲む者の命が延びる不老泉として名高い。

2　歴史的環境

加藤屋敷遺跡が所在する南陽市には現在まで約 260 箇所の遺跡が確認されている。

旧石器時代では、長岡丘陵に長岡山遺跡が立地し、石刃が採集されている。

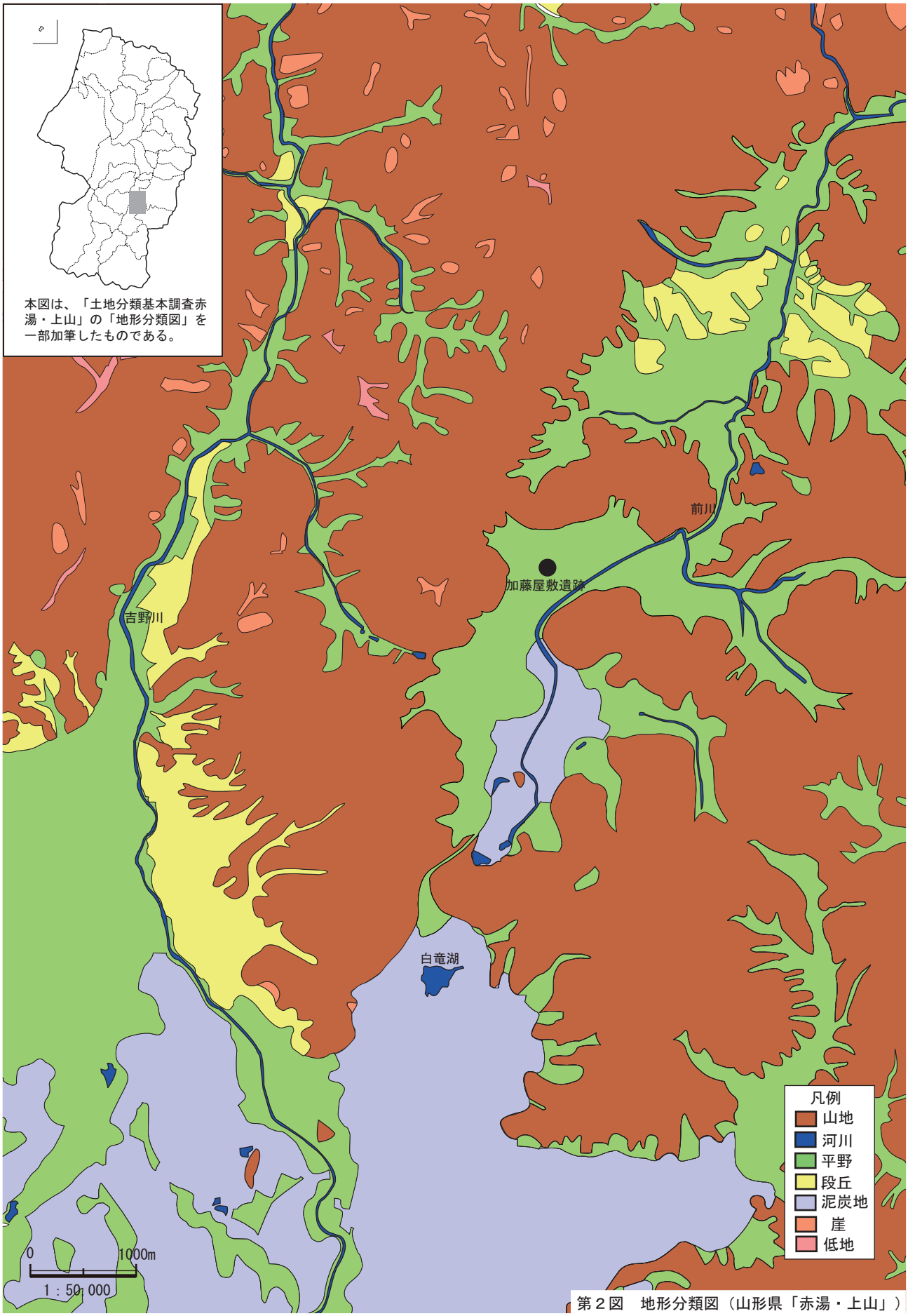
縄文時代の遺跡では、高原山遺跡・掛在家遺跡・漆山遺跡・東六角遺跡・諏訪前遺跡などの前期から中期の遺跡や、北前遺跡などの後・晩期の遺跡が、山間部から谷地田周辺まで広く分布している。加藤屋敷遺跡の西側にも晩期の集落と考えられている岩谷堂遺跡が所在する。

弥生時代の遺跡では、天王山式並行の土器が出土した沢田遺跡の他、庚壇遺跡からは後期の竪穴住居が確認されている。

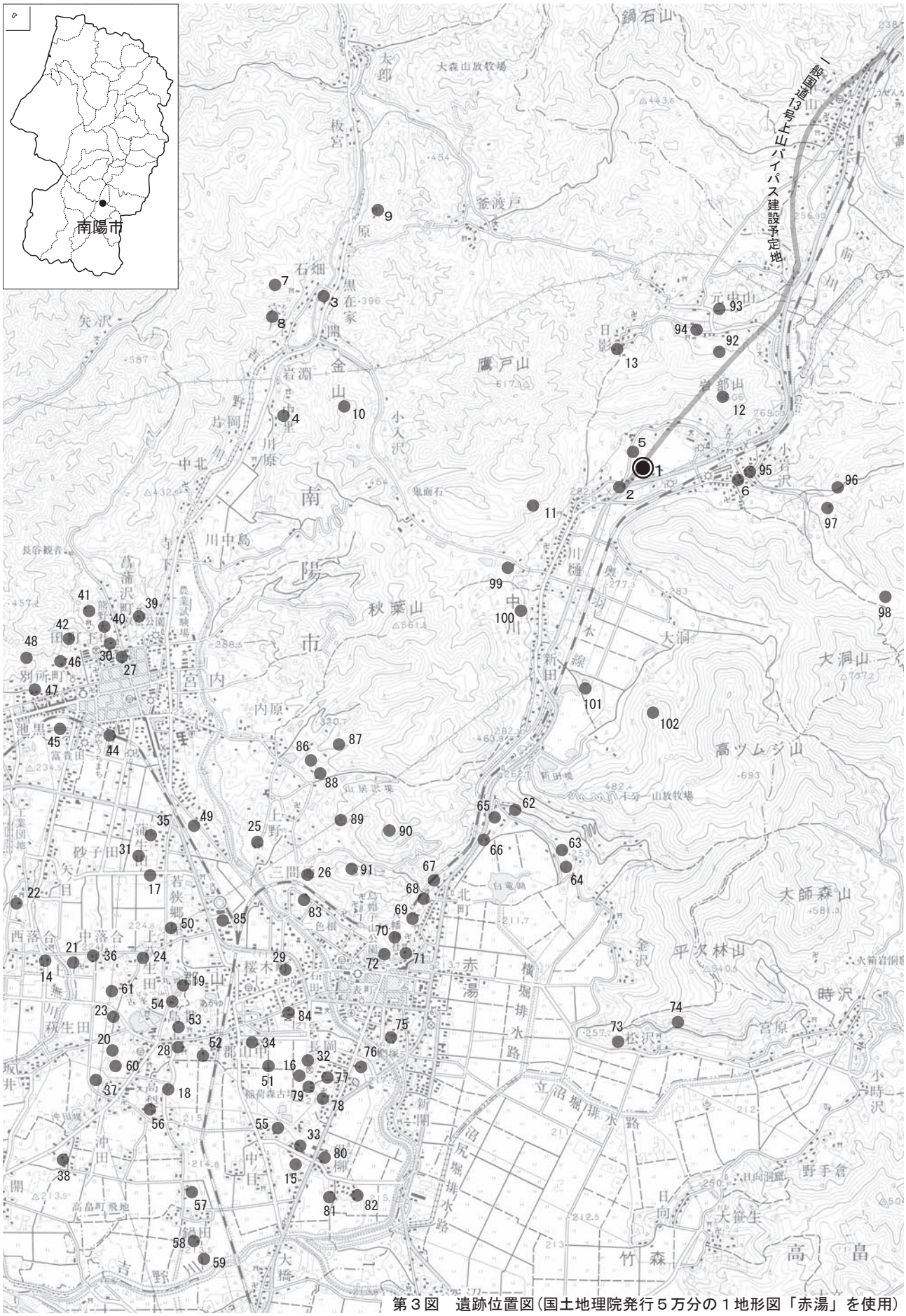
古墳時代の遺跡には、国指定史跡の稲荷森古墳が存在する。稲荷森古墳は全長 96 m を測り県内最大、東北でも６番目の大きさの前方後円墳で、現在は史跡公園として整備されている。他に、島貫遺跡・沢田遺跡・百刈田遺跡などで古墳時代の集落跡が確認されており、また、平成 16 年度に調査を行った大塚遺跡では 15 基の方形周溝墓が確認された。

奈良・平安時代の遺跡は、宮内扇状地に多く確認されており、庚壇遺跡・中落合遺跡・檜原遺跡・沢田遺跡・西中上遺跡・植木場一遺跡・富貴田遺跡などがある。南陽市周辺は置賜郷ないし宮城郷と呼ばれ、「郡山」という地名から沖郷地区には８世紀末から９世紀末にかけて古代置賜郡衙があったとみられている地域である。平成 17 年度の中落合遺跡の調査では、置賜郡衙を構成する一部とも考えられる計画的に配置された掘立柱建物群と区画施設が確認された。

中世の遺跡では、多くの城館跡が確認されており、虚空蔵山館、岩部山館、日影館、川樋館、大洞山館などが加藤屋敷周辺に存在する。当地域が当時、最上氏と伊達氏の領土争いの要害であったことが推測できる。



第２図　地形分類図（山形県「赤湯・上山」）



第３図　遺跡位置図（国土地理院発行５万分の１地形図「赤湯」を使用）

番号	遺跡名	時 代	種別	番号	遺跡名	時 代	種別
1	加藤屋敷	縄文・古墳・奈良・平安・中世・近世	集落跡	52	間々ノ上	奈良	散布地
2	天矢場	縄文・中世・近世	集落跡	53	郡山中堀	奈良・平安	散布地
3	石畑	縄文（中期）	集落跡	54	島貫	古墳～奈良・平安	集落址
4	三入山	縄文（前期）・平安	散布地	55	中ノ目下	奈良・平安	散布地
5	岩谷堂	縄文（晩期）	集落跡	56	前小屋	縄文	散布地
6	小岩沢	縄文（中・後期）	集落跡	57	大屋敷	平安	散布地
7	金座館	中世	楯跡	58	畿内田	平安	散布地
8	天狗山館	中世	楯跡	59	窪田尻	平安	散布地
9	御獄山物見	中世	砦跡	60	将監屋敷	奈良・平安	散布地
10	地蔵岩物見	中世	硝堡・物見	61	梅ノ木	奈良・平安	散布地
11	虚空蔵山館	中世	館跡	62	十分の一山	縄文	集落址
12	岩部山館	中世	館跡	63	金沢山ノ神	縄文	集落跡
13	日影館	中世	城砦・砦	64	七両坂古墳	古墳	古墳
14	檜原	平安・中世・近世	集落跡	65	月ノ木Ａ	平安	散布地
15	鵜の木館跡	中世	館跡	66	月ノ木Ｂ	縄文・弥生	集落跡
16	稲荷森古墳	旧石器・縄文・古墳	散布地・古墳	67	夷平	縄文・中世	散布地
17	当時作	縄文・奈良・平安	散布地	68	北町	縄文	散布地
18	百刈田	縄文・古墳	集落跡	69	稲荷前	縄文	散布地
19	沢田	弥生・古墳・奈良・平安	集落跡	70	上ノ山	縄文	散布地
20	西中上	平安	散布地	71	烏帽子山経塚	平安	経塚
21	中落合	奈良・平安	集落跡	72	烏帽子山古墳	古墳	古墳
22	庚壇	縄文～平安	集落跡	73	松沢	縄文	散布地
23	大塚	古墳～平安	集落跡	74	松沢古墳群	古墳	古墳群
24	荻生田	弥生・奈良	集落跡・散布地	75	椚塚館	中世	館跡
25	上野	縄文・中世・近世	集落跡	76	太子堂	平安	散布地
26	二色根古墳群	古墳	古墳群	77	長岡山東	縄文・平安	散布地
27	久保	縄文	集落跡	78	長岡南森	縄文・古墳	散布地
28	沢口	奈良・平安	集落跡	79	長岡西田	縄文	散布地
29	諏訪前	縄文・古墳・平安	散布地・集落跡	80	水上	奈良・平安	散布地
30	宮内小学校敷地内	縄文・平安	集落跡	81	東畑Ａ	奈良・平安・近世	集落跡
31	南館館ノ内	縄文・奈良・平安	散布地	82	東畑Ｂ	平安	散布地
32	長岡山	旧石器・縄文・古墳	集落跡	83	横沢	縄文・奈良	散布地
33	内城館	中世	館跡	84	東六角	縄文・平安	集落跡
34	矢の目館 953 他	中世	館跡	85	唐越	縄文・奈良・平安	散布地・集落跡
35	蒲生田館	中世	館跡	86	蒲生田古墳群	古墳	古墳群
36	中落合館	中世	館跡	87	山居沢山Ａ	平安	散布地
37	将監屋敷館	中世	館跡	88	山居沢山Ｂ	平安	散布地
38	沖田館	中世	館跡	89	狸沢山古墳群	古墳	古墳群
39	慶海山館	中世	館跡	90	上野山古墳群	弥生・古墳	散布地・古墳群
40	宮沢城	戦国期	館・城跡	91	二色根館	中世	城跡
41	北館	室町	館跡	92	諏訪原Ａ	縄文	集落跡
42	宮内南館	戦国期	館跡	93	諏訪原Ｂ	縄文	散布地
43	笹子平	縄文	散布地	94	諏訪原Ｃ	縄文	集落跡
44	大清水	縄文・平安	散布地	95	小岩沢墳墓	平安・鎌倉	墳墓
45	富貴田	縄文・奈良	集落跡	96	日向	縄文	散布地
46	別所Ａ	平安	散布地	97	長次郎	縄文	散布地
47	別所Ｂ	縄文	散布地	98	一ノ倉山	縄文	散布地
48	別所山経塚	平安	経塚	99	川樋館	中世	館跡
49	観音堂	縄文・平安	散布地	100	館平館	中世	館跡
50	西田	平安	散布地	101	中野森館	中世	館跡
51	早稲田	奈良	散布地	102	大洞山館	中世	館跡

Ⅲ　遺構と遺物の分布

1　遺構の分布

平成18・19年度の調査で、遺跡範囲内の事業実施区域である面積約6,000㎡を調査した。調査で検出された主な遺構は、竪穴住居、祭祀遺構、井戸、土坑、河川、溝、柱穴などである。溝には方形に巡るものもある。時代は縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代、中・近世のものが認められるが、奈良･平安時代のものが多数を占める。

遺構の分布は調査区全体に亘るが希薄である。以下に調査区毎にその分布状況を述べる。

Ａ区は、北西端に遺構の集中が見られるが、明確な遺構は井戸１基が中央に分布するのみで、他は落ち込みと考えられる。

Ｂ区は、主に西側と東側に遺構が集中する傾向がみられる。中央部は直角に曲るＳＤ２溝のみであるが、西側には、３－４Ｇにピットが集中し、３－３Ｇで落ち込みが集中する。東側は、溝が２条分布し、ＳＤ４は方形に巡る。

Ｃ区では、竪穴住居が３棟検出された。西端にＳＴ７のみ１棟、東端にＳＴ13・14の２棟が分布し、ＳＴ13・14周辺には落ち込みが数基確認された。他には、溝跡が調査区中央に､落ち込みとピット群が南東部の８・９－７Ｇに集中している。

Ｄ区でも、竪穴住居が３棟検出され、南西から北東端に並ぶようＳＴ21・20・５が分布し、ＳＴ20の北東端をＳＫ19が切る。また、ＳＴ５の西側に落ち込み状の遺構ＳＸ16がある。

Ｅ区では、ＳＧ23河川のみ確認された。ＳＧ23は南西のＤ区からＥ区東側にかけて、中央で屈曲しながら調査区を横断する様に流れる河川である。

Ｆ区は、縄文時代の竪穴住居と土坑、溝などが確認された。住居は南西端にＳＴ36が１棟のみ分布し、４－２Ｇに土坑１基とＢ区のＳＤ２から続くと考えられるＳＤ50溝がある。その他、調査区中央から東には大小の溝が多く分布する。

Ｇ区は、西側が希薄で東側に遺構が集中する傾向が認められる。西半には土坑が４基のみなのに対し、東半には土坑３基、溝４条、Ｅ区から続く河川１条が確認され東側に溝、河川が多く分布する。以上、明確な遺構は希薄で、その分布も散布している傾向が認められた。

2　遺物の分布

遺物は、第１・２次調査を合わせて整理箱にして181箱出土した。奈良・平安時代の土師器、須恵器が大半を占め、墨書・刻書土器（転用硯含む。）も69点出土している。また、木製品や石製品、縄文土器、石器、陶磁器、少数であるが金属製品も出土している。

河川の氾濫の影響か、遺物は調査区全体に散布する様相を呈している。但し、遺構出土の遺物には、遺構の種別によって顕著な違いがみられた。特にＳＧ23河川は、全体に多量の遺物が分布している。このほか、Ａ～Ｄ区の竪穴住居やＳＭ24埋設遺構、土坑、溝などからまとまった量の遺物が出土した。

遺物の種別による分布状況は、土師器、須恵器はＳＧ23河川、竪穴住居、ＳＭ24埋設遺構、土坑などから出土したが、その大半はＳＧ23からである。また、このうち墨書土器はＳＴ出土４点、ＳＫ出土１点、グリッド出土２点の他は全てＳＧ23からの出土である。

木製品も須恵器・土師器と同様で、そのほとんどがＳＧ23から出土している。ＳＧ23以外で出土がみられるのは、ＳＴ出土２点、ＳＸ出土１点、グリッド出土６点のみである。

縄文土器や石器は､Ｆ区の縄文時代のＳＴ36竪穴住居、その周辺の土坑やグリッドから多く出土している。この他の遺構やグリッドからも出土しているが､少数である。

陶磁器は、中・近世の遺構と考えられるＳＤ２・87溝とグリッドからの出土が見られたが、ＳＧ23からの出土は無かった。

以上のように、遺物の分布は、遺構に伴うものが大半を占めるため、ほぼ遺構の分布と同じ様相を呈する。しかし、その出土量と種別には遺構の性格により、顕著な違いが認められた。

Ⅳ　遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居７棟、周溝、祭祀遺構、墓坑が各１基、土坑、溝、河川などである。

出土した遺物には、縄文土器、土偶、石器、須恵器、土師器、黒色土器、石製品、木製品、陶磁器や金属製品などがある。時代は縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世・近世と考えられる。以下に、主な遺構と遺物の概略を遺構毎に述べる。なお、還元焔で焼成された土器を須恵器、酸化焔によって焼成された土器を土師器とした。また、土師器の内面ないしは内外面に黒色処理を施す土器は黒色土器とした。

1　竪穴住居

ＳＴ 36 竪穴住居（第 13 図、第 31 図１～第 32 図 28）

Ｆ区南西端３・４－１Ｇで検出され、ＳＫ 41・43・44 に切られる。平面プランは長軸 6.1m、短軸 5.3m を測る楕円形を呈する。確認面から床面までの深さは、20cm を測る。壁は急角度で立ち上がり、底面は平坦となる。内部施設は、ほぼ中央に径 40cm を測る石組の炉（ＥＬ３）、南と西側に貯蔵穴（ＥＫ１・２）が検出された。柱穴は８基（ＥＰ１～８）確認された。

出土した遺物は、縄文時代後期後葉に属する土器片が大半で、口縁部や体部に瘤が付き、沈線等による半孤文または平行文が描かれるもの（１～５）、器面に条線が施されるもの（６～ 11）、器面に縄文のみ施されるもの（12 ～ 16）、沈線による文様が施されるもの（17 ～ 20）、無文のもの（21 ～ 23）などがある。１～５には貼り瘤に違いがみられる。１・２は瘤の中央に刻みが入り、２つに割れる。３の口縁部に貼り付けられる瘤は、上方に刻みが入るものと小さな瘤があり、体部には摘みだしの瘤が付く。４は瘤と共に円形や半円形の粘土紐が貼り付けられる。５の瘤はやや大きくボタン状につぶれる。その他、足首に押圧痕が見られる土偶の脚部（26）、刺突文や集合沈線文の模様が描かれた土偶の胴部下半（27）、石匙（28）が出土した。ＥＫ１出土土器の特徴から縄文時代後期後葉と考えられる。

ＳＴ５竪穴住居（第 14 図、第 33 図 29 ～第 34 図 48）

Ｄ区 13・14 － 10 Ｇで検出され、北東隅と南東隅は調査区外になる。平面プランは長辺 4.1m、短辺 3.7m を測る長方形を呈する。確認面から床面までの深さは 10cm を測る。主軸方位はＮ－２°－Ｅを測る。壁は垂直に立ち上がり、床面は平坦となる。内部施設は、カマド（ＥＬ）が南西壁に１基確認された。カマド前面には焼土が広がり、その東側から壁面には炭化物の集中域が検出された。

出土した遺物は、須恵器では、平笠タイプの蓋（35）、ロクロ整形で切り離しが回転糸切となる無台坏（36 ～ 39）、小型の短頸壺（40）、甕の破片資料（41･42）がある。土師器では、内外面にハケ、ナデの調整が施される甕（43 ～ 46）や塝（47）がある。45 と 46 の底部には網代痕が認められる。48 は砥石で、４面に擦痕がみられた。その他、流れ込みと考えられる縄文土器（29 ～ 33）と弥生土器（34）が出土した。須恵器の無台坏の特徴から９世紀前半と考えられる。

ＳＴ７竪穴住居（第 15 図、第 35 図 49 ～第 36 図 59）

Ｃ区５・６－６Ｇで検出された。平面プランは長辺 4.6m、短辺 4.1m を測る長方形を呈する。確認面からの深さは５～ 15cm を測る。主軸方向はＮ－７°50′－Ｗを測る。壁は急角度で立ち上がり、床面は平坦となる。内部施設は、カマド（ＥＬ）が南西壁に１基確認された。カマドは、両袖と煙道が検出され、焼成部は地山が赤く焼けている。柱穴は南東隅に１基（ＥＰ１）と北側に小穴が３基見つかった。

出土した遺物は、須恵器では有台坏（49）、無台坏（50）があり、49 は外面下部にヘラ削り調整が施され、底部の切り離しがヘラ切りとなる。50 は底部切り離しが回転糸切である。土師器では甕（51 ～ 56）、鉢（57）などで、53 ～ 57 の底部に木葉痕が認められる。黒色土器（58）は内面に黒色処理が施され、内外面にミガキ調整が施される。砥石（59）はＥＰ１からの出土で、４面に擦痕がみられた。出土遺物から９世紀初頭と考えられる。

ＳＴ 13 竪穴住居（第 16 図、第 36 図 60 ～ 65）

Ｃ区８－８Ｇで検出された。平面プランは長辺 3.7m、短辺 2.8m を測る長方形を呈する。上部が削平されているため、確認面からの深さは２～５cm と浅い。主軸方向はＮ－ 88°－Ｗを測る。床面は若干の凹凸がみられ、壁面の立ち上がりは不明である。内部施設はカマドが東壁に１基確認された。カマド前面に焼土と炭化物の広がりがみられ、土師器の甕がこの部分から出土している。

出土した遺物は、須恵器では内面を転用硯とし、摘みに墨書がある蓋（60）、土師器は、内外面にハケやナデ調整が施される甕（61 ～ 65）などがある。65 は外面にタタキ痕、内面にアテ痕がみられる。出土遺物から９世紀初頭と考えられる。

ＳＴ 20 竪穴住居（第 17 図、第 37 図 66 ～第 41 図 110）

Ｄ区 12 － 10 ＧでＳＴ 20、ＳＫ 19 共に検出された。

ＳＴ 20 は北東隅をＳＫ 19 に切られる。平面プランは、一辺が 4.8m の正方形を呈し、中央部を東西方向に暗渠によって削平を受ける。確認面からの深さは 10cm を測る。主軸方向はＮ－ 81° 50′－Ｗを測る。壁面は垂直に立ち上がり、床面は平坦となる。明確な内部施設は確認できなかったが、暗渠により削平された東側壁面に張り出しがみられ、壁際に焼土があることから、ここにカマドがあったとも考えられる。焼土が混じる多量の木炭が床面に散布していることから焼失住居と考えられる。

出土した遺物は、須恵器では蓋（67～72）、有台坏（73・74）、無台坏（75～89）、壺（90～93）、甕（94～97）などがある。85は外面底部に89は体部に墨書があり、85は内面底部を転用硯としている。90はミニチュアの壺である。土師器では無台坏（98）、甕（99～103）などで、98は外面にケズリとナデ調整が、内面にはミガキとナデ調整が施される。100の底部には網代痕、101・102の底部には木葉痕がみられる。黒色土器の無台坏（104）は内面に黒色処理が施され、底部に木葉痕がみられた。105は土製品の紡錘車である。砥石（106～108）は106が２面、107・108は４面に擦痕が認められた。また、炭化した木製品（109・110）も２点出土した。109は椀の高台部分のみの資料で、110は刳物と考えられる。その他、流れ込みと考えられる縄文時代の小型壺（66）も出土している。66は匹字文が描かれ、縄文晩期大洞Ａ２式併行と思われる。また、ヤマドリの焼骨も出土している（第Ⅴ章－11）。時期は、出土土器の特徴から８世紀末から９世紀初頭と考えられる。

ＳＴ 14 竪穴住居（第 18 図、第 42 図 116 ～ 120）

Ｃ区の北側端９－９Ｇで検出された。北側の大半が調査区外になるため規模、平面プランは不明である。確認面からの深さは 15cm を測る。主軸方向はＮ－ 13° 50′－Ｗを測る。カマド（ＥＬ）は南西壁に構築され、燃焼部付近は赤く焼けている。

出土した遺物は、須恵器の無台坏（116）、壺（117）、土師器の甕（118）、鉢（119・120）の底部資料などがある。117は底部切り離しがヘラ切りとなる。118 ～ 120の底部には木葉痕がみられる。時期は須恵器の無台坏の特徴から９世紀前半と考えられる。

ＳＴ 21 竪穴住居（第 18 図、第 43 図 121 ～ 127）

Ｄ区 10・11 － 10 Ｇで検出された。平面プランは長辺 3.7m、短辺 3.4m を測る長方形を呈する。確認面からの深さは 15cm を測る。主軸方向はＮ－ 80°－Ｅを測る。壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦となる。内部施設は北東壁にカマド（ＥＬ）が構築されている。煙道と燃焼部付近にカマドの袖石などに使用されたと思われる被熱した石が残る。

出土した遺物は、須恵器の有台坏（121）、無台坏（122・123）、土師器の甕（124 ～ 126）、砥石（127）などがある。121 は底部が転用硯となる。また、125・126 の底部には木葉痕がみられる。127 は４面に擦痕が認められ、良く使い込まれた様子が窺える。時期は、須恵器の無台坏の特徴から９世紀後半と考えられる。

２　周　　溝

ＳＤ４周溝（第 19 図、第 43 図 128 ～ 129）

Ｂ区北東隅の６－５Ｇで検出された。方形に巡る周溝である。溝のみの検出で、主体部は検出されなかった。周溝の軸線はＮ－ 10°－Ｗを測る。溝の幅は 40 ～ 60cm、深さ 25 ～ 40cm を測る。規模は南北方向が外辺 3.9m、内辺 2.9m、東西方向は外辺 3.6m、内辺 2.6m を測り、ほぼ正方形に近い。溝の断面はＵ字状を呈する。覆土は、４層に分かれ、１・２・４層は黒色砂質土に灰白色砂や褐灰色砂を混入し、３層は褐色砂と黒褐色砂の混合土が堆積する。

遺物は、須恵器の甕片（128）、土師器の甕（129）な

どの他に、大型哺乳類で人骨の可能性がある火熱を受けた骨（第Ⅴ章－11）も出土した。土器は平安時代のものであるが、古墳時代の方形周溝墓とも考えられる。規模は異なるが、同様の方形に巡る周溝が南陽市の大塚遺跡（平成16年度発掘調査）や中落合遺跡（平成17年度発掘調査）でも確認されているが、両者とも出土遺物が少なく時期の特定には至っていない。

3　祭祀遺構・墓坑・井戸

ＳＭ24祭祀遺構（第20図、第44図130～134）

Ｃ区のほぼ中央７－７Ｇで検出された。長径90cm、短径40cmを測り、平面プランは楕円形を呈する。南北方向に土師器の長胴甕２個体の口縁部分を合わせた合口甕棺１基と土師器の無台坏を正位の状態で１点、黒色土器の無台坏２点の口縁部分を合わせた状態で１組埋納する。合口甕棺内の土壌分析からは、遺体埋納の痕跡はみられなかった（第Ⅴ章－１）が、土器の出土状況から、祭祀遺構と考えられる。

出土遺物には、前述のとおり土師器の甕２点（131・132）、土師器の無台坏（130）、内面黒色処理が施された黒色土器の無台坏２点（133・134）がある。132は底部穿孔とみられ、131も底部を意図的に破壊している可能性がある。無台坏３点の底部切り離しは回転糸切である。時期は、無台坏の形態と切り離しから９世紀後半と考えられる。

ＳＨ67墓坑（第20図）

Ｆ区のほぼ中央６－４Ｇで検出された。ＳＤ65の覆土に掘り込まれた墓坑である。平面プランは長辺1.4m、短辺0.8mの不整形を呈する。確認面からの深さは10cmを測る。覆土はやわらかく、しまりが無い黒色シルトがレンズ状に堆積する。覆土に骨片が混じる。

出土遺物は、覆土から出土した焼けた骨片と歯などである。分析の結果、大型の哺乳類のもので、人の臼歯の可能性も残る（第Ⅴ章－11）。覆土の状況、近辺から出土した寛永通宝（694）から近世のものと考えられる。

ＳＥ１井戸（第20図、第45図135・136）

Ａ区のほぼ中央２－３・４Ｇで検出された。平面プランは長径2.6m、短径2.5mのほぼ円形を呈するが、崩落のためか西側が張り出す。確認面からの深さは1.1mを測る。断面形は開口部が広く、掘り方途中に段を形成した後、急角度で掘り下げられる台形状の形態となる。底面は凹凸がみられるが、平坦に近い素掘りの井戸である。覆土は４層に分かれるが、３層目は明黄褐色粘土のブロックとなり、１・２・４層は黒色土で明黄褐色砂や灰黄褐色砂を混入する。４層目からはクルミや木片も出土した。

遺物は、前述のクルミや木片の他、石臼（135）、砥石（136）などが出土している。136は砂岩で、２面に鋭く深い擦痕がみられた。

4　土坑・性格不明遺構

ＳＫ19土坑（第17図、第41図111～115）

Ｄ区12－10ＧでＳＴ20の北東隅に検出され、ＳＴ20を切る。平面プランは、長辺1.9m、短辺1.6mの隅丸長方形を呈する。確認面からの深さは25cmを測る。断面形は壁が急角度で立ち上がり、底面が平坦な台形状となるが、北側に段が付く。東側壁面が赤く焼けている。覆土は５層に分かれ、概ね黒色砂質土となり、灰白砂粒と木炭粒を混入する。

出土遺物には、須恵器の無台坏（111）と甕（112）、土師器の甕（113～115）がある。111は底部切り離しが回転糸切となる。113は二次加熱を受け、外面が剥落する。また、113の底部には木葉痕が、115の底部は網代痕がみられる。時期は、須恵器の無台坏の特徴から９世紀後半と考えられる。

ＳＫ18土坑（第20図）

Ｄ区東側12－10Ｇで検出された。平面プランは長辺0.9m、短辺0.7mの隅丸長方形を呈する。確認面からの深さは10cmを測り、断面形はレンズ状となる。覆土は１層でオリーブ黒色砂に少量の木炭が混じる。底面からは、木炭が多量に検出された。

ＳＫ37土坑（第20図）

Ｆ区の西側３－１Ｇで検出された。平面プランは径1.0mの円形を呈する。確認面からの深さは10～15cmを測る。断面形は壁が急角度で立ち上がり、底面は平坦な台形状となる。覆土は１層で黒褐色シルトに黒色シルトと炭化粒を少量混入する。

ＳＫ38土坑（第21図）

Ｆ区の西側３－１Ｇで検出された。平面プランは長径1.2m、短径1.1mのほぼ円形を呈する。確認面からの深

さは 20cm を測る。断面形は壁が急角度で立ち上がり、底面が平坦な台形状となる。覆土は１層で、黒褐色シルトに黒色シルトと微量の炭化粒を混入する。

ＳＫ 41 土坑（第 21 図、第 45 図 137）

Ｆ区の西側３－１Ｇで検出された。ＳＴ 36 を切る。平面プランは径 1.0m の円形を呈する。確認面からの深さは 40cm を測る。断面形は壁がほぼ垂直に立ち上がり、底面が平坦な方形状となる。覆土は３層に分かれ、１層目が黒褐色シルト、２層目は黒色の粘土質シルト、３層目は黒褐色砂質シルトになる。２層目は帯状に堆積し炭化物を多く混入する。

遺物は土師器の甑(137)の口縁部資料が出土している。

ＳＫ 43 土坑（第 21 図）

Ｆ区の西側３－１Ｇで検出された。ＳＴ 36 の覆土に掘り込まれた土坑である。平面プランは長辺 1.3m、短辺 0.9 mの隅丸長方形を呈する。確認面からの深さは 20 ～ 40cm を測り、南側が深くなる。断面形は、北半が浅く壁は緩やかに立ち上がり、南側が柱穴状に深く掘り込まれ壁が急角度で立ち上がる形状になる。覆土は３層に分かれるが、２・３層目の黒褐色粘質シルトが厚く堆積する。全ての層に炭化粒が混入する。

ＳＫ 45 土坑（第 21 図）

Ｆ区の南東側４－１Ｇで検出された。平面プランは径 1.0m を測るほぼ円形を呈する。確認面からの深さは 40cm を測る。断面形は壁が急角度で立ち上がり、底面は平坦な台形状となる。覆土は３層に分かれ、黒色シルト、黒色粘質シルト、黒褐色シルトが堆積し、２・３層目には炭化粒が混入する。

ＳＫ 49 土坑（第 21 図、第 45 図 138 ～ 140）

Ｆ区の４－２Ｇで検出された土坑で、ＳＤ２に東側を切られる。平面プランは長径 2.4m 以上、短径 2.0m の楕円形を呈すると思われる。確認面からの深さは５～ 30cm を測る。断面形は西側が浅く緩やかに立ち上がり東側は深く緩やかに掘り込まれる。底面はレンズ状になる。覆土は３層に分かれ、黒褐色シルト、黒色粘質シルト、暗褐色シルトが堆積する。

出土遺物は、流れ込みと考えられる縄文土器２点(138・139）と円盤状土製品（140）がある。138 には条線文が、139 は地文が縄文ＬＲで沈線が描かれる。140 も同じく縄文ＬＲの地文に並行沈線文が描かれる。縄文時代後期のものと思われる。

ＳＫ 85 土坑（第 21 図、第 45 図 141 ～ 143）

Ｇ区中央 15 － 10 Ｇで検出された。平面プランは長径 1.6m、短径 1.4m の楕円形を呈する。確認面からの深さは 20cm を測る。断面形は壁がほぼ垂直に立ち上がり、底面が平坦な方形状となる。覆土は３層に分かれ、黒色粘質シルトと黒色シルトが堆積する。覆土には炭化物が帯状に混入する。

出土遺物は、図示できたものは３点で、土師器の無台坏（141・142)、黒色土器の無台坏（143）である。142 は口唇部が摘み出される。143 は内面に黒色処理が一部分残る。他にも土師器の小破片が出土している。時期は、坏類の特徴から９世紀後半と考えられる。

ＳＫ 78 土坑（第 22 図）

Ｆ区北東端８－５Ｇで検出された。平面プランは長径 2.3m、短径 1.6m の楕円形を呈する。確認面からの深さは 20cm を測る。断面形は壁が急角度で立ち上がり、底面が平坦な台形状となる。覆土は２層に分かれ、黒褐色シルトを多量に混入する暗褐色粗砂が大半を占め、灰黄褐色細砂が底面の際に堆積する。

ＳＫ 88 土坑（第 22 図、第 45 図 144）

Ｇ区中央 15 － 10 ＧでＳＤ 87 の東側に隣接して検出された。底面から多量の炭化物が出土している土坑である。平面プランは長辺 1.2m、短辺 0.8m のほぼ隅丸方形を呈するが、南東側一部に張り出しが見られる。確認面からの深さは 10cm を測る。断面形は、壁が急角度で立ち上がる台形状となるが、一部に段が付く。覆土は３層に分かれ、焼土粒を混入する暗赤褐色シルトが上層に堆積し、黒褐色シルト、炭化粒を混入する極暗赤褐色シルトが下層に堆積する。

遺物は、土師器甕（144）の口縁部資料と土器の小破片などが出土した。

ＳＫ 89 土坑（第 22 図、第 45 図 145）

Ｇ区東側 16 － 11 Ｇで検出された。ＳＧ 23 に北側の一部を切られる。平面プランは長径 1.1m 以上、短径 0.9 m の楕円形を呈すると思われる。断面形は壁が急角度で立ち上がり、底面が平坦な台形状となる。覆土は７層に分かれるが、オリーブ黒色粘土、オリーブ黒色砂混じりシルト、黒色粘土が多く堆積する。覆土には多量の炭化物が混入していた。

遺物は、底部に網代痕がある土師器の甕（145）の底部資料が出土した。

ＳＫ 93 土坑（第 22 図、第 45 図 146）

Ｇ区西側 13 － 9 Ｇで検出された。近世の水路で中央を一部削平されていた。底面から多量の炭化物が出土している。平面プランは長径 1.8m、短径 1.1m のほぼ楕円形を呈する。確認面からの深さは５～ 10cm を測る。断面形は壁が緩やかに立ち上がり、底面は弧を描くレンズ状になる。覆土は２層に分かれ、炭化物を混入する黒色シルトが堆積する。

遺物は土師器の甕（146）や土器の小破片が出土した。

ＳＫ 95 土坑（第 22 図、第 45 図 147・148）

Ｇ区中央 14 － 10 Ｇで検出された。平面プランは長辺 1.2m、短辺 1.1m の隅丸方形を呈する。確認面からの深さは 10cm を測る。断面形は壁が急角度で立ち上がり、底面が平坦な台形状となる。覆土は概ね２層に分かれ、黒色シルトと黒褐色砂混じりシルトである。上層に黄灰色の粘土がブロック状に堆積する。

遺物は、須恵器の有台坏（147）と砥石（148）が出土した。147 は底部に転用硯の痕跡が残る。148 は２面に擦痕がみられるが、未整形で使用されたと考えられる。有台坏の特徴から、９世紀中頃の時期と考えられる。

ＳＫ 96 土坑（第 22 図、第 45 図 149）

Ｇ区中央 14 － 10 Ｇで検出された。平面プランは長径 0.9m、短径 0.6m の楕円形を呈する。確認面からの深さは 30cm を測る。断面形は壁が急角度で立ち上がり、底面が弧を描くＵ字状となる。覆土は５層に分かれ、褐色シルトを混入する黒色シルトやオリーブ黒色細砂、黒色砂混じりシルトが堆積する。

遺物は、土師器の甕（149）の底部資料が出土している。二次加熱を受け、外面が剥落している。

ＳＫ 109 土坑（第 30 図）

Ｇ区北東側 16 － 11 ＧでＳＧ 23 の壁面に検出された。ＳＧ 23 に上部を切られる。平面プランは径 0.6m のほぼ円形を呈していたと思われる。覆土は３層に分かれ、オリーブ色砂混じり粘土、黒褐色粘土、灰色粗砂が堆積する。一部、底面が開口部より広くなっていることからフラスコ状土坑の可能性も考えられるが、遺物の出土が無く詳細は不明である。

ＳＸ６性格不明遺構（第 23 図、第 46 図 150 ～ 154）

Ｄ区東壁 13 － 10 ＧでＳＴ５南側に検出された。南半部が調査区外となる。平面プランは南北 1.7m 以上、東西 2.0m の不整形と考えられる。確認できた深さは 30cm を測る。断面形は壁が急角度で立ち上がり、底面は凹凸があるものの、ほぼ平坦な台形状となる。覆土は４層に分かれるが、黒色砂質土が多く堆積し、土器片や炭化物を混入する。

遺物は、須恵器の無台坏（150）、黒色土器の無台坏（151）、有台坏（152）、土師器の甕（153・154）などが出土した。151 は外面にケズリ調整が施される。また、151 と 152 は内面に黒色処理が施される。154 は二次加熱を受け、外面の摩滅が激しい。須恵器の無台坏の特徴から、９世紀後半の時期と考えられる。

ＳＸ 15 性格不明遺構（第 23 図、第 46 図 155 ～ 159）

Ｃ区東側９－７Ｇで検出された。南側半部は水路によって切られる。平面プランは南北 1.8m 以上、東西 2.6m の隅丸方形と思われる。確認面からの深さは５～ 20cm を測る。断面形は壁が急角度で立ち上がり、底面が平坦な台形状となる。

遺物は流れ込みと考えられる、縄文土器片（155 ～ 158）、凹石（159）などがある。155 は浅鉢の波状口縁部である。平行沈線文が描かれる。157 は胎土に雲母片が混入する。159 は石材が安山岩で凹は浅い。出土土器の時期は概ね縄文後期と考えられる。

ＳＸ 16 性格不明遺構（第 23 図、第 46 図 160・161）

Ｃ区中央８－７Ｇで検出された。長さ 1.9 ～ 4.7m、幅 1.2 ～ 3.1m を測る。平面プランが不整形で確認面からの深さも５cm に満たないことから落ち込みの可能性が高い。

出土遺物には、縄文土器の口縁部片（160）と木札（161）がある。160 は晩期後葉の鉢で縄文ＬＲの地文に平行沈線文が描かれる。161 は上部のみの資料で薄く作られ、抉りが作出される。

5　溝・河川

ＳＤ２溝（第 24 図、第 47 図 162 ～第 48 図 173）

Ｂ区中央からＦ区西側、４～６－２～４Ｇで検出された。Ｆ区でＳＫ 49 を切る。Ｆ区からＢ区へ南北方向に走り、４－４Ｇで直角に東に曲る溝である。長さは

41m で幅は 1.0 ～ 2.0m を測る。確認面からの深さは５～ 80cm を測り、Ｂ区内で深く、Ｆ区で浅くなる。断面形は壁が急角度で立ち上がり、底面が平坦な台形状や底面が弧を描くレンズ状の形態になる。黒色や黒褐色の砂質土や黒褐色の砂が主に堆積する。遺物は屈曲部から出土している。ほぼ直角に曲ることから区画溝とも考えられるが、詳細は不明である。

出土した遺物は、丁寧な作りとなる勾玉（162）、磨製石斧（163）、石棒（164）、表面に媒が付着している石皿（165）、磨石（166）などの縄文時代の石器・石製品と、古代の須恵器の無台坏（167 ～ 169）、壺（170）、甕破片（171・172）、中世陶器の甕（173）などがある。須恵器無台坏は底径が大きく、底部切り離しは全てヘラ切りとなる。173 は外面に火ハネ痕がある。中世陶器が出土していることから、中世の溝と考えられる。

ＳＤ 64 溝（第 25 図）

Ｆ区中央６－３・４Ｇで検出された。ＳＤ 65 の西側に位置する南北方向の溝である。ＳＤ 63 に切られる。調査区内での長さは 11m を測るが、さらに南側に延びる。幅は 50cm で、確認面からの深さは 30 ～ 40cm となる。断面形は壁が急角度で立ち上がり、底面が平坦な台形状や弧を描くＵ字状となる。覆土は暗赤褐色細砂や黒色シルトが堆積する。

ＳＤ 65 溝（第 25 図）

Ｆ区中央６－３・４Ｇで検出された。ＳＤ 64 の東側に位置する南北方向の溝で、ＳＤ 66 と平行に走る。調査区内での長さは 12.4m で、さらに調査区外に延びると考えられたが、Ｂ区では削平のためか検出されなかった。幅 0.4 ～ 1.3m で、確認面からの深さ 15 ～ 20cm を測る。断面形は壁が緩やかに立ち上がり、底面が弧を描くレンズ状となる。覆土は黒褐色シルトと黒色粘質シルトが堆積する。

ＳＤ 66 溝（第 25 図、第 48 図 174・175）

Ｆ区中央６・７－３・４Ｇで検出された。ＳＤ 65 の東側に位置する南北方向の溝で、ＳＤ 65 と平行に走る。調査区内での長さ 11.5m で、さらに調査区外に延びる。幅 2.0 ～ 2.6m で、確認面からの深さ 40 ～ 70cm を測る。断面形は壁が急角度で立ち上がり、底面がほぼ平坦な台形状となる。覆土は黒褐色や黒色の粗砂やシルトが多く堆積し、石や小礫を多量に混入する。

遺物は、流れ込みと考えられる縄文時代の土器（174）と石器（175）が出土した。174 は縄文時代晩期の深鉢の口縁部資料で、地文は縄文ＬＲである。175 は左側縁と先端に連続的な調整加工が施される。石材は頁岩である。

ＳＤ 72 溝（第 25 図）

Ｆ区北端７・８－５Ｇで検出された。ＳＤ 73 の覆土に構築された東西方向の溝である。調査区内での長さ 14m で、さらに調査区外に延びる。幅 0.4 ～ 0.7m で、確認面からの深さ 10cm を測る。断面形は壁が緩やかに立ち上がり、底面が弧を描くレンズ状となる。覆土は、極暗褐色粗砂で、多量の小礫を混入する。

ＳＤ 73 溝（第 25 図）

Ｆ区北端７・８－５Ｇで検出された。ＳＤ 72 に覆土を切られる東西方向の溝である。調査区内での長さ 14m で、さらに調査区外に延びる。幅 0.9 ～ 1.3m で、確認面からの深さ 30 ～ 40cm を測る。断面形は壁が緩やかに立ち上がり、底面が弧を描くレンズ状の形態となるが、壁面途中に段が付く。覆土は、黒褐色のシルトや細砂で、炭化物や小礫を混入する。

ＳＤ 86 溝（第 26 図）

Ｇ区東側 15 － 10・11 Ｇで検出された。ＳＫ 85 の東側に位置する南北方向の溝である。ＳＤ 87 とほぼ平行に走る。調査区内での長さ 11.8m で、南側に延びる。幅 0.3 ～ 0.5m で、確認面からの深さ５～ 10cm を測る。断面形は壁が緩やかに立ち上がり、底面が弧を描くレンズ状の形態となる。覆土は、黒色の砂混じりシルトである。図示しなかったが、近世の磁器片が出土した。

ＳＤ 87 溝（第 26 図、第 48 図 176 ～ 179）

Ｇ区東側 15・16 － 10・11 Ｇで検出された。ＳＤ 86 の東側に位置する南北方向の溝である。ＳＤ 86 とほぼ平行に走り、北側でＳＧ 23 を切る。調査区内での長さ 14.3m で、さらに調査区外に延びる。幅 0.4 ～ 1.0m で、確認面からの深さ 10 ～ 15cm を測る。断面形は壁が急角度で立ち上がり、底面が平坦となる台形状や弧を描くＵ字状の形態となる。覆土は黒色のシルトや細砂で、細砂利を多量に混入する。遺物は、古代の土師器甕（176）や黒色土器坏（177）、中世陶器（178）、金属製品（179）が出土した。177 は内面に黒色処理が施されミガキ調整される。178 は擂鉢で８条の卸目がみられる。179 は毛抜きであると思われる。近世の溝と考えられる。

ＳＤ 91 溝（第 26 図）

Ｇ区北端 16・17 － 12 Ｇで検出された。ＳＧ 23 の北側に位置する東西方向の溝である。調査区内での長さ８ｍで、さらに東西に延びる。幅 0.9 ～ 1.5m で、確認面からの深さ 20 ～ 30cm を測り、南側が浅くて北側が深くなる。壁は東では急角度で立ち上がり、西では緩やかに立ち上がる。覆土は２層で、上層に黒色シルト、下層にオリーブ黒色粘質シルトが堆積する。図示しなかったが、近世の陶磁器などが出土している。

ＳＤ 92 溝（第 26 図、第 48 図 180）

Ｇ区北東隅 16・17 － 11 Ｇで、ＳＧ 23 の上層に検出された。ＳＧ 23 を切る東西方向の溝である。調査区内での長さは 7.0m でさらに東西に延びる。幅 1.0 ～ 2.0m、確認面からの深さは 25 ～ 40cm を測り、南側が浅く、北側が深くなる。壁は緩やかに立ち上がる。覆土は４層に分かれ１層に黒褐色砂混じりシルト、２・３層に黒色シルト、４層に黒褐色粘土が堆積する。２・３層には炭化粒、炭化物を混入する。

遺物は、土師器の甕片（180）などが出土している。180 は底部資料で、底部に木葉痕がみられる。

ＳＧ 23 河川（第 27 図～第 30 図、第 49 図 181 ～第 96 図 592）

Ｄ・Ｅ区からＧ区の北側、11 ～ 17 － 11・12 Ｇで検出された河川である。Ｇ区でＳＤ 87・92 に切られる。調査区内での長さはＤ・Ｅ区内で 51.0m、Ｇ区で 19.0m を測り、さらに調査区外に延びる。西から東に流れていたと考えられる。幅 2.7 ～ 8.0m で、西側が広い。確認面からの深さは 1.0 ～ 1.5 ｍを測り、断面形は壁が急角度で立ち上がり、底面がほぼ平坦となる台形状を呈する。覆土は上層に細砂が中層に粘質のシルト、下層には粗砂が多く堆積する。また、覆土には多くの木片や炭化物を混入する。

遺物は、縄文時代の遺物から古代の土器、土製品、木製品、中世の鉄製品、木製品などが出土し、中には墨書土器 59 点と刻書土器１点も含まれる。181 ～ 185、187 ～ 194 は縄文時代の遺物で、186 は弥生土器である。

181・182 は縄文中期の土器で、181 は大木８ａ式、182 は大木９式である。183 ～ 185 は晩期後葉の土器で、184 と 185 は同一個体で、平行沈線文が描かれ、小さな貼り瘤が付く。186 は弥生土器で、交互刺突文が施され、天王山式と考えられる。187・188 は削器で、187 は縦長剥片を素材とし、左側縁に両面調整加工を施す。188 は横長剥片素材で、背面の先端部調整加工を施す。189 は掻器で、先端部に急角度の調整加工により刃部を作出している。190 は石箆で、両面に調整加工が施される。191 は磨製石斧の基部のみ、192 は表裏面に凹がみられる凹石、193 は石棒、194 は石製の玉である。縄文及び弥生時代の遺物は流れ込みと考えられる。

古代の土器は 195 ～ 434 である。須恵器の蓋（195 ～ 197）は平笠タイプで 196 は摘みが宝珠形となる。197 は摘みに「他田（おさだ）」の墨書があり、196 は外面体部に墨痕がある。須恵器の有台坏（198 ～ 210）は、底径が小さく、器高が比較的高く、底部切り離しが回転糸切となるものが多い。200 と 205 は底部切り離しがヘラ切りとなる。210 は外面下部に明瞭な稜が作出される稜碗である。200・202・204・206 ～ 208 は転用硯や墨書土器である。須恵器の無台坏（211 ～ 329）は、底径が大きく器高が低いもの（211 ～ 240）と、底径が小さく器高が高いもの（294 ～ 324）が多く出土している。前者の底部切り離しは全てヘラ切りで、後者は１点を除き回転糸切となる。また、全体的に歪みや焼成不良のものが多くみられる。

他に、須恵器には壺（330 ～ 325）、甕（336・337）、横瓶（338）がある。330 と 336 は小型の壺と甕である。331 ～ 334 には自然釉が付着し、334 は二次加熱を受けている。338 は器厚も薄く、丁寧な作りで内面にナデ調整が施される。外面に自然釉がかかる。

土師器の無台坏（339 ～ 368）は、ロクロを使わず、粘土紐を輪積みして内外面をケズリやヘラナデ、ハケメ、ミガキなどで整形し、底部に網代痕や木葉痕がみられるもの（339 ～ 360）、ロクロ整形のもの（361 ～ 368）の２種がある。ロクロ不使用の無台坏には、底径に対して器高が低く坏形のもの（339 ～ 345）と、底径に比べ器高が高くなる碗形となるもの（346 ～ 360）がある。347・348 などは、ロクロ整形の須恵器や土師器の器形と類似するものもみられることから、それらを意識して作られたと考えられる。ロクロ使用のものは底部切り離しがヘラ切りとなる 361・362、回転糸切の 368 がある。364 ～ 366 は底部に粘土が残存し、366 には削り取ろうとした痕跡がみられる。368 の体部には「千」の墨書がある。

369 ～ 398 は土師器の甕である。369 ～ 376 は器高が低い小型のもの、377 は中型のもので、380 ～ 398 は大型の長胴甕である。377・379 は内外面にミガキ調整が施され、377 には一部分に黒色処理がみられた。小型、中型の底部には網代痕や木葉痕が多く認められる。大型は 380 に木葉痕、381・397 には網代痕がみられ、394・396 はケズリ調整となる。399 ～ 401 は土師器の鉢で 399 と 400 の底部には網代痕があり、401 の底部には媒が付着する。402・403 は土師器の堝である。

黒色土器には有台坏（404 ～ 407）や、ロクロを使わず、粘土紐を輪積みして内外面をケズリやヘラナデ、ハケメなどで整形し、黒色処理を施す無台坏（408 ～ 422）、ロクロ整形の無台坏（423 ～ 430）、器高が高い鉢（431 ～ 433）、甕（434）がある。全て内面に黒色処理が施される。404・406 は付け高台で、405・407 は削り出しで高台が作出される。408 ～ 422 はロクロ不使用の無台坏と同様の作りで、底部に網代痕や木葉痕があり、内面に黒色処理が施されてミガキ調整が入る。412 の体部には「寺ヵ」の墨書と墨痕がある。423 ～ 426 は底部切り離しが回転糸切で、428・430 はヘラ切り離しの後にヘラナデが施される。431 ～ 433 は外面にケズリ調整が施され、432 の内面にはハケメがみられる。434 は底径が大きく寸胴のような形態の甕である。底部に網代痕がある。

435 はカマドの上にのせる台と思われる。中央に径 20cm 程の円形の穴があり、ここに甕などを設置したと考えられる。表裏面にハケメ調整が施される。436 は半円状の土製品で、指圧痕が表面に残る。突起部の剥がれたものとも考えられるが詳細は不明である。437 ～ 439 は擦痕が認められることから砥石と判断した。439 は中央に細く深い擦痕があり、通常の砥石とは異質である。440 は鏨である。先端は細く基部は途中で破損している。

441 ～ 592 は木製品である。器種は容器が多く、ＳＧ 23 からは 100 点出土した。441 ～ 452 は椀である。高台が低く作られるもの（441 ～ 445）と高く作られるもの（446 ～ 452）がある。445・446・449・450 には焼焦痕が見られ、450 は口縁部に片口状の焼焦がある。453 ～ 491 は皿である。皿には無台のもの（453 ～ 464）、台が著しく低いもの（465 ～ 482）、低い高台のもの（483 ～ 488）、高い高台のもの（489 ～ 491）がある。453・454 は内外面に黒漆が塗られ、485 も内面に微量の黒漆が残り、453 の底部にはロクロの刺痕が認められる。456・465・466・483 には焼焦痕がある。457 の内面と底面には工具による削痕がみられる。462・480・482 の底部には刻み文字のような工具痕？がみられた。椀、皿の木取りは 490 が横木取りで他は縦木取りとなる。樹種は広葉樹で樹種同定したものは全てケヤキ（第Ⅴ章－ 7）であった。

492 ～ 540 は曲物である。側板や底板のみの場合も曲物に入れた。曲物は側板を樹皮で固定するもの（492 ～ 510・523 ～ 525）と木釘で固定するもの（511 ～ 522・526 ～ 534）がある。492・517 ～ 519・528・529・532・533・537 には黒漆の付着がみられる。498・499 には皿でみられた刻み文字のような工具痕がある。533 はケズリ痕が明確に残り、544 は側面に半円状の削り出しが作出され、小さい孔が２ヶ所あけられる。539 にも２ヶ所の穿孔がある。樹種は針葉樹が大半を占め、一部広葉樹がみられた。

食事具には柄杓（541・542）と匙（543・544）、杓子形木器（545）、箸（557 ～ 559）がある。柄杓は、身はひょうたんで、柄はスギで作られる。ひょうたんに孔を開け、柄を挿入している。同様のものが遊佐町の上髙田遺跡でも出土している。匙もひょうたんを加工して作られる。545 は柄の部分に焼焦痕がみられ、表裏面の大半が剥落している。箸は割り材を細く削り出して作出する。

服飾品は 546 の下駄１点である。546 は左足用のもので、木表を台の上面とする連歯下駄で歯と台を一木から作っている。上歯は片側が、下歯は両側が外方に張り出す。鼻緒の穴は上から下に穿孔される。焼焦痕がみられ、左足親指痕と台の下方に刃物痕が残る。樹種はスギである。

農具は、547 の木錘と 548 の横槌がある。547 は両端が太く中央部が細く削られる。548 は長さ 260mm の横槌である。敲打部と柄部は斜めに削られ、敲打部の先端も丸みを付けるように削られている。

武器は弓（549 ～ 556）がある。樹種は全てイヌガヤで、554・556 には焼焦痕があり、556 は切断痕が残る。555 は残存する先端を先尖状に削っていることから何かに転用している可能性がある。

560 ～ 576 は棒状の木製品で、563 と 576 以外は割り材を削り出して作出している。560 ～ 562・569 は太さと丁寧な削り出しから柄杓の柄の可能性が考えられる。571・572・574・576 には焼焦痕がある。571 は断面が三

角形で、575 は先端が細く削られる。

祭祀具と考えられるものは 577 と 578 である。577 は上部に顔が彫られる人形である。目と口を浅い切り込みで表現している。頸となる部分は細めに削り出し、下部は尖頭状に削っている。全長 215mm で樹種はイヌガヤである。祭祀用のものと考えられる。遊佐町の上高田遺跡２・３次報告書に掲載されている第60図856の木針も、その形態から顔の部分が破損した人形の可能性が考えられる。578 は幅 16mm 程の細く薄い平らな板の間に膠（にかわ）のようなものを厚く塗り、２枚以上接着させて作成していると考えられる。下部は細く、尖頭状に削られる。小型の斎串に似ているが詳細は不明である。

579 は皿を転用した有孔木製品である。中心に径 12mm の穴が開けられている。焼焦痕がみられ、表裏面の剥落が著しい。

部材と考えられるものが 580 と 581 である。580 は角材の部材の一部と思われる。四面を面取りして、62 × 44mm 角の孔が開けられている。581 も楕円状の形態になる部材の一部と思われ、ほぞ穴が作出されている、ほぞ穴にはノミによる加工痕が残る。

582 ～ 586 は用途不明の板状の木製品である。582 は焼焦痕があり、上部周縁部に木釘孔１ヶ所と下部中央に小さな穴が１ヶ所認められる。裏面には削り痕が残る。583 は断面レンズ状の板材で、表面は平らに整形され、裏面は弧を描くように削られる。破損部分に凹部が見られるが、意識的に作出したものかは不明である。584 と 586 は幅が狭い板状のものである。585 は曲物の底板の一部を転用したものである。上下に抉りが入り、中央が若干細く加工されている。樺皮が３ヶ所残る。樹種は 582・586 が針葉樹で 583 ～ 585 は広葉樹である。

587 ～ 592 は大型の用途不明木製品である。589 は断面がＬ字状で、左側面にＵ字状の切り込みが作出されている。591 も断面がＬ字状で、右側面にＵ字状の切り込みが２ヶ所と左側面に穿孔が１ヶ所確認できる。592 には焼焦痕が残る。樹種は 587・591 が針葉樹、588 ～ 590・592 は広葉樹と思われる。

縄文時代の遺物は流れ込みと考えられる。須恵器の無台坏には、底径が大きく、器高が低く底部切り離しがヘラ切りとなるもの、底径が小さく、器高が高く底部切り離しが回転糸切りとなる８世紀末から９世紀後半の特徴を示すものが出土している。土師器のロクロ未使用の坏は須恵器無台坏の古い時期と併行すると考えられる。

以上から、河川は８世紀末から９世紀に機能していたと推測される。

6　遺構外の出土遺物

縄文時代の遺物（第 97 図 593 ～第 99 図 621）

縄文土器、土偶、石器、石製品などが出土している。593 ～ 603 は縄文土器である。593 は深鉢の口縁部の破片で渦巻文が貼り付けられる。大木９式である。594 は４単位の波状口縁の長胴壺で、頸から胴部に平行文と斜行文が沈線で描かれ、地文は縄文 LR である。後期中葉の加曽利Ｂ式併行と思われる。595 ～ 597 は後期後葉の深鉢である。595 と 596 は口縁部資料で、595 の地文は縄文 LR で平行沈線文が描かれ、刻みが中央に入り２つに割れる瘤が口縁部に付く。596 の地文は縄文Ｌで沈線文が描かれ、瘤が付き、半円形の粘土紐が貼り付けられる。597 は略完形で、器面全体に櫛描きによる条線文が施される。598・600・601 は縄目のみが施されるもので、598・601 は縄文 LR、600 は縄文Ｌである。599 は格子状の沈線文が描かれる。602 は摩滅が激しく地文、時期は不明である。603 は注口のみの資料である。下部に隆帯が張り付けられる。後期中葉と考えられる。604 ～ 606 は土偶の脚部で指圧痕がみられる。

607 ～ 617 は打製石器である。器種は、尖頭器（607）、石鏃（608）、石錐（609）、石匙（610 ～ 614）、削器（615・616）、石箆（617）がある。石材は全て頁岩である。607 は主要剥離面全面に調整加工を施すが、背面側は周縁部のみ調整加工される。608 は基部を、609 は先尖部を欠く。610・611 は完形品である。612 は摘み部の抉りが浅く、未成品の可能性がある。612 ～ 614 は刃部を欠く。615 は左側面を、616 は右側面と先端部を刃部とする。617 は撥形で刃部が両刃状となる。618 は完形の両側面を面取りする定角式の磨製石斧である。619 は凹石で一面に凹痕をもつ。620・621 は石皿である。620 は砂岩を素材とし、中央部に浅い窪みがみられる。621 は、ほぼ扁平な礫岩を素材とし、表裏面に媒が付着している。

古代の土器（第 100 図 622 ～第 105 図 679）

須恵器は蓋、有台坏、無台坏、双耳坏、壺、甕がある。蓋は、平笠タイプで器高が低いものが多く、口唇部がや

や内傾する。629 は山笠タイプで摘みが宝珠形となる。626 は摘みに墨書「十万」がある。630 は短頸壺の蓋である。有台坏は、底径が大きく、器高が高いものが多く、底部切り離しは、631 が回転糸切、633 ～ 635 はヘラ切りである。無台坏は底径が大きめで、器高が低めのものが大半を占めるが、底部の切り離しは回転糸切が多い。638・642 は焼成が悪く生焼けである。645 は箱型に近い形態を示す。650 の体部に墨書「□」がある。

656 は双耳坏の取手のみで、ケズリにより整形される。660 は大型の甕で、残存高 519mm を測る。頸から口縁部にかけて２本の波状文が描かれる。

土師器には無台坏、甕、鉢、甑がある。661・662 はロクロ不使用の無台坏で、ハケ、ナデ、ケズリで整形し、内面にミガキ調整を施す。661 は底部にもミガキが施され、662 は底部に網代痕がある。663 は器高が高い碗形となるロクロ整形の無台坏である。内面にミガキ調整が施され、外面下部は回転ヘラケズリにより整形されている。甕は、頸が直立する 664・665、くの字状になる 667・669、強く外反する 670・671 がある。667 は小型の長胴甕である。664・667・673・674 の底部には木葉痕が、672 は網代痕がみられる。676・677 は取手が付く甑と考えられる。

黒色土器は坏と甕がある。678 は内外面に黒色処理が施される両黒土器の坏である。679 は内黒土器で、内面に黒色処理が施される甕の底部資料である。

古代の土器は、概ね８世紀末から９世紀第３四半期頃のものが出土している。

その他の遺物（第 106 図 680 ～第 107 図 700）

680 は手捏ねのミニチュア土器で器部と思われる。

681 ～ 686 は石製品である。681 ～ 683 は砥石である。砥面は 681・682 が４面、683 は３面である。681 の欠損部には穿孔されていた痕跡がみられる。681 と 682 は良く使い込まれ摩滅している。685 は瘤が６ヶ所に作出される石製の玉である。686 は円盤状の石製品で全面に削痕がみられる。中世の磁器は 687 と 688 で、共に龍泉窯産の青磁である。687 は盤で内面に鎬蓮弁文が描かれる。688 は稜花皿で、高台内は釉掻き取りとなる。687 は 13 世紀、688 は 15 世紀後半の年代と考えられる。鉄製品には鏨と古銭がある。古銭は 690 が天禧通寶、692・693 は元豊通寶、694 は寛永通寶である。691 は摩滅が激しく判別困難だが、紹元通寶とみられる。

木製品には、曲物（695）、板状の用途不明品（696・697）、部材（698）、柱（699・700）がある。695 は曲物の底板の一部で、穿孔が２ヶ所あり、２ヶ所に樺皮が残存し、焼焦痕が表裏面にみられる。696 は片面に漆が付着しているが、端部に線状の未付着部分がみられ、側板がついていた痕跡の可能性が考えられる。697 は端部の破損部に穿孔の痕跡がある。698 は段状に厚い部分と薄い部分を作出している。699 は側面、底面に加工痕が残る。700 は柱の根の部分のみである。焼焦痕が破損部分を含め、ほぼ全面にあることから焼失した建物の柱の可能性も考えられる。699 の樹種はクリで、年代測定によると、江戸時代以降の所産という結果（第Ⅴ章－３）を得ている。

7　墨書・刻書土器（第 108 ～ 110 図）

墨書、刻書、墨痕があるものについて述べる。転用硯のみの資料も５点掲載したが割愛する。

墨書土器 63 点、刻書土器1点がある。SG23 から 59 点、竪穴住居から３点、D 区南側のグリッドから2点出土した。

墨書の文字は、「物」が４点、「主」・「大」が各３点、「子鷹」・「本」・「物ヵ」が各２点、「主ヵ」・「中清」・「他田」・「王仁」・「若」・「山」・「廾」・「信」・「継」・「十万」・「日」・「吉」・「寺ヵ」・「□上」・「||」・「千」・「成□」・「十ヵ」・「卅」・「廣」・「五ヵ」・「全ヵ」・「子」・「中ヵ」・「□□」が各１点、「天井」と「廾」の２文字あるものが１点。「□」が 11 点、墨痕が 10 点、刻書「□」が１点である。墨書土器の種別は、須恵器が 60 点、土師器が１点、祭祀用の副葬品と考えられている黒色土器が２点である。刻書土器は須恵器１点である。

墨書土器の器種は、有台坏７点、無台坏 52 点、蓋４点、刻書土器は無台坏１点で食膳具のみである。

墨書土器の部位は、坏類の底部のみが 36 点と多くを占めるが、体部のみが 19 点、体部と底部の２ヶ所のものも５点ある。また、蓋の摘みが３点である。坏の内面底部に刻書がある 264 は特異な印象を受ける。

「中清」は横位と逆位で対面に、「本」は底部と体部に同じ文字が書かれものもある。黒色有台坏の底部に書かれる「王仁」は南陽市庚壇遺跡に刻書ではあるが出土例がある。墨書と刻書の違いはあるが、同じ器種の、同じ

部位に、同じ文字ということから、関連性が窺える。

「物」、「主」、「子鷹」、「大」など、同一の文字は同一人物により、同一の部位に記された可能性が高いことが山形大学三上氏より指摘されている（付編）。

8　遺物の分類（第 111 ～ 112 図）

本遺跡から、比較的まとまって出土した縄文土器、須恵器の蓋、有台坏、無台坏、土師器のケズリやナデ、ミガキ調整で整形された無台坏、甕、黒色土器のロクロ整形の無台坏、ケズリやナデ、ミガキ調整で整形された無台坏、鉢、そして木製品の椀、皿、曲物について器形や大きさなどの観点から分類を行った。なお、還元焔で焼成された土器を須恵器、酸化焔によって焼成された土器を土師器とした。各遺物の分類基準は以下のとおりである。

［縄文土器］

Ⅰ類：縄文時代中期に属するもの。

Ⅱ類：縄文時代後期に属するもの。

　a 類：精製土器となるもの。

　　1 類：沈線による平行文や斜行文が描かれるもの。

　　2 類：口縁部や体部に瘤が付き、沈線や磨消し縄文による半弧文または平行文が描かれるもの。

　b 類：粗製土器となるもの。

　　1 類：器面に櫛状工具による条線が施されるもの。

　　2 類：器面が縄文のみのもの。

　　3 類：ヘラ状工具により沈線が描かれるもの。

　　4 類：無文となるもの。

　c 類：底部資料。

Ⅲ類：縄文時代晩期に属するもの。

　a 類:沈線による平行文や入組文、匹字文が描かれる。

　b 類:衰退した小さな瘤が付き平行沈線文が描かれる。

　c 類：器面が縄文のみのもの。

Ⅳ類:摩滅や小破片のため時期が特定できない縄文土器。

［須恵器蓋］

A 類：平笠タイプとなるもの。

　a 類：器高が高くなるもの。

　b 類：器高が低いもの。

B 類：山笠タイプとなるもの。

［須恵器有台坏］

A 類：底径が大きく、器高が低いもの。

　a 類：坏部が直線状に立ち上がるもの。

　b 類：口縁部が外反するもの。

B 類：底径が大きく、器高が高いもの。

　a 類：坏部が内湾ぎみに立ち上がるもの。

　b 類：坏部が直線状に立ち上がるもの。

C 類：底径が小さく、器高がやや高くなるもの。

　a 類：坏部が直線状に立ち上がるもの。

　b 類：口縁部が外反するもの。

D 類：底径が小さく、器高が高くなるもの。

　a 類：坏部が内湾ぎみに立ち上がるもの。

　b 類：坏部が直線状に立ち上がるもの。

　c 類：口縁部が外反するもの。

E 類：坏部に明瞭な稜をもつもの（稜碗）。底径が大きく、器高は低い。

［須恵器無台坏］

A 類：底径が大きく、器高が低いもの。底部の切り離しは全てヘラ切りである。

　a 類：体部が直線状に立ち上がるもの。

　b 類：体部が内湾ぎみに立ち上がるもの。

　c 類：口縁部が外反するもの。

　　1 類：体部が急角度で立ち上がるもの。

　　2 類：体部が緩やかに立ち上がるもの。

B 類：底径がやや大きく、器高がやや高いもの。

　a 類：体部が直線状に立ち上がるもの。

　b 類：体部が内湾ぎみに立ち上がるもの。

　c 類：口縁部が外反するもの。

　　1 類：底部の切り離しがヘラ切りのもの。

　　2 類：底部の切り離しが回転糸切のもの。

C 類：底径がやや大きく、器高が高いもの。

　a 類：体部が直線状に立ち上がるもの。

　b 類：体部が内湾ぎみに立ち上がるもの。

　c 類：口縁部が外反するもの。

　　1 類：底部の切り離しがヘラ切りのもの。

　　2 類：底部の切り離しが回転糸切のもの。

D 類：底径が小さく、器高が高いもの。

　a 類：体部が直線状に立ち上がるもの。

　b 類：体部が内湾ぎみに立ち上がるもの。

　c 類：口縁部が外反するもの。

　　1 類：底部切り離しがヘラ切りとなるもの。

　　2 類：底部切り離しが回転糸切となるもの。

［土師器無台坏］：ケズリやナデ、ミガキ調整で整形。
A類：底径に対し、器高が低い坏形となるもの。
　a類：体部が内湾ぎみに立ち上がるもの。
　b類：体部が外反ぎみに立ち上がるもの。
　　1類：口径 12cm 以上、器高 4 cm 以上の大型。
　　2類：口径 12cm 未満、器高 4 cm 未満の小型。
B類：底径に対し、器高が高くなる碗形となるもの。
　a類：体部が内湾ぎみに立ち上がるもの。
　b類：体部が外反ぎみに立ち上がるもの。
　　1類：口径 13cm 以上、器高 5.5cm 以上の大型。
　　2類：口径 13cm 未満、器高 5.5cm 未満の小型。

［土師器甕］
A類：器高が 13cm 未満の小型のもの。
B類：器高が 13cm 以上、20cm 未満の中型のもの。
　a類：胴部の最大径が体部の上方にくるもの。
　b類：胴部の最大径が体部のほぼ中央にくるもの。
　c類：胴部の最大径が体部の下方にくるもの。
　　1類：口縁部がほぼ直立し、鉢形となるもの。
　　2類：口縁部が外反するもの。
C類：器高が 20cm 以上の大型のもの。
　a類：口縁部が強く外反するもの。
　b類：口縁部がくの字状になるもの。
　c類：口縁部がくの字状で口唇部が立つもの。
　　1類：口径長が胴径長より長いもの。
　　2類：胴径長が口径長より長いもの。

［黒色土器無台坏］：ケズリやナデ、ミガキ調整で整形。
A類：体部の立ち上がりが緩やかで、底径に比べ口径が大きくなるもの。
　a類：体部が内湾ぎみとなるもの。
　b類：体部が直線状となるもの。
B類：体部が急角度で立ち上がり、箱形となるもの。
　a類：体部が内湾ぎみとなるもの。
　b類：体部が直線状となるもの。
C類：器高が高く、体部が内湾ぎみに立ち上がり、碗形となるもの。

［黒色土器無台坏］：ロクロ整形。
A類：体部が内湾ぎみに立ち上がるもの。底部切り離しは回転糸切となる。
B類：体部が直線状に立ち上がるもの。底部切り離し後に、ヘラナデ調整を施す。
C類：体部が外反ぎみに立ち上がるもの。外面下部にヘラナデ調整が入り、底部はヘラ切り後にヘラナデやケズリ調整を施す。
D類：内外面に黒色処理が施されるもの（両黒土器）。

［木製品椀］
A類：高台が低いもの。
　a類：高台径が大きいもの。
　b類：高台径が小さいもの。
　　1類：体部が薄く作られるもの。
　　2類：体部が厚めに作られるもの。
B類：高台が高いもの。
　a類：体部が内湾ぎみに立ち上がるもの。
　b類：体部が直線状に立ち上がるもの。
　c類：口縁部が外反するもの。
　　1類：体部が薄く作られるもの。
　　2類：体部が厚めに作れるもの。

［木製品皿］
A類：無台のもの。
　a類：器厚が薄く、口縁部が立ち上がるもの。
　b類：器厚が厚く、見込みの凹が少なく平らとなる。
B類：1 cm 未満の低い高台のもの。
　a類：体部が立ち上がり、見込みが作出されるもの。
　b類：体部の立ち上がりがほとんど無く、内面が平らになるもの。
C類：1 cm 以上、1.5cm 未満の高台のもの。
　a類：内面に体部の立ち上がりがあり、見込みの断面形が台形状になるもの。
　b類：内面体部の立ち上がりがほとんど無く、底面から緩やかに立ち上がるもの。
D類：1.5cm 以上の高い高台のもの。

［木製品曲物］
A類：直径が 20cm 未満のもの。
　a類：底板の周縁部に段を設け、側板をあて樹皮などで固定する。
　b類：底板の側面に直接側板をあて木釘で固定する。
B類：直径 20cm 以上のもの。
　a類：底板の周縁部に段を設け、側板をあて樹皮などで固定する。
　b類：底板の側面に直接側板をあて木釘で固定する。
C類:欠損のため、大きさや接合部が判別できないもの。

Ⅴ　自然科学分析

1　第１次調査における分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回は住居や杭列、河道埋積物中の種実の年代測定を行い、遺構の年代に関する情報を得る。また、平安時代の遺構埋積物や遺構構築以前の堆積物（いわゆる地山）について花粉分析を行い、古植生に関する情報を得る。また、甕棺が埋納された遺構について、土壌理化学分析を行い、遺体埋納の痕跡について調査する。さらに、出土した杭の樹種同定を実施し、当時の用材に関する情報を得る。

試　　料

分析試料の一覧を表１に示す。年代測定用試料は、住居や杭列、河道埋積物等から採取した、炭化材、生材、種実など10点である。花粉分析用試料は、河道や住居跡の覆土、基本土層、遺構確認面の下層（いわゆる地山）など15点である。土壌理化学分析用試料は、ＳＭ24の覆土、甕棺内土壌、対照試料となる地山など11点である。樹種同定用試料は、杭材２点であるが、土壌試料以外の年代測定用試料についても観察を行っている（ただし、写真撮影は実施していない）。

分析方法

（１）放射性炭素年代測定

試料は、超音波煮沸洗浄と酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸1.2Ｎ、水酸化ナトリウム１Ｎ、塩酸1.2Ｎ）により、不純物を取り除いたあと、グラファイトを合成し、測定用試料とする。測定機器は、ＮＥＣ製コンパクトＡＭＳ・1.5ＳＤＨを用いる。放射性炭素の半減期はＬＩＢＢＹの半減期5,568年を使用する。測定年代は1,950年を基点とした年代（ＢＰ）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION　PROGRAM CALIB　REV5.02（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

（２）花粉分析

約10gについて、水酸化ナトリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）よる有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9、濃硫酸１の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定･計数する。結果は同定･計数結果の一覧表として表示する。

（３）樹種同定

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東（1982）、Richter他（2006）を参考にする。また、各樹種の木材組織の配列の特徴については、林（1991）も参考にする。

（４）土壌理化学分析

今回の分析は、遺体埋納の痕跡を検討することから、リン酸、カルシウム、腐植含量の３項目を測定する。リン酸は硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法、カルシウムは硝酸・過塩素酸分解－原子吸光光度法、腐植はチューリン法で実施する（土壌養分測定法委員会,1981; 土壌標準分析・測定法委員会,1986）。以下に各項目の具体的な操作工程を示す。

試料を風乾後、軽く粉砕して2.00mmの篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、５時間）により測定する。風乾細土試料の一部を粉砕し、0.5mmφのふるいを全通させる（微粉砕試料）。

リン酸およびカルシウムは、風乾細土試料 2.00 g をケルダール分解フラスコに秤量し、硝酸約 5 ml を加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸約 10ml を加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で 100ml に定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P2O5）濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム（CaO）濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（P2O5mg/g）とカルシウム含量（CaOmg/g）を求める。

腐植含量は、微粉砕試料 0.100 ～ 0.500 g を 100ml 三角フラスコに正確に秤とり、0.4 N クロム酸・硫酸混液 10ml を正確に加え、約 200℃の砂浴上で正確に 5 分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアントラニル酸液を指示薬に 0.2 N 硫酸第 1 鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量（Org-C 乾土％）を求める。これに 1.724 を乗じて腐植含量（％）を算出する。

表 1　分析資料一覧

番号	地区	位置・試料名	状態	分析項目	現地サンプル番号
1	C 区	ST7 床面 1 中央	炭化材	年代測定	5
2	C 区	ST7 床面 2 北東コーナー	炭化材	年代測定	6
3	D 区	ST20 床面 1 中央	炭化材	年代測定	7
4	D 区	ST20 床面 2 北東壁板材	炭化材	年代測定	9
5	C 区	ST13 カマド	炭化材	年代測定	28
6	C 区	杭列 サンプル 2	生木	年代測定	23
7	E 区	SG23 流木	生木	年代測定	24
8	E 区	SG23 トチ	種実	年代測定	
9	E 区	SG23 クルミ	種実	年代測定	
10	E 区	SG23 検出面黒色粘土	土壌	年代測定	12
11	E 区	SG23 検出面黒色粘土	土壌（10 と同じ）	花粉分析	12
12	E 区	SG23 検出面黒色粘土下層の褐色粘土	土壌	花粉分析	13
13	E 区	SG23 検出面褐色粘土	土壌	花粉分析	14
14	E 区	SG23 検出面褐色粘土下層の青灰色粘土	土壌	花粉分析	15
15	E 区	SG23 壁面の青灰色粘土	土壌	花粉分析	16
16	E 区	SG23 検出面最下層青灰色粘土	土壌	花粉分析	17
17	E 区	SG23 検出面黒色粘土	土壌	花粉分析	18
18	E 区	調査区南端断面の黒色粘土	土壌	花粉分析	19
19	E 区	調査区南端壁断面の暗褐色土	土壌	花粉分析	20
20	E 区	SG23 の右岸 D 区との境界の黒粘土層	土壌	花粉分析	21
21	E 区	SG23 の右岸 D 区の青灰色粘土	土壌	花粉分析	22
22	E 区	SG23 覆土	土壌	花粉分析	23
23	D 区	G13-9 付近遺構確認面	土壌	花粉分析	25
24	C 区	ST14 出土 RP109 短頸壺内の土壌	土壌	花粉分析	44
25	D 区	RP85 内の土壌	土壌	花粉分析	47
26	C 区	SM24 合口甕棺 RP302 上層	土壌	土壌理化学分析	32
27	C 区	SM24 合口甕棺 RP302 中層	土壌	土壌理化学分析	33
28	C 区	SM24 合口甕棺 RP302 下層	土壌	土壌理化学分析	34
29	C 区	SM24 合口甕棺 RP303 内土壌 1	土壌	土壌理化学分析	35
30	C 区	SM24 合口甕棺 RP303 内土壌 2	土壌	土壌理化学分析	35
31	C 区	SM24 合口甕棺出土土坑内の覆土	土壌	土壌理化学分析	38
32	C 区	SM24 合口甕棺 RP303 の下の土	土壌	土壌理化学分析	39
33	C 区	SM24 合口甕棺 RP303 北側土坑底面の土	土壌	土壌理化学分析	40
34	C 区	SM24 合口甕棺周辺地山（甕棺北側）	土壌	土壌理化学分析	41
35	C 区	SM24 合口甕棺周辺地山（甕棺南側）	土壌	土壌理化学分析	42
36	C 区	SM24 合口甕棺の上層坏 RP299 下の土壌	土壌	土壌理化学分析	43
37	C 区	杭列　サンプル 2-1	生木（6 と同じ）	樹種同定	2
38	C 区	杭列　サンプル 2-2	生木（6 と同じ）	樹種同定	3

結　　果

（1）放射性炭素年代測定

放射性同位体効果による補正を行った測定結果を表２に、暦年較正値を表３に示す。暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5,730±40年）を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、１年単位で表す。暦年較正は、測定誤差σ、2σ双方の値を計算する。σは統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、２σは真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、σ、２σの範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

暦年較正値をみると、住居の床面から検出された炭化材は、おおよそ８－９世紀を示し、平安時代の年代を示す。杭列の試料は新しく、近世以降の年代値を示す。河道の木材や種実は10世紀前後であり、住居跡の炭化材の値に近い。河道の地山に相当する遺構検出面の黒色土は古く、約7000年前を示す。

（2）花粉分析

分析結果を表４に示す。花粉化石は全体的に保存が悪く、種類数、個数ともに少ない試料が大部分を占める。

河道（ＳＧ23）検出面よりも下位（地山）の試料７点は（試料番号11－17）、モミ属、マツ属、イネ科、ヨモギ属、シダ類胞子が若干認められる程度である。Ｅ区断面の黒色粘土ならびに暗褐色土（試料番号18－19）では、他に比べて花粉化石がやや多く検出される。木本花粉ではマツ属とハンノキ属が多くみられる。草本花粉は、イネ科、カヤツリグサ科、アカザ科、セリ科、ヨモギ属等が検出されるが、この中でもヨモギ属が特に多産する。

河道（ＳＧ23）の覆土、埋設土器内の土壌等（試料番号20－25）に関しても花粉化石の保存状態が悪く、モミ属、マツ属、イネ科、ヨモギ属、シダ類胞子が若干認められる程度である。

（3）樹種同定

樹種同定の結果、分析を行った杭材（杭列サンプル２－１、２－２）の樹種はいずれもマツ属複維管束亜属であった（表５）。また、年代測定試料の種類（木材･種実）同定も行い、その結果は年代測定結果（表２）に記してある。以下に杭材に関する解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複維管束亜属（Pinus subgen. Diploxylon）マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、１－10細胞高。

（4）土壌理化学分析

結果を表６に示す。腐植含量は甕棺内の試料が３％程度、土坑内や地山試料で１－２％程度である。リン酸含量はいずれも１mg/g以下であるが、腐植含量の少ない試料で低い傾向がある。そのため、腐植含量とリン酸含量には正の相関がみられ、相関係数は0.84である。カルシウム含量は１－２mg/gであり、腐植やリン酸と同様、ばらつきが小さい。

表２　放射性炭素年代測定結果

番号	区	試料名	性状	補正年代 BP	δ^{13}C (‰)	測定機関番号	Code. No.
1	C 区	ST7 床面 1 中央	炭化材（広葉樹）	1145 ± 20	-25.17 ± 0.17	PLD-7034	9513-1
2	C 区	ST7 床面 2 北東コーナー	炭化材（クリ）	1270 ± 20	-24.14 ± 0.17	PLD-7035	9513-2
3	D 区	ST20 床面 1 中央	炭化材（オニグルミ）	1195 ± 20	-24.96 ± 0.19	PLD-7036	9513-3
4	D 区	ST20 床面 2 北東壁板材	炭化材（広葉樹）	1235 ± 20	-25.71 ± 0.17	PLD-7037	9513-4
5	C 区	ST13 カマド	炭化材（不明）	1180 ± 20	-26.94 ± 0.17	PLD-7038	9513-5
6	C 区	杭列 サンプル 2	生木（マツ属複維管束亜属）	245 ± 20	-25.40 ± 0.17	PLD-7039	9513-6
7	E 区	SG23 流木	生木（ヤナギ属）	1135 ± 20	-26.43 ± 0.18	PLD-7040	9513-7
8	E 区	SG23 トチ	種実（トチノキ）	1095 ± 20	-25.87 ± 0.17	PLD-7041	9513-8
9	E 区	SG23 クルミ	種実（オニグルミ）	1090 ± 20	-27.13 ± 0.19	PLD-7042	9513-9
10	E 区	SG23 検出面黒色粘土	土壌	6200 ± 30	-15.82 ± 0.17	PLD-7043	9513-10

1）年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用。
2）BP年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。
3）付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の 68％が入る範囲）を年代値に換算した値。

表３　暦年較正結果

番号		補正年代 (BP)		暦年較正年代（cal）															相対比	Code No.
1	C 区 ST7 床面 1 中央	1144 ± 21	σ	cal	AD	882	–	cal	AD	900	cal	BP	1,068	–	1,050	0.296	9513–1
				cal	AD	918	–	cal	AD	963	cal	BP	1,032	–	987	0.704	
			2 σ	cal	AD	783	–	cal	AD	788	cal	BP	1,167	–	1,162	0.010	
				cal	AD	813	–	cal	AD	845	cal	BP	1,137	–	1,105	0.073	
				cal	AD	857	–	cal	AD	974	cal	BP	1,093	–	976	0.917	
2	C 区 ST7 床面 2 北東コーナー	1269 ± 22	σ	cal	AD	689	–	cal	AD	725	cal	BP	1,261	–	1,225	0.585	9513–2
				cal	AD	738	–	cal	AD	753	cal	BP	1,212	–	1,197	0.245	
				cal	AD	759	–	cal	AD	771	cal	BP	1,191	–	1,179	0.170	
			2 σ	cal	AD	674	–	cal	AD	777	cal	BP	1,276	–	1,173	1.000	
3	D 区 ST20 床面 1 中央	1196 ± 21	σ	cal	AD	781	–	cal	AD	791	cal	BP	1,169	–	1,159	0.148	9513–3
				cal	AD	807	–	cal	AD	871	cal	BP	1,143	–	1,079	0.852	
			2 σ	cal	AD	775	–	cal	AD	889	cal	BP	1,175	–	1,061	1.000	
4	D 区 ST20 床面 2 北東壁板材	1236 ± 22	σ	cal	AD	695	–	cal	AD	699	cal	BP	1,255	–	1,251	0.026	9513–4
				cal	AD	708	–	cal	AD	747	cal	BP	1,242	–	1,203	0.473	
				cal	AD	765	–	cal	AD	782	cal	BP	1,185	–	1,168	0.212	
				cal	AD	789	–	cal	AD	811	cal	BP	1,161	–	1,139	0.222	
				cal	AD	846	–	cal	AD	856	cal	BP	1,104	–	1,094	0.067	
			2 σ	cal	AD	689	–	cal	AD	752	cal	BP	1,261	–	1,198	0.427	
				cal	AD	761	–	cal	AD	872	cal	BP	1,189	–	1,078	0.573	
5	C 区 ST13 カマド	1181 ± 22	σ	cal	AD	782	–	cal	AD	789	cal	BP	1,168	–	1,161	0.091	9513–5
				cal	AD	811	–	cal	AD	847	cal	BP	1,139	–	1,103	0.480	
				cal	AD	855	–	cal	AD	887	cal	BP	1,095	–	1,063	0.429	
			2 σ	cal	AD	776	–	cal	AD	895	cal	BP	1,174	–	1,055	0.980	
				cal	AD	927	–	cal	AD	935	cal	BP	1,023	–	1,015	0.020	
6	C 区 杭列 サンプル 2	247 ± 20	σ	cal	AD	1,645	–	cal	AD	1,664	cal	BP	305	–	286	1.000	9513–6
			2 σ	cal	AD	1,640	–	cal	AD	1,668	cal	BP	310	–	282	0.784	
				cal	AD	1,782	–	cal	AD	1,797	cal	BP	168	–	153	0.209	
				cal	AD	1,948	–	cal	AD	1,950	cal	BP	2	–	0	0.007	
7	E 区 SG23 流木	1136 ± 22	σ	cal	AD	888	–	cal	AD	900	cal	BP	1,062	–	1,050	0.208	9513–7
				cal	AD	918	–	cal	AD	964	cal	BP	1,032	–	986	0.792	
			2 σ	cal	AD	784	–	cal	AD	786	cal	BP	1,166	–	1,164	0.003	
				cal	AD	825	–	cal	AD	841	cal	BP	1,125	–	1,109	0.023	
				cal	AD	862	–	cal	AD	982	cal	BP	1,088	–	968	0.973	
8	E 区 SG23 トチ	1093 ± 21	σ	cal	AD	899	–	cal	AD	919	cal	BP	1,051	–	1,031	0.365	9513–8
				cal	AD	950	–	cal	AD	986	cal	BP	1,000	–	964	0.635	
			2 σ	cal	AD	892	–	cal	AD	994	cal	BP	1,058	–	956	1.000	
9	E 区 SG23 クルミ	1089 ± 22	σ	cal	AD	899	–	cal	AD	919	cal	BP	1,051	–	1,031	0.357	9513–9
				cal	AD	950	–	cal	AD	988	cal	BP	1,000	–	962	0.643	
			2 σ	cal	AD	894	–	cal	AD	995	cal	BP	1,056	–	955	0.980	
				cal	AD	1,005	–	cal	AD	1,012	cal	BP	945	–	938	0.020	
10	E 区 SG23 検出面黒色粘土	6199 ± 28	σ	cal	BC	5,215	–	cal	BC	5,205	cal	BP	7,165	–	7,155	0.102	9513–10
				cal	BC	5,167	–	cal	BC	5,116	cal	BP	7,117	–	7,066	0.536	
				cal	BC	5,111	–	cal	BC	5,076	cal	BP	7,061	–	7,026	0.361	
			2 σ	cal	BC	5,288	–	cal	BC	5,269	cal	BP	7,238	–	7,219	0.024	
				cal	BC	5,228	–	cal	BC	5,051	cal	BP	7,178	–	7,001	0.976	

1）年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用。
2）BP年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。
3）付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の 68％が入る範囲）を年代値に換算した値。

表４　花粉分析結果

種　類　資料番号	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25
木本花粉															
モミ属	－	－	1	－	4	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
ツガ属	－	－	－	－	1	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－
トウヒ属	－	－	－	－	3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
マツ属複維管束亜属	－	－	－	－	－	－	－	3	1	－	－	2	－	－	－
マツ属（不明）	－	－	－	－	－	－	－	5	22	－	－	1	－	1	－
スギ属	－	－	－	－	－	－	－	1	4	－	－	1	1	－	－
サワグルミ属	－	－	－	－	－	－	－	1	1	－	－	－	－	－	－
クマシデ属－アサダ属	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－
ハンノキ属	－	－	－	1	1	－	－	10	51	2	2	－	1	－	－
ブナ属	－	－	－	－	1	－	－	－	4	－	－	－	－	－	－
コナラ属コナラ亜属	－	－	－	－	－	－	－	1	4	1	－	3	－	1	－
コナラ属アカガシ亜属	－	－	－	－	2	－	1	1	3	－	－	－	－	－	－
クリ属－シイノキ属	－	－	－	1	－	－	1	3	9	－	－	－	－	4	－
ニレ属－ケヤキ属	－	－	－	－	－	－	－	3	－	－	－	－	－	2	－
トチノキ属	－	－	－	－	－	－	－	1	2	－	－	－	－	－	－
草本花粉															
イネ科	－	－	1	－	3	－	1	12	39	－	－	2	1	10	－
カヤツリグサ科	－	－	－	－	－	－	－	3	12	－	－	－	－	－	－
クワ科	－	－	－	－	－	－	－	1	4	－	－	－	－	－	－
ソバ属	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－
アカザ科	－	－	－	－	－	－	－	3	7	－	－	－	－	1	－
ナデシコ科	－	－	－	－	－	－	－	1	1	－	－	－	－	－	－
カラマツソウ属	－	－	－	－	－	－	－	－	4	－	－	－	－	－	－
ツリフネソウ属	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－
セリ科	－	－	－	－	－	－	－	－	6	－	－	－	1	－	－
ヨモギ属	1	3	2	1	－	－	4	49	179	3	－	4	2	17	1
キク亜科	－	－	－	－	－	－	－	1	6	－	－	－	－	－	－
タンポポ亜科	－	－	－	－	－	－	－	－	3	－	－	－	－	－	－
不明花粉	－	－	－	－	－	－	2	3	16	－	1	－	1	3	－
シダ類胞子															
シダ類胞子	4	3	4	8	34	5	9	46	189	34	12	4	9	26	8
合　計															
木本花粉	0	0	1	2	12	0	2	30	101	3	2	8	2	8	0
草本花粉	1	3	3	1	3	0	5	70	263	3	0	6	4	28	1
不明花粉	0	0	0	0	0	0	2	3	16	0	1	0	1	3	0
シダ類胞子	4	3	4	8	34	5	9	46	189	34	12	4	9	26	8
総計（不明を除く）	5	6	8	11	49	5	16	146	553	40	14	18	15	62	9

表５　樹種同定結果

番号	地区	遺構	位置・試料名	遺物番号	状態	樹種
37	C 区	杭列	サンプル 2–1	現地サンプル番号 2	生木	マツ属複維管束亜属
38	C 区	杭列	サンプル 2–2	現地サンプル番号 3	生木	マツ属複維管束亜属

表６　土壌理化学分析結果

	試料名	土性	土色	腐植含量（%）	P2O5（mg/g）	CaO（mg/g）
26	C 区 SM24 合口甕棺 RP302 上層	SC	2.5Y2/1 黒	2.83	0.72	1.47
27	C 区 SM24 合口甕棺 RP302 中層	SC	2.5Y2/1 黒	2.96	0.75	1.58
28	C 区 SM24 合口甕棺 RP302 下層	SC	2.5Y2/1 黒	3.12	0.74	1.82
29	C 区 SM24 合口甕棺 RP303 内土壌 1	LiC	2.5Y2/1 黒	3.32	0.77	1.67
30	C 区 SM24 合口甕棺 RP303 内土壌 2	LiC	2.5Y2/1 黒	2.81	0.80	1.54
31	C 区 SM24 合口甕棺出土土坑内の覆土	LiC	2.5Y2/1 黒	2.54	0.68	1.56
32	C 区 SM24 合口甕棺 RP303 の下の土	SC	2.5Y2/1 黒	2.02	0.64	1.24
33	C 区 SM24 合口甕棺 RP303 北側土坑底面の土	SC	2.5Y3/1 黒褐	1.93	0.59	1.44
34	C 区 SM24 合口甕棺周辺地山（甕棺北側）	SL	2.5Y3/2 黒褐	0.63	0.32	0.71
35	C 区 SM24 合口甕棺周辺地山（甕棺南側）	SL	2.5Y3/2 黒褐	1.36	0.58	1.09
36	C 区 SM24 合口甕棺の上層坏 RP299 下の土壌	SC ～ LiC	2.5Y2/1 黒	1.74	0.77	2.13

注.（１）土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）による。
（２）土性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編，1984）の野外土性による。
SL･･･ 砂壌土（粘土 0 ～ 15%、シルト 0 ～ 35%、砂 65 ～ 85%）
LiC･･･ 軽埴土（粘土 25 ～ 45%、シルト 0 ～ 45%、砂 10 ～ 55%）
SC･･･ 砂質埴土（粘土 25 ～ 45%、シルト 0 ～ 20%、砂 55 ～ 75%）

考　　察

（１）周辺植生

遺構構築面より下位の試料は、いずれも花粉化石が検出されない。遺構が掘り込まれている黒色土（地山）の分析は、市内の鵜の木館跡、庚壇遺跡、百刈田遺跡等でも実施しているが、いずれも保存状態が悪く花粉化石が豊富に検出された例はない。花粉化石は、好気的環境下による風化に弱いことから、黒色土が形成された当時は河川の影響を受けず、乾燥していたと考えられる。このため、植生が被覆して腐植が蓄積され、黒色化したと考えられる。黒色土は、約 7000 年前の年代を示すことから、少なくとも縄文時代早期末頃に黒色土が形成されていたとみられる。黒色土の年代測定で、同位体分別による補正を行うために測定した δ^{13}C の値は、－ 15.8 であった。δ^{13}C の値は、光合成の様式の違いにより、異なった値を示す。大部分の植物は C3 植物であり、δ^{13}C の値は－ 25 前後に収まることが多いが、C4 植物では－ 13 前後の値をとることが多い。このことから、黒色土中には C4 植物由来の腐植が多く含まれていることになる。C4 植物は暖地や乾燥地に生育する植物に多く、イネ科の一部（ススキ属、キビ属、ヒエ属、エノコログサ属など）、カヤツリグサ科の一部、ヒユの一部、スベリヒユ科の一部、トウダイグサ科の一部などが含まれる。当時は、乾燥条件に強い C4 植物が地表を覆い、これらの植物によって腐植が供給されていたと推測される。

平安時代の遺構覆土からも花粉化石はほとんど検出されない。河道が形成されているので、一時的には河川の影響を受けていたと考えられるが、河川の影響を受けずに乾燥していることのほうが多く、その結果、花粉化石が消失したと思われる。このことは、本地点に集落が形成したこととも調和的である。なお、E 区断面の黒色粘土ならびに暗褐色土（試料番号 18 － 19）では、花粉化石がやや多く検出される。草本花粉が多く検出され、その中でもヨモギ属が多産し、イネ科、カヤツリグサ科、アカザ科、セリ科等が検出される。草本花粉が多産する組成は、南陽市の遺跡の分析例（鵜の木館跡、庚壇遺跡、百刈田遺跡、東畑 A 遺跡など）をみると、古代以降の堆積物にみられ、中世以降特に顕著になる。また、木本花粉では、マツ属とハンノキ属が多くみられるが、上記の例によれば、マツ属の増加は古代の堆積物で増加傾向を示して、中世以降に顕著となる。試料番号 18 － 19 は平安時代以降の堆積物と考えられているが、過去の事例から中世頃にあたると思われる。当時の周辺は、河畔林が切り開かれ、イネ科、カヤツリグサ科、アカザ科、ヨモギ属等の草本類に覆われていたと思われる。ただし、ハンノキ属も検出されることから、一部には河畔林や湿地林も残されていたと推定される。年代測定を行った木材や種実をみると、オニグルミ、ヤナギ、トチノキといった湿った場所を好む樹木が検出されており、これらも平

安時代以降周辺に生育していたと思われる。また、マツ属は山地の伐採地などに先駆的に侵入して、二次林を構成していたと考えられる。

（２）遺体埋納の痕跡

リン酸は、哺乳動物の生命維持に必要な要素であり、特に、脳、内臓、骨などに多く含まれている。動物の遺体には、リン酸やカルシウムといった無機元素が含まれるが、これらは土壌中と比べて桁違いに多いので、土壌中に埋納されると、土壌中に多く残存する。これらは、遺体が腐敗したあとも成分として土壌中に残存するが、この中でもリン酸は水に溶けにくいことから、土壌中での移動が少なく、長い間残ると考えられている。また、これまで当社で行ってきた事例をみると、本遺跡の遺構覆土のように河川性の堆積物が母材となっている場合、自然状態でのリン酸値は、１mg/g 前後である。今回の結果はいずれも、１mg/g 以下であることから、甕棺内土壌や遺構内土壌等、いずれも自然状態の範囲内といえる。また、遺構内のリン酸は、遺体が直接存在していた場所では濃度が高く、埋土のみの場所では薄くなる。この結果、複数の遺構・層位を対象として調査すると、組成のばらつきが起こり、これを遺体埋納の指標とすることができる。さらに、土壌が本来持っているリン酸は、大部分が腐植に由来するため、自然状態では腐植含量とリン酸との間に強い正の相関がある。しかし、遺体埋納などでこのバランスが崩れると、相関が乱れることから、これも遺体埋納の指標になる。今回の結果では、腐植とリン酸の間に強い正の相関がみられることから、甕棺内土壌中のリン酸は大部分が腐植に由来すると考えられる。一方、カルシウム含量も覆土と対照試料間で大きな変化はなく、ばらつきも小さい。以上のことから、今回の分析では、遺体埋納の痕跡は見出せなかった。

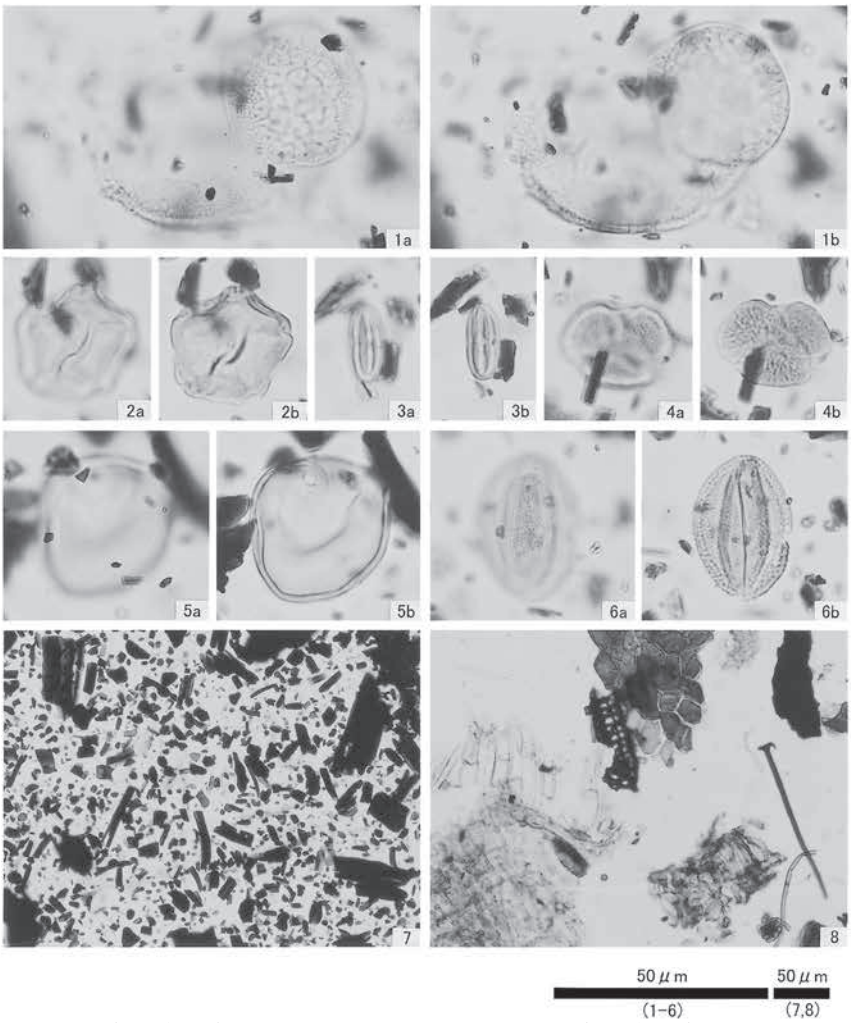
（３）木材利用

杭列の杭材は、２点ともに複維管束亜属（ニヨウマツ類）であった。本州に分布する複維管束亜属にはアカマツとクロマツの２種がある。いずれも比較的強度は高いが、加工は容易である。複維管束亜属の木材は、松脂を多く含むために、水中などでの使用にも耐える材質を有している。２点とも複維管束亜属であったことから、使用環境を考慮して、耐水性のある複維管束亜属の木材を選択した可能性がある。複維管束亜属は、花粉分析の結果から、古代以降遺跡周辺に生育していたことが推定され、近世においても入手が容易であったたことも木材利用の背景に考えられる。

引用文献

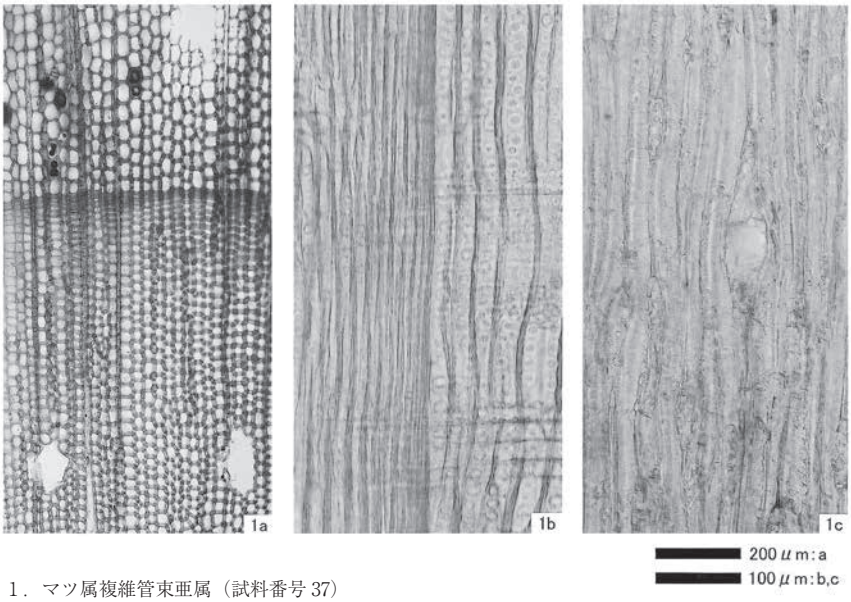
土壌養分測定法委員会編　1981　土壌養分分析法 . 養賢堂 ,440p.
土壌標準分析・測定法委員会編　1986　土壌標準分析・測定法 . 博友社 ,354p.
林　昭三　1991　日本産木材　顕微鏡写真集 . 京都大学木質科学研究所 .
農林省農林水産技術会議事務局監修　1967　新版標準土色帖 .
ペドロジスト懇談会編　1984　土壌調査ハンドブック . 博友社 ,156p
.Richter　H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（編）　2006　針葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト . 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘（日本語版監修）, 海青社 ,70p.［Richter　H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification］.
島地　謙・伊東　隆夫　1982　図説木材組織 . 地球社 ,176p.

図版１　花粉化石



１．マツ属（試料番号 19）
２．ハンノキ属（試料番号 19）
３．クリ属ーシイノキ属（試料番号 19）
４．ヨモギ属（試料番号 19）
５．イネ科（試料番号 19）
６．ソバ属（試料番号 19）
７．プレパラード内の状況（試料番号 17）
８．プレパラード内の状況（試料番号 22）

図版２　木材



１．マツ属複維管束亜属（試料番号 37）
　a：木口．b：柾目．c：板目

2　放射性炭素年代測定（1）

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
伊藤茂・丹生越子・廣田正史・瀬谷薫・
小林紘一・Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani・
中村賢太郎

はじめに

検出された試料について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。
試料の調製は廣田、瀬谷、Lomtatidze、Jorjoliani、測定は小林、丹生、伊藤、本文は伊藤、中村が作成した。

試料と方法

測定試料の情報、調製データは表１のとおりである。試料は、G区の河川ＳＧ 23 より出土した生材（PLD-11318）と土坑ＳＫ 89 より出土した炭化材（PLD-11319）の２点である。いずれも部位不明である。
試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C 年代、暦年代を算出した。

表１　測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-11318	調査区：G 区 遺構：SG23 資料 No.：1 その他：河川	試料の種類：生材（ケヤキ） 試料の性状：部位不明（5 年輪分） 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1N, 塩酸 :1.2N） サルフィックス
PLD-11319	調査区：G 区 遺構：SK89 資料 No.：2 その他：土坑	試料の種類：炭化材（カエデ属） 試料の性状：部位不明（5 年輪分） 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1N, 塩酸 :1.2N） サルフィックス

結　　果

表２に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲を、図１に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差（±1σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.2％であることを示すものである。

なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

暦年較正

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.0（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ 暦年代範囲は 95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表２に下線で示してある。

表２　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	δ ^{13}C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
PLD − 11318 資料 No.：1	− 24.99 ± 0.21	1459 ± 26	1460 ± 25	585AD（68.2%）636AD	560AD（95.4%）647AD
PLD − 11319 資料 No.：2	− 24.24 ± 0.14	1191 ± 24	1190 ± 25	783AD（ 6.6%）790AD 809AD（61.6%）879AD	771AD（94.3%）895AD 926AD（ 1.1%）936AD

考　　察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。2 σ暦年代範囲（95.4％の確率でこの範囲に暦年代が収まることを意味する）に着目すると、河川SG23 出土生材（PLD − 11318）の暦年代範囲は、560 − 647calAD（95.4％）で、紀元６～７世紀に相当する。土坑 SK89 出土炭化材（PLD − 11319）の暦年代範囲は、771 − 895calAD（94.3％）および 926 − 936calAD（1.1％）で、紀元８～10 世紀に相当し、特に８～９世紀に収まる確率が高い。

なお、木材の ^{14}C 年代は試料とする部位が生育していた年代を示す。木材は部位によって形成された時期が異なるため、古い時期に形成された組織はその分古い年代を示す。たとえば、最外年輪の年代は枯死・伐採年を示し、内側の年輪であるほど古い年代を示す。今回の測定試料はいずれも部位不明であるため、枯死・伐採年より古い年代を示している可能性がある。

参考文献

Bronk Ramsey, C.（1995）Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.

Bronk Ramsey, C.（2001）Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の ^{14}C 年代．3-20.

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Bronk Ramsey, C., Reimer, R.W., Remmele, S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E.（2004）IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. Radiocarbon, 46, 1029-1058.

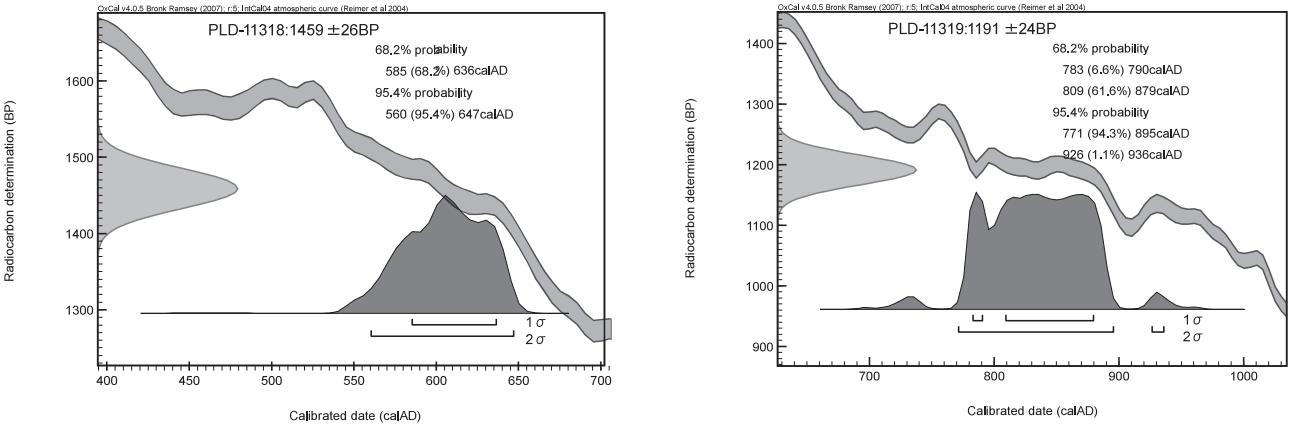


図１　暦年較正結果

3　放射性炭素年代測定（2）

（株）加速器分析研究所

測定対象試料

測定対象試料は、C調査区5-7Gから出土した木柱片（No. 1：IAAA-80897）、SD92埋土3から出土した木炭（No. 2：IAAA-80898）、SK85埋土1から出土した木炭（No. 3：IAAA-80899）、SK93埋土2から出土した木炭（No. 4：IAAA-80900）、合計4点である。

測定の意義

遺構の年代を明らかにする。

化学処理工程

(1)　メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。

(2)　酸処理、アルカリ処理、酸処理（AAA：Acid Alkali Acid）により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では1Nの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。なお、AAA処理において、アルカリ濃度が1N未満の場合、表中にAaAと記載する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。

(3)　試料を酸化銅と共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で2時間加熱する。

(4)　液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素（CO_2）を精製する。

(5)　精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し、グラファイトを作製する。

(6)　グラファイトを内径1mmのカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした^{14}C－AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH－2）を使用する。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

算出方法

(1)　年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polash 1977）。

(2)　^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。この値は、δ^{13}Cによって補正された値である。^{14}C年代と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また、^{14}C年代の誤差（±1σ）は、試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

(3)　δ^{13}Cは、試料炭素の13C濃度（^{13}C/12C）を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰）で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により^{13}C/^{12}Cを測定した場合には表中に（AMS）と注記する。

(4)　pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。

(5)　暦年較正年代とは、年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の^{14}C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差（1σ＝68.2%）あるいは2標準偏差（2σ＝95.4%）で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しない^{14}C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal04データベース（Reimer et al 2004）を用い、OxCalv4.0較正プログラム（Bronk Ransey 1995 Bronk Ransey 2001　Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001）を使用した。

測定結果

^{14}C 年代は、C 調査区 5－7G から出土した木柱片（No. 1）が 220 ± 30yrBP、SD92 埋土 3 から出土した木炭（No. 2）が 1210 ± 30yrBP、SK85 埋土 1 から出土した木炭（No. 3）が 1220 ± 30yrBP、SK93 埋土 2 から出土した木炭（No. 4）が 1210 ± 30yrBP である。暦年較正年代（1 σ）は、No. 1 が 1647 ～ 1952AD に含まれ、江戸時代以降に属する。その他は、No. 2・4 がほぼ同じで、775 ～ 871AD、No. 3 が 722 ～ 869AD に含まれる。試料の炭素含有率は 50％以上であり、十分な値である。化学処理および測定内容に問題は無く、妥当な年代と考えられる。

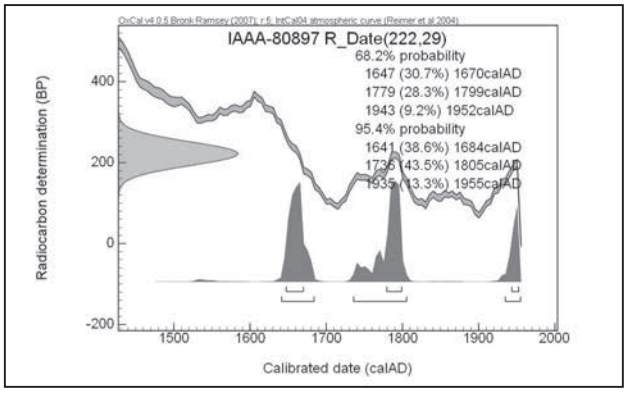
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ ^{13}C（‰）（AMS）	δ ^{13}C 補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA-80897	No.1	遺構：C 調査区　5-7G	木柱の木片	AAA	-28.86 ± 0.41	220 ± 30	97.27 ± 0.36
IAAA-80898	No.2	遺構：SD92 溝　層位：埋土 3	木炭	AAA	-30.38 ± 0.64	1,210 ± 30	85.97 ± 0.32
IAAA-80899	No.3	遺構：SK85 土坑　層位：埋土 1	木炭	AAA	-26.30 ± 0.41	1,220 ± 30	85.87 ± 0.32
IAAA-80900	No.4	遺構：SK93 土坑　層位：埋土 2	木炭	AAA	-25.30 ± 0.47	1,210 ± 30	85.99 ± 0.33

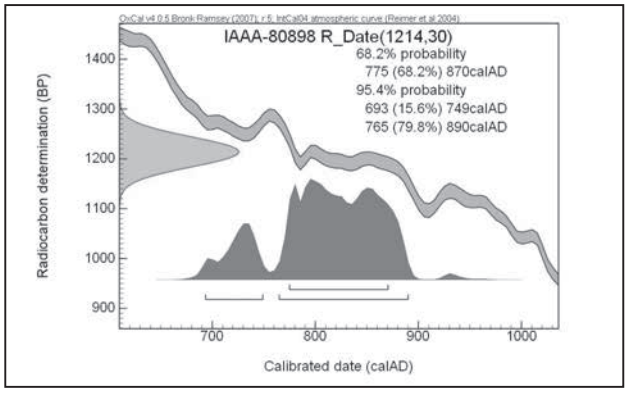
測定番号	δ ^{13}C 補正なし		暦年較正用（yrBP）	1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
	Age　（yrBP）	pMC　（%）			
IAAA–80897	290 ± 30	96.50 ± 0.35	222 ± 29	1647AD – 1670AD（30.7%） 1779AD – 1799AD（28.3%） 1943AD – 1952AD（ 9.2%）	1641AD – 1684AD（38.6%） 1736AD – 1805AD（43.5%） 1935AD – 1955AD（13.3%）
IAAA–80898	1,300 ± 30	85.02 ± 0.30	1,214 ± 30	775AD – 870AD（68.2%）	693AD – 749AD（15.6%） 765AD – 890AD（79.8%）
IAAA–80899	1,250 ± 30	85.64 ± 0.31	1,224 ± 30	722AD – 741AD（10.9%） 770AD – 830AD（38.7%） 837AD – 869AD（18.5%）	690AD – 750AD（24.5%） 762AD – 886AD（70.9%）
IAAA–80900	1,220 ± 30	85.94 ± 0.32	1,212 ± 30	775AD – 871AD（68.2%）	694AD – 748AD（13.6%） 765AD – 891AD（81.8%）

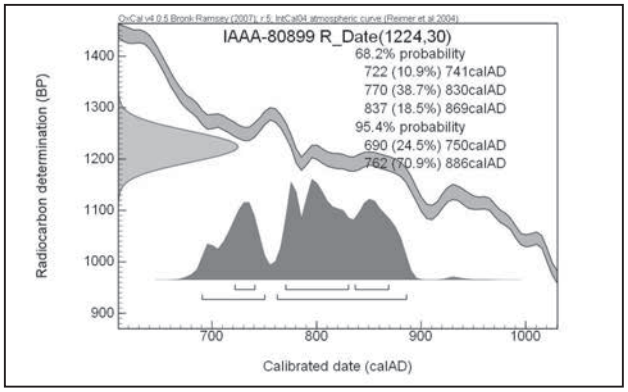
［参考値］

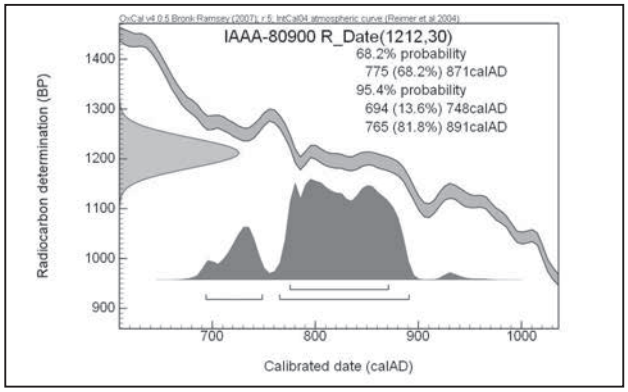
参考文献

Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19, 355-363
Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, Radiocarbon 37(2), 425-430
Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon 43（2A）, 355-363
Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, Radiocarbon 43(2A), 381-389
Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, Radiocarbon 46, 1029-1058









［参考］暦年較正年代グラフ

4　漆皿の漆膜構造について

（財）山梨文化財研究所　鈴木　稔

漆皿１点について、漆膜の構造分析を実施したので以下に報告する。

資　　料

漆皿（遺物番号453、登録番号ＲW174）は内外面とも黒色に塗られている。樹種分析によれば木胎はケヤキ材である。分析資料は漆皿から２mm×１mm前後の漆膜を採取した。

採取した漆膜は乾燥後、エポキシ樹脂で包埋し、膜の断面を観察できるように研磨してから落射照明で顕微鏡写真を撮影した。次に、反対側を研磨して透過照明での観察が可能な薄片を作成した。

顕微鏡観察

オリンパスＢＨ－２金属顕微鏡（透過・落射照明型）、接眼10倍、対物10～50倍で観察し、落射照明による写真を参照しながら透過照明で写真撮影した。採取した試料には部分的に木胎が付着している。

写真１～３は試料のほぼ全体を低倍率で透過観察している。下が木胎でその上に約200μm厚の不透過の黒い下地層、上面に不均一な厚さの漆層が見える。

写真４は対物レンズを50倍に変更し、また、透過光の他に適当量の落射光を当てて下地の粒子を浮き立たせることを行ったものである。その結果、下地層は木炭様の粒子と見られ、いわゆる炭粉下地である。その上に約20～25μm厚の褐色の漆層が見えるが、上述したようにこの試料の漆層の厚さには相当な幅（約５～25μm）があり一定しない。写真４では漆層がさらに褐色の濃淡２層に分かれて見えるが、炭粉の入り込み方から見て表層の約10μm厚の部分は変色層と考えるべきだろう。

つまり、試料から判断する限り、この漆皿は木胎に漆粉を混ぜた下地を厚く塗り、その上から顔料を混ぜない透明漆を不均一に塗布したために黒色に見えていたものと考えられる。

写真１

写真２

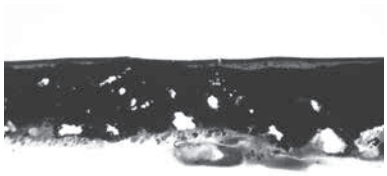


写真３

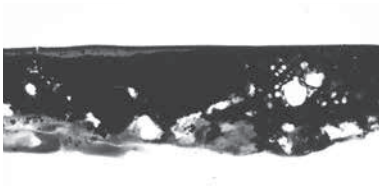


写真１～３スケール（最小目盛 1/100mm）

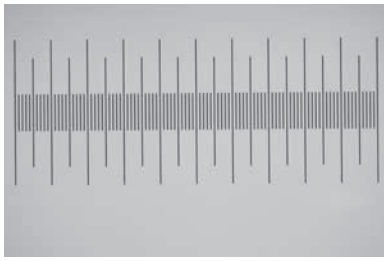


写真４

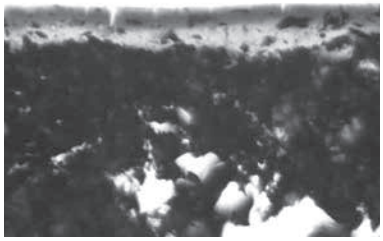
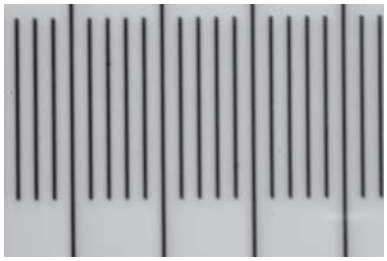


写真４スケール（最小目盛り 1/100mm）



5　漆器の塗膜構造調査

（株）吉田生物研究所

はじめに

漆器１点について、その製作技法を明らかにする目的で塗膜構造調査を行ったので、以下にその結果を報告する。

調査資料

調査した資料は、表１に示す漆器１点である。

表１　調査資料

No.	遺物番号	品名	樹種*	概　　要
1	454	漆皿	ケヤキ	内外両面とも黒色の漆で覆われた、高台を削りだしていない無文の皿。内面には、直線状の鋭利な刃物傷が多数残っている。

※：樹種については別稿の樹種同定報告書を参照のこと

調査方法

表１の資料本体から数㎜四方の破片を採取してエポキシ樹脂に包埋し、塗膜断面の薄片プレパラートを作製した。これを落射光ならびに透過光の下で検鏡した。

断面観察結果

塗膜断面の観察結果を表２に示す。

表２　断面観察結果表

No.	器種	部位	写真 No.	塗膜構造（下層から）		
				下　地		漆　層　構　造
				膠着剤	混和材	
1	漆皿	内面	1	漆	木炭粉	透明漆１層
		外面	2	漆	木炭粉	透明漆１層

塗膜構造：木胎の上に下地、漆層と重なる塗膜構造であった。

下　　地：黄褐色の漆に木炭粉を混和した炭粉漆下地が施されていた。この下地の漆が、木胎にもしみこみ、木胎の表面から数細胞分には黄褐色の漆が観察された。

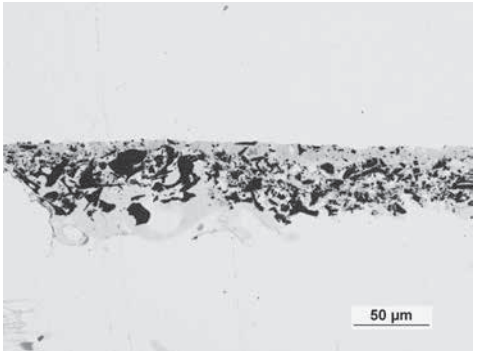
漆　　層：下地の上に、黄褐色の透明漆が１層重なっていた。内外面ともに、この透明漆層には比較的細かな木炭粉が浮いているような状態が認められた。これは、下地に混和された木炭粉が浮いたもの、と判断する。また、内面の透明漆層には、上面から層向と垂直方向に断面Ｖ字形の亀裂が多数認められた。これらは漆器表面からの漆膜の劣化を示している。

摘　　要

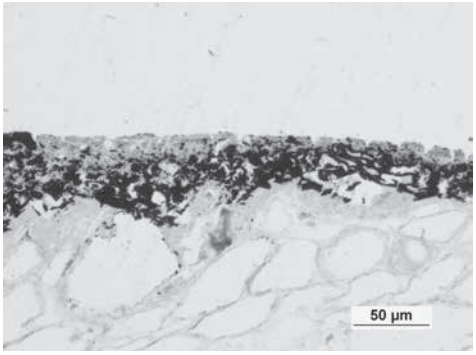
山形県に所在する、加藤屋敷遺跡から出土した、古代の無文黒色漆器皿の塗膜構造を調査した。

木胎上に、漆に木炭粉を混和した漆下地を施し、その上に透明漆１層を重ねるという構造であった。

ケヤキの木胎上に炭粉漆下地を施し、さらに漆を１層重ねる、という構造は都以外の場所で検出される律令期の漆器として、汎用性の広いものである。



遺物番号 454 外面



遺物番号 454 内面

6　漆製品の塗膜構造調査

㈱吉田生物研究所

はじめに

曲物底板１点に､片面に黒色物質の付着が認められた。この部分について塗膜構造調査を行ったので、以下にその結果を報告する。

調査資料

調査した資料は、表１に示す曲物底板１点である。

表１　調査資料

No.	遺物番号	品名	出土遺構	樹種※	概　　要
1	529	底板	ＳＧ23	アスナロ属	片面のほぼ全面に黒色の物質が付着した曲物底板。

※：樹種については別稿の樹種同定報告書を参照のこと

調査方法

表１の資料本体の内外面から数㎜四方の破片を採取してエポキシ樹脂に包埋し、塗膜断面の薄片プレパラートを作製した。これを落射光ならびに透過光の下で検鏡した。

断面観察結果

断面の観察結果を記す。

木胎の表面と内部に、黄褐色の物質が観察された。この層の中には、精製度の低さをあらわす気泡が多数観察される。この層はやや途切れた部分もあるが、上面は平滑である。その色調や層のひろがりなどの様子から、漆の層であろうと判断できる。また、木胎と漆層との間に下地は認められず、木胎の上に直接漆層が認められることから、木胎にわざわざ塗布された、漆の塗装ではなく、曲物の内容物の漆が木胎に浸透したもの､と考えられる。

摘　　要

山形県に所在する加藤屋敷遺跡から出土した曲物底板の付着物質を、薄片化し観察した。

気泡を多数含む、黄褐色の塗層１層が認められた。しかし、下地が施されていない点などから、これは塗布された漆ではなく、付着した漆と考えられる。片面のみに付着している点とも矛盾しない。

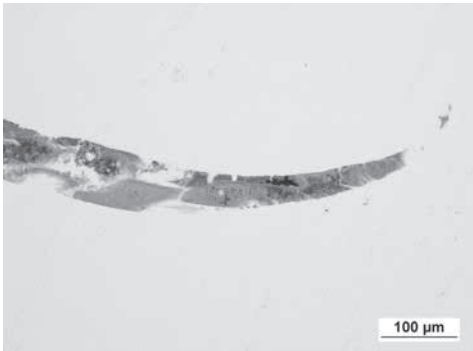


写真１　遺物番号 529 断面

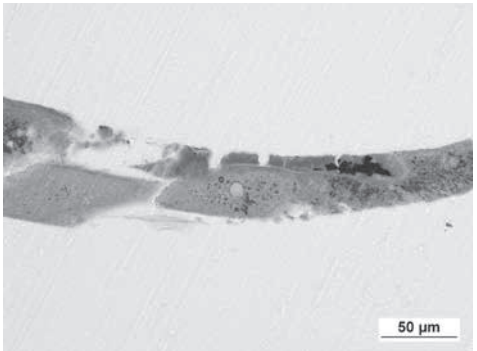


写真２　遺物番号 529 断面

7　木製品の樹種調査結果（1）

（株）吉田生物研究所

試　　料

試料は出土した農具１点、服飾具１点、容器22点の合計24点である。

観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

結　　果

樹種同定結果（針葉樹２種、広葉樹１種、果皮１種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

１）スギ科スギ属スギ（Cryptomeria japonica D.Don）
（No. １Ｂ・２、写真 No. １Ｂ、２）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で１分野に１～３個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

２）ヒノキ科アスナロ属（Thujopsis sp.）
（No.17 ～ 24、写真 No.17 ～ 24）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で１分野に２～４個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ（ヒバ、アテ）とヒノキアスナロ（ヒバ）があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

３）ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節（Quercus subgen. Lepidobalanus Endlicher sect. Cerris）
（No. ３、写真 No. ３）

環孔材である。木口では大道管（～ 430μm）が年輪界にそって１～数列並んで孔圏部を形成している。孔圏外では急に大きさを減じ、厚壁で円形の小道管が単独に放射方向に配列している。放射組織は単列放射組織と非常に幅の広い放射組織がある。柾目では道管は単穿孔と対列壁孔を有する。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には柵状の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と肉眼でも見られる典型的な複合型の広放射組織が見られる。クヌギ節はクヌギ、アベマキがあり、本州（岩手、山形以南）、四国、九州、琉球に分布する。

４）ニレ科ケヤキ属ケヤキ（Zelkova serrata Makino）
（No. ４～ 16、写真 No. ４～ 16）

環孔材である。木口ではおおむね円形で単独の大道管（～ 270μm）が１列で孔圏部を形成している。孔圏外では急に大きさを減じ、多角形の小道管が多数集まって円形、接線状あるいは斜線状の集団管孔を形成している。軸方向柔細胞は孔圏部では道管を鞘状に取り囲み、さらに接線方向に連続している（イニシアル柔組織）。放射組織は１～数列で多数の筋として見られる。柾目では大道管は単穿孔と側壁に交互壁孔を有する。小道管はさらに螺旋肥厚も持つ。放射組織は平伏細胞と上下縁辺の方形細胞からなり異性である。方形細胞はしばしば大型のものがある。板目では放射組織は少数の１～３列のものと大部分を占める６～７細胞列のほぼ大きさの一様な紡錘形放射組織がある。紡錘形放射組織の上下端の細胞は、他の部分に比べ大型である。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。

５）ウリ科ユウガオ属（Lagenaria sp.）の果皮
（No. １Ａ、写真 No. １Ａ）

横断面では外側から厚壁細胞の厚壁組織、その内側の薄壁細胞の柔組織がみられる。柔断面では多面体の柔細胞がみられる。ユウガオ属のユウガオとヒョウタンの果実はともに熟成すると果皮が堅くなるので、容器をつくる材料として用いられている。

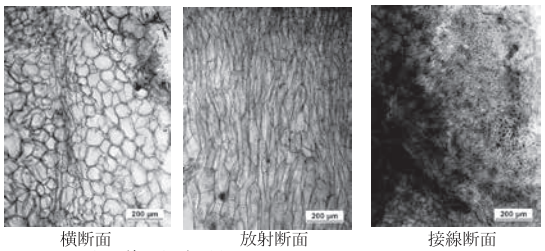
参考文献

島地 謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版（1988）
島地 謙・伊東隆夫「図説木材組織」 地球社（1982）
伊東隆夫 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」京都大学木質科学研究所（1999）
北村四郎・村田 源「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」 保育社（1979）
深澤和三「樹体の解剖」海青社（1997）
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第 27 冊 木器集成図録 近畿古代篇」（1985）
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第 36 冊 木器集成図録 近畿原始篇」（1993）

使用顕微鏡
Nikon DS-Fi1

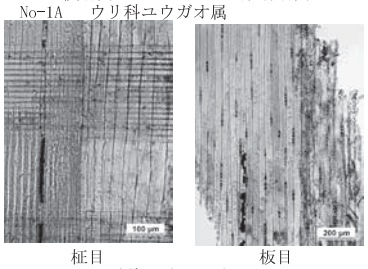
木製品同定表

No.	遺物番号	品名	樹種
1	542	A 柄杓（本体） B 〃（柄）	ウリ科ユウガオ属 スギ科スギ属スギ
2	546	下駄	スギ科スギ属スギ
3	547	木錘	ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節
4	448	椀	ニレ科ケヤキ属ケヤキ
5	454	漆器皿	ニレ科ケヤキ属ケヤキ
6	488	皿	ニレ科ケヤキ属ケヤキ
7	489	皿	ニレ科ケヤキ属ケヤキ
8	468	皿	ニレ科ケヤキ属ケヤキ
9	476	皿	ニレ科ケヤキ属ケヤキ
10	478	皿	ニレ科ケヤキ属ケヤキ
11	470	皿	ニレ科ケヤキ属ケヤキ
12	462	皿	ニレ科ケヤキ属ケヤキ
13	469	皿	ニレ科ケヤキ属ケヤキ
14	484	皿	ニレ科ケヤキ属ケヤキ
15	473	皿	ニレ科ケヤキ属ケヤキ
16	457	皿	ニレ科ケヤキ属ケヤキ
17	494	曲物	ヒノキ科アスナロ属
18	495	側板（曲物）	ヒノキ科アスナロ属
19	496	底板（曲物）	ヒノキ科アスナロ属
20	522	底板（曲物）	ヒノキ科アスナロ属
21	508	底板（曲物）	ヒノキ科アスナロ属
22	505	底板（曲物）	ヒノキ科アスナロ属
23	509	底板（曲物）	ヒノキ科アスナロ属
24	538	底板（曲物）	ヒノキ科アスナロ属



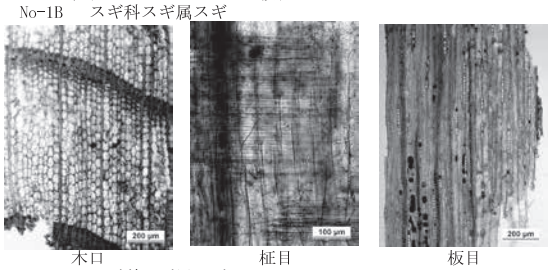
横断面　放射断面　接線断面

No-1A　ウリ科ユウガオ属



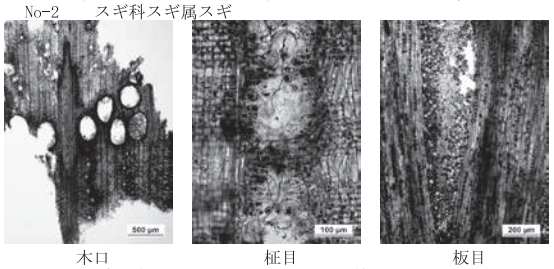
柾目　板目

No-1B　スギ科スギ属スギ



木口　柾目　板目

No-2　スギ科スギ属スギ

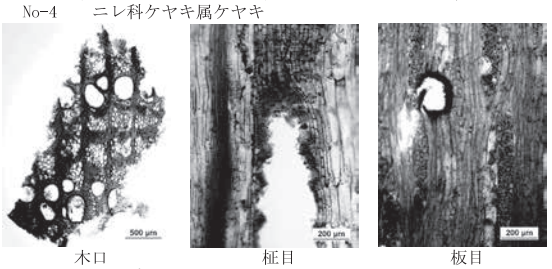


木口　柾目　板目

No-3　ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節

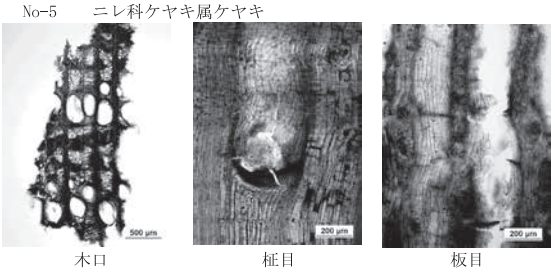
木口　柾目　板目

No-4　ニレ科ケヤキ属ケヤキ



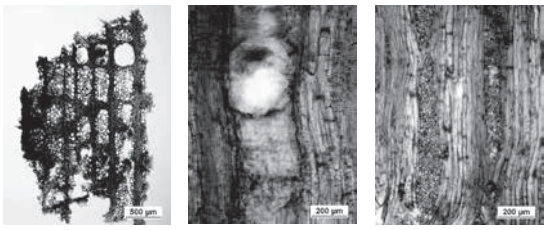
木口　柾目　板目

No-5　ニレ科ケヤキ属ケヤキ



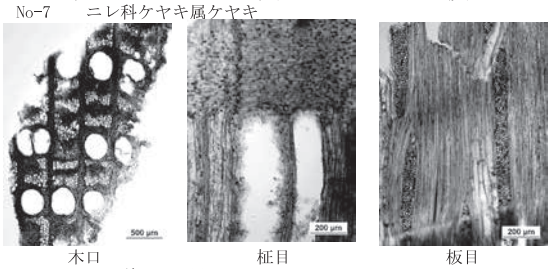
木口　柾目　板目

No-6　ニレ科ケヤキ属ケヤキ



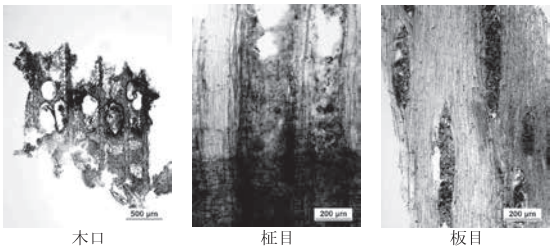
木口　柾目　板目

No-7　ニレ科ケヤキ属ケヤキ



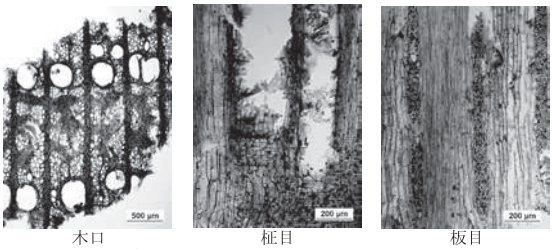
木口　柾目　板目

No-8　ニレ科ケヤキ属ケヤキ



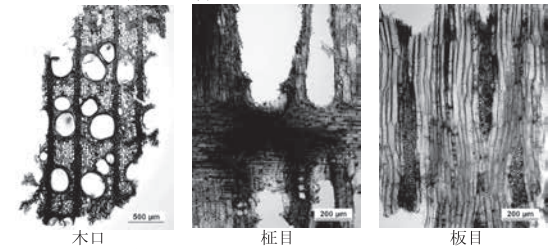
木口　柾目　板目

No-9　ニレ科ケヤキ属ケヤキ



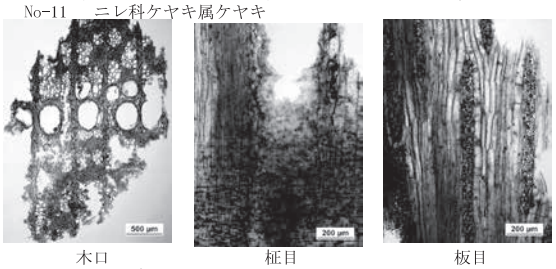
木口　柾目　板目

No-10　ニレ科ケヤキ属ケヤキ



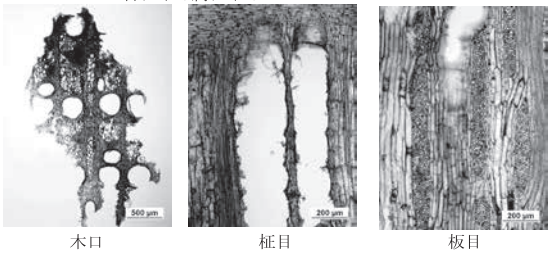
木口　柾目　板目

No-11　ニレ科ケヤキ属ケヤキ



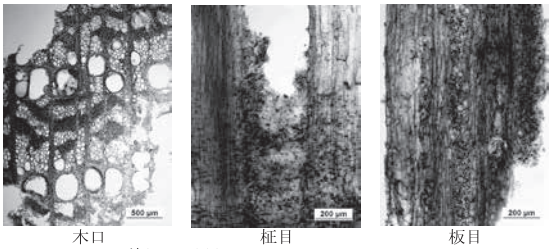
木口　柾目　板目

No-12　ニレ科ケヤキ属ケヤキ



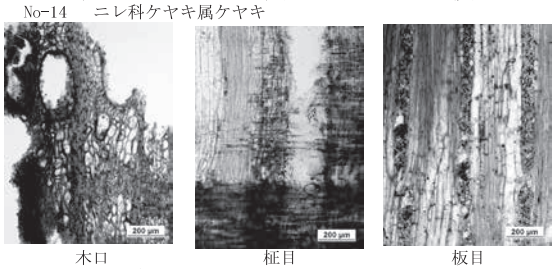
木口　柾目　板目

No-13　ニレ科ケヤキ属ケヤキ



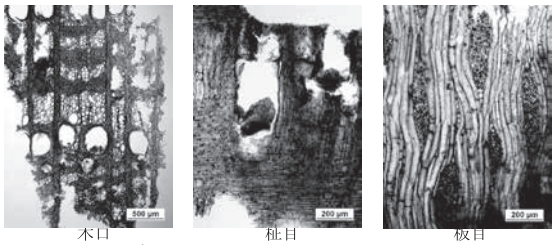
木口　柾目　板目

No-14　ニレ科ケヤキ属ケヤキ



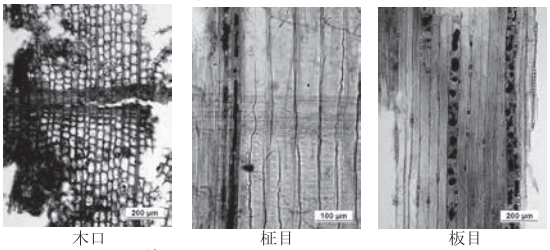
木口　柾目　板目

No-15　ニレ科ケヤキ属ケヤキ



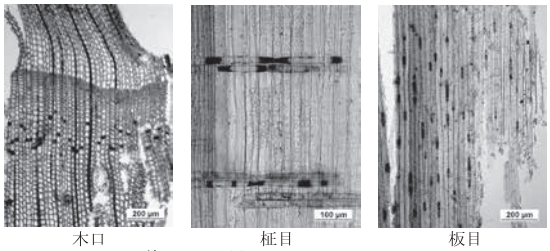
木口　柾目　板目

No-16　ニレ科ケヤキ属ケヤキ



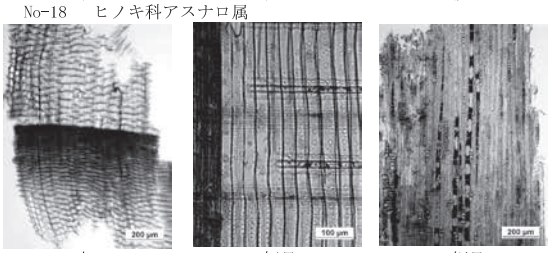
木口　柾目　板目

No-17　ヒノキ科アスナロ属



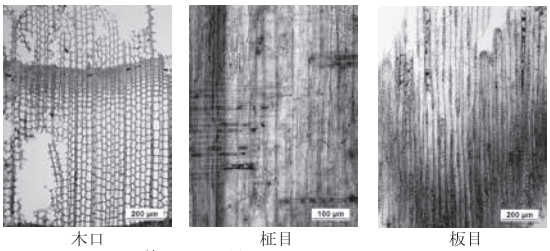
木口　柾目　板目

No-18　ヒノキ科アスナロ属



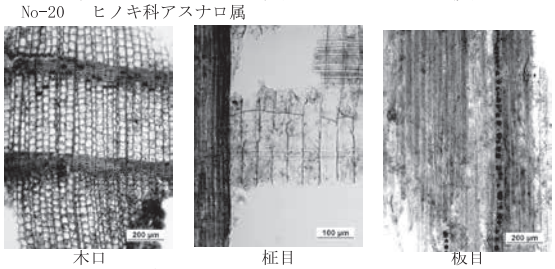
木口　柾目　板目

No-19　ヒノキ科アスナロ属



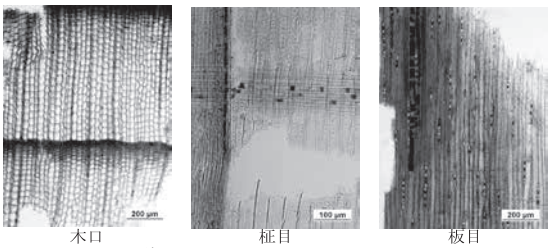
木口　柾目　板目

No-20　ヒノキ科アスナロ属



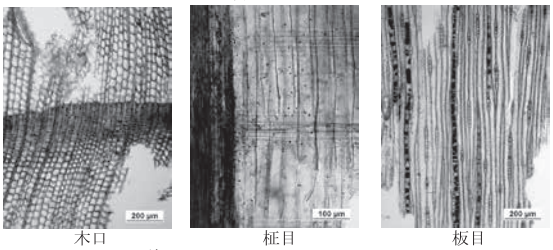
木口　柾目　板目

No-21　ヒノキ科アスナロ属



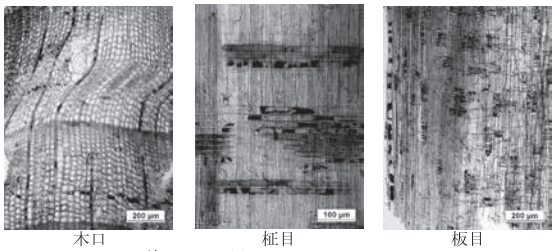
木口　柾目　板目

No-22　ヒノキ科アスナロ属



木口　柾目　板目

No-23　ヒノキ科アスナロ属



木口　柾目　板目

No-24　ヒノキ科アスナロ属

8　木製品の樹種調査結果（2）

（株）吉田生物研究所

試　　料

試料は出土した武器１点、食事具１点、容器12点、建築部材１点、部材２点、用途不明品３点の合計20点である。

観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

結　　果

樹種同定結果（針葉樹４種、広葉樹２種、樹皮１種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1）イヌガヤ科イヌガヤ属イヌガヤ（Cephalotaxus Harringtonia K. Koch f. drupacea Kitamura）
（No. ２、写真 No. ２）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は漸進的で、晩材の幅は非常に狭く、年輪界がやや不明瞭で均質な材である。樹脂細胞はほぼ平等に散在し数も多い。柾目では放射組織の分野壁孔はトウヒ型で１分野に１～２個ある。仮道管内部には螺旋肥厚が見られる。樹脂細胞は不明。板目では放射組織はほぼ単列であった。イヌガヤは本州（岩手以南）、四国、九州に分布する。

2）スギ科スギ属スギ（Cryptomeria japonica D.Don）
（No. ３～８・14・17、写真 No. ３～８・14・17）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で１分野に１～３個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

3）ヒノキ科アスナロ属（Thujopsis sp.）
（No.10 ～ 12・15・16・18・19・20A、 写真 No.10 ～ 12・15・16・18・19・20A）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で１分野に２～４個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ（ヒバ、アテ）とヒノキアスナロ（ヒバ）があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

4）ヒノキ科クロベ属クロベ（Thuja standishii Carriere）
（No.13、写真 No.13）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部に偏って接線状に存在する。柾目では放射組織の分野壁孔はスギ型で１分野に２～６個ある。放射柔細胞の水平壁が接線壁と接する際に水平壁は山形に厚くなり、接線壁との間に溝のような構造（インデンチャー）ができ、よく発達しているのが認められる。板目では放射組織は全て単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。クロベは本州、四国に分布する。

5）カバノキ科ハンノキ属（Alnus sp.）
（No. ９、写真 No. ９）

散孔材である。木口では中庸ないしやや小さい道管（～ 90μm）が２～数個半径方向に放射複合管孔をなして平等に分布する。軸方向柔組織は単接線状柔組織を形成している。放射組織は多数の単列放射組織と幅の広い放射組織がある。柾目では道管は階段穿孔と小型で円形の対列壁孔を有する。放射組織はおおむね平伏細胞からなるが、ときに上下縁辺に方形細胞が現れる。板目では多数の単列放射組織（１～ 30 細胞高）と単列放射組織が集まってできた集合型の広放射組織がある。ハンノキ属はハンノキ、ミヤマハンノキ、ケヤマハンノキ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

6）ニレ科ケヤキ属ケヤキ（Zelkova serrata Makino）
（No. １、写真 No. １）

環孔材である。木口ではおおむね円形で単独の大道管（～ 270μm）が１列で孔圏部を形成している。孔

圏外では急に大きさを減じ、多角形の小道管が多数集まって円形、接線状あるいは斜線状の集団管孔を形成している。軸方向柔細胞は孔圏部では道管を鞘状に取り囲み、さらに接線方向に連続している（イニシアル柔組織）。放射組織は１～数列で多数の筋として見られる。柾目では大道管は単穿孔と側壁に交互壁孔を有する。小道管はさらに螺旋肥厚も持つ。放射組織は平伏細胞と上下縁辺の方形細胞からなり異性である。方形細胞はしばしば大型のものがある。板目では放射組織は少数の１～３列のものと大部分を占める６～７細胞列のほぼ大きさの一様な紡錘形放射組織がある。紡錘形放射組織の上下端の細胞は、他の部分に比べ大型である。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。

7）ヤマザクラ or カバの樹皮

（No.20B、写真 No.20B）

木口と柾目ではコルク組織とコルク皮層が交互に並んで密に詰まっている。板目では細胞が放射方向に規則正しく配列している。しかし桜、樺の皮は顕微鏡観察での判別は難しい。

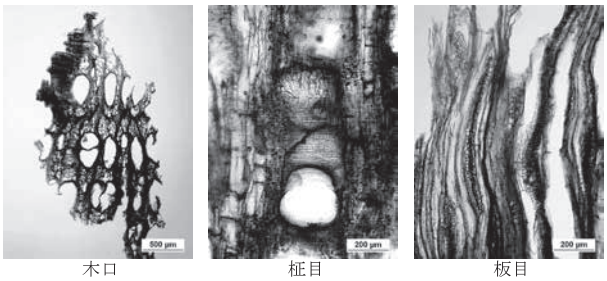
参考文献

島地 謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版（1988）
島地 謙・伊東隆夫「図説木材組織」 地球社（1982）
伊東隆夫 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」京都大学木質科学研究所（1999）
北村四郎・村田 源「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」 保育社（1979）
深澤和三「樹体の解剖」海青社（1997）
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第 27 冊 木器集成図録 近畿古代篇」（1985）
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第 36 冊 木器集成図録 近畿原始篇」（1993）

使用顕微鏡
Nikon DS-Fi1

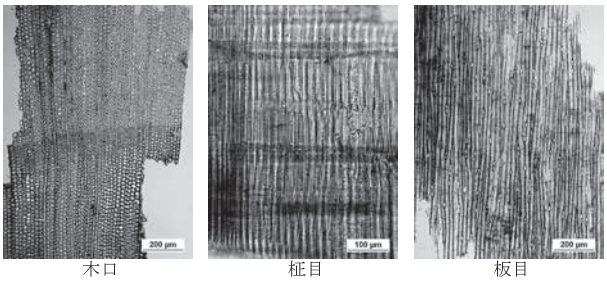
木製品同定表

No.	遺物番号	品名	樹種
1	467	皿	ニレ科ケヤキ属ケヤキ
2	552	弓	イヌガヤ科イヌガヤ属イヌガヤ
3	559	箸	スギ科スギ属スギ
4	569	棒状具	スギ科スギ属スギ
5	573	棒状木製品	スギ科スギ属スギ
6	572	棒状木製品	スギ科スギ属スギ
7	581	部材	スギ科スギ属スギ
8	698	部材	スギ科スギ属スギ
9	580	建築部材	カバノキ科ハンノキ属
10	536	側板（曲物）	ヒノキ科アスナロ属
11	529	底板（曲物）	ヒノキ科アスナロ属
12	534	底板（曲物）	ヒノキ科アスナロ属
13	523	底板（曲物）	ヒノキ科クロベ属クロベ
14	525	底板（曲物）	スギ科スギ属スギ
15	518	底板（曲物）	ヒノキ科アスナロ属
16	519	底板（曲物）	ヒノキ科アスナロ属
17	502	底板（曲物）	スギ科スギ属スギ
18	510	底板（曲物）	ヒノキ科アスナロ属
19	507	底板（曲物）	ヒノキ科アスナロ属
20	521	A 底板（曲物） B 樹皮（曲物）	ヒノキ科アスナロ属 ヤマザクラ or カバ樹皮



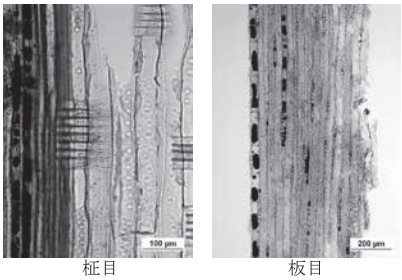
木口　柾目　板目

No-1　ニレ科ケヤキ属ケヤキ



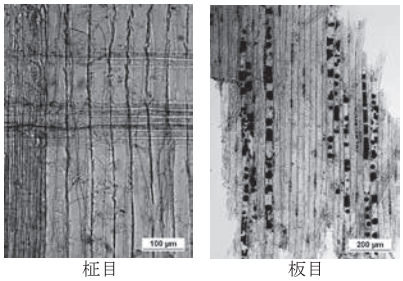
木口　柾目　板目

No-2　イヌガヤ科イヌガヤ属イヌガヤ



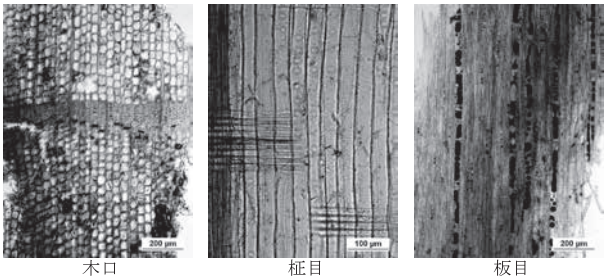
柾目　板目

No-3　スギ科スギ属スギ



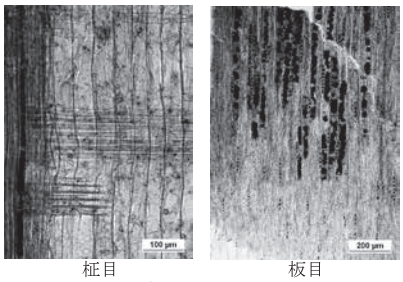
柾目　板目

No-4　スギ科スギ属スギ



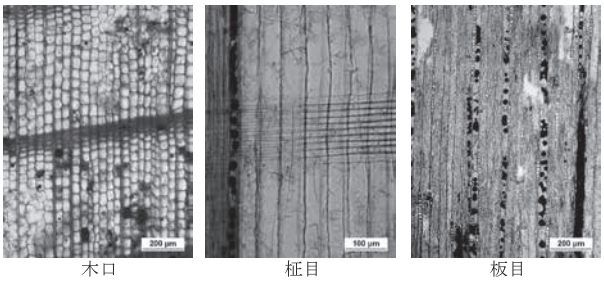
木口　柾目　板目

No-5　スギ科スギ属スギ



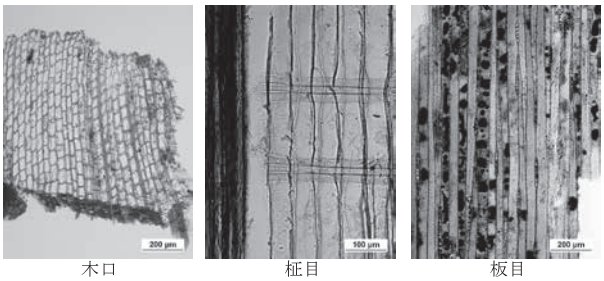
柾目　板目

No-6　スギ科スギ属スギ



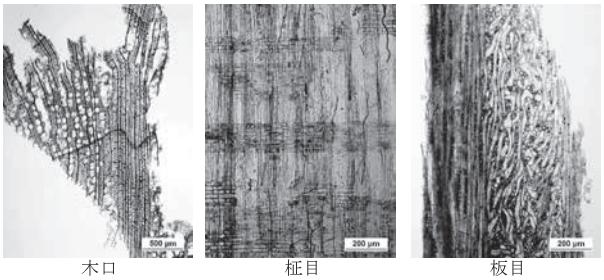
木口　柾目　板目

No-7　スギ科スギ属スギ



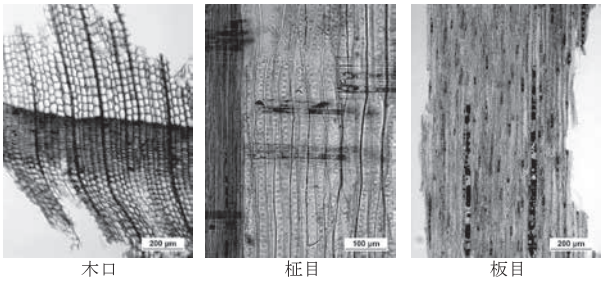
木口　柾目　板目

No-8　スギ科スギ属スギ



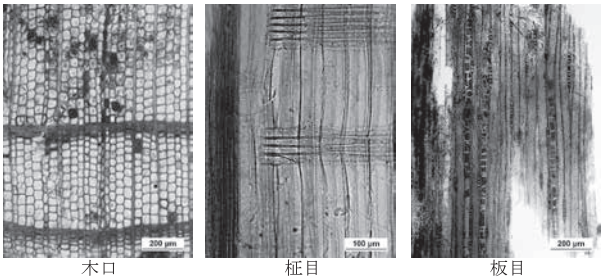
木口　柾目　板目

No-9　カバノキ科ハンノキ属



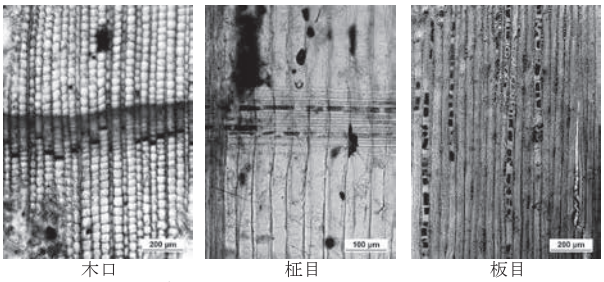
木口　柾目　板目

No-10　ヒノキ科アスナロ属



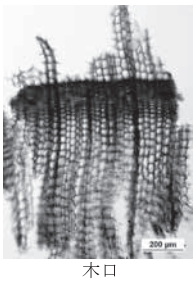
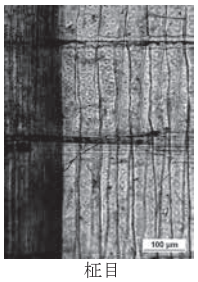
木口　柾目　板目

No-11　ヒノキ科アスナロ属



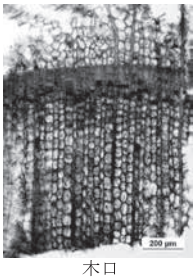
木口　柾目　板目

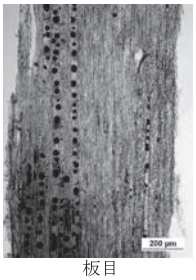
No-12　ヒノキ科アスナロ属

木口　柾目　板目

No-13　ヒノキ科クロベ属クロベ



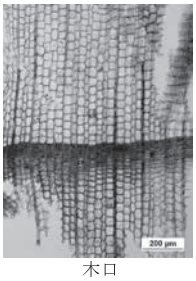
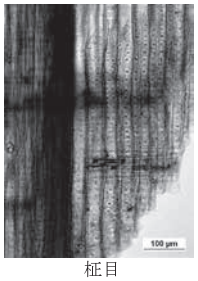


木口　柾目　板目

No-14　スギ科スギ属スギ

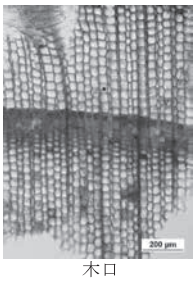
木口　柾目　板目

No-15　ヒノキ科アスナロ属

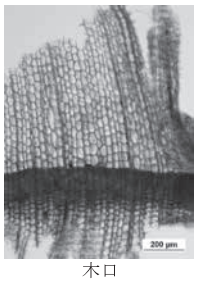
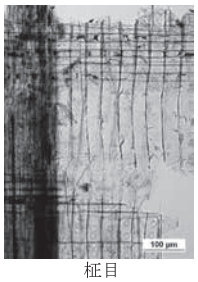
木口　柾目　板目

No-16　ヒノキ科アスナロ属



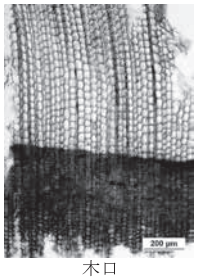
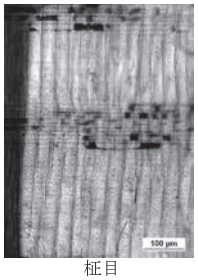
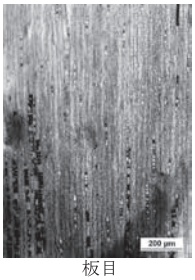
木口　柾目　板目

No-17　スギ科スギ属スギ

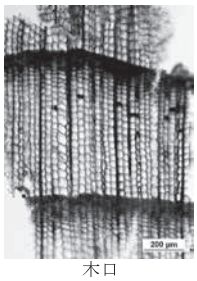
木口　柾目　板目

No-18　ヒノキ科アスナロ属

木口　柾目　板目

No-19　ヒノキ科アスナロ属



木口　柾目　板目

No-20A　ヒノキ科アスナロ属

横断面　放射断面　接線断面

No-20B　ヤマザクラorカバの樹皮

9　木材の樹種同定

藤根　久（パレオ・ラボ）

はじめに

河川および土坑から出土した木材の樹種同定を行った。なお、同一試料について、放射性炭素年代測定を行っている（放射性炭素年代測定参照）。

試料と方法

試料は、河川（ＳＧ23）および土坑（ＳＫ89）から出土した生材および炭化材である（表1）。

炭化材は、カッターなどを用いて３断面（横断面・接線断面・放射断面）を採取し、直径１cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し銀ペーストを塗布した後、金蒸着を行った。観察および同定は、走査型電子顕微鏡（日本電子㈱製　JSM-5900LV型）を使用した。

生材は、剃刀を用いて木材の３方向（横断面・接線断面・放射断面）の切片を採取し、ガムクロラールで封入してプレパラートを作製した。プレパラートは、光学顕微鏡（40～400倍）を用いて観察・同定した。

結　　果

樹種を同定した結果、試料No.１の生材は落葉広葉樹のケヤキ、試料No.２の炭化材は落葉広葉樹のコナラ属コナラ亜属クヌギ節とカエデ属であった（表１）

表１　木材と樹種同定結果

試料No.	調査区	遺構	樹種	備考
1	Ｇ区	SG23	ケヤキ	PLD-11318
2a	Ｇ区	SK89	カエデ属	PLD-11319
2b	Ｇ区	SK89	コナラ属クヌギ節	

以下に、同定根拠とした材組織の特徴を記載した。

(1) コナラ属コナラ亜属クヌギ節　Quercus subgen. Quercus sect. Aegilops　ブナ科図版１　１a－１c（No.２b）

年輪の始めに大形の道管が１～３層程度配列し、晩材部では小型の丸い道管が単独で放射方向に配列する環孔材である。放射組織は、同性単列のものと集合放射組織から構成される。

クヌギ節は、落葉性高木であり、関東ではクヌギ、瀬戸内海沿岸地方にはアベマキが多い。材は、重厚で割裂性が良い。現在においても薪炭材として重要な樹木である。

(2) ケヤキ　Zelkova serrata（Thunb.）Makino　ニレ科　図版１　２a・２c（No.１）

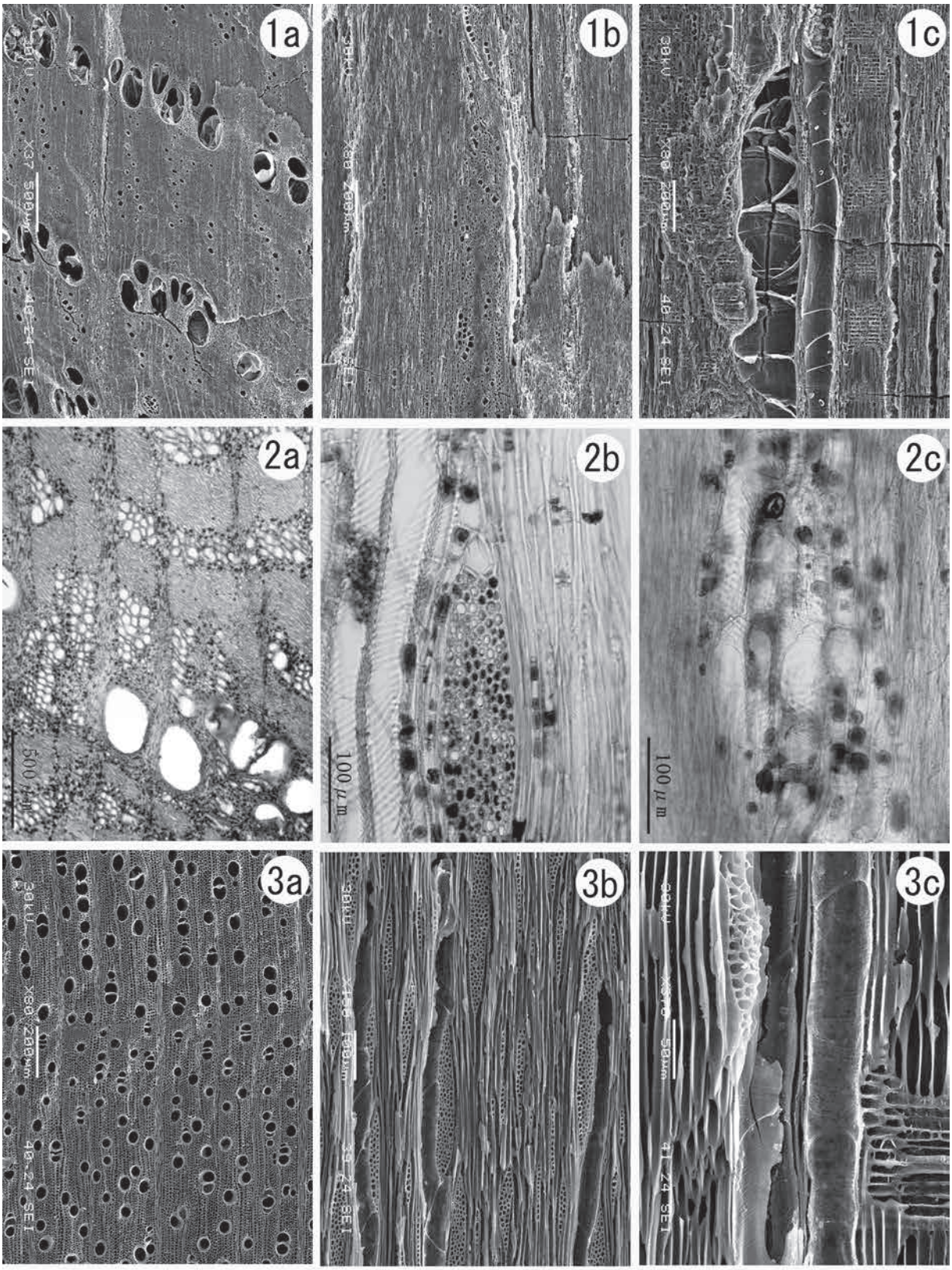
年輪の始めに中型の道管が１～２層配列し、その後小型の道管が集合して接線状・斜状に配列する環孔材である。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、小道管にはらせん肥厚がある。放射組織は異性１～９細胞幅、４～32細胞高の紡錘形、上下端や縁に結晶細胞がある。

ケヤキは、暖帯下部から温帯の山中や川岸に生育する落葉高木である。材は、堅く木目が美しい。用途は建築材や容器が多い。

(3) カエデ属 Acer カエデ科 図版１ 3a－3c(No.2a)

小型の道管が単独または２～３個が放射方向に複合して散在し年輪界は不明瞭で、帯状の柔組織が顕著な散孔材である。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、内腔に細いらせん肥厚がある。放射組織は、同性１～６細胞幅、４～43細胞高である。

カエデ属は、日本全土の暖帯から温帯の山地や谷間に生育し、落葉広葉樹林の主要構成樹であり、約26種があり多くの変種が知られている。材は、堅く緻密で割れにくく、保存性は中程度であり、家具材や床柱などに用いられる。



図版1　木材の走査型電子顕微鏡および光学顕微鏡写真（a:横断面 ,b:接線断面 , c:放射面）

1a-1b. コナラ亜属クヌギ節　（No. 2：炭化材）　2a-2c. ケヤキ　（No. 1：生材）

3a-3c. カエデ属（No. 2a：炭化材）

10　木柱および炭化材の樹種

（株）加速器分析研究所

はじめに

本報告では、木材利用や古植生に関する資料を得るために、木柱や溝・土坑から出土した炭化材の樹種同定を実施する。

試　料

試料は、C区から出土した木柱１点（試料番号１）と、G区の溝や土坑から出土した炭化材３点（試料番号２～４）の合計４点である。

分析方法

木柱は、剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール, アラビアゴム粉末, グリセリン, 蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察する。炭化材は、自然乾燥させた後、3断面の割断面を作製して実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察する。各試料の特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。なお、木材組織の名称や特徴については、島地・伊東（1982）およびWheeler他（1998）を参考にする。また、各分類群の組織配列については、林（1991）や東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

結　果

樹種同定結果を表１に示す。木柱は落葉広葉樹のクリ、炭化材は落葉広葉樹３分類群（オニグルミ・クリ・カエデ属）に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・オニグルミ（Juglans mandshurica Maxim. subsp. sieboldiana (Maxim.) Kitamura）クルミ科クルミ属

散孔材で、道管径は比較的大径、単独または２～３個が放射方向に複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織はほぼ同性、１～３細胞幅、１～40細胞高。

・クリ（Castanea crenata Sieb. et Zucc.）ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は３～４列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～15細胞高。

・カエデ属（Acer）カエデ科

散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独および２～３個が複合して散在し、年輪界に向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列～交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、１～８細胞幅、１～40細胞高。木繊維が木口面において不規則な帯状の紋様をなす。

表１　樹種同定結果

番号	地区	遺構	状態	器種	樹種
1	C区	5-7G	生木	木柱	クリ
2	G区	SD92	炭化材	溝出土炭化材	カエデ属
3	G区	SK85	炭化材	土坑出土炭化材	オニグルミ
4	G区	SK93	炭化材	土坑出土炭化材	クリ

考　察

C区から出土した木柱は、遺構確認面から出土しているとされるが、出土状況等の詳細は不明である。木柱には、落葉広葉樹のクリが利用され、重硬で強度・耐朽性の高い木材が選択されていたことが推定される。本遺跡周辺地域では、古代や中世の柱材を対象とした分析事例がほとんどない。比較的近い地域では、太夫小屋１遺跡（川西町）、古志田東遺跡（米沢市）、馳上遺跡（米沢市）で古代の柱材について樹種同定が行われており、クリが比較的多い結果が得られている（汐見・岡田,2001; 米沢市教育委員会,2001;パリノ・サーヴェイ株式会社,2002）。また、中世の資料では、上浅川遺跡（米沢市）でヒノキが確認された例がある（米沢市教育委員会,1985）。今回の結果は、クリが利用されている点で、米沢市周辺地域における古代の柱材と木材利用が類似する。

今後、周辺地域でさらに資料を蓄積し、比較検討することが望まれる。

一方、G区の溝や土坑から出土した炭化材は、いずれも炭化していることから、何らかの人間活動によって火を受けた可能性がある。溝の炭化材はカエデ属、土坑の炭化材はオニグルミとクリに同定された。いずれも重硬

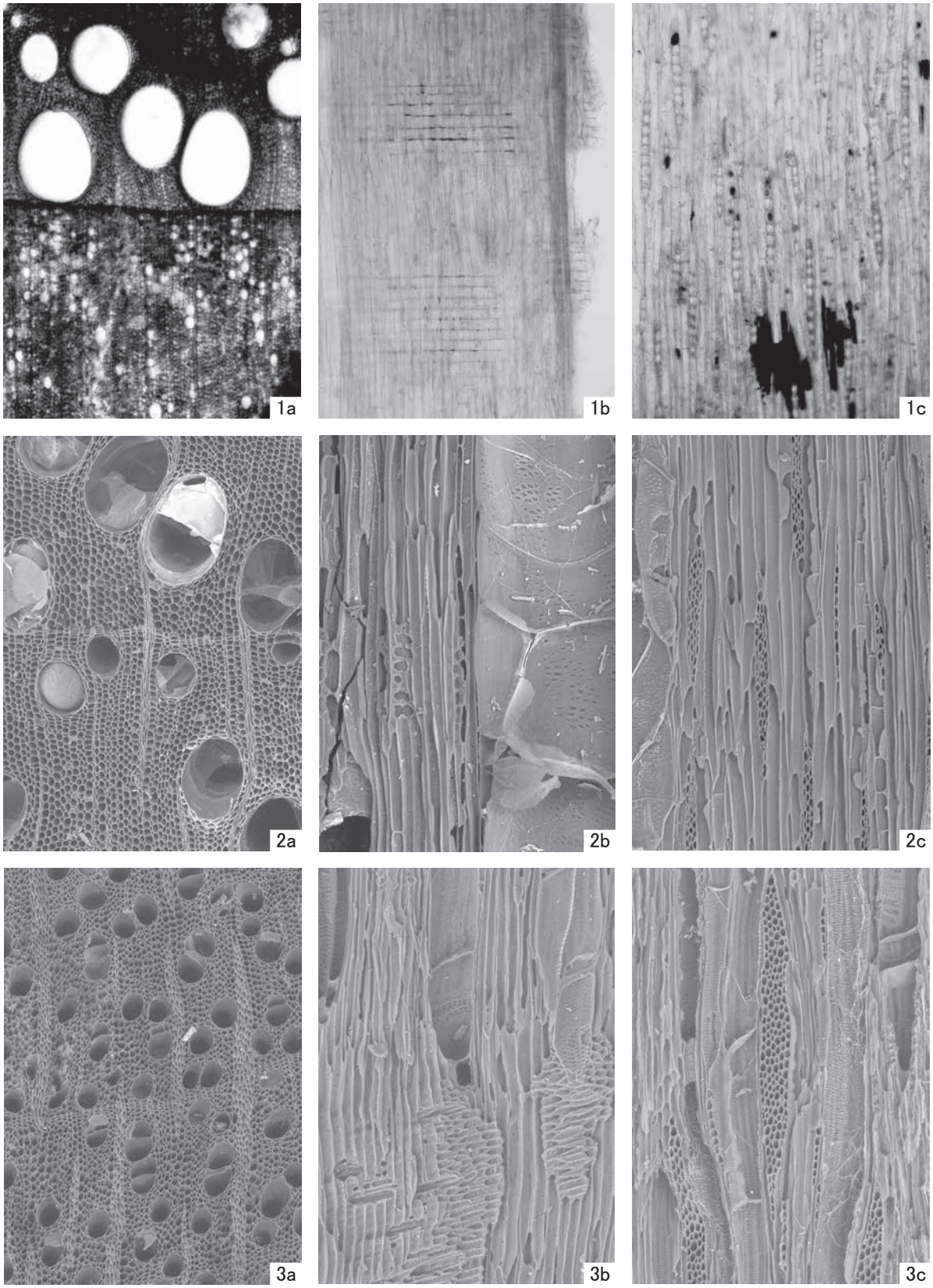
で強度の高い材質を有している種類である。土坑では遺構によって樹種が異なるが、今回の結果が遺構による木材利用の違いを示しているかは不明である。炭化材に確認された種類は、河畔林等として、現在の本地域において普通にみられる種類であり、当該期の遺跡周辺にも生育し、利用されていたことが推定される。

引用文献

林昭三　1991　日本産木材　顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.
伊東隆夫　1995　日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料　31　京都大学木質科学研究所　81－181.
伊東隆夫　1996　日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料　32　京都大学木質科学研究所　66－176.
伊東隆夫　1997　日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料　33　京都大学木質科学研究所　83－201.
伊東隆夫　1998　日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料　34　京都大学木質科学研究所　30－166.
伊東隆夫　1999　日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料　35　京都大学木質科学研究所　47－216.
パリノ・サーヴェイ株式会社　2002　馳上遺跡から出土した柱材の樹種.「馳上遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第101集　山形県埋蔵文化財センター　1－3.
島地謙・伊東隆夫　1982　図説木材組織.地球社　176p.
汐見真・岡田文男　2001　山形県太夫小屋1遺跡出土木製品の樹種調査結果.「太夫小屋1・2・3遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第81集　山形県埋蔵文化財センター　附編1－2.
Wheeler E.A.　Bass P. and Gasson P.E.（編）　1998　広葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩（日本語版監修）　海青社　122p.［Wheeler E.A.　Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］.
米沢市教育委員会　1985　上浅川1次・2次調査報告書.米沢市埋蔵文化財調査報告書第14集　米沢市教育委員会　53p.
米沢市教育委員会　2001　古志田東遺跡　林泉寺住宅団地造成予定地内埋蔵文化財調査報告書.米沢市埋蔵文化財調査報告書第73集　米沢市教育委員会　282p.

※）本測定は、当社協力会社・パリノ・サーヴェイ（株）にて実施した。

図版1　木材・炭化材



1. クリ(試料番号1)
2. オニグルミ(試料番号3)
3. カエデ属(試料番号2)
　a:木口,b:柾目,c:板目

300 μm:1a
200 μm:1b,c
200 μm:2−3a
200 μm:2−3b,c

11　動物遺体分析

樋泉岳二（早稲田大学）
孔智賢（パレオ・ラボ）

はじめに

平安時代～近世の遺構から検出された骨片資料の同定結果を報告する。

資料と分析方法

資料は、以下の４遺構から検出されたものである。

ＳＤ４（方形周溝状遺構）は、弥生時代や古墳時代の方形周溝墓と同じ形だが、平安時代の土器が出土している。ＳＴ20（竪穴住居）は、一辺３～４ｍの四角形で、据付のカマドの跡が確認された。炭や焼土が多量に検出され、火事になった可能性が想定されている。ＳＨ67（墓坑）は、残存深さ10cm程で、骨片は覆土から検出された。付近から一文銭が出土していることから江戸時代頃の人骨の可能性が想定されている。ＳＫ89（土坑）は、直径１ｍ前後の楕円形である。炭や焼けた土の塊が多量に検出されたが、用途は不明である。

資料の採集方法の詳細は不明である。接合可能な資料については、接合を行った。同定は現生標本との比較によって行った。現生標本は国立歴史民俗博物館西本豊弘氏の所蔵標本を参照させていただいた。

結果と考察

同定結果を表１に示した。資料はすべて脊椎動物の骨で、焼けて灰色～白色を呈している。以下に各資料の同定結果に関する所見を述べる。

・資料No. １：ＳＤ４（方形周溝状遺構）

大型哺乳類の長骨破片２点である。小破片のため種類・部位の特定は困難だが、骨質からみて人骨の可能性がある。焼けた際に生じたと思われる亀裂が顕著であり、有機成分を豊富に含んだ「生」の骨が急激な火熱を受けたものと推定される。もし人骨であるとすれば、火葬骨の可能性がある。

・資料No. ２～６：ＳＴ20（竪穴住居）

No. ２～No. ５は、すべて鳥類の骨で、右大腿骨の近位端と遠位端、右脛骨の近位端、部位不明の長骨骨幹が確認された。大腿骨と脛骨はヤマドリ Syrmaticus soemmerringii の可能性が高いが、被熱による破損・変形のため、確実ではない。これらの資料は、おそらく同一個体のものと推測される。ヤマドリはキジに近縁の日本固有種で、生息地は本州・四国・九州に限られ、主に山地の森林に生息する（小林,1983）。

No. ６は、比較的大型の哺乳類の長骨を素材とした骨製品だが、種類・部位の特定は困難である。長骨を縦割りにして、断面を研磨し、棒状の製品に仕上げている。

・資料No. ７～９：ＳＨ67（墓坑）

比較的大型の哺乳類の歯および部位不明の骨片である。歯はヒトの臼歯の可能性があるが、歯冠は完全に消失しており、焼けた歯根のみの資料であるため同定は確実でない。

・資料No.10：ＳＫ89（土坑）

シカ Cervus Nippon の中節骨である。近位端は未癒合で脱落していることから、若獣と推定される。被熱による亀裂が認められる。

まとめ

加藤屋敷遺跡から出土した動物遺体を分析した。資料はすべて焼骨であった。同定の結果、ＳＴ20（竪穴住居）からヤマドリ？、ＳＫ89（土坑）からシカが確認された。これらは、本遺跡における野生鳥獣類利用の一端を示唆するものといえる。ＳＤ４（平安時代の方形周溝状遺構）とＳＨ67（近世の墓坑）からはヒトの可能性のある歯・骨が確認された。いずれも火葬人骨の可能性があるが、その性格については出土状況を踏まえて検討する必要がある。

参考文献

小林桂助　『原色日本鳥類図鑑(新訂増補版)』保育社.（1983）

表１　動物遺体の同定結果

資料No.	出土区・遺構		種類	部位	残存位置	左右	数	焼	備考
1	B区	SD4（方形周溝状遺構）	大型哺乳類・種同定不可	不明（長骨）	破片	?	2	焼（亀裂顕著）	人骨の可能性あり
2	D区	ST20（竪穴住居）	ヤマドリ？	大腿骨	近位端	R	1	焼	RN244
3			ヤマドリ？	大腿骨	遠位端	R	1	焼	RN244、おそらく近位端と同一骨だが接合せず
4			ヤマドリ？	脛骨	近位端	R	1	焼	RN244
5			鳥類・種同定不可	不明（長骨）	骨幹	?	1	焼	RN244
6			大型哺乳類・種同定不可	不明（長骨）	加工品	?	1	焼	RN245
7	F区	SH67（墓坑）	ヒト？	臼歯	歯根のみ	?	1	焼	歯冠は完全に消失しているため同定は不確実
8			大型哺乳類・種同定不可	不明	破片	?	2	焼	
9			同定不可	不明	小破片	?	多数	焼	
10	G区	SK89（土坑）	シカ	中節骨	近位端未癒合脱落	?	1	焼（亀裂あり）	

図版1　加藤屋敷遺跡出土の動物遺体

1.ヤマドリ？ 大腿骨近位端（No. 2）　2.ヤマドリ？ 大腿骨遠位端（No. 3）　3.ヤマドリ？ 脛骨近位端（No. 4）
4.鳥類・種同定不可 長骨骨幹（No. 5）　5.シカ 中節骨（No. 10）　6.大型哺乳類 長骨加工品（No. 6）
7・8.大型哺乳類・長骨（No. 1）　9.ヒト?臼歯（No. 7）　10・11 大型哺乳類（No. 8）　12.同定不可（No. 9）
スケールバーは3cm

Ⅵ　まとめと考察

今回の調査は、一般国道13号上山バイパス改築事業に伴う、加藤屋敷遺跡の第１・２次発掘調査である。調査によって得られた成果を以下に述べる。

加藤屋敷遺跡は、山形県南陽市大字川樋字加藤屋敷に所在し、国道13号線沿いにあるJR中川駅から西へ約0.5kmの地点に位置する。標高は228mを測り、鷹戸山と岩部山に囲まれた緩やかな傾斜地に立地する。発掘調査は、第１・２次調査を合わせて事業実施地区のうち遺跡にかかる約6,000㎡を対象に実施した。

遺跡からは、縄文時代後期、古墳時代、奈良・平安時代、中世、近世と考えられる遺構が検出され、遺物は縄文時代の土器や石器、石製品、土偶、弥生時代の土器、奈良・平安時代の土器、石製品、木製品、中世以降の陶磁器や木製品、金属製品など整理箱で181箱出土した。

縄文時代の遺構は、F区で検出されたＳＴ36竪穴住居である。中央に石組みの炉が構築され、東北地方南半で「新地式」とされる瘤付土器が出土している。瘤付土器は、精製土器では口縁部や体部に瘤が付き沈線や磨消し縄文で判弧文や平行文が描かれるⅡa2類が多い。粗製土器は器面に櫛状工具による条線のみを施すものや縄文のみのⅡb1類、Ⅱb2類が多く出土した。時期は土器の特徴から、縄文時代後期後葉の住居と考えられる。また、SG23の壁面で検出されたＳＫ109土坑も縄文時代に属する可能性がある。

その他、流れ込みと考えられる縄文時代中期の大木８a式や９式、入組文や匹字文などの文様が描かれる晩期の土器がSG23やグリッドから出土している。土偶は胴部１点、脚部４点がみられた。石器・石製品は29点の出土で、器種では石匙と削器が多く、尖頭器、石鏃、石錐などの他、石皿、凹石も出土している。打製石器の石材は全て頁岩である。本遺跡の北西方向約100mに縄文時代晩期の遺跡と推測されている岩谷堂遺跡が存在することから関連が窺われる。

古墳時代に属すると考えられるのはＳＤ４周溝である。同様の方形に巡る周溝が南陽市の大塚遺跡や中落合遺跡でも確認されていることから、古墳時代の方形周溝墓とも考えられる。但し、遺物の出土が無く不明である。

奈良･平安時代に属すると考えられる遺構は、ＳＴ５・７・13・14・20・21竪穴住居、ＳＭ24祭祀遺構、ＳＫ85・93・95土坑、ＳＸ６性格不明遺構、ＳＧ23河川などである。竪穴住居は全てカマドが構築され、ＳＴ20は焼失した様相を呈す。

出土遺物は須恵器、土師器、黒色土器、石製品、木製品などがある。須恵器の器種には供膳形態の蓋、有台坏、無台坏と貯蔵形態の壺、甕などがある。蓋は天井部に回転ヘラ削りを施す、平笠タイプのAa類とAb類が大半を占め、ＳＴ20とＳＧ23から多く出土している。

有台坏は、底径が小さく、器高が高くなるＤ類が多く出土している。ＳＫ95の有台坏147は底径が小さいタイプとなる。

無台坏は、箱型となるAa1類が米沢市大神窯跡の灰原資料に類似し、台形状となるAc2類は同遺跡の窯跡内資料に類似する。ＳＴ20とＳＧ23から出土している。同様の底部資料がＳＤ２からも出土しているが混入と考えられる。無台坏Ａ類に続くと考えられる底径と器高がやや大きくなるBa2類はＳＴ５、Bc1類がＳＴ14にみられる。Ca1類やDc2類は加賀塚窯跡に類例がみられ、ＳＴ21、ＳＫ19、ＳＸ６、ＳＧ23から出土している。

土師器には無台坏、有台坏、甕、堝、甑などがある。無台坏には底部に網代痕や木葉痕があり、内外面をケズリやナデ、ミガキ調整で整形するものがある。黒色土器の無台坏にも同様のものがある。県内でも類例が少なく、土師器無台坏Aa2類、黒色土器無台坏Aa類に類似するものが南陽市狸沢古墳群から出土し、古墳は８世紀の年代が当てられている。また、宮城県糠塚遺跡の土師器坏ＢⅢ類とも類似する。大半がＳＧ23から出土しているがＳＴ20、ＳＸ６にもみられる。前述した須恵器無台坏Aa1類、Ac2類の出土もＳＴ20とＳＧ23に限られることから、このタイプと併行して作られたと考えられる。104・347・348はロクロ整形の坏を意識した丁寧な作りが感じられる。

ロクロ整形となる土師器無台坏は、器形が須恵器無台

坏 Aa1 類と Aa2 類と類似するものがＳＧ 23 から、黒色土器の無台坏は須恵器無台坏 Db2 類、Dc2 類と類似するものがＳＭ 24、ＳＫ 85 から出土している。

土師器甕は、器高が 20cm 以上の大型で、口縁部がくの字状になる長胴の Cb1 類がＳＴ７・13 にみられる。高畠町南原遺跡のＳＴ 24 から類似するものが出土し、ＳＴ 13出土の蓋60と器形･寸法が近いものも含まれる。

墨書・刻書土器はＳＧ 23 から 59 点、竪穴住居から３点、Ｄ区南側のグリッドから２点出土し、同一の文字は同一人物により、同一の部位に記された可能性が高く、「他田」、「物」、「王仁」など集団名を記したと思われる墨書も含まれる。

木製品は大半がＳＧ 23 からの出土である。器種は、容器、食事具、服飾品、農具、武器、食事具、不明品、祭祀具、部材など 161 点である。椀 13 点、皿 39 点、曲物 50 点と容器が６割以上を占める。椀 Aa1 類の器形は須恵器無台坏 Aa2 類と、椀 Bc1 類は須恵器無台坏 Dc2 に類似する。下駄は、親指部の鼻緒の孔が左に偏っているという古代の特徴を示す。祭祀用と思われる人形は、遊佐町の上高田遺跡に同様のものと考えられるものがみられる。

各遺構の所属時期は、出土した土器の形態、調整技法などの特徴から、８世紀第４四半期から９世紀初頭には ST20 が属すると考えられ、９世紀初頭にＳＴ７・13、９世紀第２四半期がＳＴ５、９世紀第３四半期はＳＴ 21、ＳＭ 24、ＳＫ 19・85、ＳＸ６、９世紀前半がＳＴ 14、９世紀中頃はＳＫ 95 と推測される。ＳＧ 23 はＳＴ 20 の古い時期である８世紀第４四半期から９世紀後半までは機能していた可能性が考えられる。

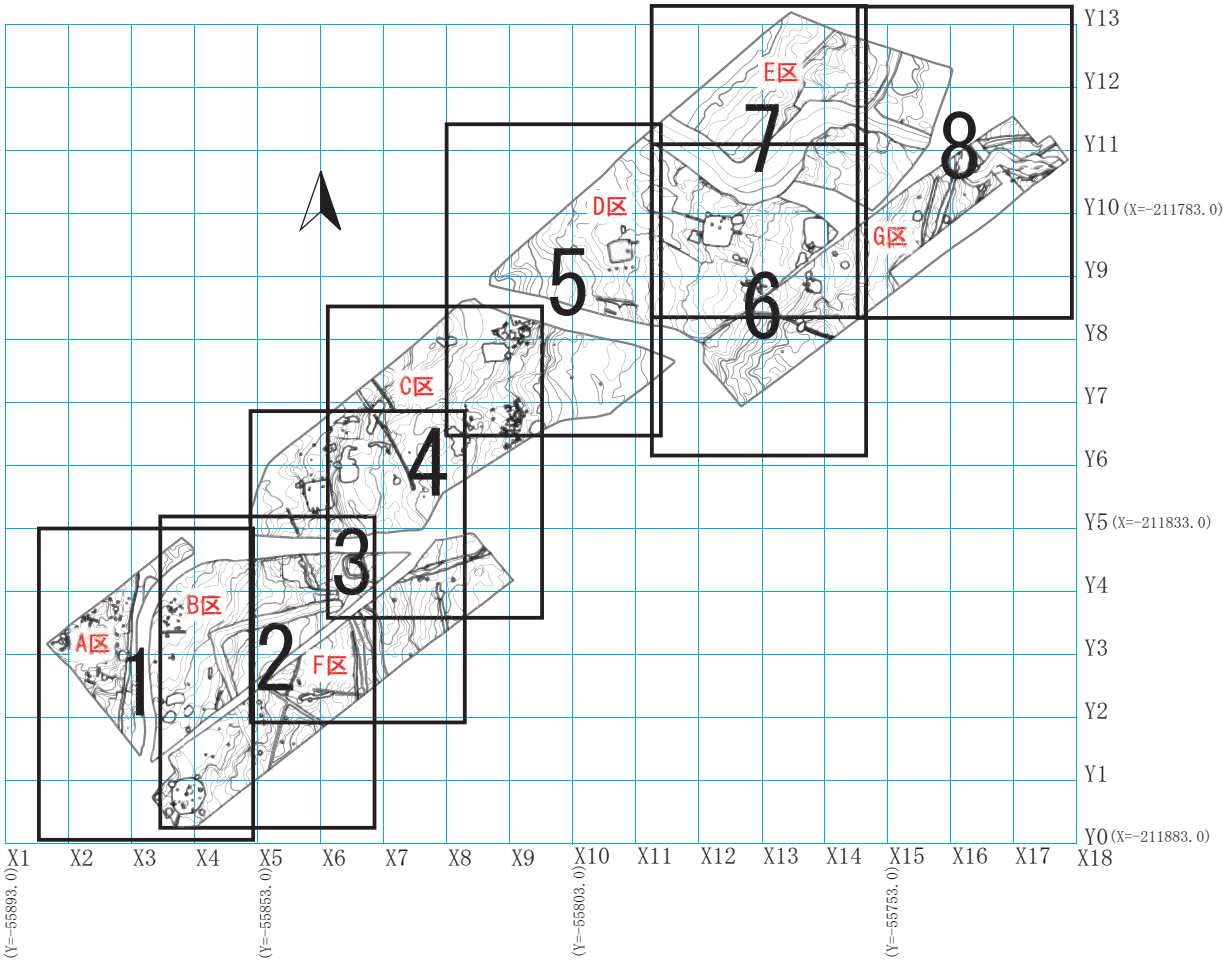
中世・近世の遺構は、ＳＤ２・86・87・91、ＳＨ 67 などである。ＳＤ２からは 15 世紀の信楽が、ＳＤ 87 からは 17 世紀前半の唐津が出土し、毛抜きと思われる金属製品もＳＤ 87 から出土している。ＳＤ 86 も近世の磁器が出土し、ＳＤ 87 と同じ様相を示す。ＳＤ 91 は近世の陶磁器が出土した。ＳＨ 67 は焼けた骨片と歯が出土し、近辺から寛永通宝がみつかっている。グリッドから出土した青磁や寛永通宝、木柱の年代などから、13 世紀から 17 世紀頃の範疇と考えられる。

以上から、遺跡は約 3,500 年前の縄文時代後期末から人々の営みが始まり、ＳＧ 23 から出土した多量の土器や木製品から、奈良・平安時代には河川から得られる豊富な水を利用した一定の規模をもつ集落があったと考えられる。そこには、墨書土器の集団名を記したと思われる「他田」、「物」、「王仁」などから、氏族集団がいたことも推測される。但し、調査で検出された古代の住居は竪穴住居６棟のみで、掘立柱建物は確認されなかった。これは、今回の調査区が遺跡の南東端部にあたり、集落の主体と推測される南西部は未調査部分となっているためである。また、確認されなかったものの、Ｃ区の北西端から出土した木柱や、ＳＧ 23 から出土している部材と考えられる木製品などから掘立柱建物が竪穴住居と並んでその集落の構成要素であったことが窺える。

この集落はその後、中世以降、近世まで営まれていたと考えられ、隣接する天矢場遺跡では中・近世に属すると考えられる掘立柱建物が 18 棟確認されていることから、同遺跡との関連も推測される。

参考文献

志間泰治ほか　1977　「糠塚遺跡」『宮城県文化財発掘調査略報』（宮城県文化財調査報告書第53集）宮城県教育委員会
柏倉亮吉ほか　1982　『山形県史第１巻　原始・古代・中世編』　山形県
佐藤鎮雄ほか　1990　『南陽市史　上巻』地質・原始・古代・中世　　南陽市教育委員会
誉田慶恩ほか　1992　『角川日本地名大辞典６山形県』角川書店
齋藤健ほか　1998　『上高田遺跡第２・3次発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財センター調査報告書第57集）財団法人山形県埋蔵文化財センター
河崎俊夫ほか　1999　『第８回企画展図録　やまがたの古墳とその時代』山形県うきたむ風土記の丘考古資料館
阿部明彦ほか　1999　「山形県の古代土器編年」『第25回古代城柵官衙遺跡検討会資料』第25回古代城柵官衙遺跡検討会事務局
植松暁彦ほか　1999　『宮の前遺跡第３次発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財センター調査報告書第65集）財団法人山形県埋蔵文化財センター
佐藤鎮雄ほか　2003　『図説「置賜の歴史」』　郷土出版社
氏家信行ほか　2007　『大塚遺跡・西中上遺跡発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財センター調査報告書第158集）財団法人山形県埋蔵文化財センター
押切智紀ほか　2007　『庚壇遺跡発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財センター調査報告書第161集）財団法人山形県埋蔵文化財センター



0 20m
1：1200

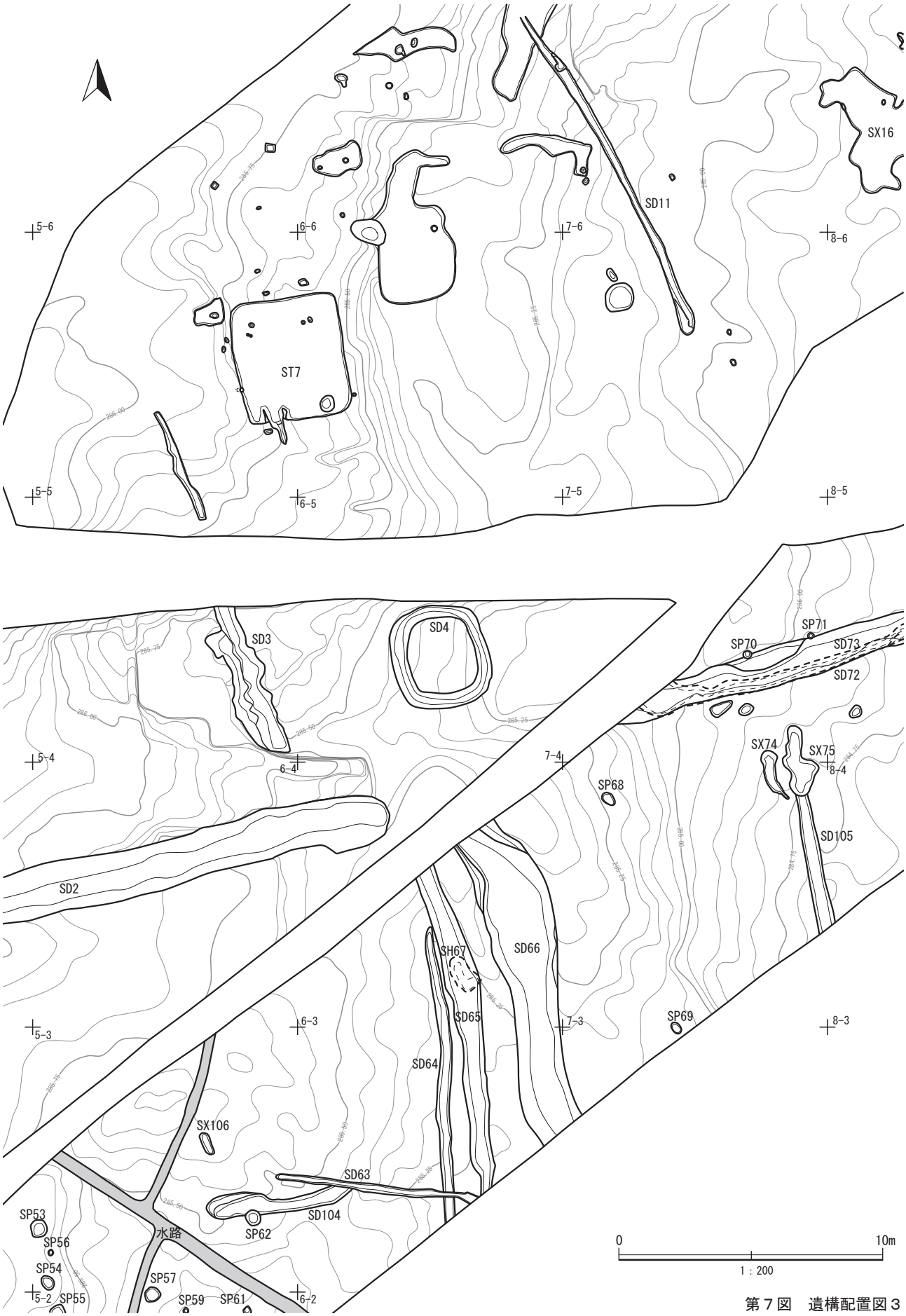
第４図　遺構配置図の割付図

2-4
3-4
4-4
SE1
2-3
3-3
4-3
SD2
SP52
2-2
3-2
4-2
SP48
SK49
SD2
SP108
SP107
SP103
SK47
2-1
3-1
4-1
SK41
SK44
ST36
SK37
SK102
SK43
SK38
SK45
SD40
0
10m
1：200

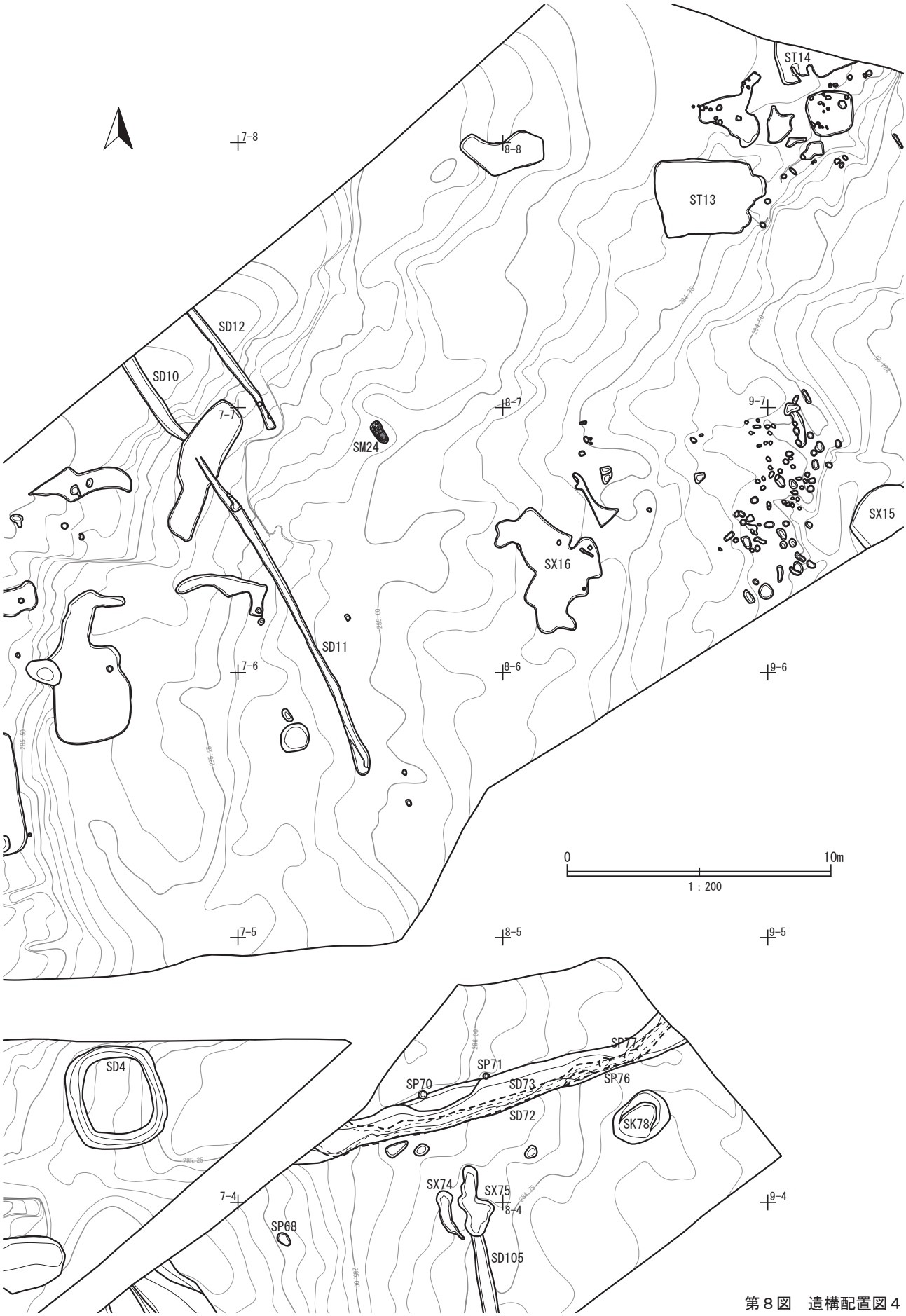
第５図　遺構配置図１

4-5
5-5
6-5
SD3
SD4
4-4
5-4
6-4
SD2
SD66
SH67
SD65
SD64
4-3
5-3
6-3
SX106
SD63
SD104
SP62
水路
SP52
SP53
SP56
SP54
SP55
5-2
SP57
SP59
SP61
6-2
4-2
SP48
SK49
SD2
SP58
SP60
SP108
SP51
SP107
SP103
SK47
5-1
6-1
SK41
4-1
ST36
SK44
EK2
SP42
SK43
SK102
SK38
SK45
SD40
0
10m
1：200

第６図　遺構配置図２


SX16
SD11
ST7
5-6
6-6
7-6
8-6
5-5
6-5
7-5
8-5
SD3
SD4
SP71
SP70
SD73
SD72
SX74
SX75
5-4
6-4
7-4
8-4
SP68
SD105
SD2
SH67
SD66
SD65
SD64
5-3
6-3
7-3
8-3
SP69
SX106
SD63
SD104
SP53
SP56
SP54
SP62
水路
SP57
SP59
SP61
5-2
SP55
6-2
0
10m
1：200

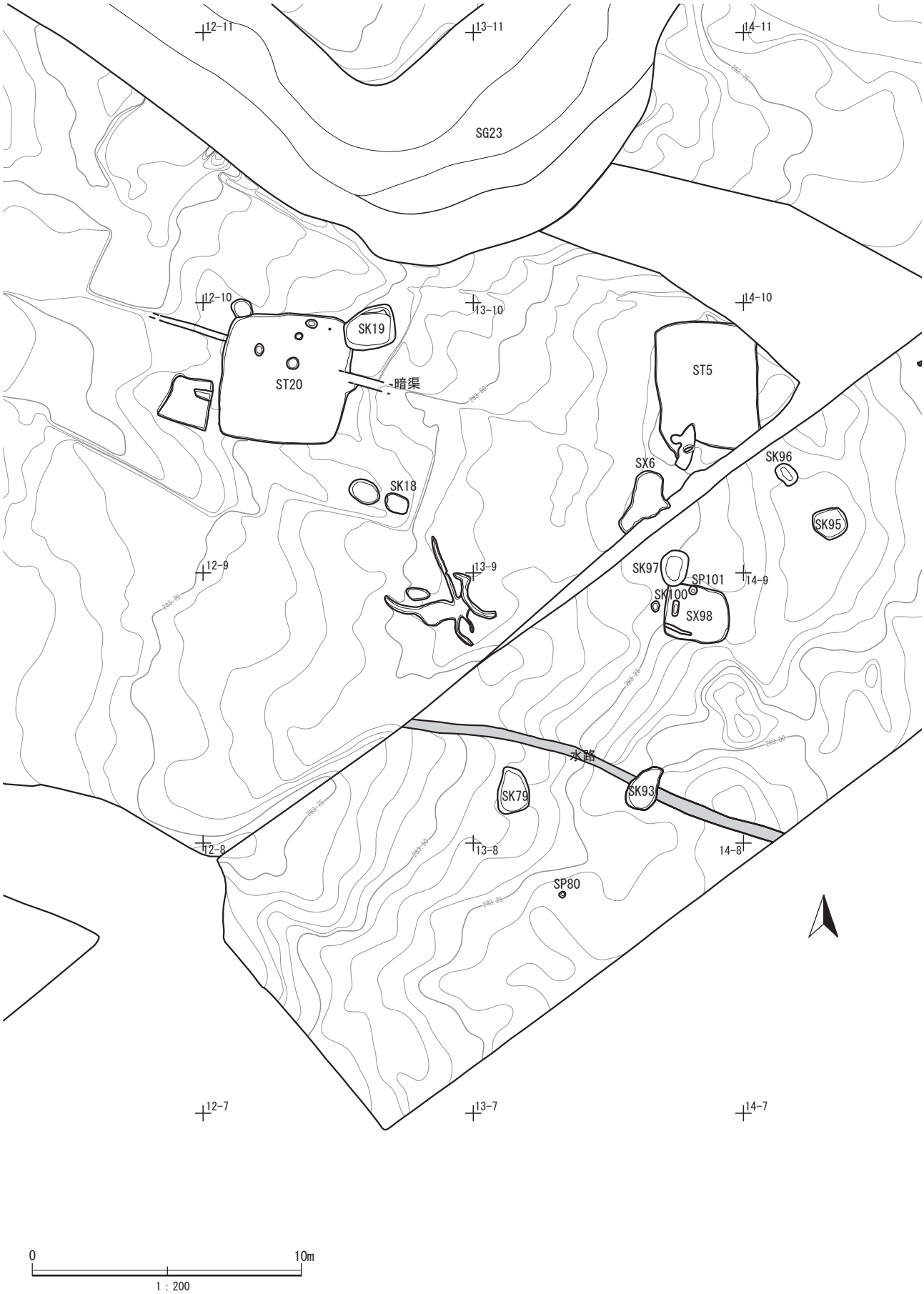
第７図　遺構配置図３


ST14
ST13
7-8
8-8
SD12
SD10
7-7
8-7
9-7
SM24
SX15
SX16
SD11
7-6
8-6
9-6
0
10m
1 : 200
7-5
8-5
9-5
SD4
SP77
SP71
SP70
SD73
SP76
SD72
SK78
SX74
SX75
7-4
8-4
9-4
SP68
SD105

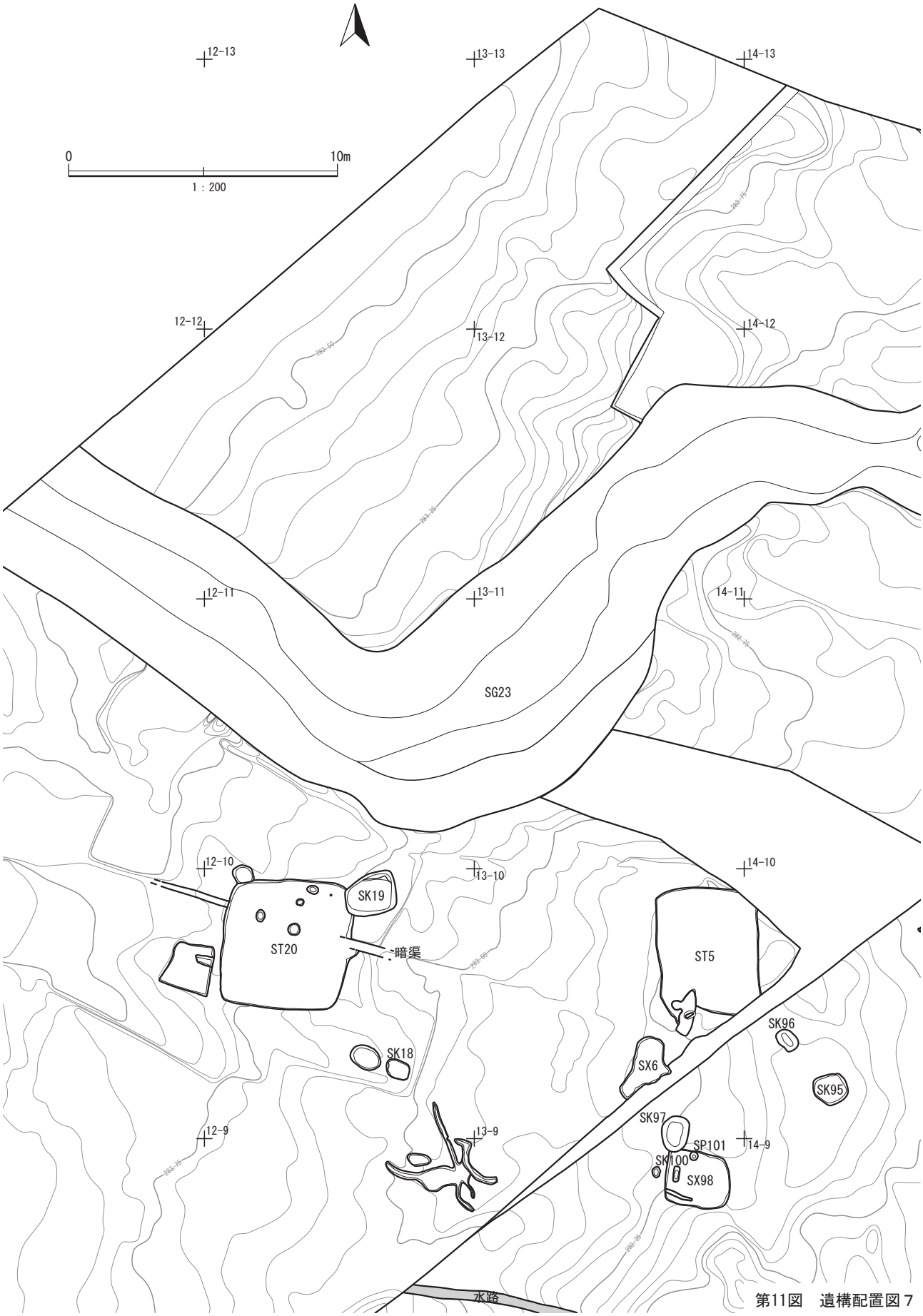
第８図　遺構配置図４

SG23
8-11
9-11
10-11
11-11
8-10
9-10
10-10
11-10
ST21
8-9
9-9
10-9
11-9
ST14
8-8
10-8
11-8
ST13
8-7
9-7
10-7
11-7
SX15
0
10m
1：200

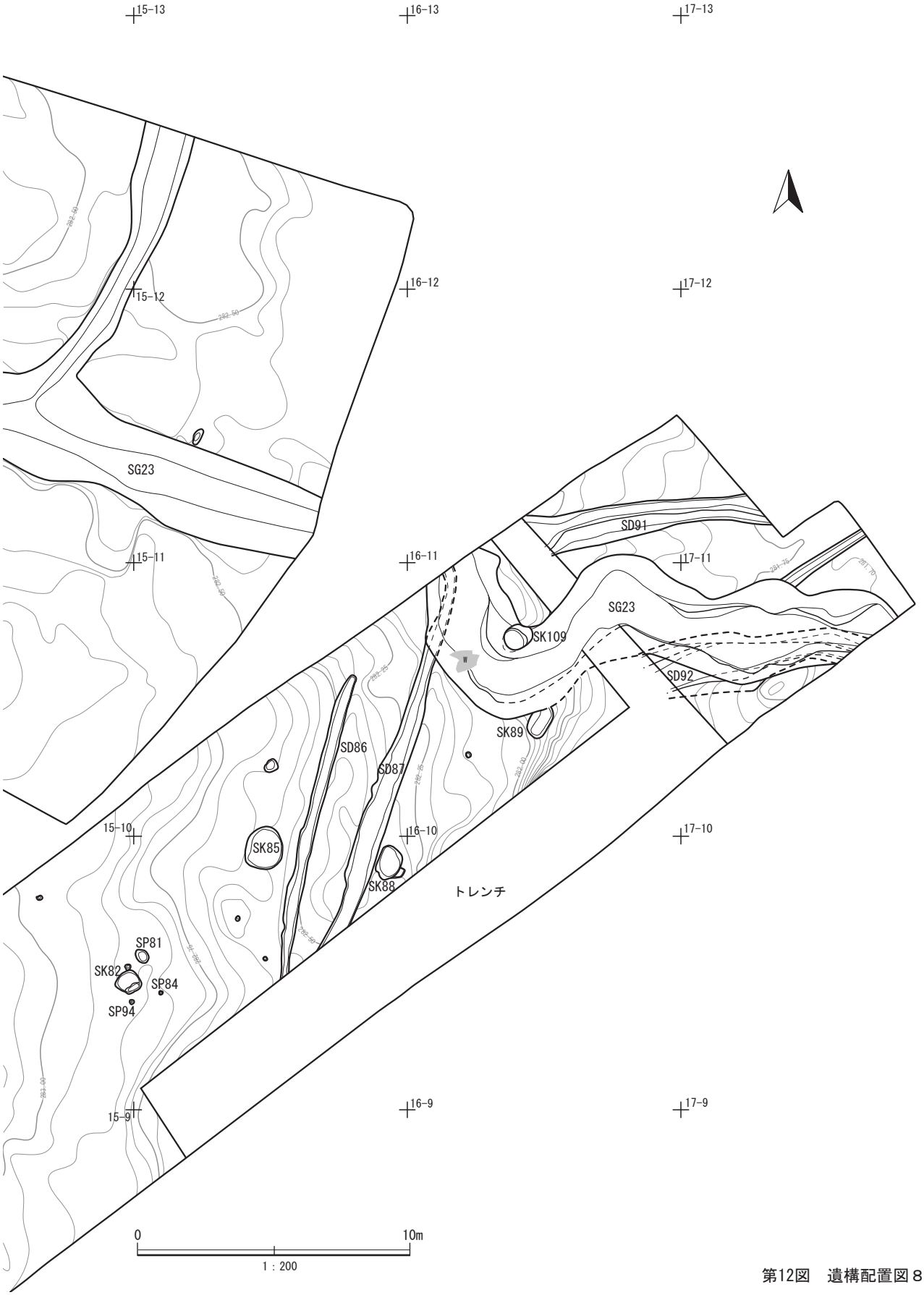
第９図　遺構配置図５


12-11
13-11
14-11
SG23
12-10
13-10
14-10
SK19
ST20
暗渠
ST5
SX6
SK96
SK18
SK95
12-9
13-9
SK97
SP101
14-9
SK100
SX98
水路
SK79
SK93
12-8
13-8
14-8
SP80
12-7
13-7
14-7
0
10m
1：200

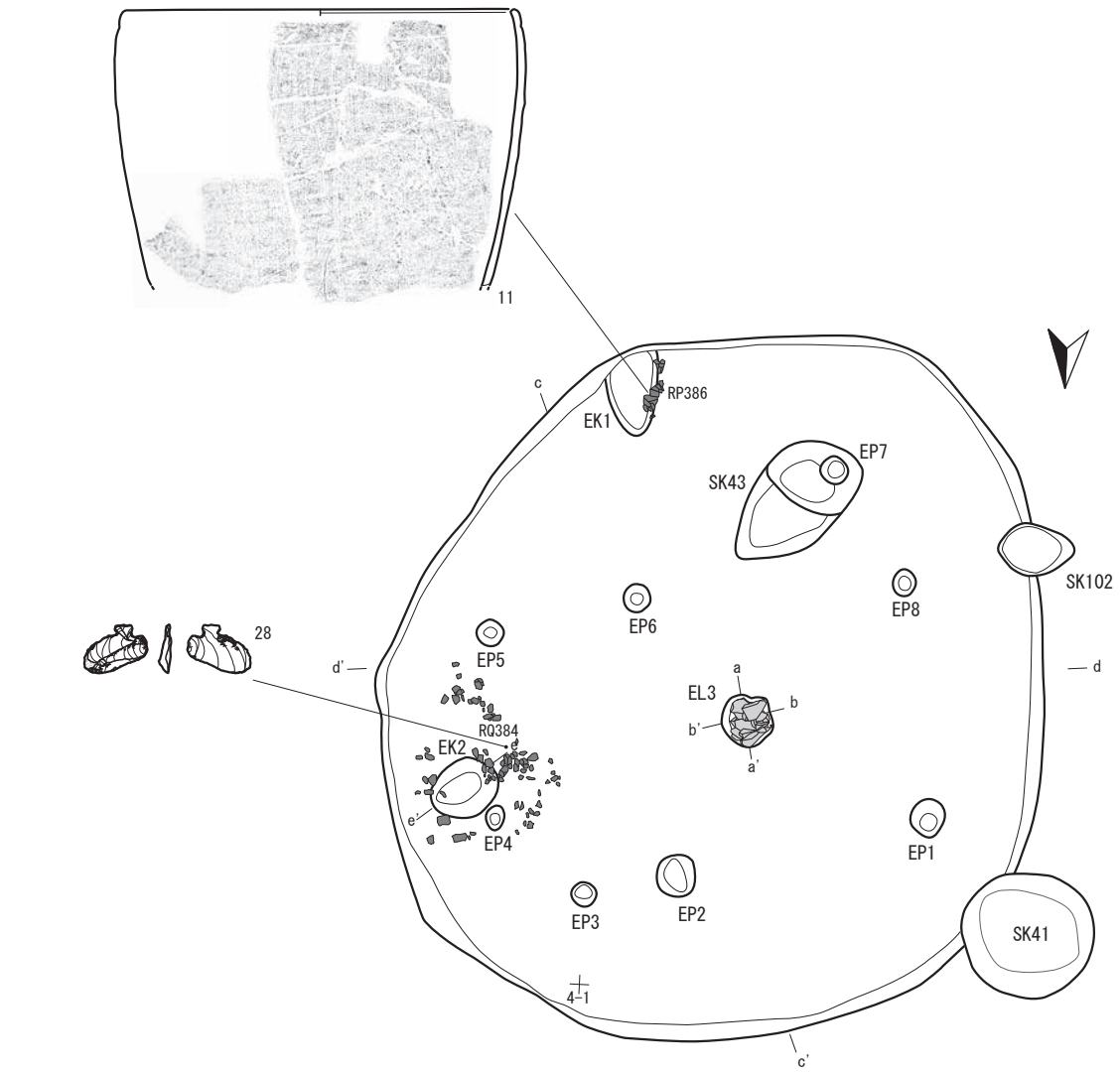
第10図　遺構配置図６

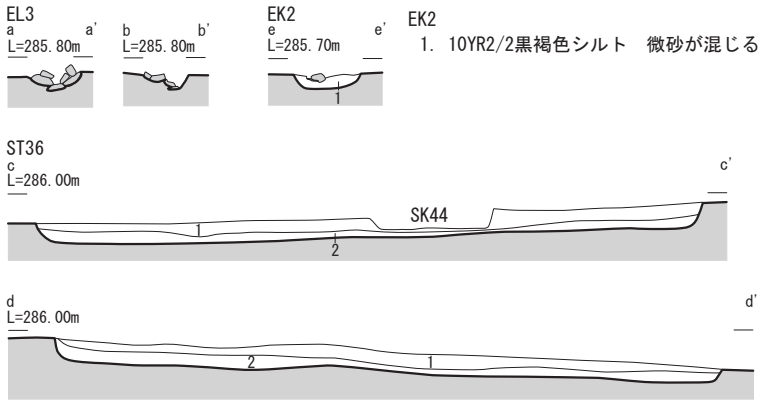

12-13
13-13
14-13
0
10m
1：200
12-12
13-12
14-12
12-11
13-11
14-11
SG23
12-10
13-10
14-10
SK19
ST20
暗渠
ST5
SK96
SK18
SX6
SK95
SK97
12-9
13-9
SP101
14-9
SK100
SX98
水路

第11図　遺構配置図７


15-13
16-13
17-13
15-12
16-12
17-12
SG23
15-11
16-11
17-11
SD91
SG23
SK109
SD92
SK89
SD86
SD87
15-10
16-10
17-10
SK85
SK88
トレンチ
SP81
SK82
SP84
SP94
15-9
16-9
17-9
0
10m
1：200

第12図　遺構配置図８



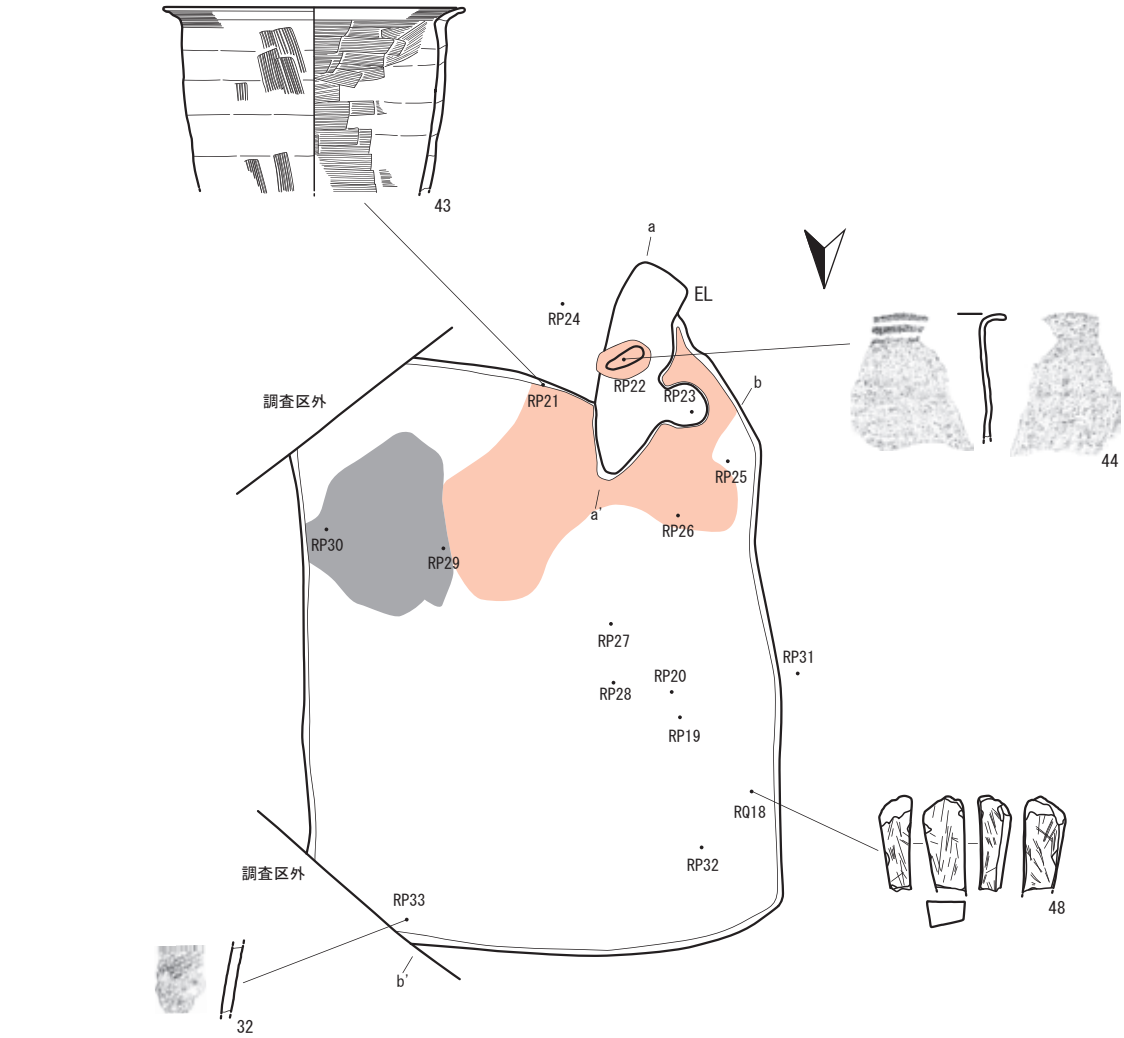


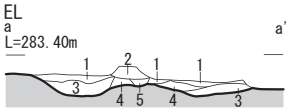
EK2
1. 10YR2/2黒褐色シルト　微砂が混じる。褐色シルトを点状に含む。

ST36
1. 7.5YR2/1黒色シルト　褐色シルトが点状に混じる。微礫、少量の炭化粒を含む。
2. 10YR2/2黒褐色シルト　褐色シルトが斑状に混じる。微礫、微量の炭化粒を含む。

0　1m
1：60

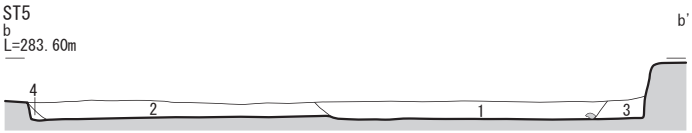
第13図　ＳＴ36竪穴住居





EL

1. 7.5YR4/4褐色土　焼土と10YR5/3にぶい黄褐色粘土の混合層。
2. 7.5YR4/4褐色土　粘土をほとんど含まない。
3. 7.5Y4/2灰オリーブ砂　焼土を少量含む。
4. 7.5Y3/1オリーブ黒色砂質土　木炭、焼土粒を少量含む。

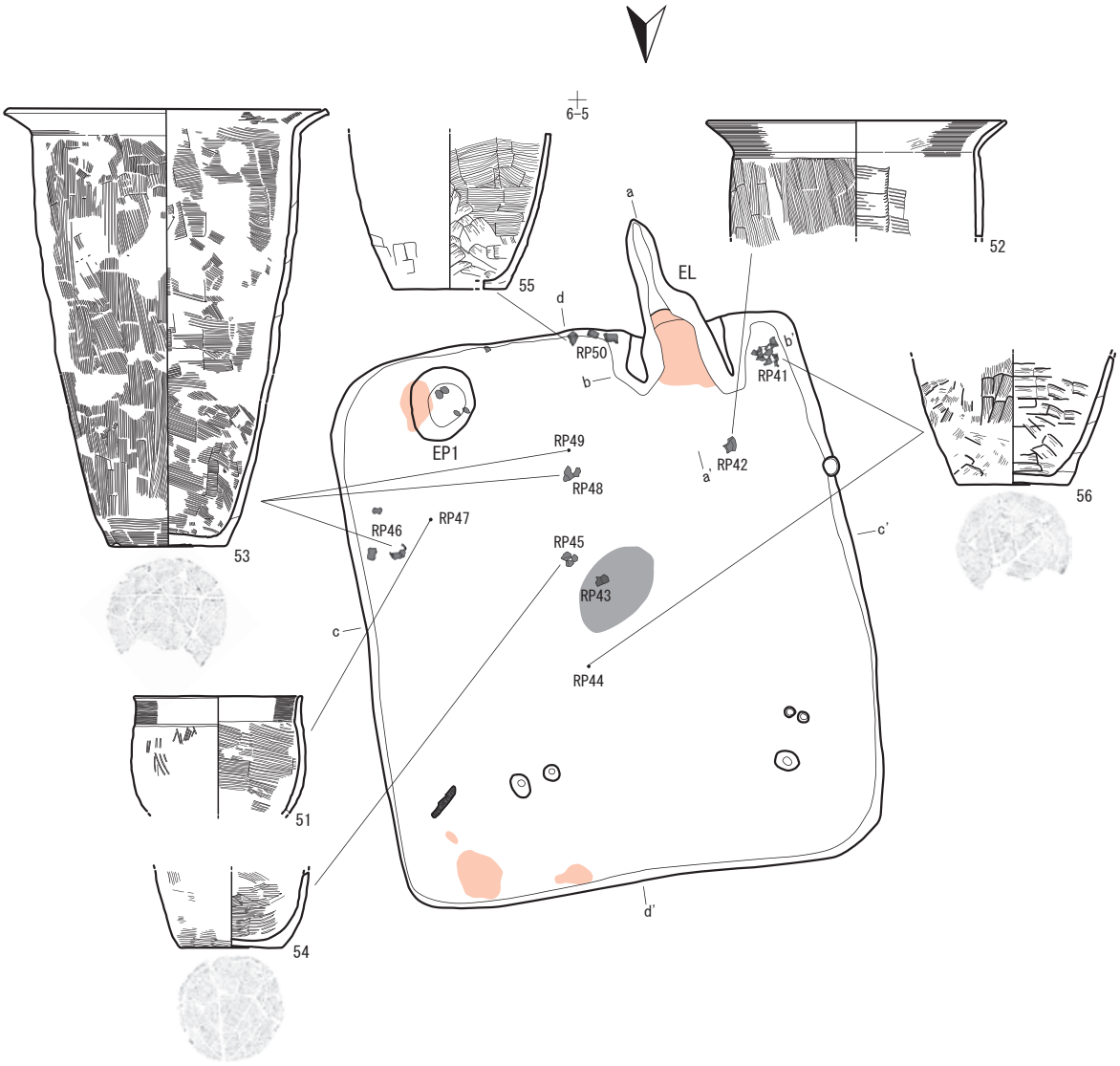


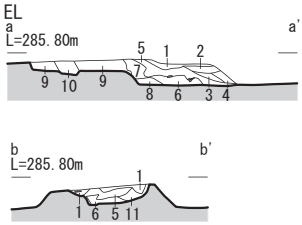
ST5

1. 10YR2/1黒色土　7.5Y3/2オリーブ黒色砂質土と小礫を多量に含む。
2. 10YR2/1黒色土　7.5Y7/1灰白粘土と7.5Y3/2オリーブ黒色砂を少量含む。
3. 10YR2/1黒色土　10G5/1緑灰色の礫を含む。
4. 10YR5/4黒色土　にぶい黄褐色砂。地山崩落土。

0　1m
1：60

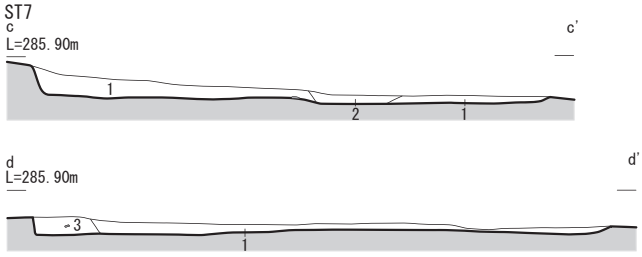
第14図　ＳＴ５竪穴住居





EL

1. 5YR2/1黒色砂質土　5Y8/2灰白砂粒を多く含む。5Y4/1灰色粘土が少量混じる。
2. 5Y4/1灰色粘土　1が少量混じる。
3. 5Y4/1灰色粘土　1が混じる。焼土を含む。
4. 5YR2/1黒色砂質土　5Y4/1灰色粘土粒を多量に含む。
5. 5Y4/1灰色粘土　焼土を含む。
6. 5Y3/1オリーブ黒色土　5Y4/1灰色粘土、焼土を多量に含む。
7. 5YR2/1黒色砂質土　5Y4/1灰色粘土、焼土を多量に含む。
8. 5Y4/1灰色砂　焼土を少量含む。
9. 5YR2/1黒色砂質土　5Y8/2灰白砂粒を多く含む。
10. 10YR1.7/1黒色砂質土　5Y8/2灰白砂粒を多く含む。
11. 5Y4/1灰色粘土　焼土を多量に含む。

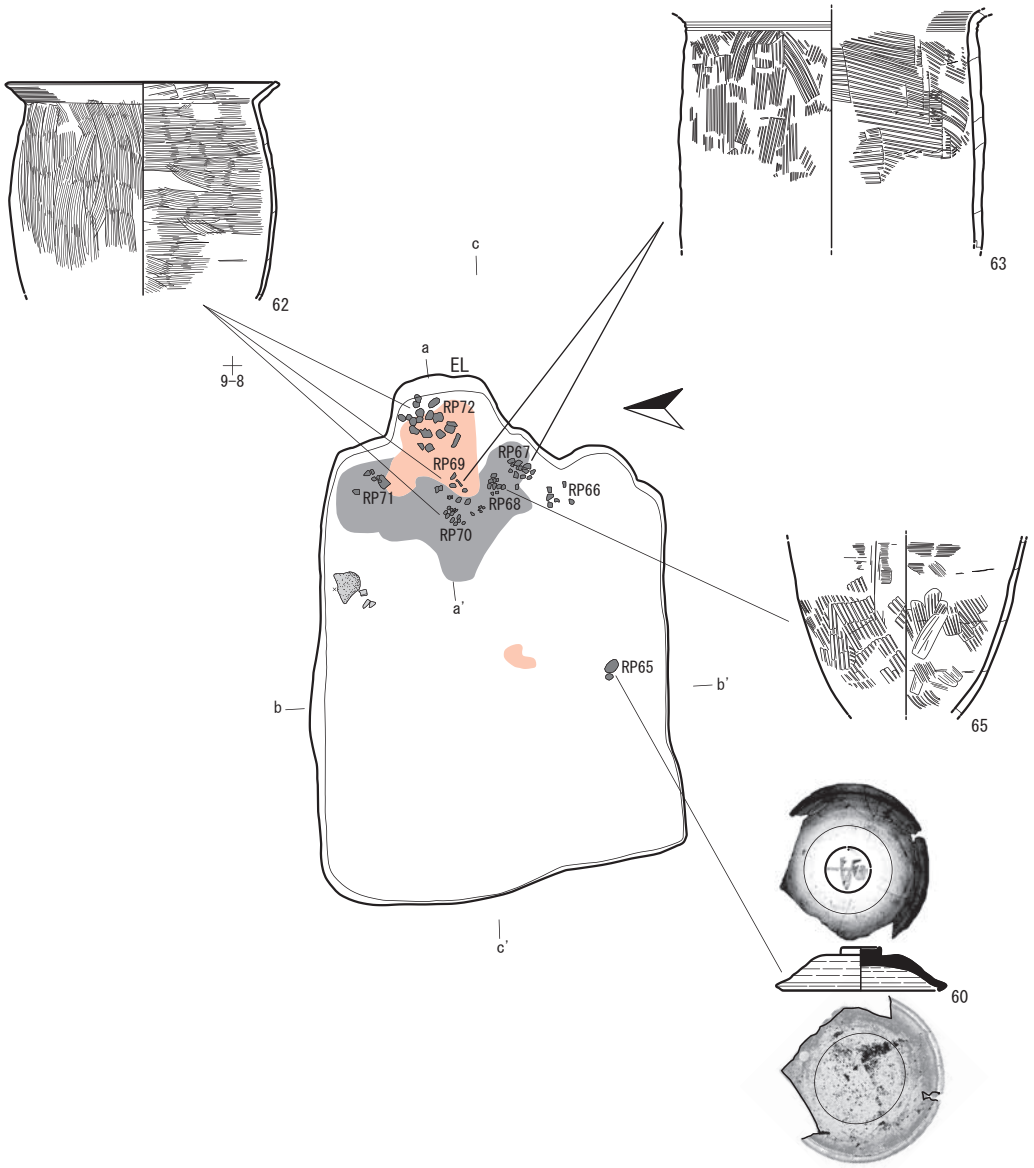


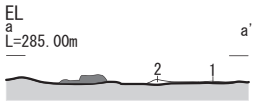
ST7

1. N1/2黒色土　7.5Y3/1オリーブ黒色砂質土、10Y7/1灰白砂粒を多量に含む。
2. N1/2黒色土　7.5Y3/1オリーブ黒色砂質土、10Y7/1灰白砂粒、木炭を多量に含む。
3. N1/2黒色土　7.5Y3/1オリーブ黒色砂質土、10Y7/1灰白砂粒を多量に含む。7.5Y5/2灰オリーブ砂質土のブロックが混じる。

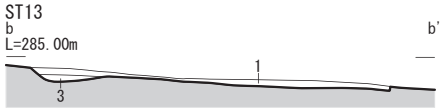
0　1m
1：60

第15図　ＳＴ７竪穴住居





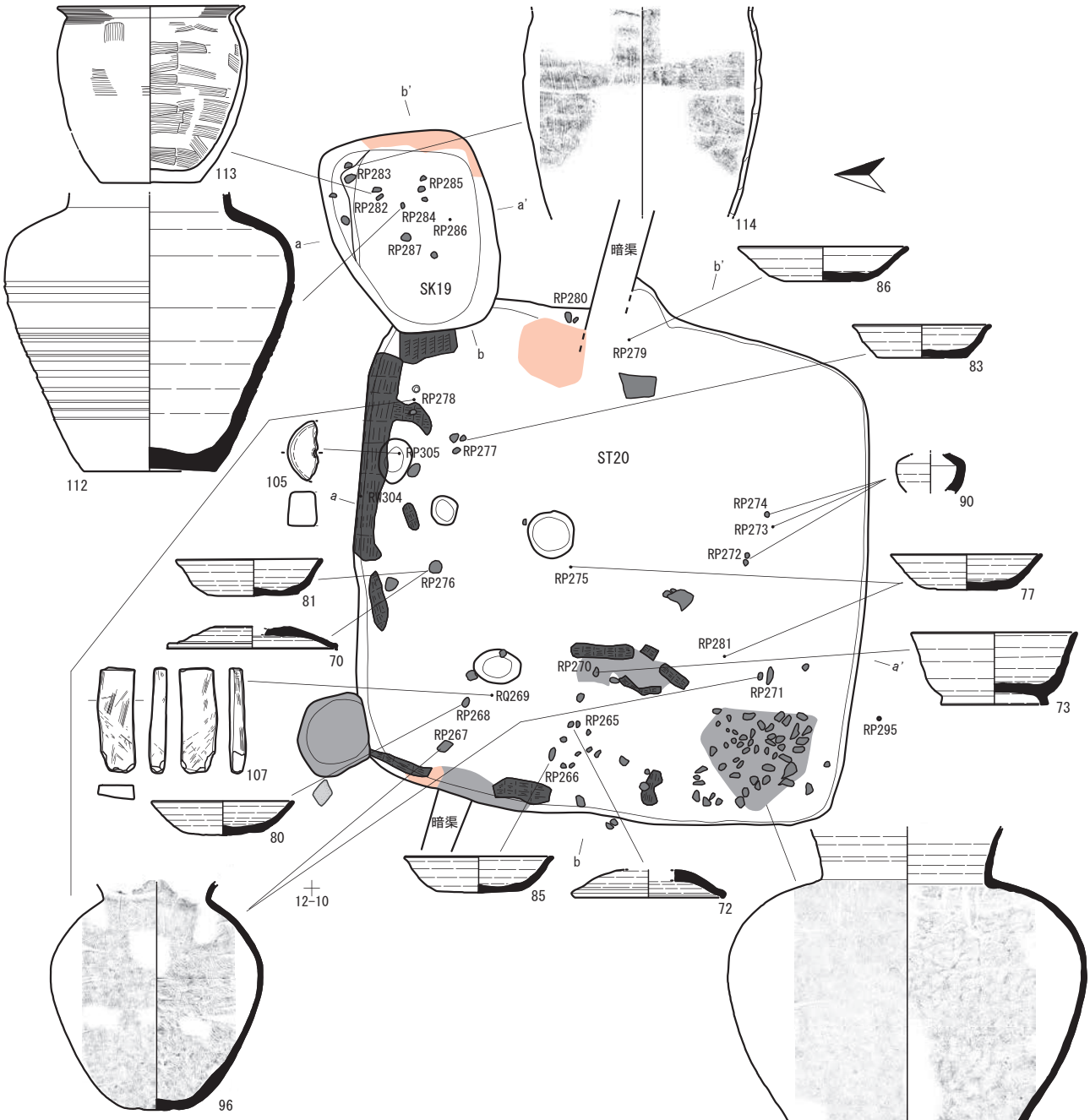
EL
1. 10YR4/1灰色粘土　焼土が混じる。木炭粒を少量含む。
2. 10YR4/1灰色粘土　焼土が混じる。木炭を多量に含む。

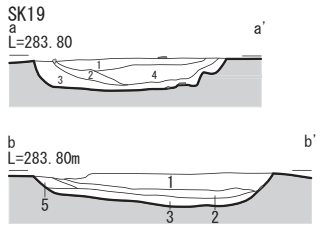


ST13
1. 5GY2/1オリーブ黒色砂質土　暗オリーブ灰色砂が混じる。木炭を多量に含む。
2. 7.5Y2/1黒色砂質土　焼土が多量に混じる。木炭を少量含む。
3. 5GY2/1オリーブ黒色砂質土　暗オリーブ灰色砂および灰色粘質土のブロックが混じる。

0　1m
1：60

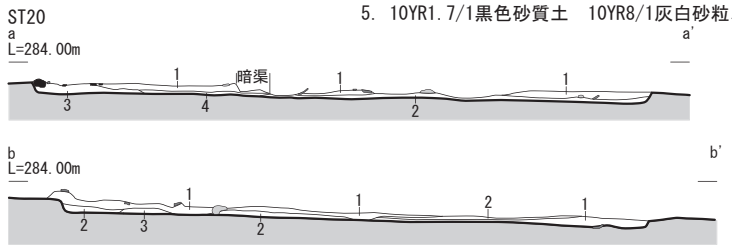
第16図　ＳＴ13竪穴住居





SK19

1. 10YR1.7/1黒色砂質土　10YR8/1灰白砂粒を多量に含む。木炭粒を含む。
2. 10YR1.7/1黒色砂質土　10YR8/1灰白砂粒および7.5Y4/2灰オリーブ砂質土ブロックを多量に含む。木炭粒を含む。
3. 7.5Y2/1黒色砂質土　10YR8/1灰白砂粒を含む。多量の木炭粒、少量の焼土粒を含む。
4. 10YR1.7/1黒色砂質土　10YR8/1灰白砂粒を多量に含む。7.5Y4/2灰オリーブ砂質土ブロックを含む。木炭粒を含む。
5. 10YR1.7/1黒色砂質土　10YR8/1灰白砂粒、木炭粒を含む。

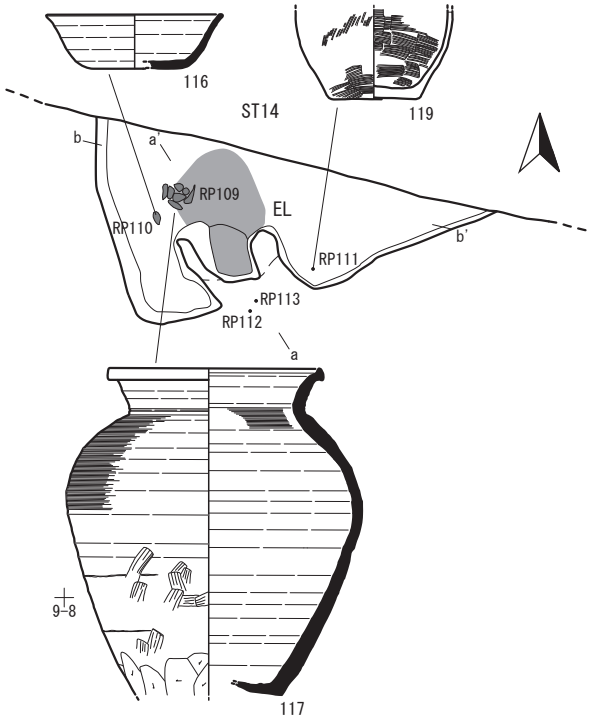


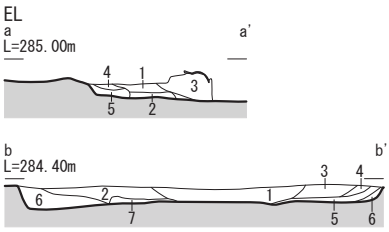
ST20

1. 10YR3/1黒褐色砂質土　木炭粒、焼土粒を多量に含む。
2. 10YR3/1黒褐色砂質土　木炭を多量に含む。
3. 10YR3/1黒褐色砂質土　木炭、焼土を多量に含む。
4. 10YR3/1黒褐色砂質土　木炭を含む。

0　1m
1：60

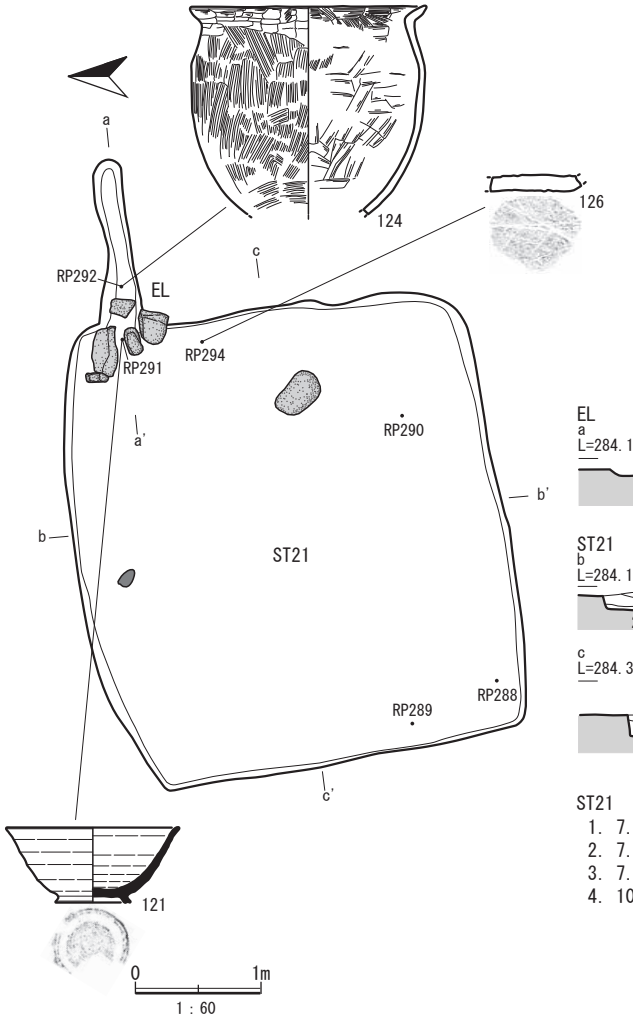
第17図　ＳＴ20竪穴住居、ＳＫ19土坑

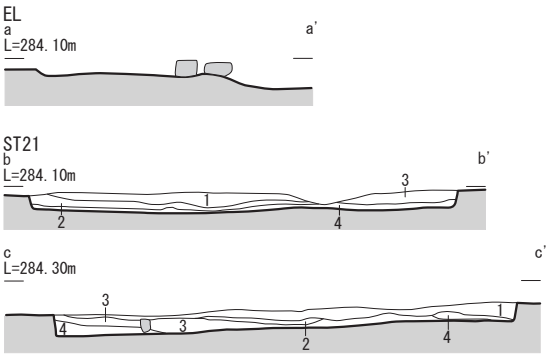




EL
1. 5Y2/1黒色砂質土　灰オリーブ粘土粒と木炭粒を少量含む。
2. 5Y2/1黒色砂質土　灰オリーブ粘土粒と木炭粒を多量に含む。
3. 5Y3/1オリーブ黒色砂質土　灰白色砂が多量に混じる。
4. 5Y2/1黒色砂質土　灰オリーブ粘土、焼土が多量に混じる。
5. 5Y2/1黒色砂質土　灰オリーブ粘土ブロック、焼土、木炭を多量に含む。

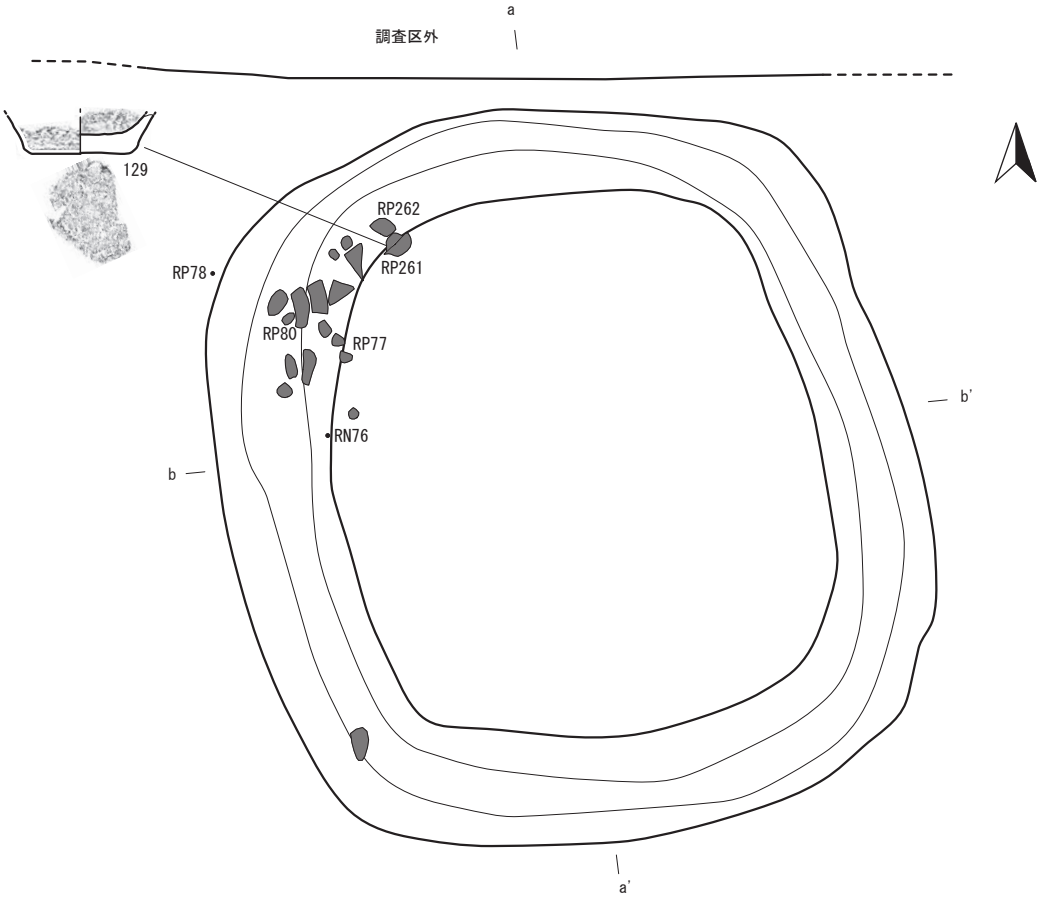
ST14
1. 5Y2/1黒色砂質土　多量の灰白色砂粒、少量の灰色砂が混じる。木炭粒を少量含む。
2. 5Y2/1黒色砂質土　灰白色砂粒、灰色砂が多量に混じる。木炭粒を少量含む。
3. 5Y2/1黒色砂質土　灰白色砂粒が多量に混じる。灰色砂が混じる。木炭粒を少量含む。
4. 5Y4/1灰色砂　灰白色砂粒が多量に混じる。
5. 5Y2/1黒色砂質土　灰白色砂粒が多量に混じる。木炭粒を少量含む。
6. 5Y3/2オリーブ黒色砂質土
7. 5Y3/2オリーブ黒色砂質土　木炭を多量に含む。

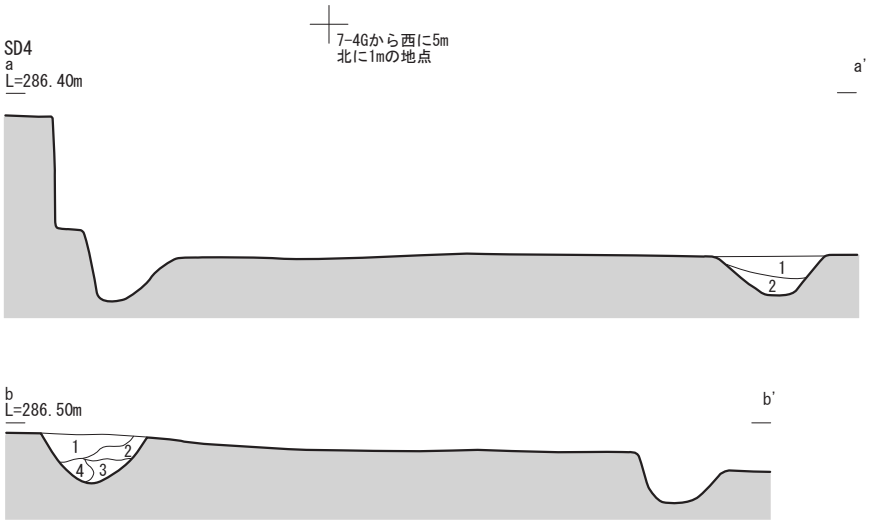




ST21
1. 7.5Y2/1黒色シルト　暗オリーブ灰色砂が多量に混じる。炭化物を多量に含む。
2. 7.5Y2/1黒色砂質土　炭化物を多量に含む。
3. 7.5Y2/1黒色砂質土　暗オリーブ灰色砂が多量に混じる。炭化物を多量に含む。
4. 10Y3/1オリーブ黒色砂質土

第18図　ＳＴ14・21竪穴住居

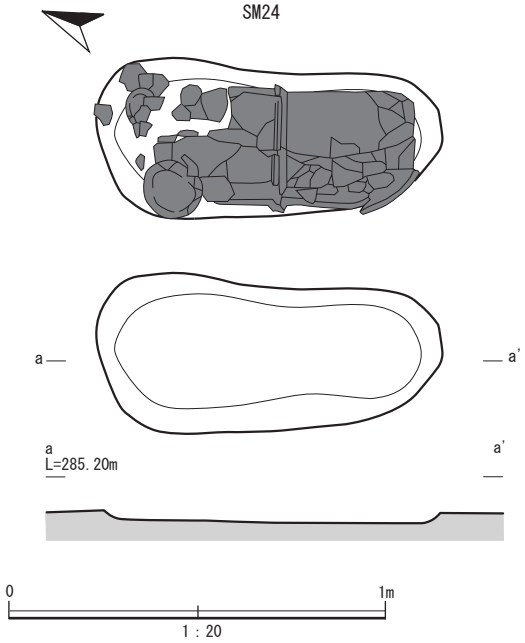


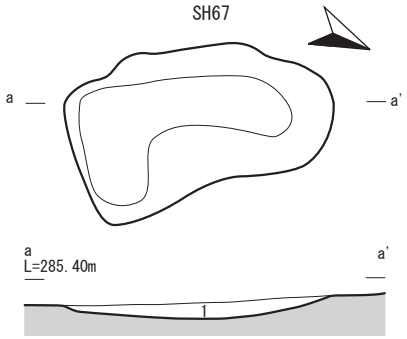


SD4
1. 10YR1.7/1黒色砂質土　灰白砂粒を多く含む。固く締まる。
2. 10YR1.7/1黒色砂質土　10YR4/1褐灰色砂を多量に含む。
3. 10YR4/4褐色砂、10YR3/1黒褐色砂の混合　周溝SD4-1を僅かに含む。
4. 10YR1.7/1黒色砂質土　10YR4/1褐灰色砂を含む。

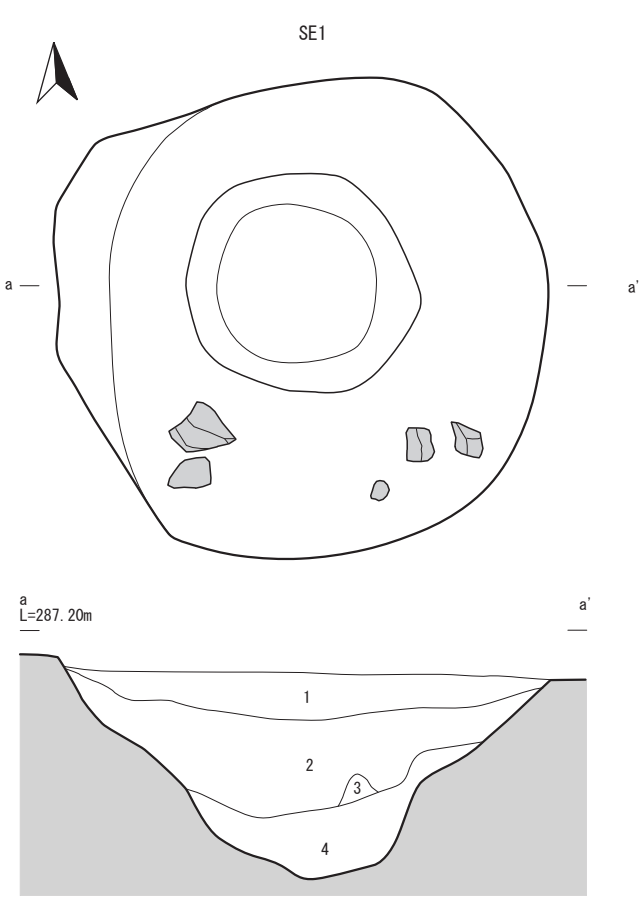
0　1m
1：40

第19図　ＳＤ４周溝

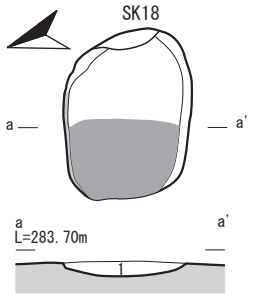




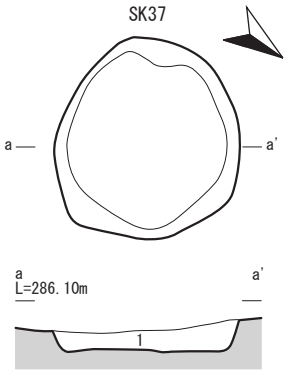
1. 10YR1.7/1黒色シルト 褐色および黄褐色粘質シルトがブロック状に混じる。骨片を点状に含む。全体に軟らかく、しまりがない。



1. 10YR2/1黒色土　10YR8/6明黄褐色砂粒、10YR8/2灰白砂粒が多量に混じる。
2. 10YR2/1黒色土　10YR4/2灰黄褐色砂のブロックを多量に含む。
3. 10YR6/6明黄褐色粘土ブロック
4. 10YR2/1黒色土　10YR6/2灰黄褐色砂、7.5Y7/1灰白砂質土が混じる。クルミ、木片出土。



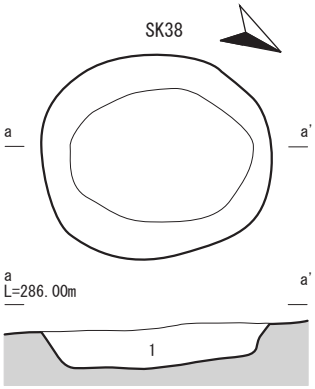
1. 5Y2/2オリーブ黒色砂 木炭を少量含む。



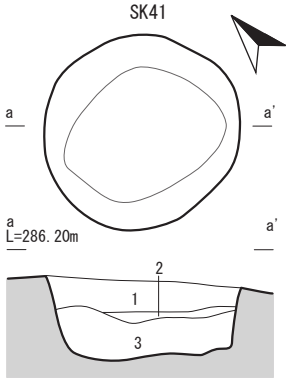
1. 10YR3/2黒褐色シルト 少量の黒色シルトブロック、微量の炭化粒を含む。

0　1m
1：40

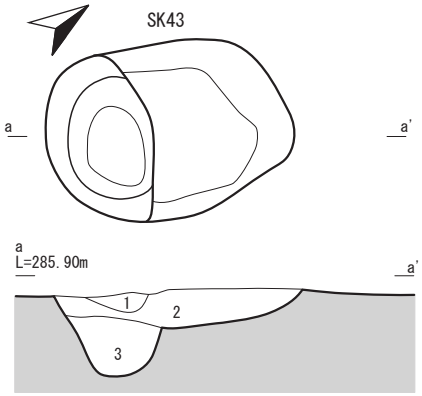
第20図　ＳＭ24祭祀遺構、ＳＨ67墓坑、ＳＥ1井戸、ＳＫ18・37土坑



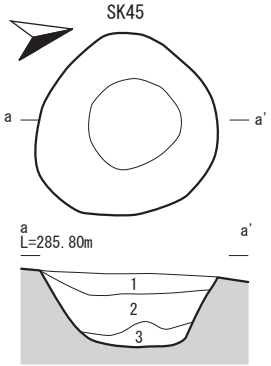
1. 10YR2/2黒褐色シルト 黒色シルトを斑状に少量含む。微量の炭化粒を点状に含む。



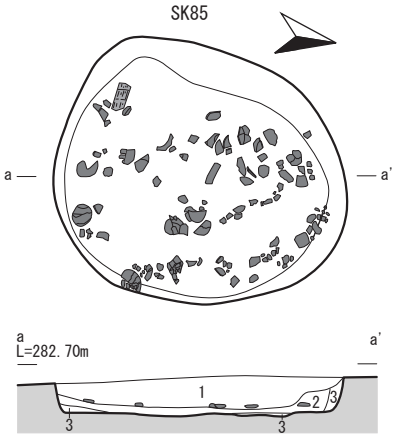
1. 10YR3/1黒褐色シルト 黒色シルトブロックが混じる含む。微量の炭化粒を点状に含む。
2. 10YR2/1黒色粘質シルト　黒褐色シルトが少量混じる。多量の炭化物を斑状に含む。
3. 10YR3/2黒褐色砂質シルト　黒褐色シルトを点状に含む。褐色微砂が少量混じる。



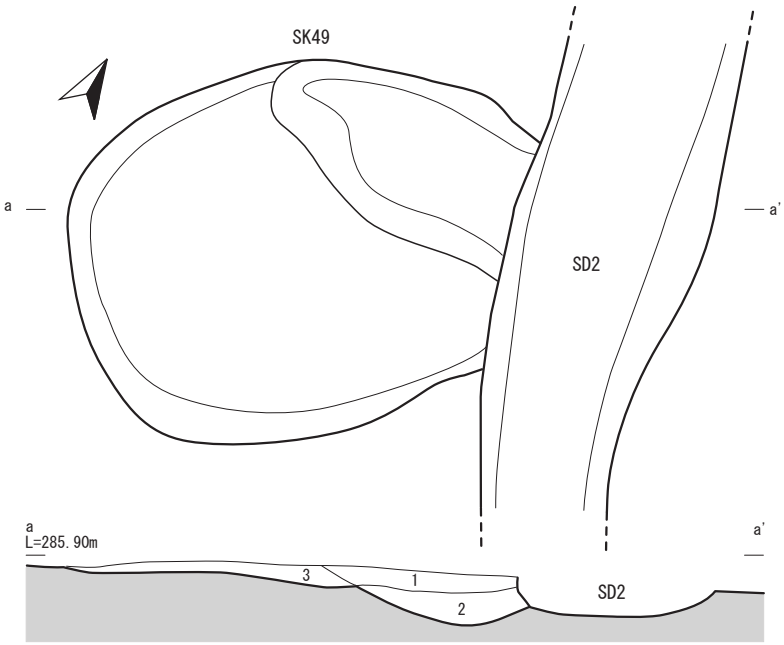
1. 7.5Y2/2オリーブ黒色シルト 少量の炭化粒を点状に含む。
2. 10YR3/2黒褐色粘質シルト　黒色シルトのブロック、微量の炭化粒を含む。
3. 10YR2/2黒褐色粘質シルト 黒色シルトを斑状に含む。微量の炭化粒を含む。



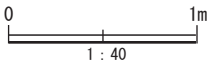
1. 10YR2/1黒色シルト　褐色シルトを斑状に多量に含む。
2. 10YR1.7/1黒色粘質シルト　微礫が混じる。微量の炭化粒を含む。
3. 10YR3/2黒褐色シルト　固く締まる。炭化粒を含む。



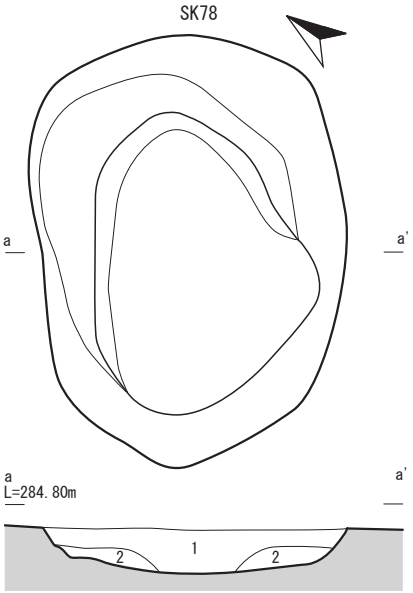
1. 2.5YR2/1黒色粘質シルト　明黄褐色粘土がブロック状に、灰色細砂が点状に混じる。炭化物を帯状に含む。土器を含む。全体に固くしまる。
2. 7.5Y2/1黒色シルト　少量の明黄褐色粘土が点状に混じる。下部に炭化物を帯状に含む。
3. N2/0黒色粘質シルト　微量の明黄褐色粘土が点状に混じる。



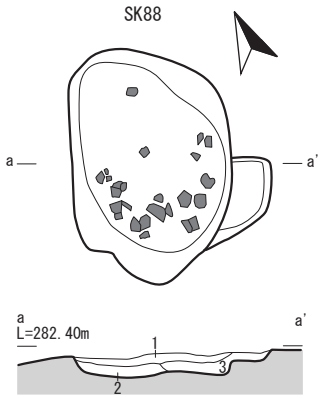
1. 7.5YR3/1黒褐色シルト　褐色シルトのブロック、土器片を含む。
2. 10YR2/1黒色粘質シルト　褐色シルトが点状に少量混じる。微量の微礫を含む。
3. 10YR3/3暗褐色シルト　少量の黒色シルトのブロック、土器片を含む。



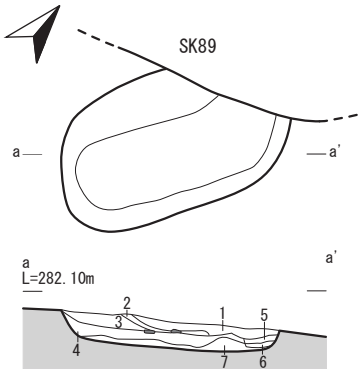
第21図　ＳＫ38・41・43・45・49・85土坑



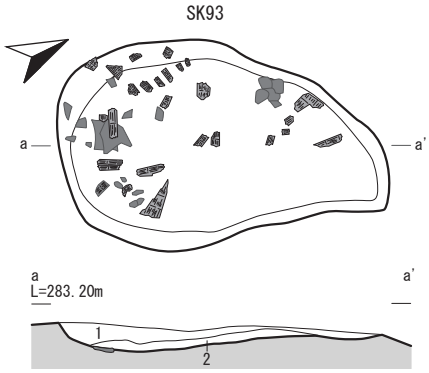
1. 7.5YR3/3暗褐色粗砂　多量の黒褐色シルトが帯状に混じる。
2. 10YR4/2灰黄褐色細砂　黒褐色シルトが斑状に混じる。暗褐色粗砂のブロックを含む。



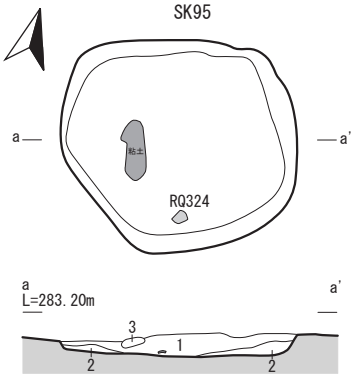
1. 5YR3/2暗赤褐色シルト　微量の焼土粒を点状に含む。炭化粒、炭化物を含む。固くしまる。
2. 5YR2/2黒褐色シルト　褐灰色シルトが斑状に混じる。固くしまる。
3. 5YR2/3極暗赤褐色シルト　褐灰色シルトが斑状に混じる。少量の炭化粒を点状に含む。固くしまる。



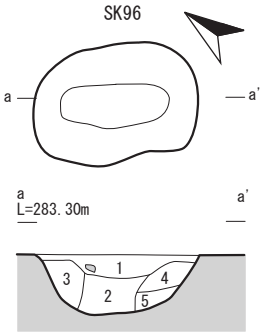
1. 5Y2/2オリーブ黒色粘土　微砂が混じる。下部に炭化物を帯状に含む。固くしまる。
2. 10YR3/4暗褐色粘質シルト　少量の炭化粒を帯状に含む。
3. 10YR3/1黒褐色シルト　褐色シルトが斑状に混じる。炭化物のブロックを含む。
4. 5Y3/1オリーブ黒色砂混じりシルト　褐色粗砂が斑状に混じる。固くしまる。
5. 5Y3/2オリーブ黒色シルト　微量の炭化粒を点状にが含む。固くしまる。
6. 5Y2/2オリーブ黒色シルト　褐色シルトが帯状に少量混じる。多量の炭化物粒を帯状に含む。
7. 7.5Y2/1黒色粘土　微量の酸化土を含む。固くしまる。



1. 5Y2/1黒色シルト　褐色シルトが点状に混じる。少量の炭化物を点状に含む。
2. N1.5/0黒色シルト　多量の炭化物を含む炭化物層。微量の褐色シルトが点状に混じる。



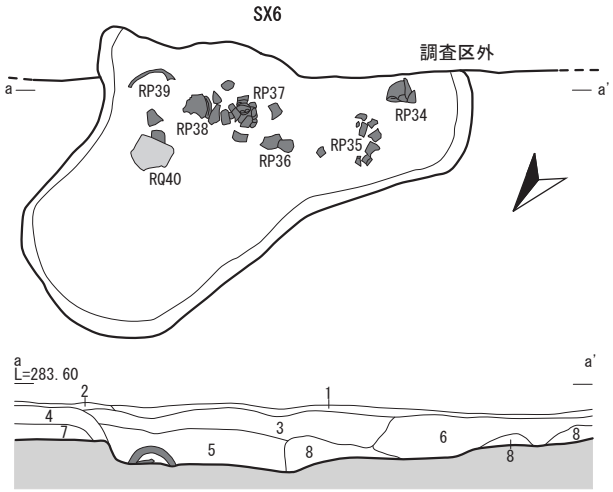
1. 5Y2/1黒色シルト　明褐色シルトが斑状に混じる。
2. 2.5Y3/1黒褐色砂混じりシルト　多量の粗砂が混じる。
3. 2.5Y6/1黄灰色粘土

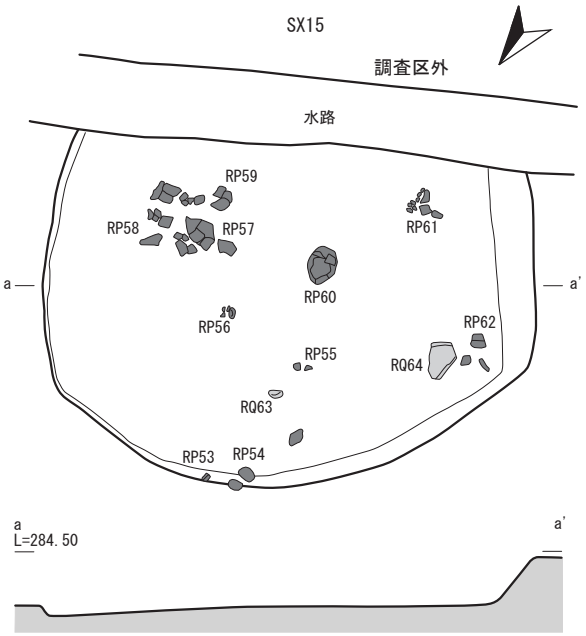


1. 2.5Y2/1黒色シルト　褐色シルトが点状に混じる。粗砂、土器を含む。
2. 10YR2/1黒色シルト　少量の灰色シルト、褐色シルトが点状に混じる。
3. 5Y3/1オリーブ黒色細砂
4. 7.5Y3/1オリーブ黒色細砂　1を斑状に少量含む。
5. 5Y2/1黒色砂混じりシルト　2を点状に少量含む。

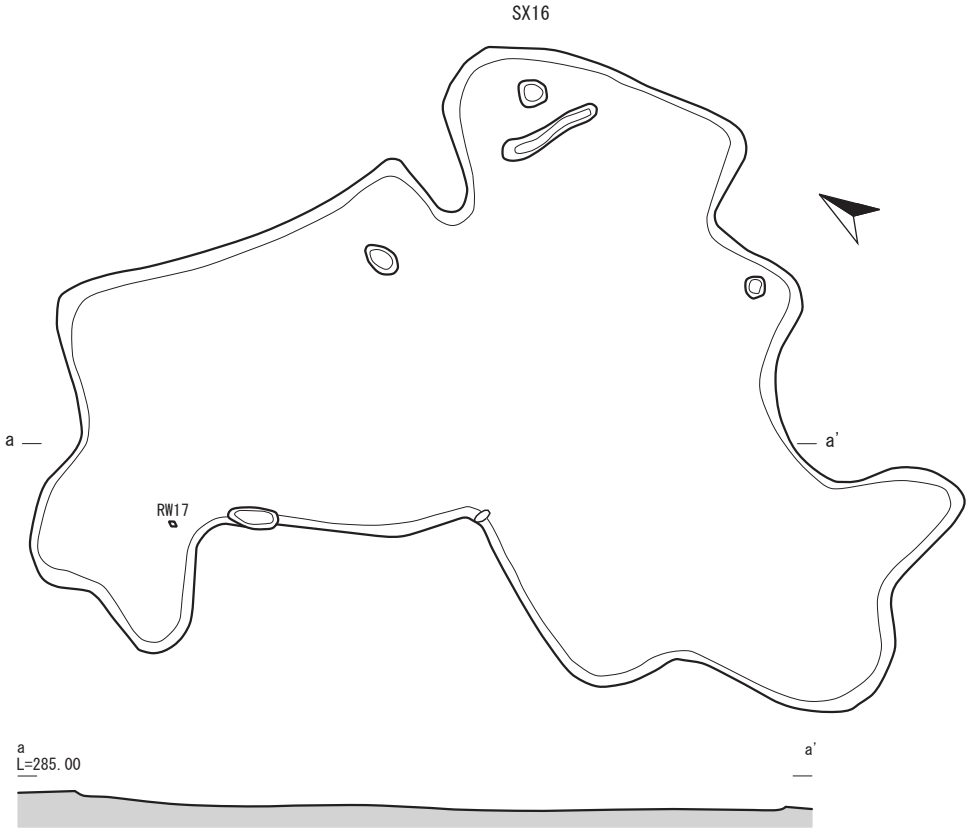
0　1m
1：40

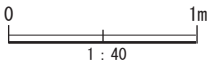
第22図　ＳＫ78・88・89・93・95・96土坑



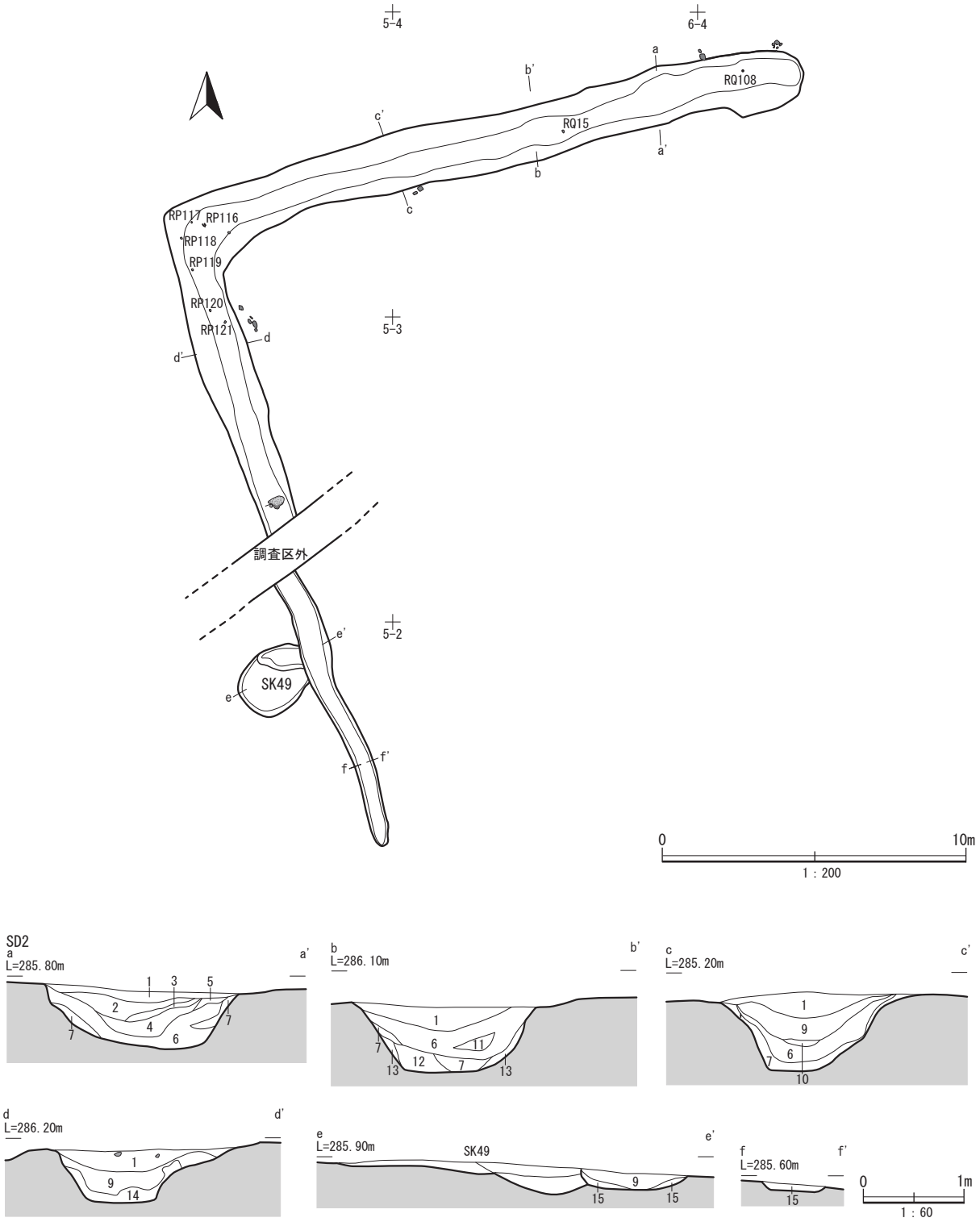


1. N1.5/0黒色土　明褐色砂粒が混じる。土器片を含む。
2. N1.5/0黒色土　明褐色砂粒が混じる。褐色砂ブロック、土器片を含む。
3. 2.5Y2/1黒色砂質土　オリーブ黒色砂が混じる。
4. 2.5Y2/1黒色砂質土　多量のオリーブ黒色砂が混じる。
5. 2.5Y2/1黒色砂質シルト　微量のオリーブ黒色砂が混じる。灰色シルトブロック、土器片、炭化物を含む。
6. 2.5Y2/1黒色砂質土　少量のオリーブ黒色砂が混じる。土器片を含む。
7. 2.5Y2/1黒色砂質土　少量のオリーブ黒色砂が混じる。固くしまる。
8. 5Y4/2灰オリーブ色砂　灰色シルトが混じる。





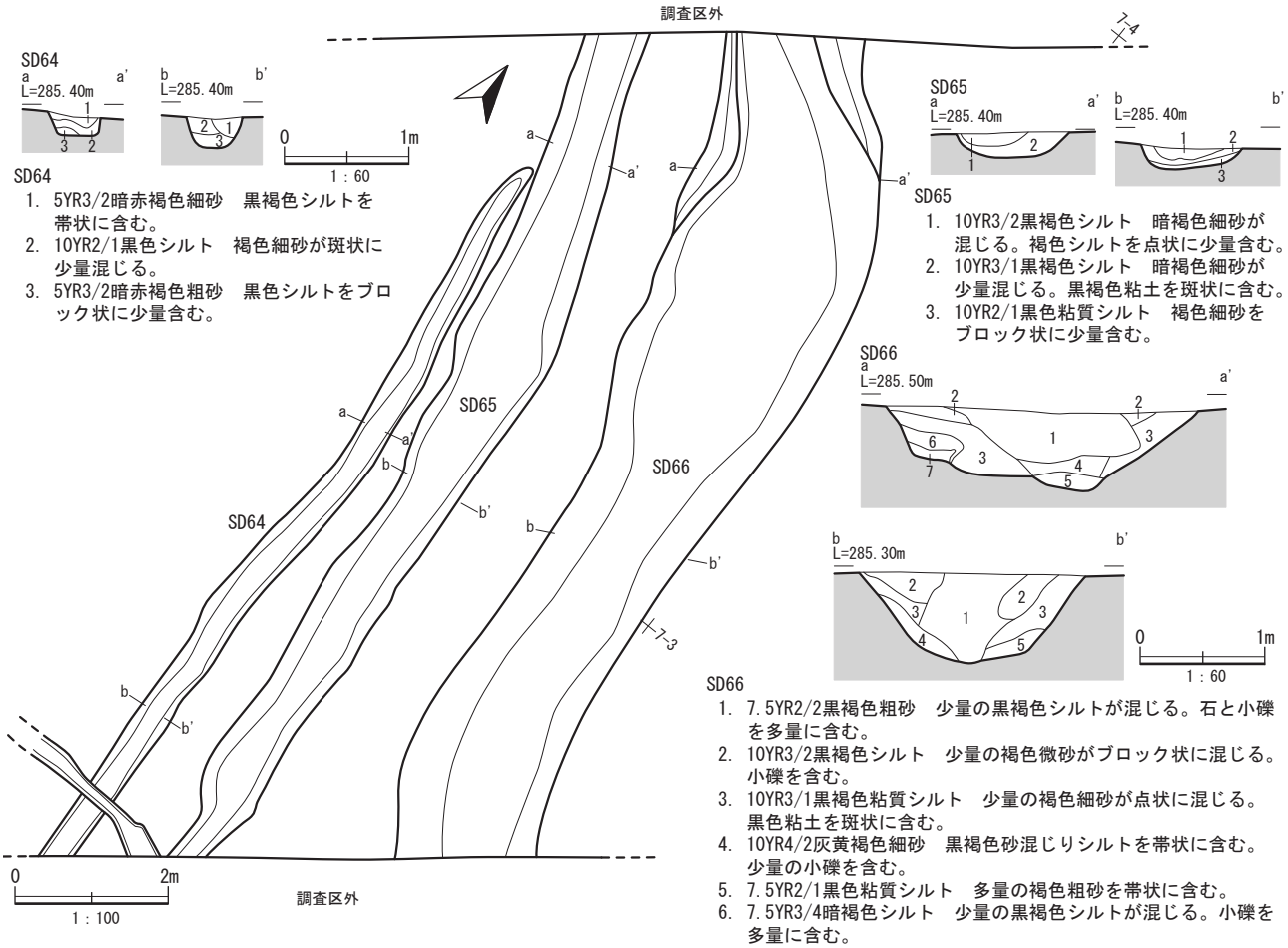
第23図　ＳＸ６・15・16性格不明遺構

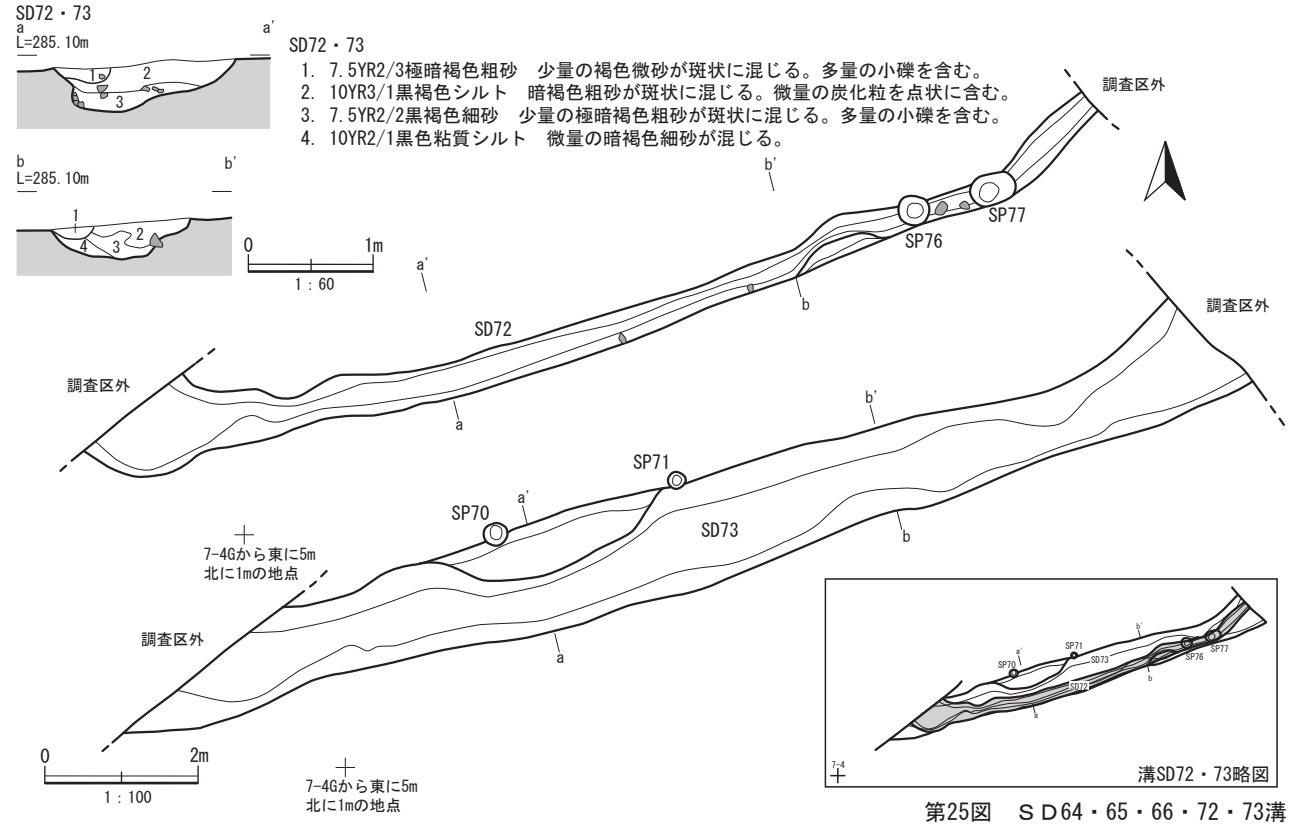


SD2

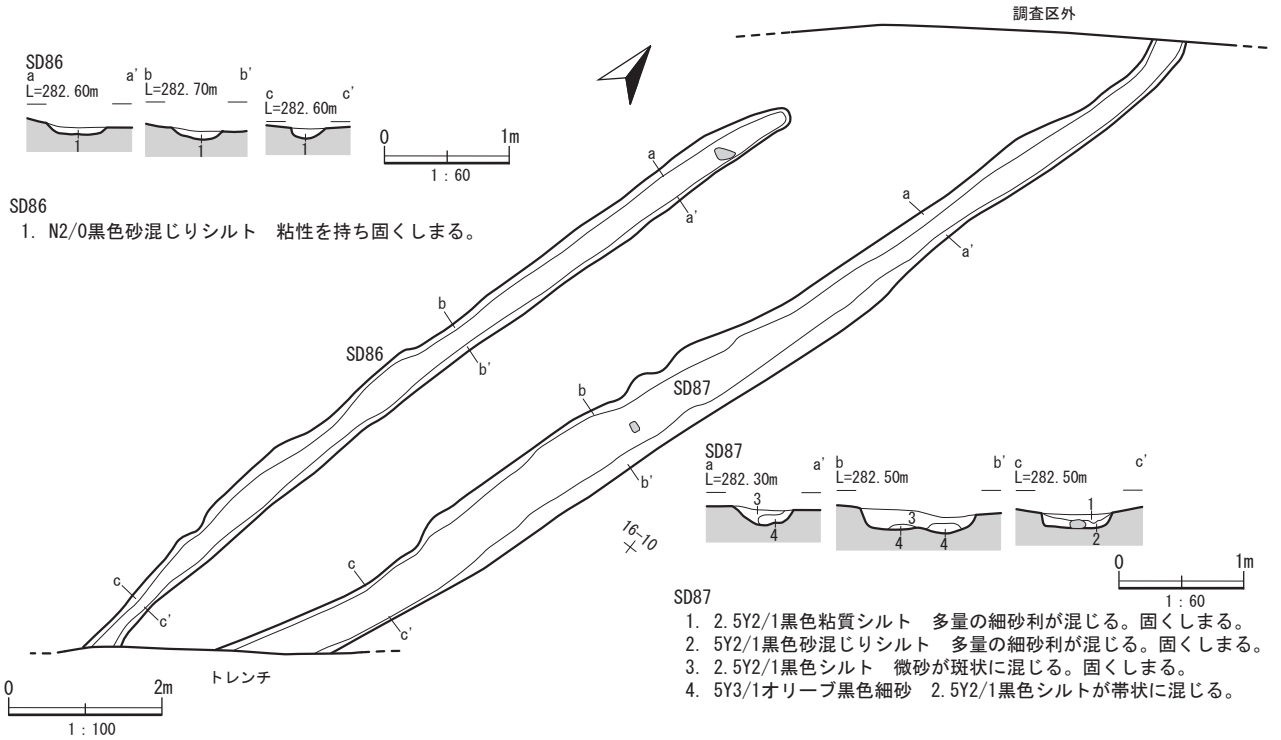
1. 10YR2/2黒褐色砂質土　明黄褐色および灰白砂粒を多量に含む。
2. 5Y2/1黒色砂質土　オリーブ黒色砂、暗褐色粗砂を多量に含む。
3. 5Y2/1黒色砂　炭化物を多量に含む。
4. 10YR3/3暗褐色粗砂　黒色砂を少量含む。
5. 10YR2/2黒褐色砂質土　明黄褐色砂および灰白砂粒を多量に含む。黒色砂を含む。
6. 5Y2/1黒色砂質土　灰白砂粒を多量に含む。木炭粒を含む。
7. 5Y4/1灰色砂質土　6が少量混じる。
8. 5Y4/1灰色砂質土　固くしまる。
9. 10YR2/1黒色砂質土　明黄褐色および灰白砂粒を少量含む。
10. 10YR2/2黒褐色砂
11. 10YR2/2黒褐色砂　灰白砂を多量に含む。
12. 5Y2/1黒色砂質土　灰白砂粒を多量に含む。木片を含む。
13. 5Y4/1灰色粘質シルト
14. 10YR4/4褐色砂
15. 7.5YR1.7/1黒色粘質シルト　黒色シルトを斑状に少量含む。

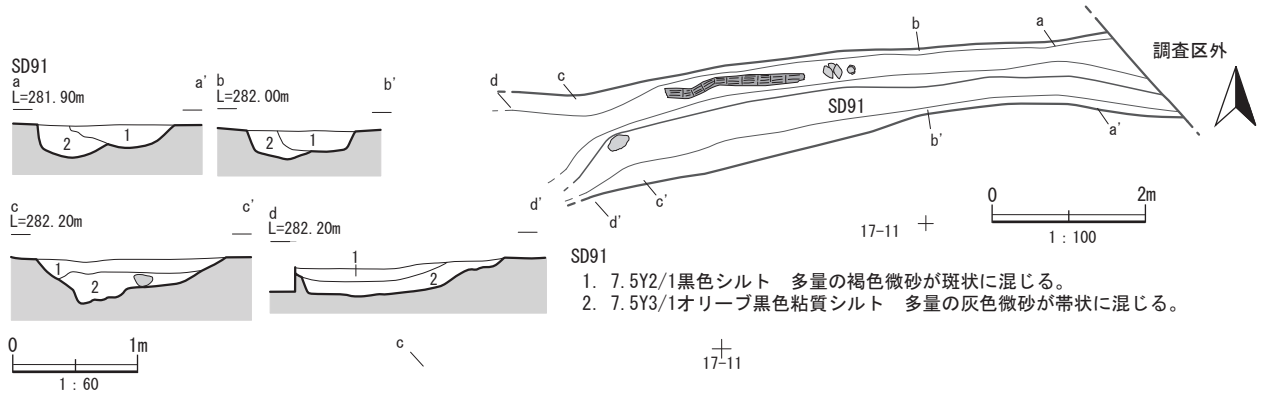
第24図　ＳＤ２溝

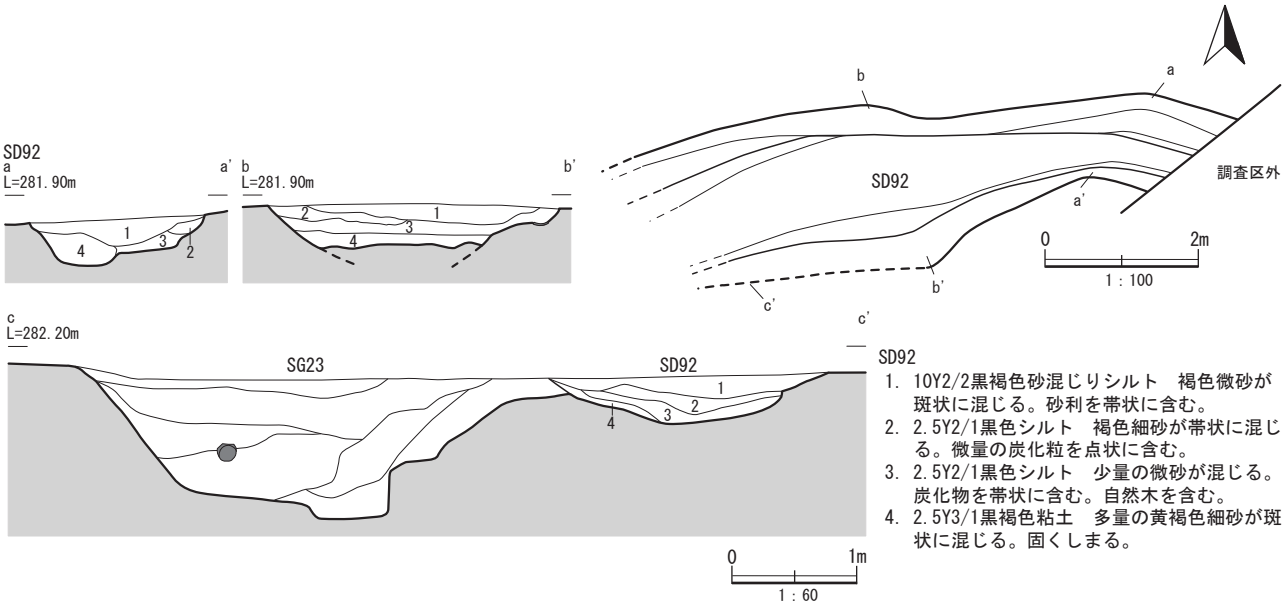




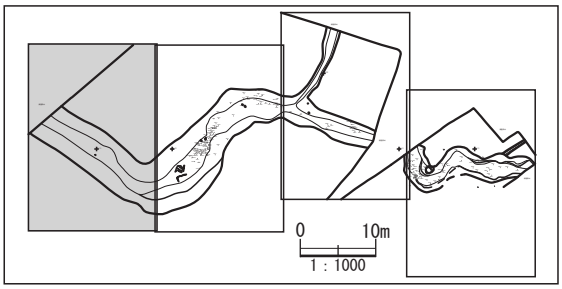
第25図　ＳＤ64・65・66・72・73溝



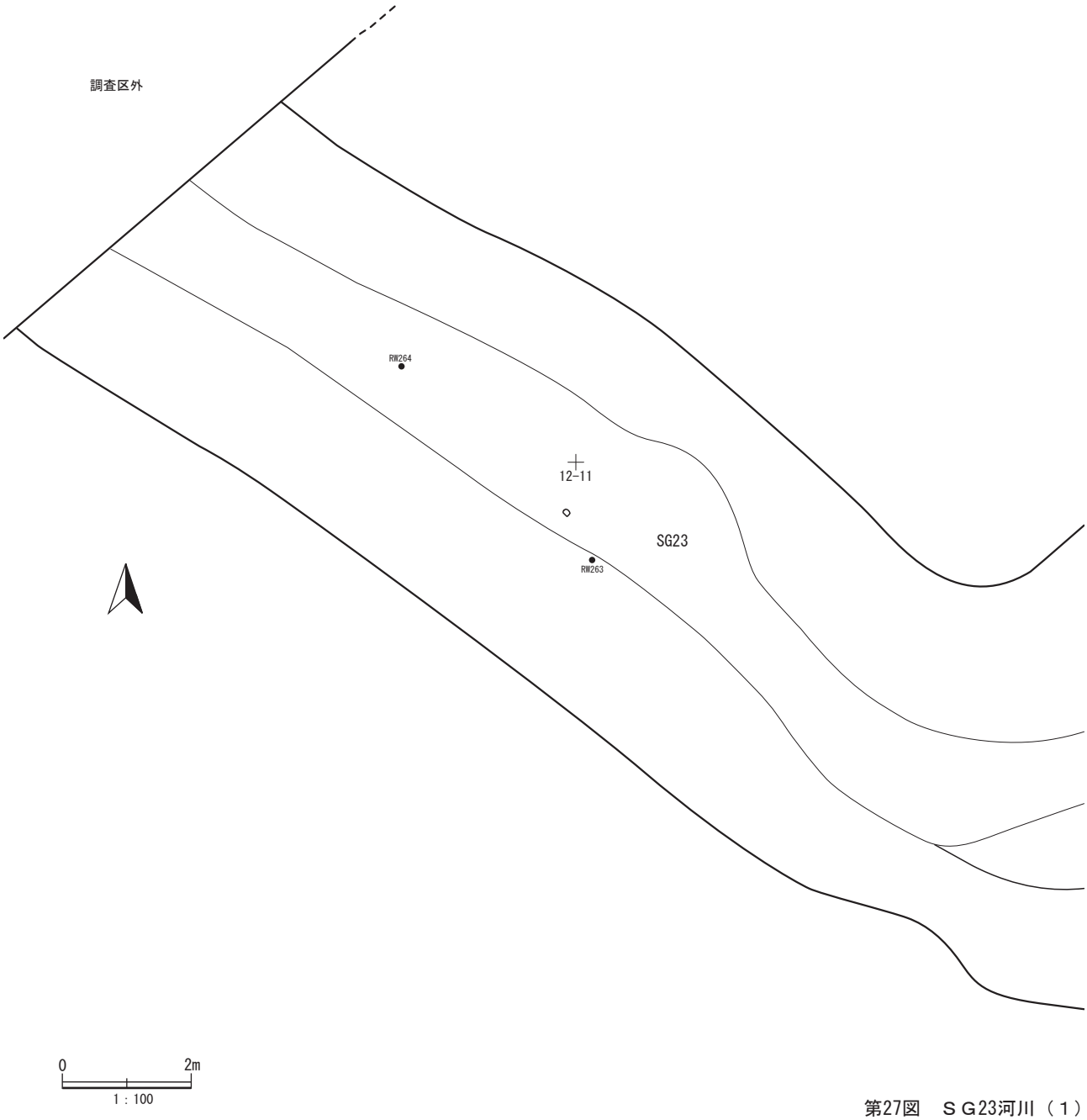




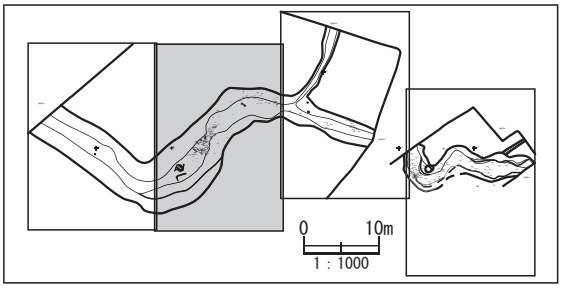
第26図　ＳＤ86・87・91・92溝



SG23河川区割り図

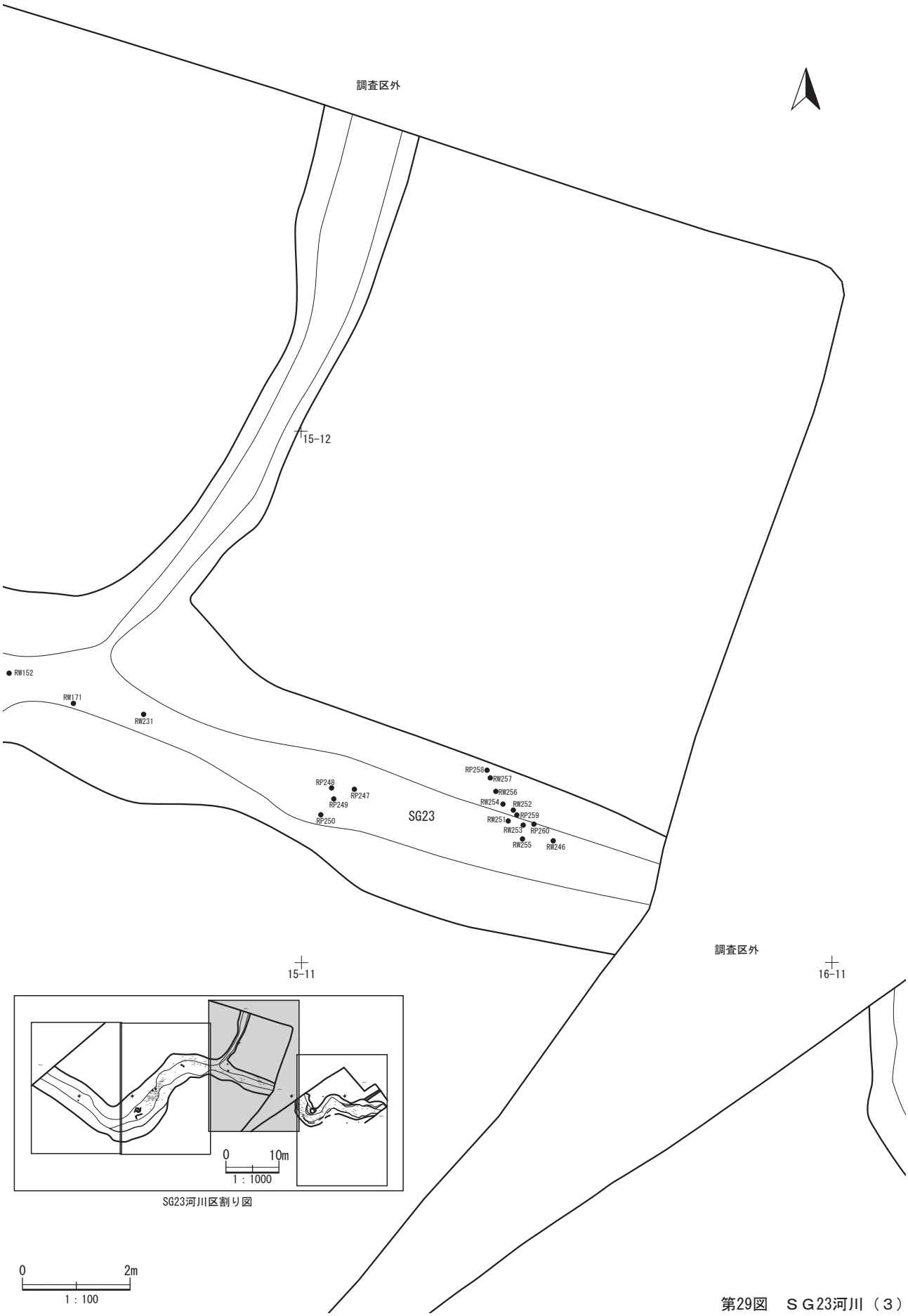


第27図　ＳＧ23河川（１）

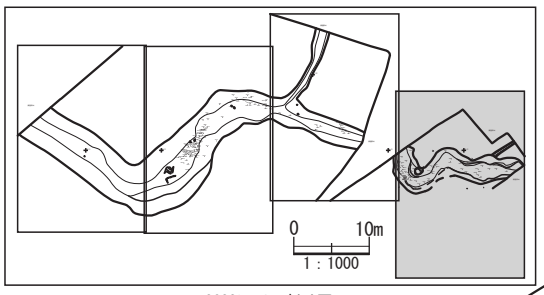


SG23河川区割り図

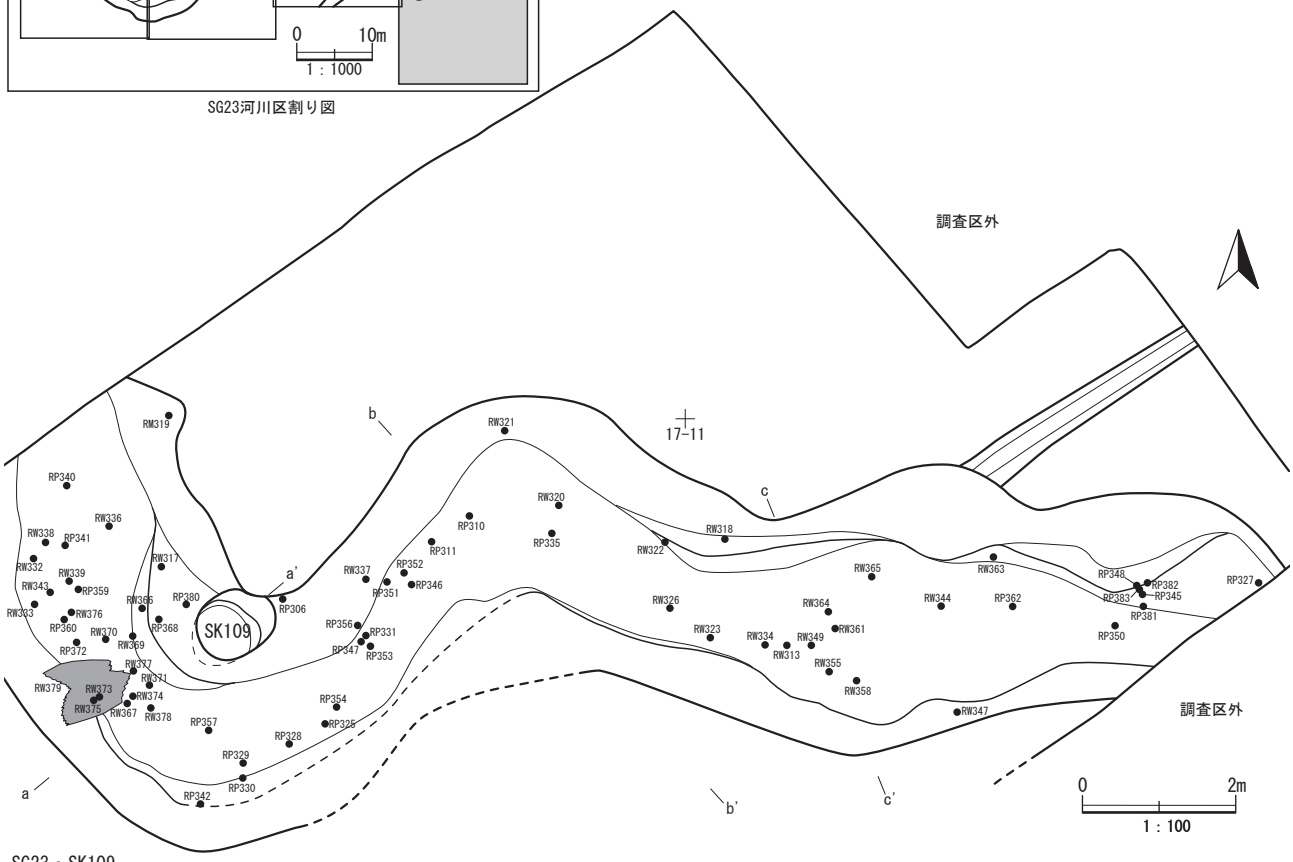
第28図　ＳＧ23河川（２）

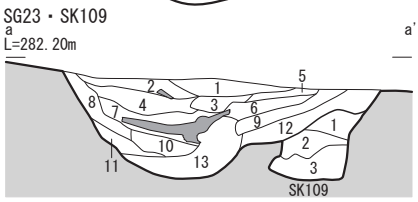


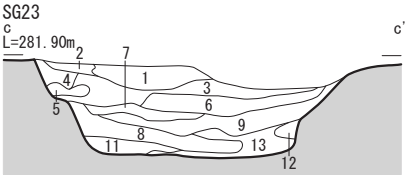
第29図　ＳＧ23河川（３）

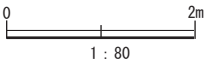


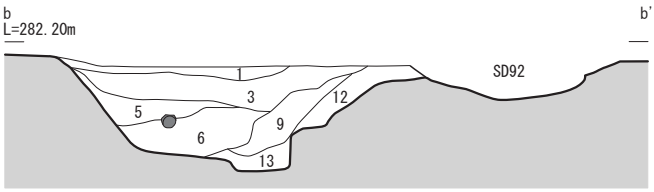
SG23河川区割り図











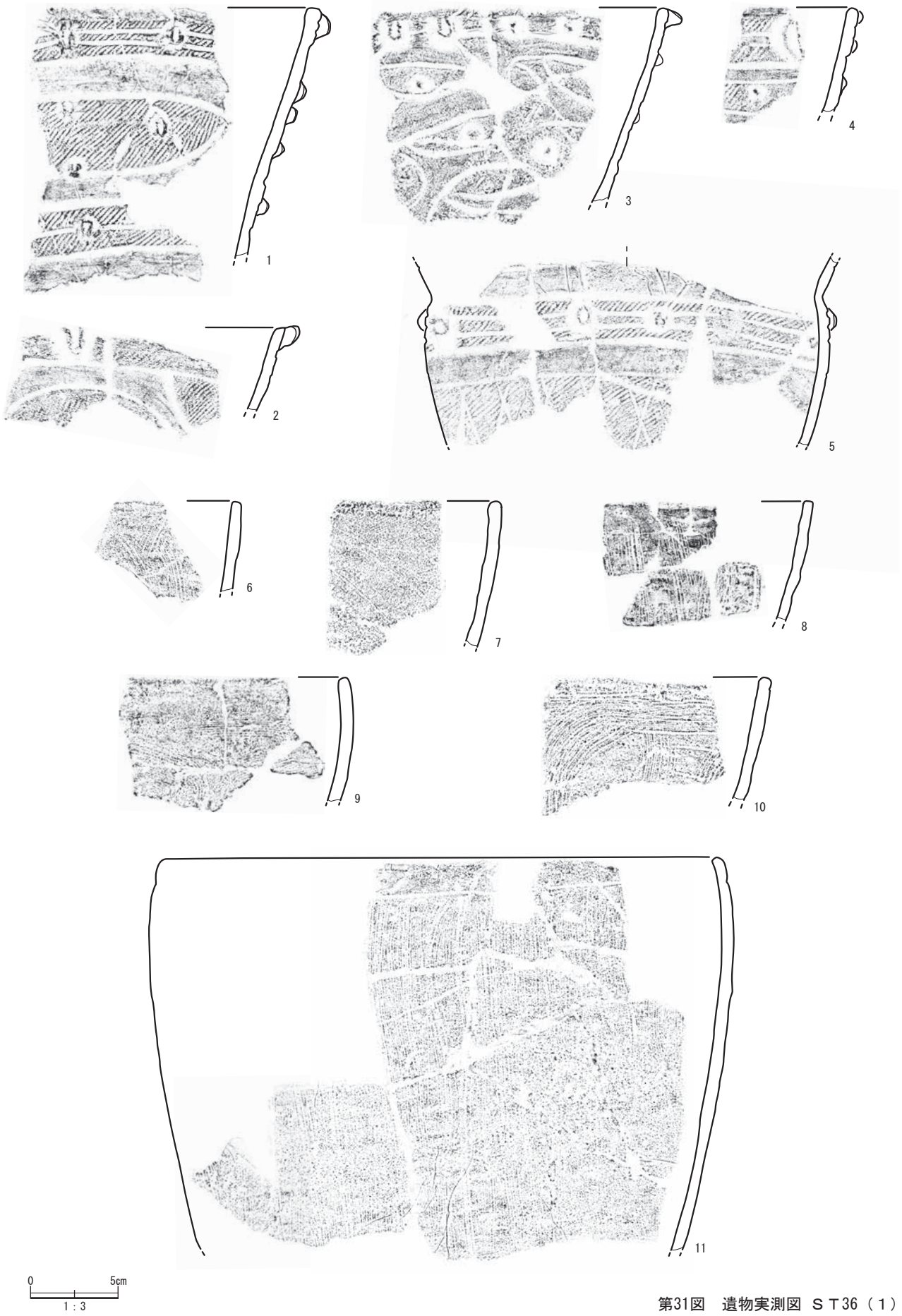
SK109

1. 5Y4/2灰オリーブ色砂混じり粘土　黒褐色粘土が斑状に混じる。微礫を全体に含む。固くしまる。
2. 2.5Y3/1黒褐色粘土　褐色細砂が帯状に混じる。オリーブ粘土を斑状に含む。固くしまる。
3. 7.5Y4/1灰色粗砂　少量の褐色粗砂が混じる。褐色細砂を含む黒褐色粘土の大ブロックを含む。

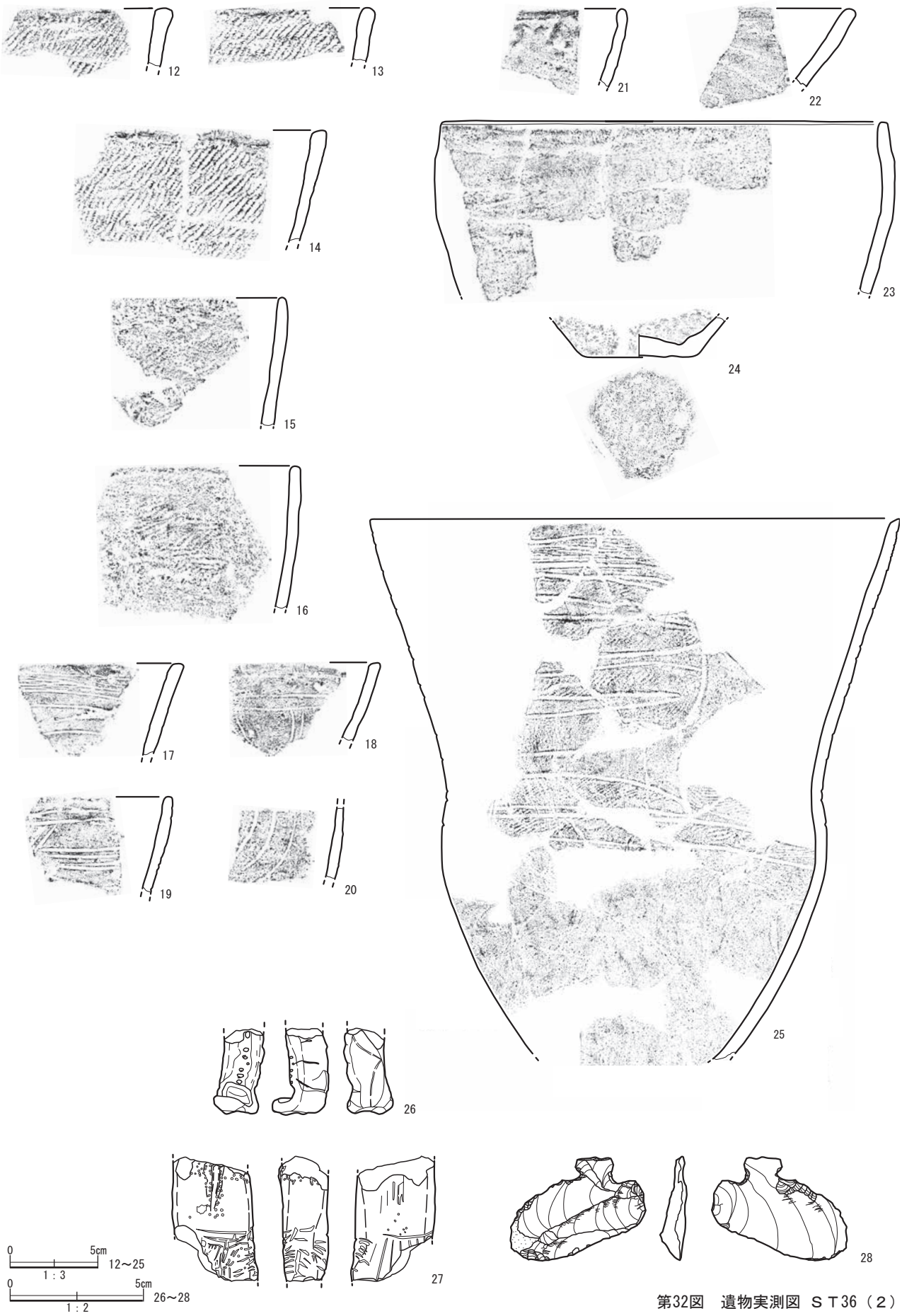
SG23

1. 2.5Y4/2明灰黄色細砂　灰色粘質シルトが帯状に混じる。多量の細礫を含む。
2. 2.5Y4/1黄灰色粗砂　多量の灰色粘質シルトが帯状に混じる。木片、細礫を含む。炭化物を少量含む。
3. 10YR1.7/1 黒色シルト　微量の炭化粒を点状に含む。木片を含む。
4. 5Y3/2オリーブ黒色粗砂　灰色粘質シルトが帯状に混じる。炭化物を点状に含む。
5. 5Y3/1オリーブ黒色シルト　灰オリーブ色シルトが帯状に混じる。少量の褐色細砂が混じる。
6. 5Y3/1オリーブ黒色細砂　褐色細砂と灰色粘質シルトが帯状に混じる。炭化物、木片を点状に含む。
7. 7.5Y3/1オリーブ黒色粗砂混じりシルト　多量の褐色砂が混じる。炭化物、木片を点状に含む。
8. 5Y2/1黒色シルト質粘土　少量の褐色細砂が混じる。多量の炭化粒を点状に含む。固くしまる。
9. 10YR2/1黒色粘質シルト　黄褐色砂が斑状に混じる。炭化物、木片を含む。
10. 5Y4/2灰オリーブ色粗砂　少量のオリーブ黒色シルトが斑状に混じる。微細礫を含む。
11. 5Y2/1黒色粘質シルト　灰色粗砂と褐色微砂が斑状に混じる。少量の炭化木材を点状に含む。
12. 2.5Y2/1黒色粘土　灰色微砂が混じる。炭化物のブロックを含む。微礫を含む。固くしまる
13. 5Y2/2オリーブ黒色粗砂　黒褐色粘土のブロックを含む。少量の小礫を含む。

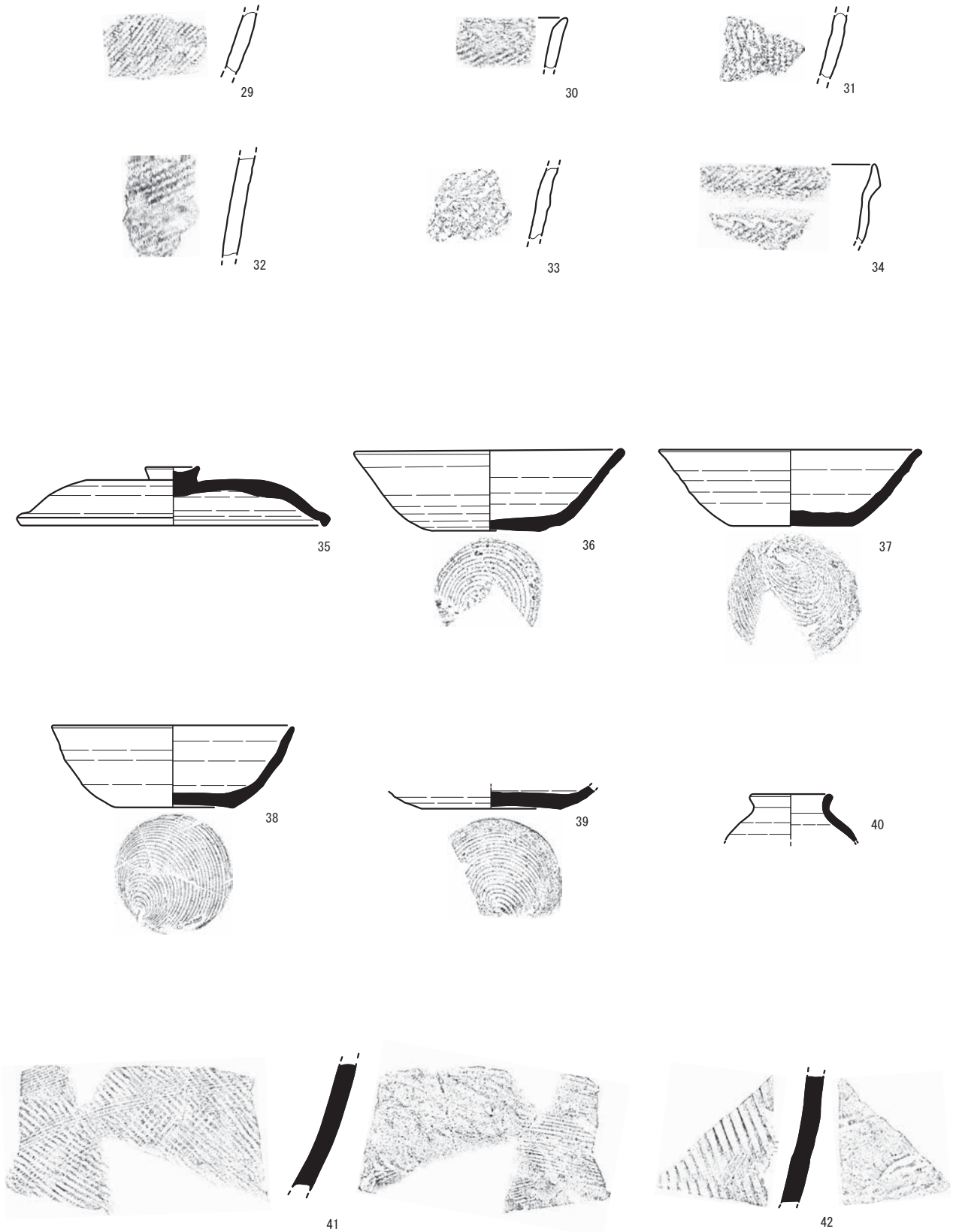
第30図　ＳＧ23河川（４）、ＳＫ109土坑



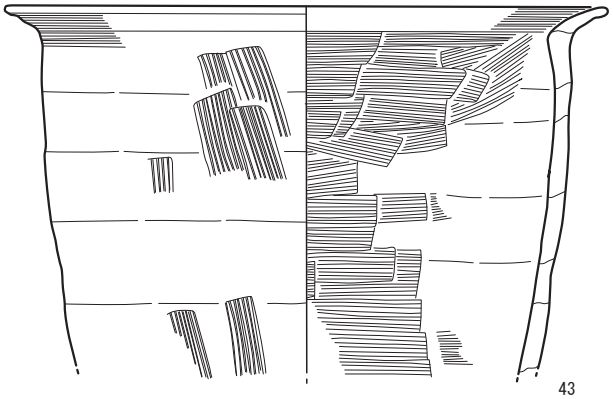
第31図　遺物実測図 ＳＴ36（１）

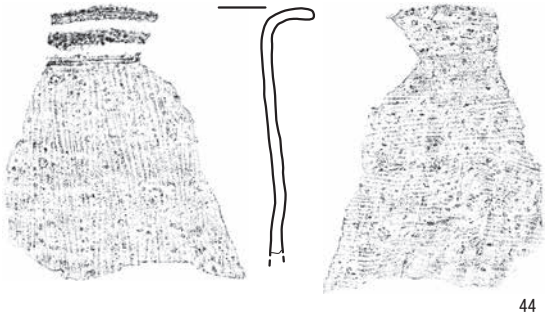


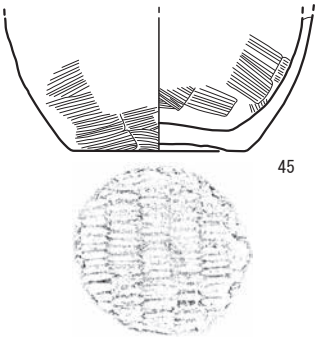
第32図　遺物実測図　ＳＴ36（２）

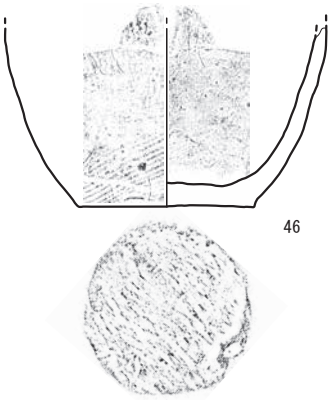


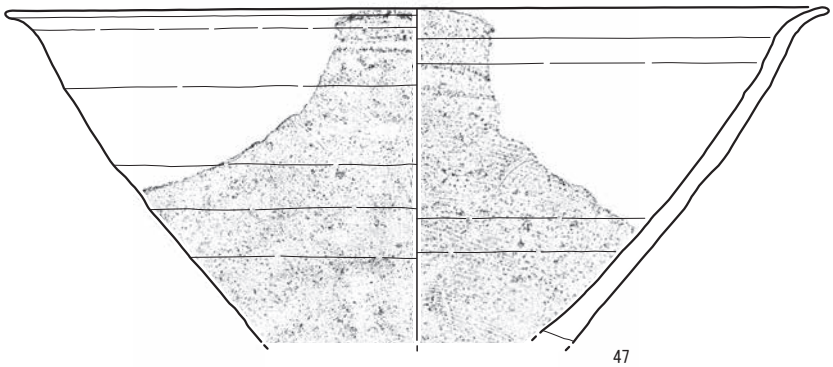
第33図　遺物実測図 ＳＴ５（１）

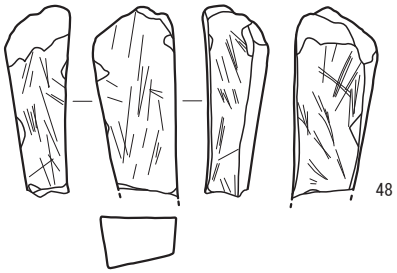


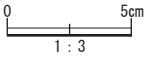






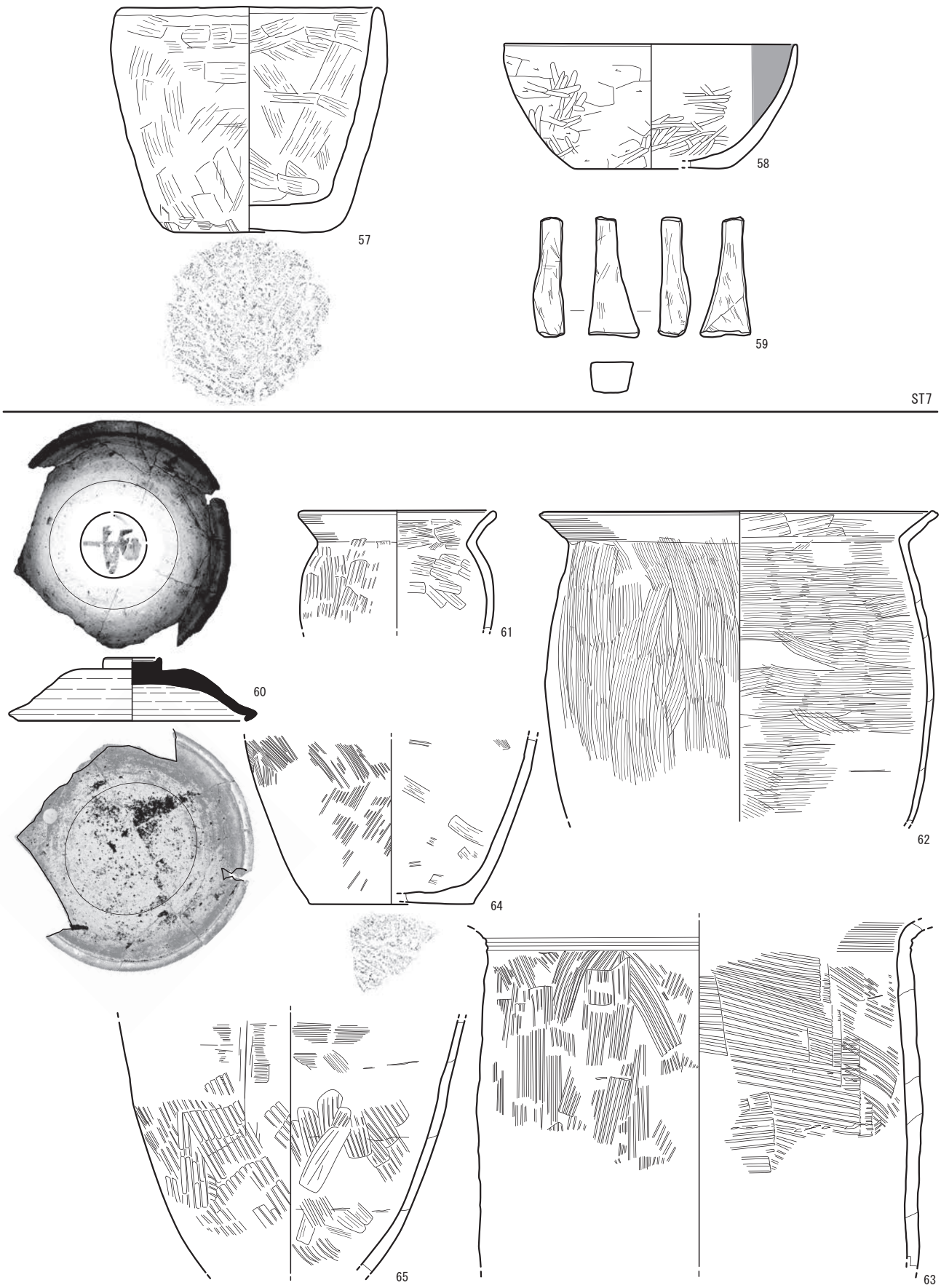




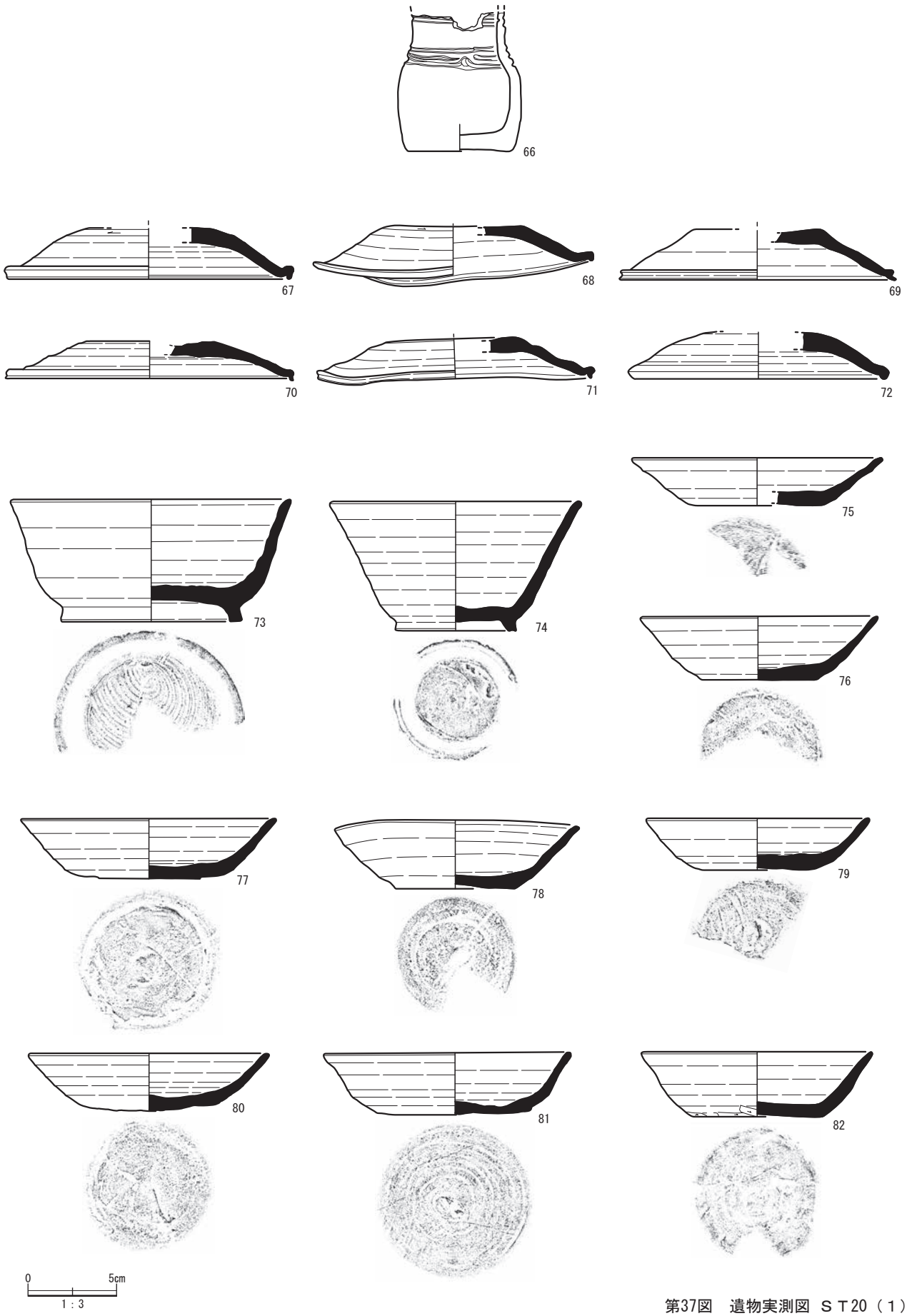


第34図　遺物実測図 ＳＴ５（２）

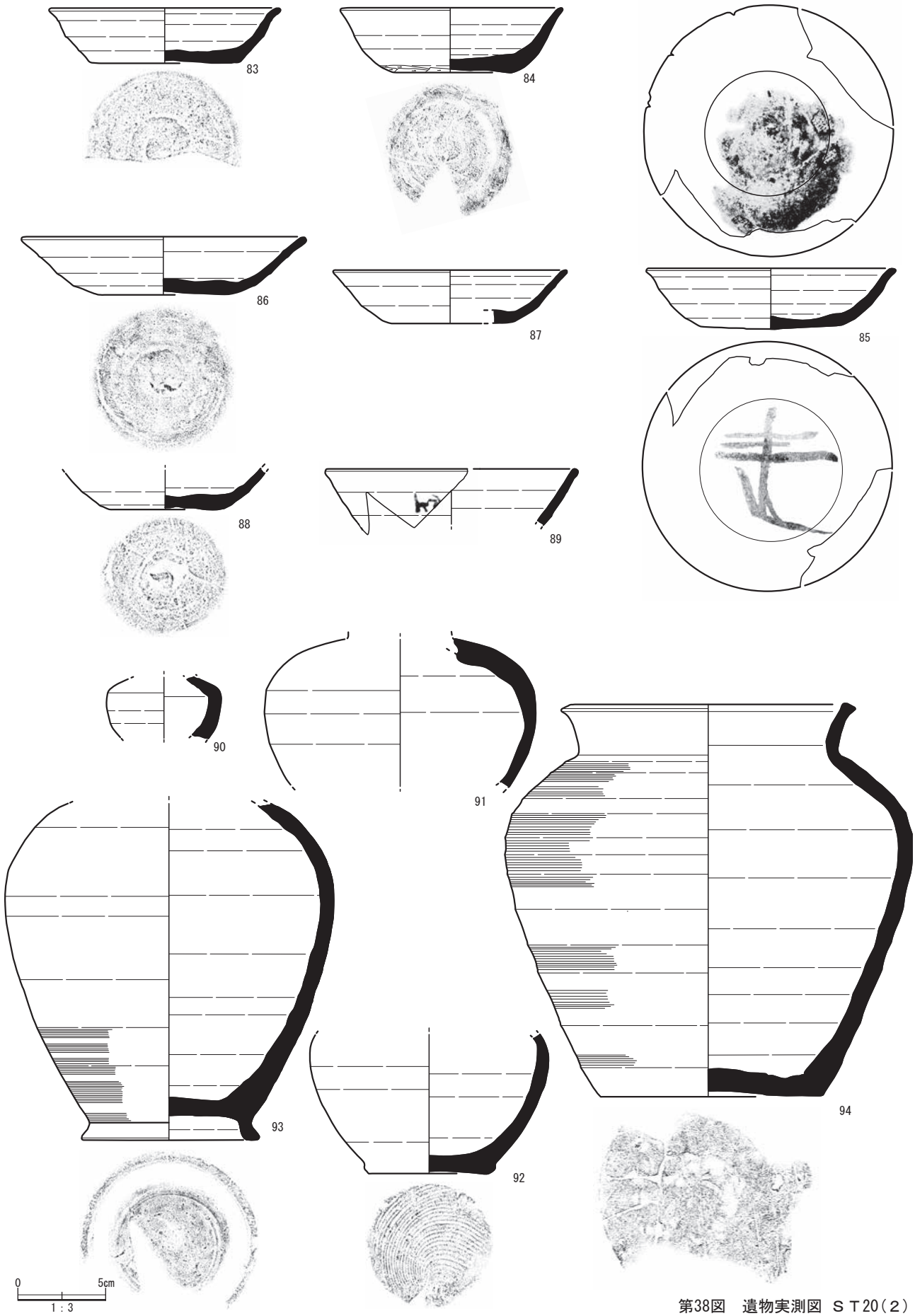
第35図　遺物実測図 ＳＴ７（１）



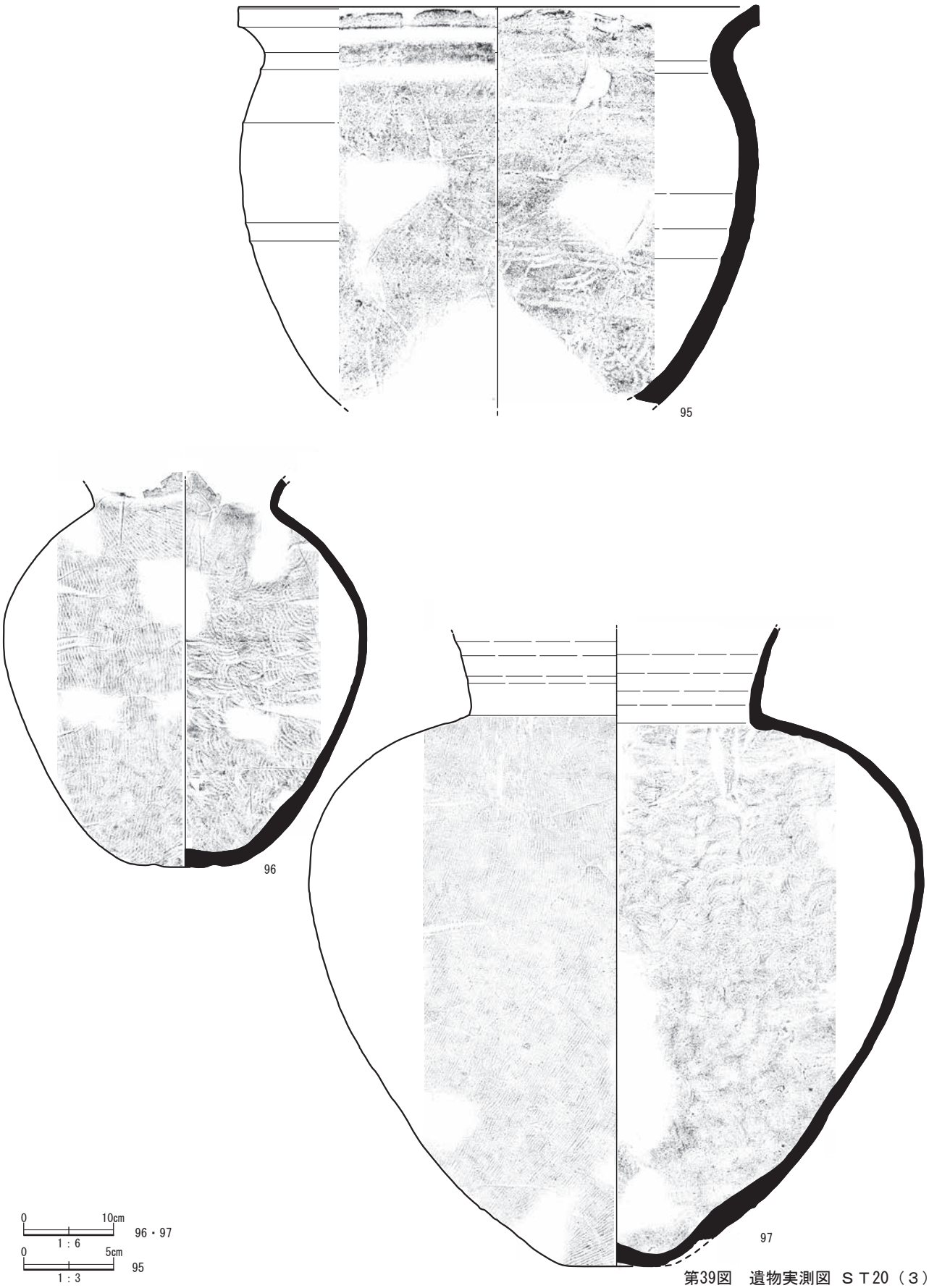
第36図　遺物実測図 ＳＴ７（２）・ＳＴ13



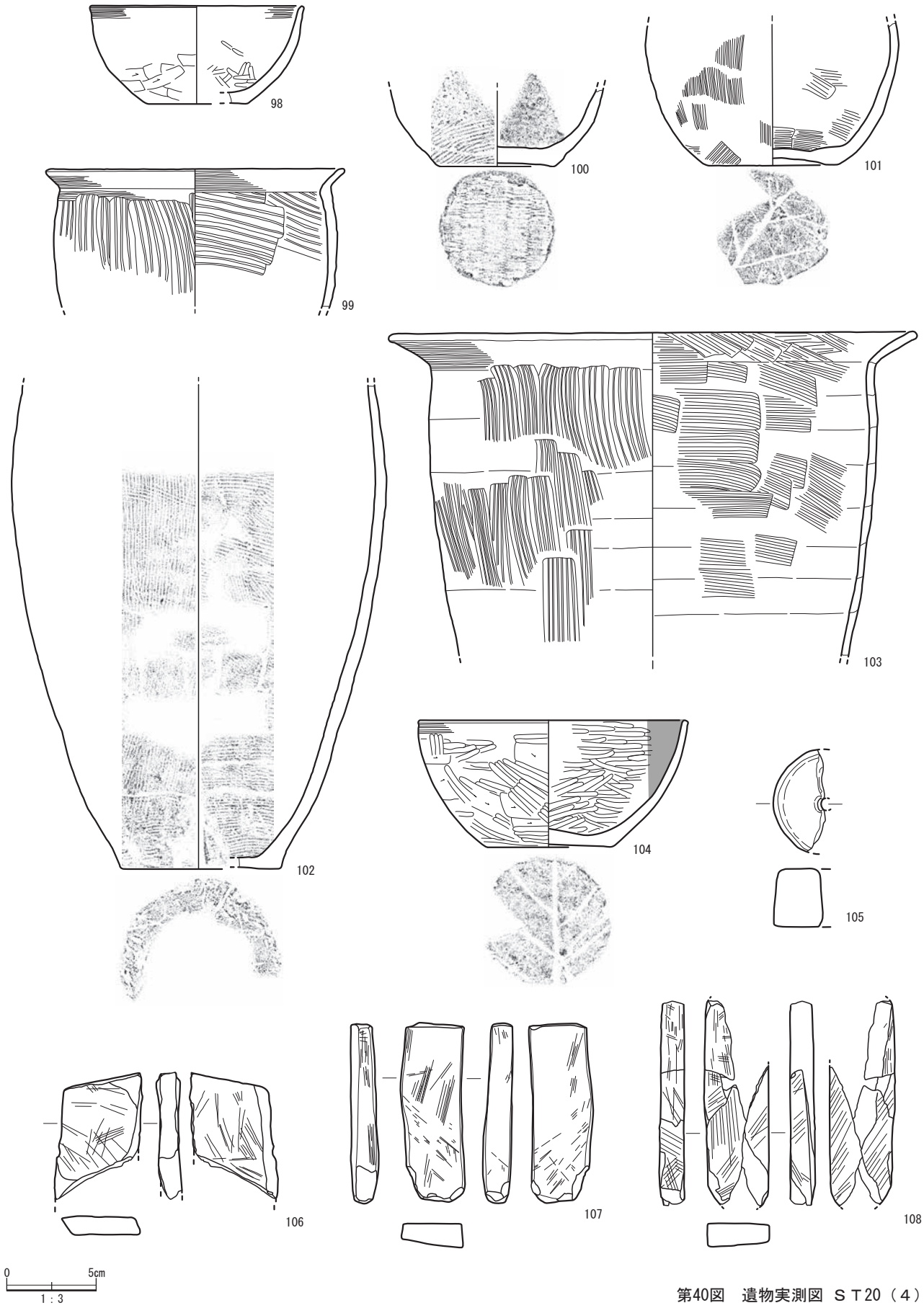
第37図　遺物実測図 ＳＴ20（１）



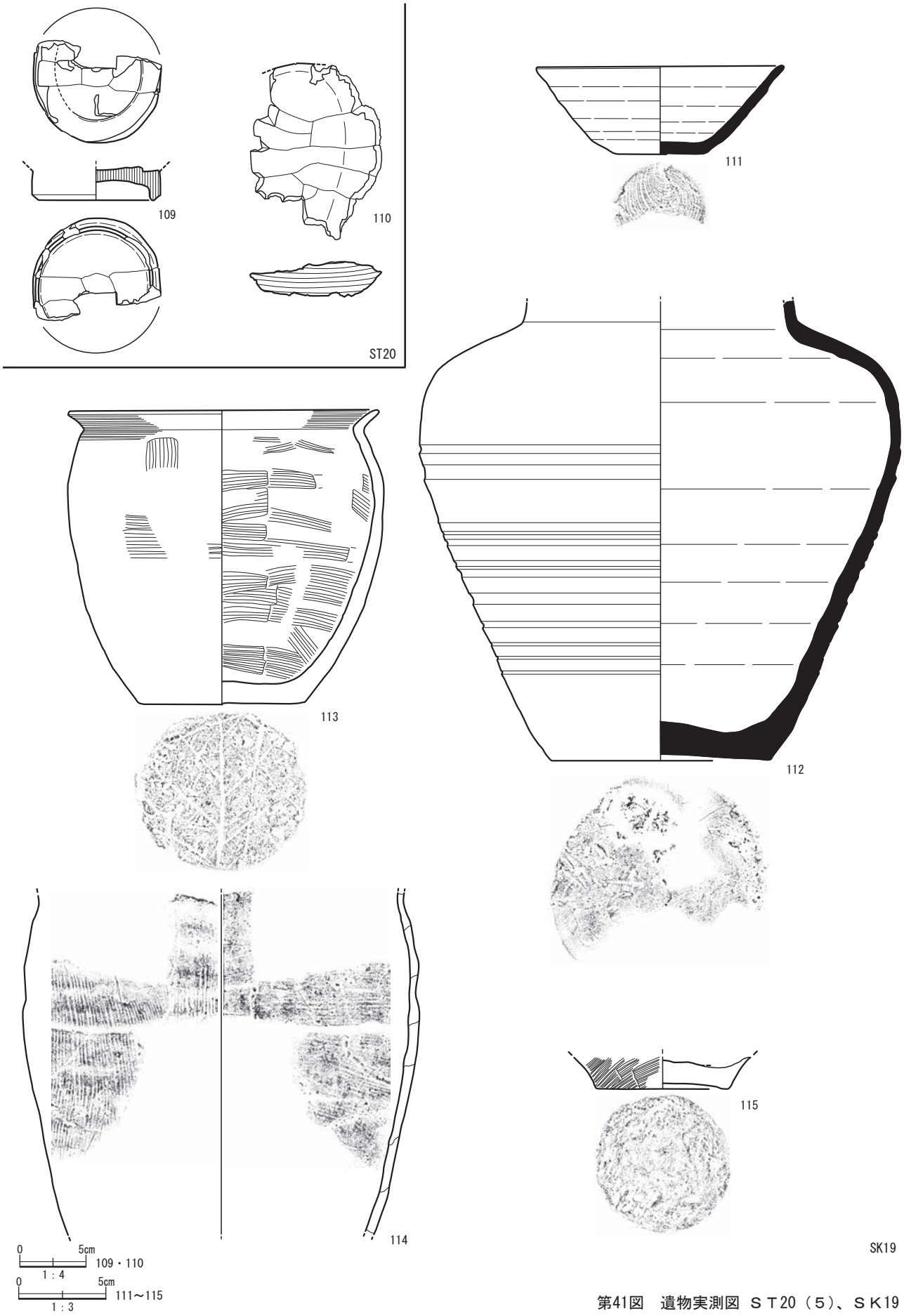
第38図　遺物実測図 ＳＴ20（２）



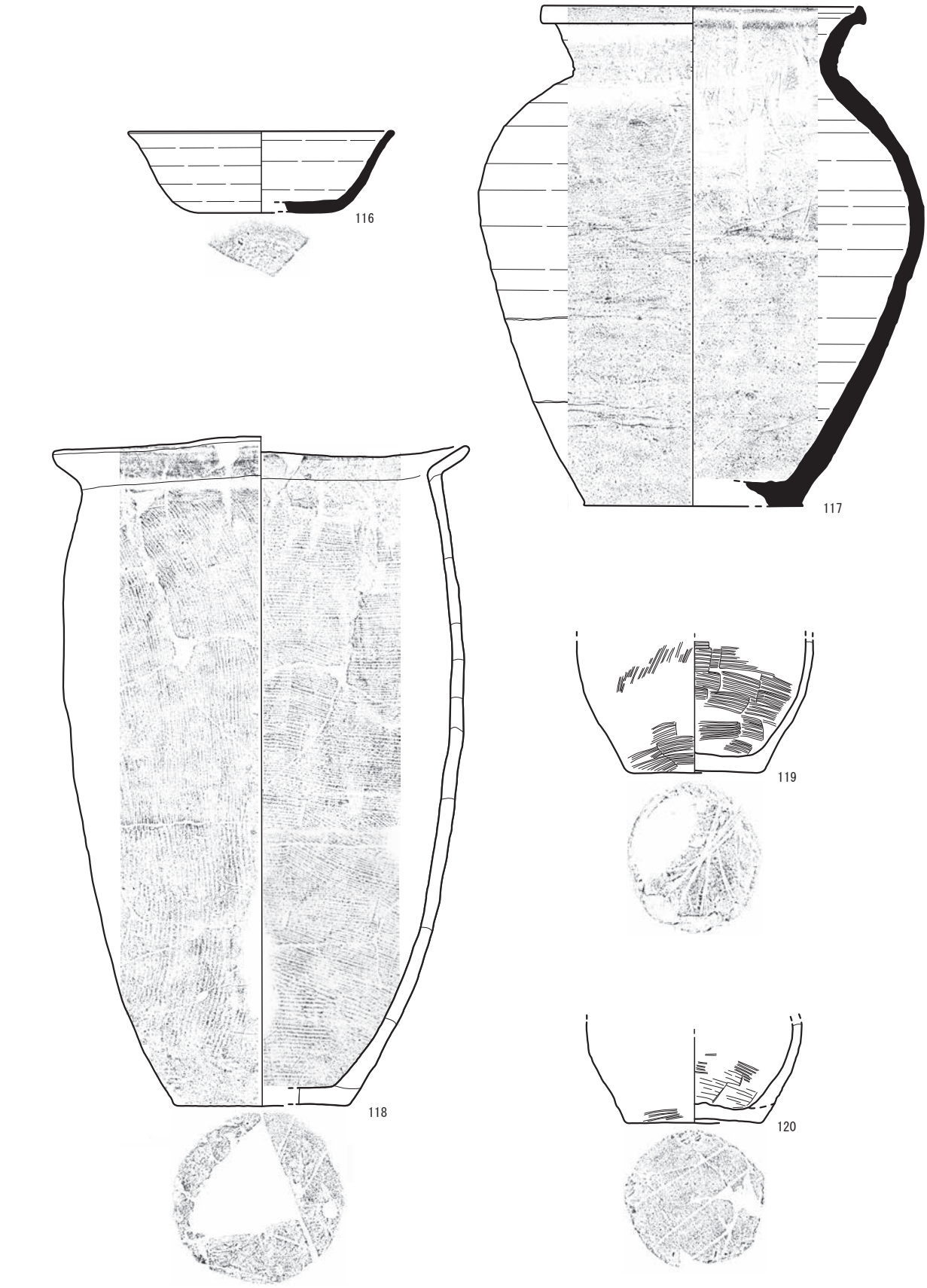
第39図　遺物実測図 ＳＴ20（３）



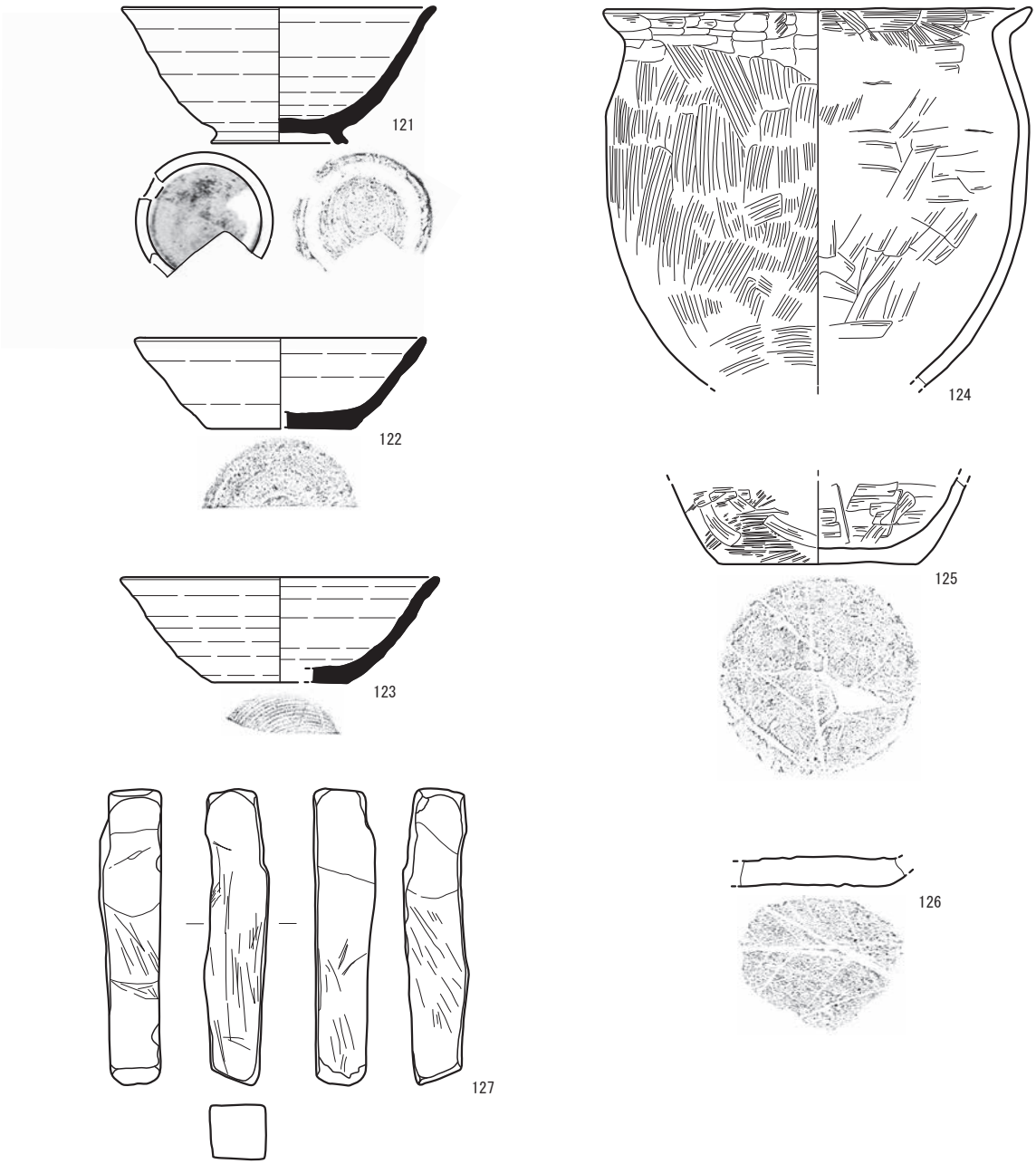
第40図　遺物実測図 ＳＴ20（４）



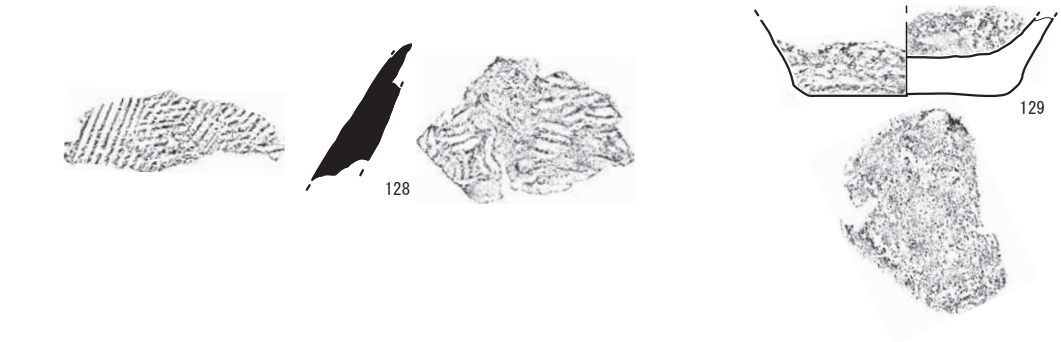
第41図　遺物実測図 ＳＴ20（５）、ＳＫ19



第42図　遺物実測図 ＳＴ14



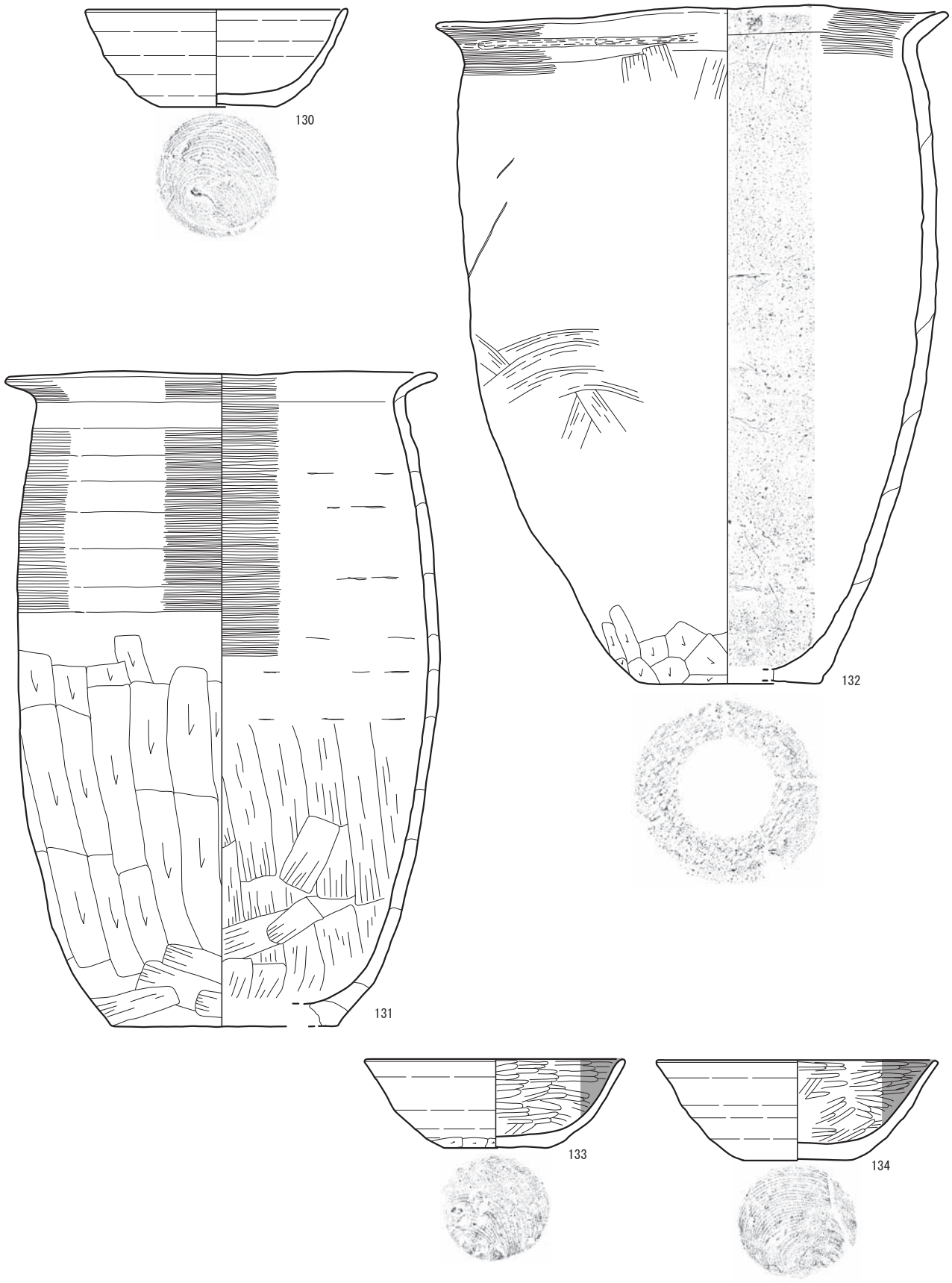
ＳＴ21



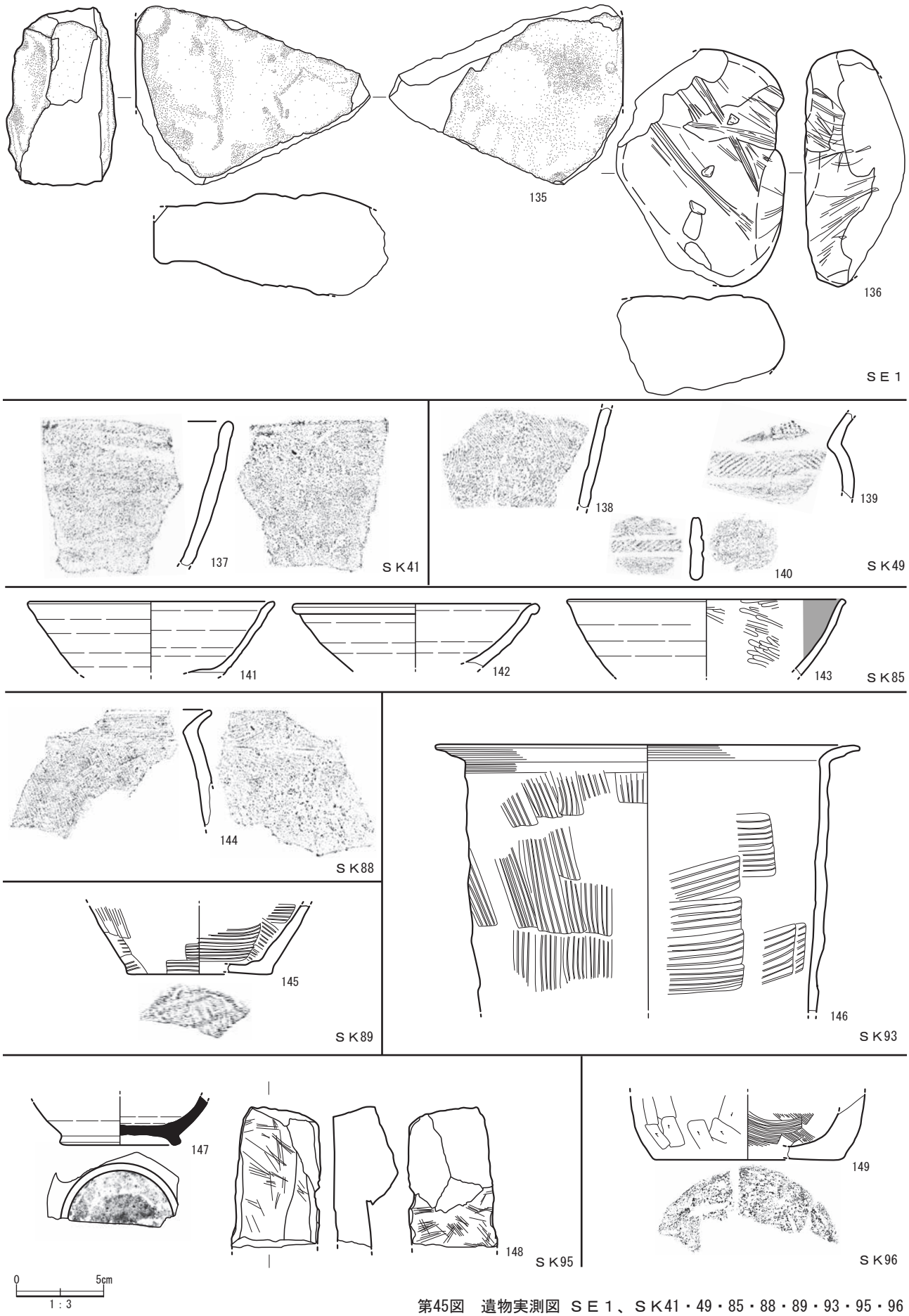
ＳＤ4

0　5cm
1：3

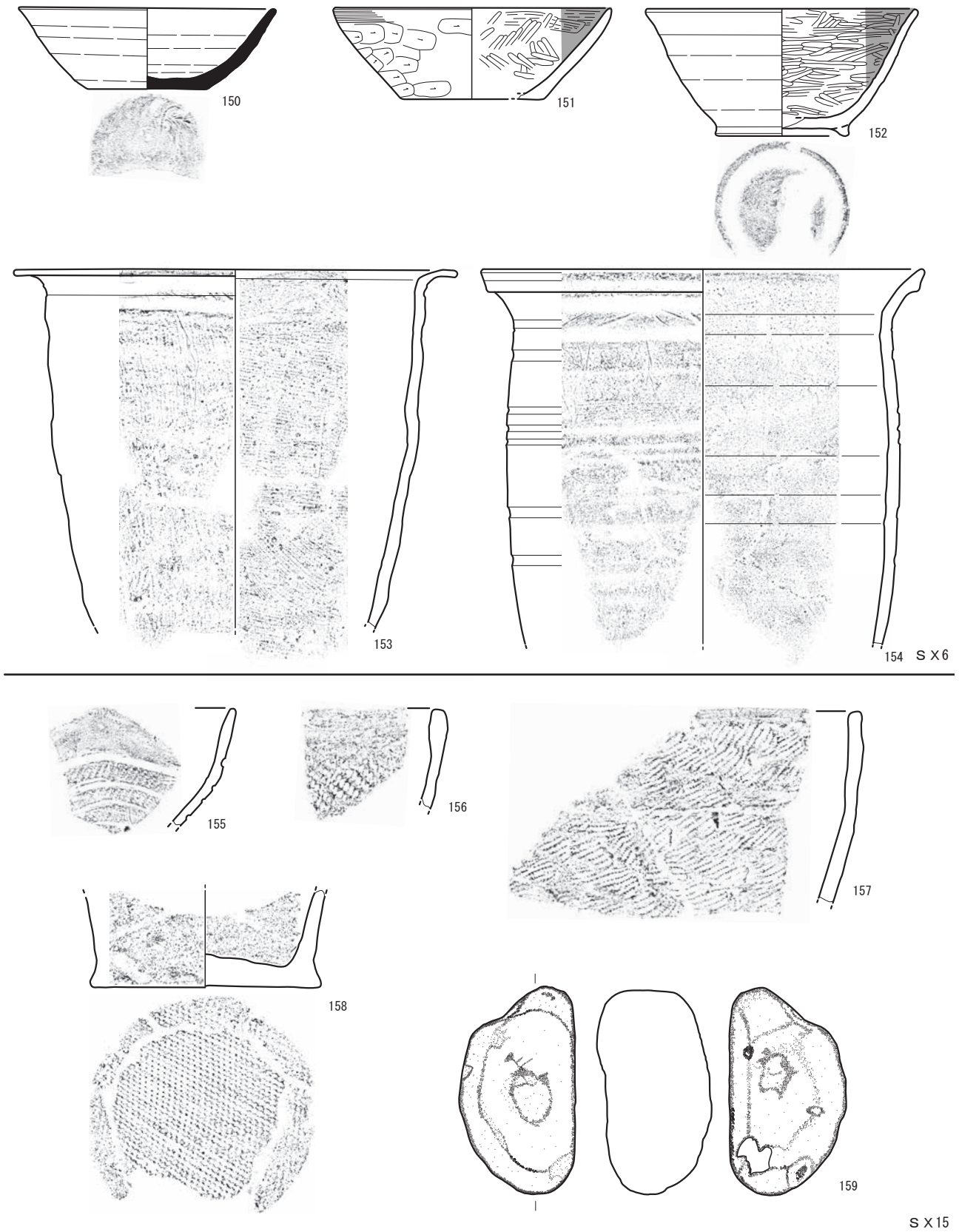
第43図　遺物実測図 ＳＴ21、ＳＤ４



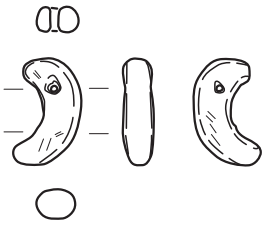
第44図　遺物実測図　ＳＭ24

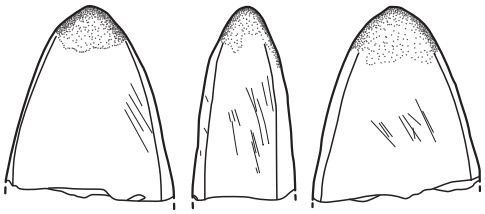


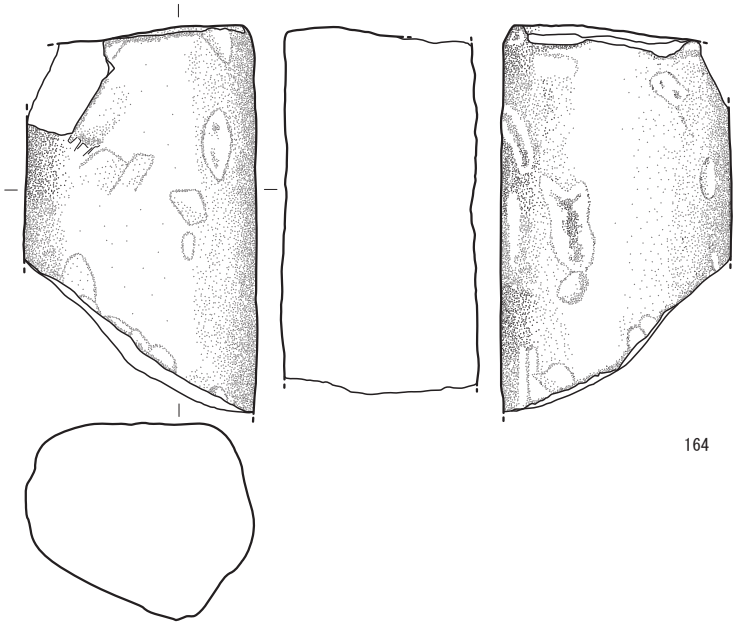
第45図　遺物実測図 ＳＥ１、ＳＫ41・49・85・88・89・93・95・96

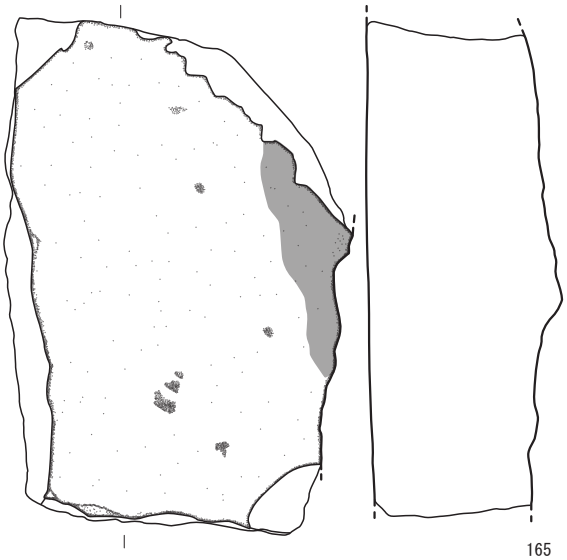


第46図　遺物実測図 ＳＸ6・15・16



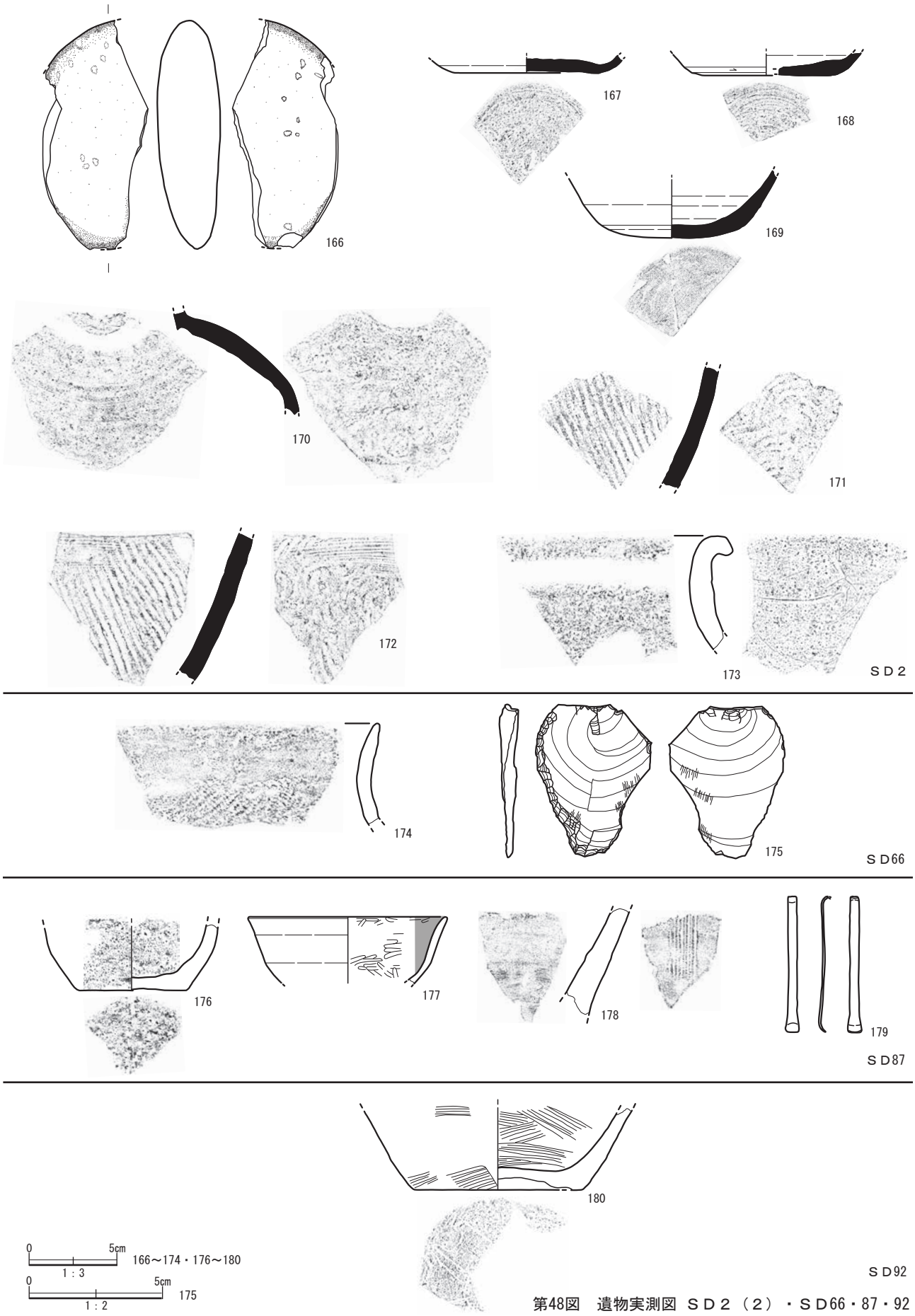




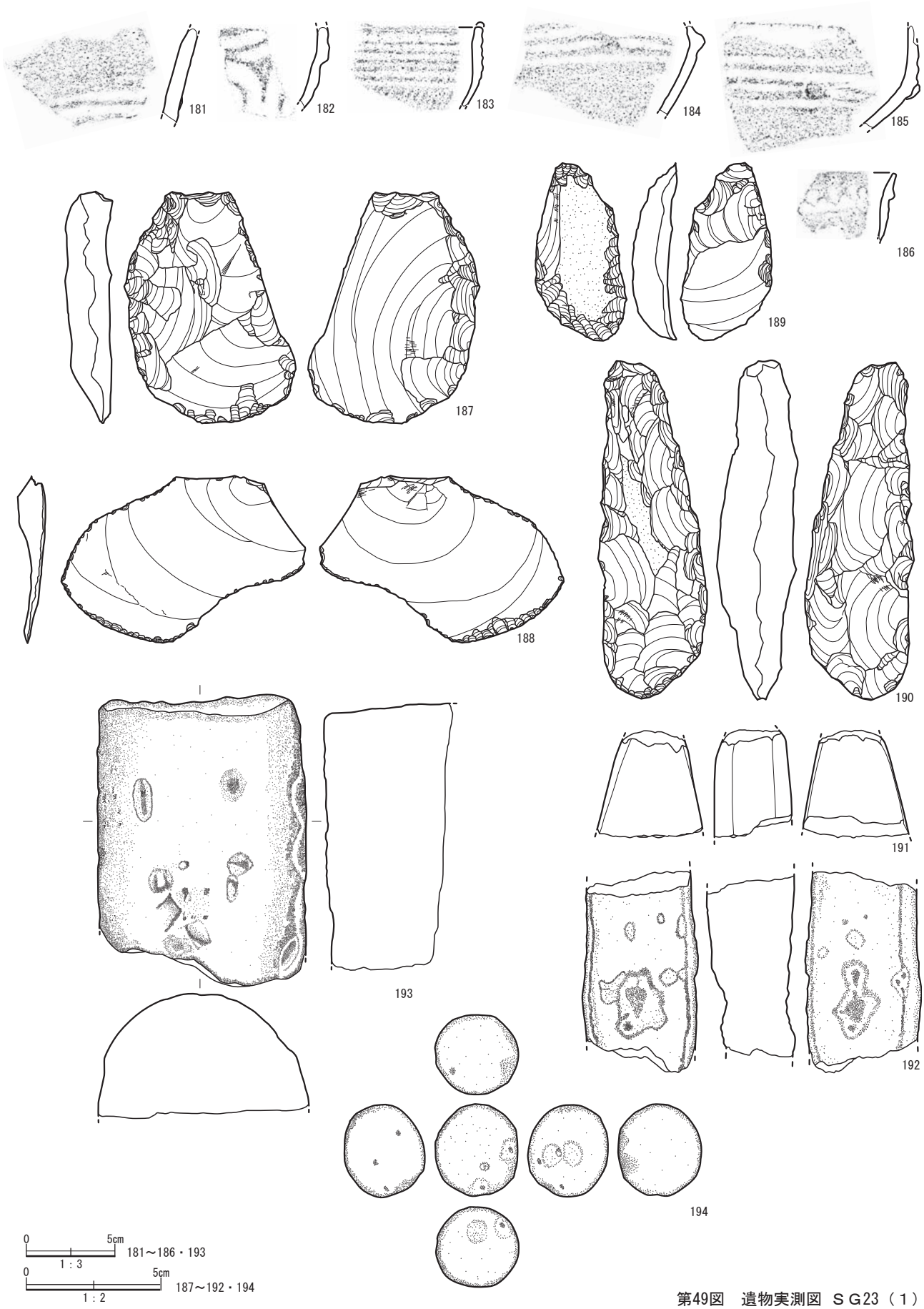


0 5cm 164・165
1：3
0 5cm 162・163
1：2

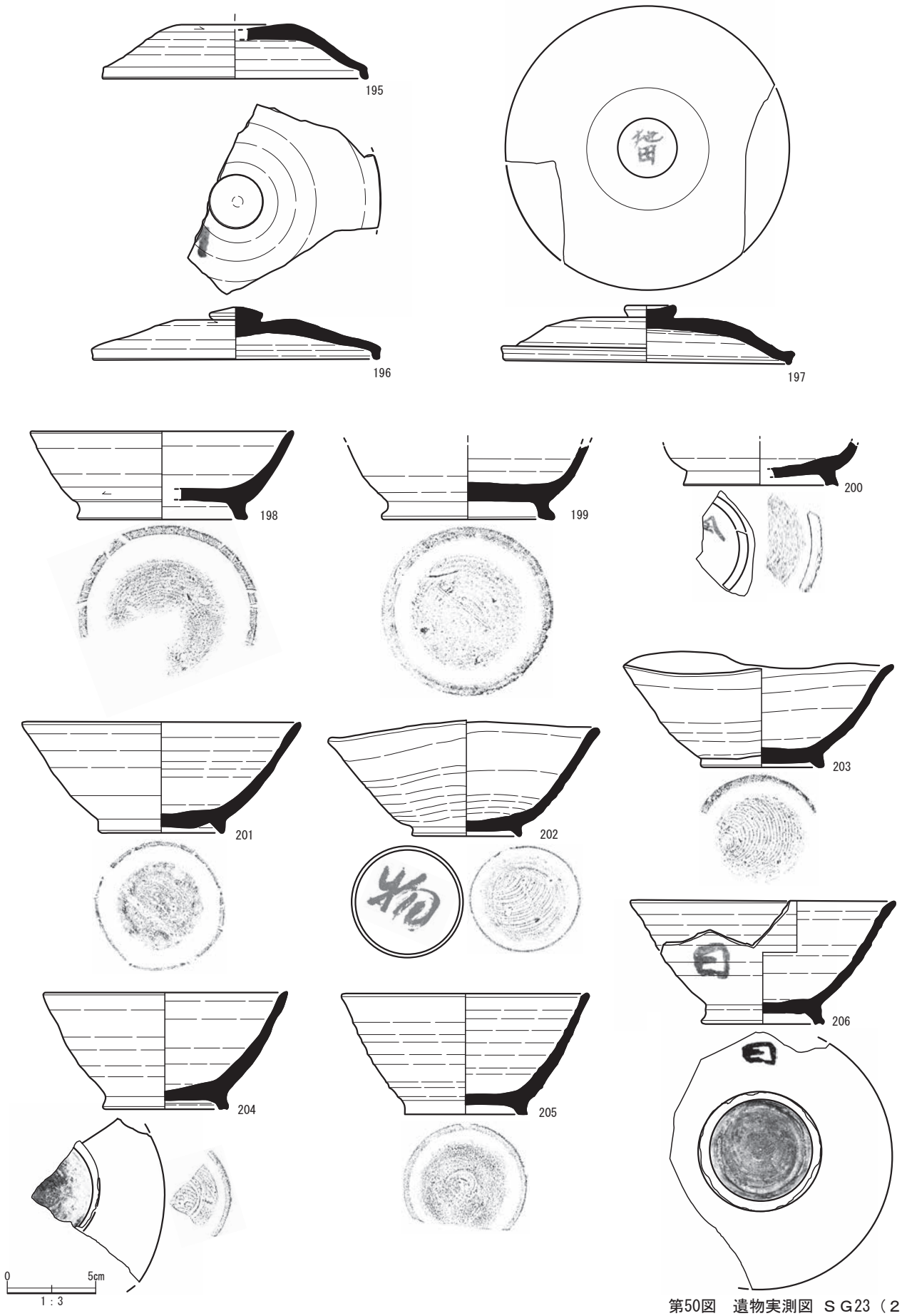
第47図　遺物実測図 ＳＤ２（１）



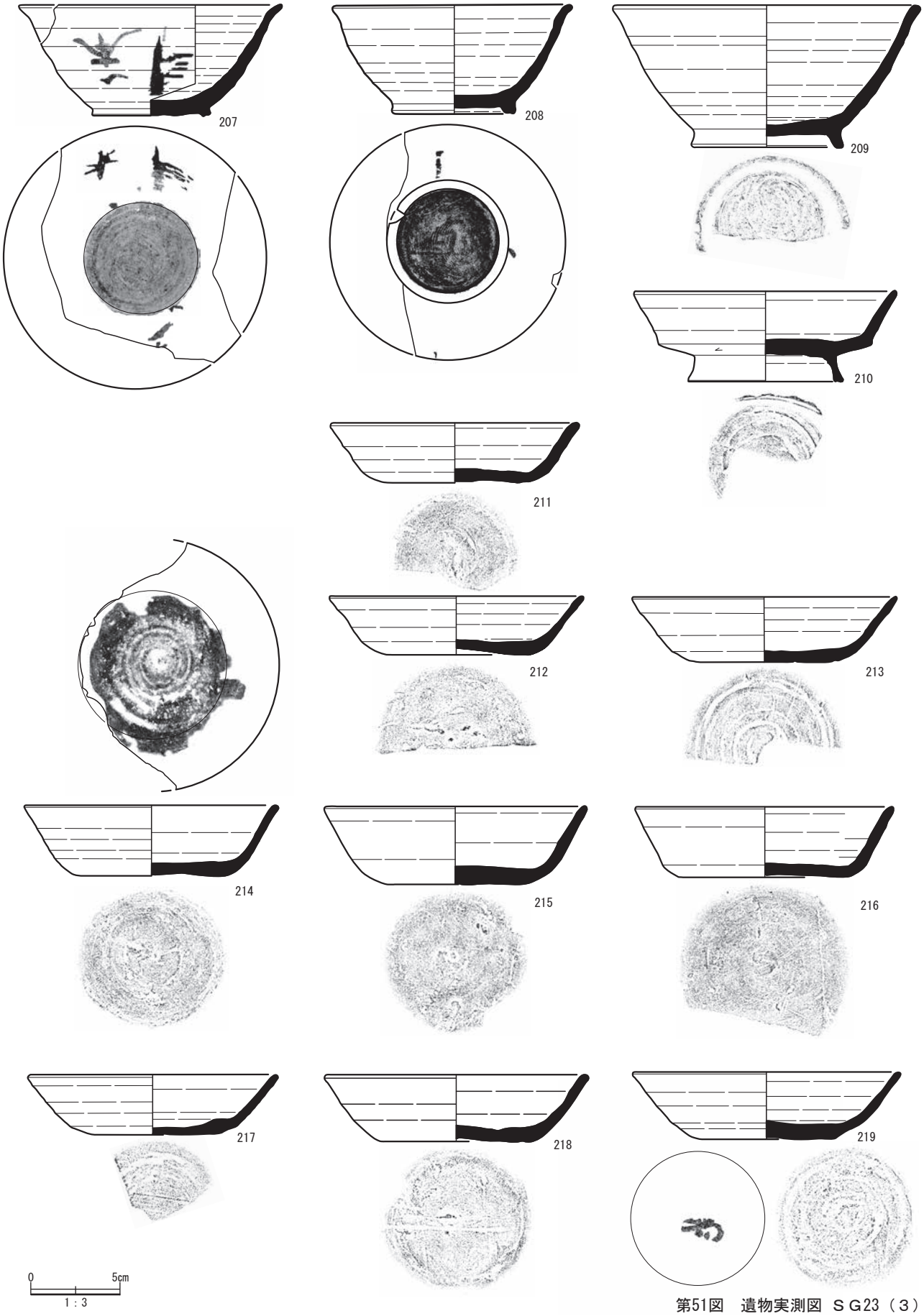
第48図　遺物実測図 ＳＤ２（２）・ＳＤ66・87・92



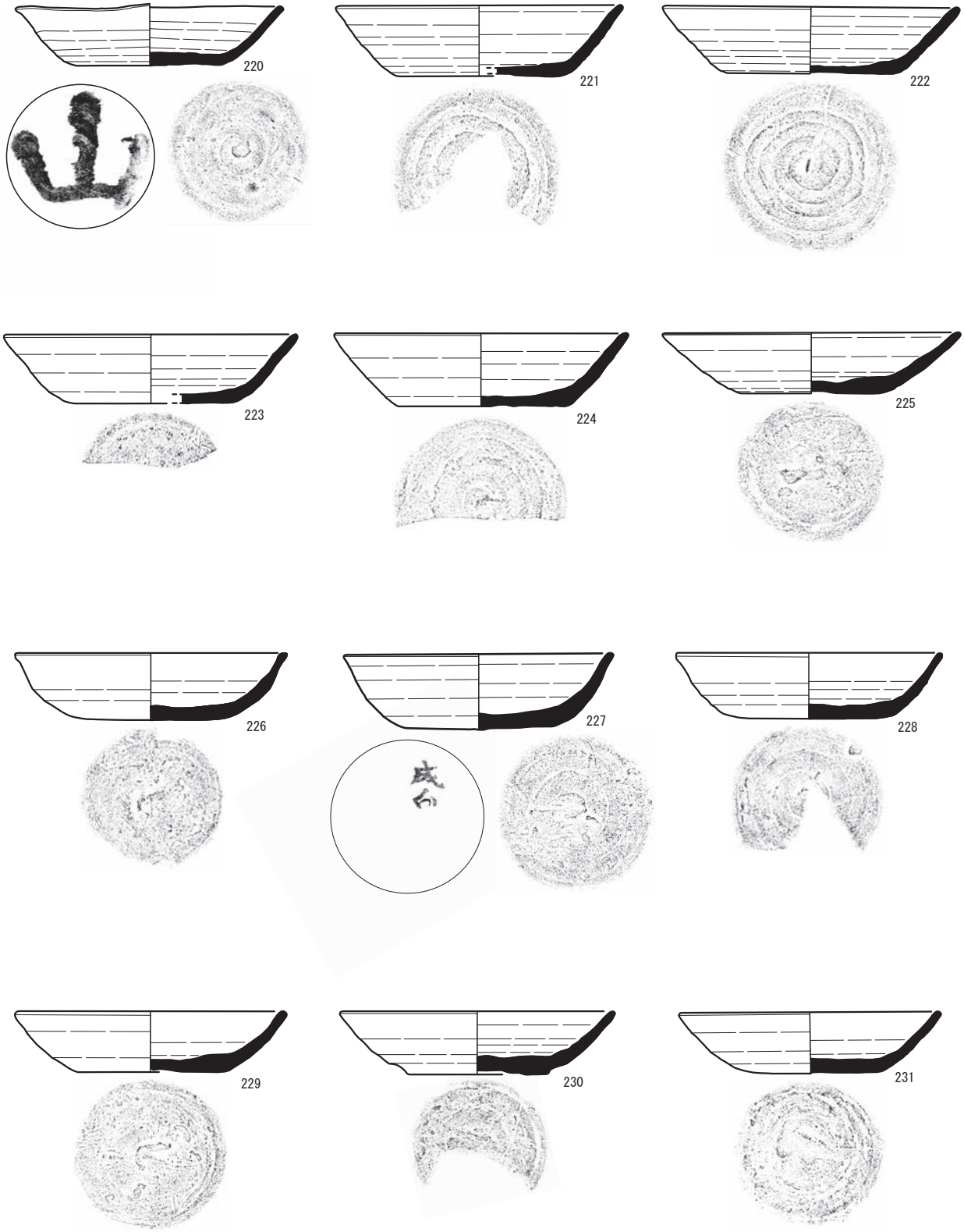
第49図　遺物実測図　ＳＧ23（１）



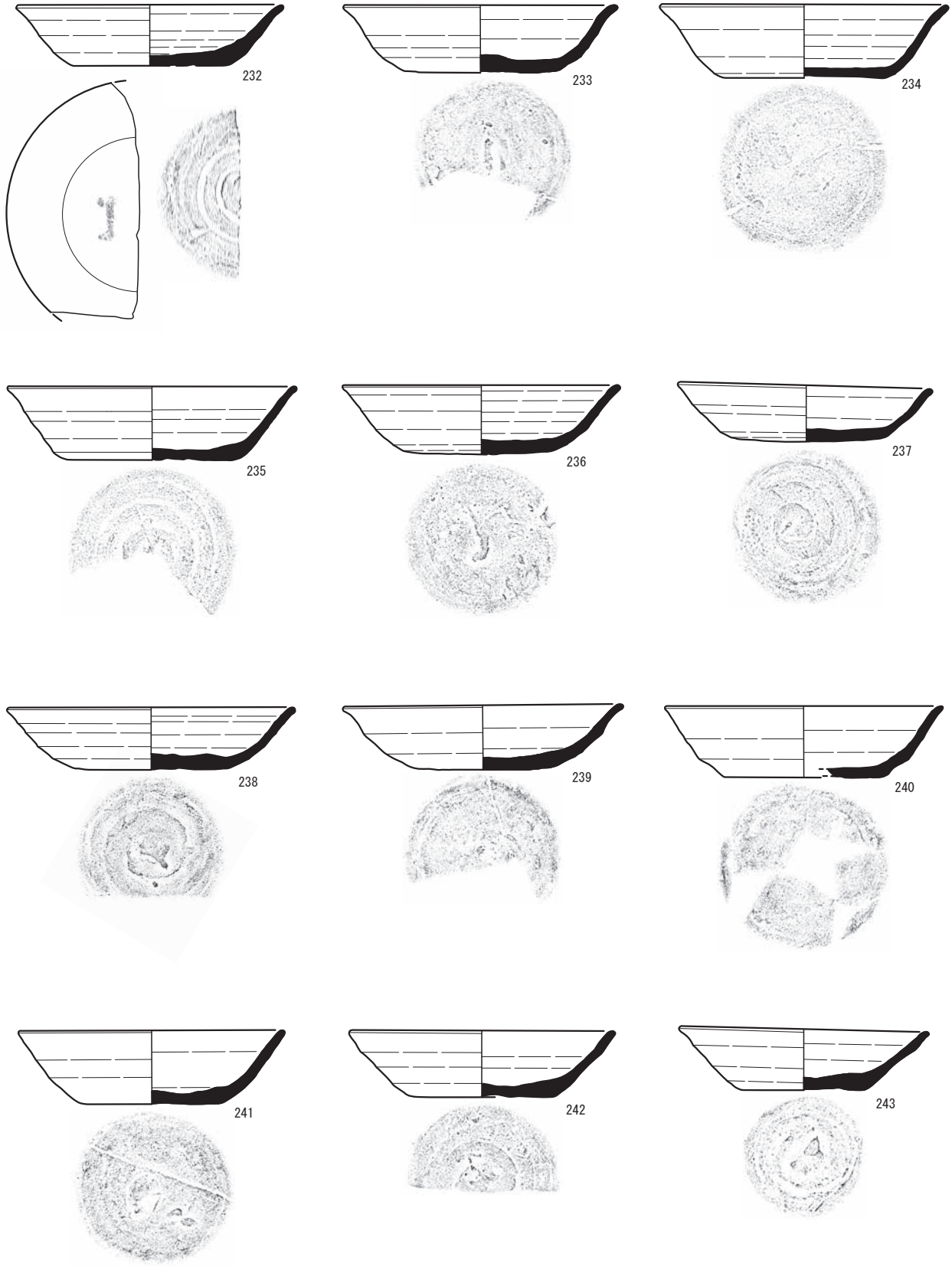
第50図　遺物実測図　ＳＧ23（２）



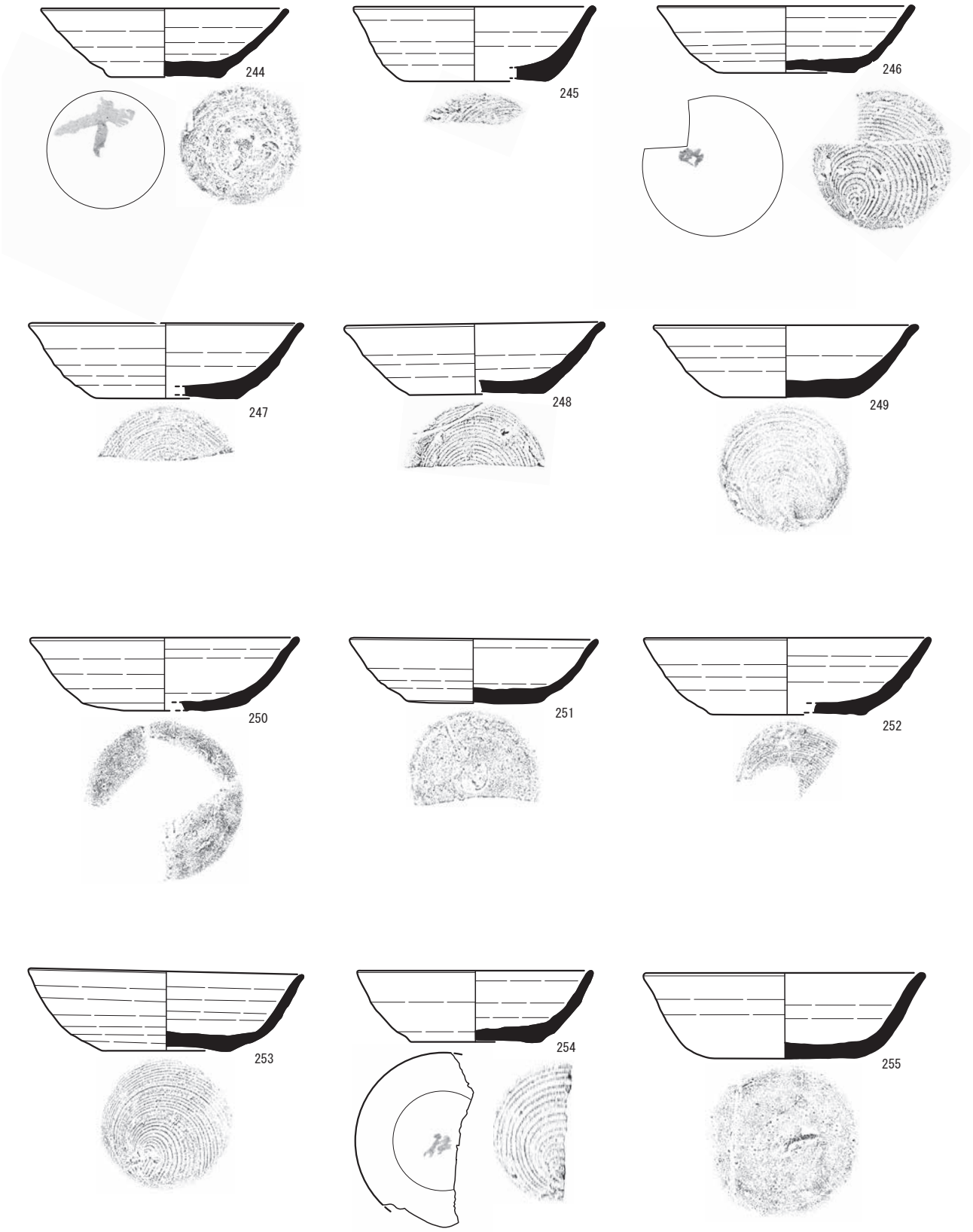
第51図　遺物実測図　ＳＧ23（３）



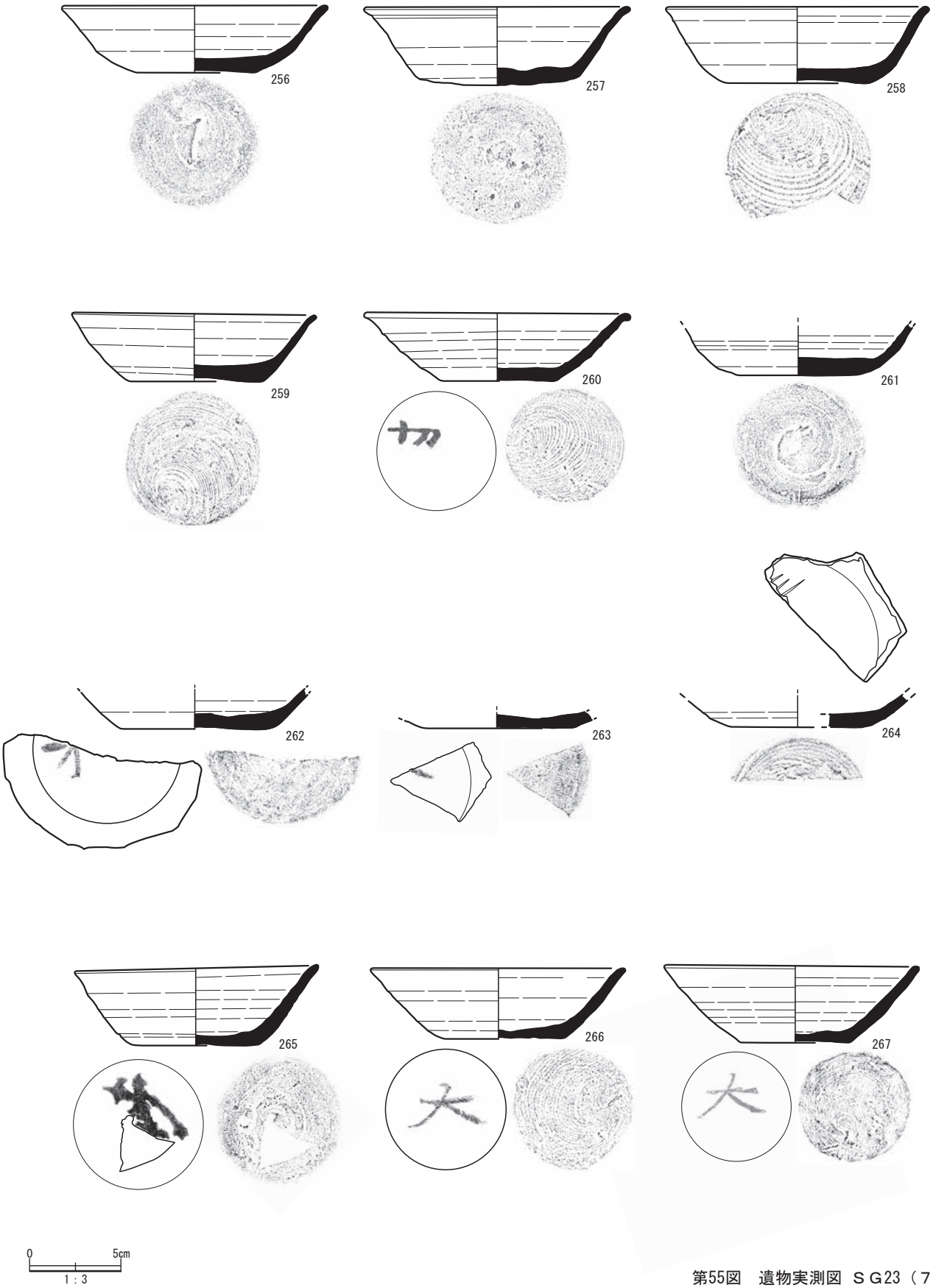
第52図　遺物実測図 ＳＧ23（４）



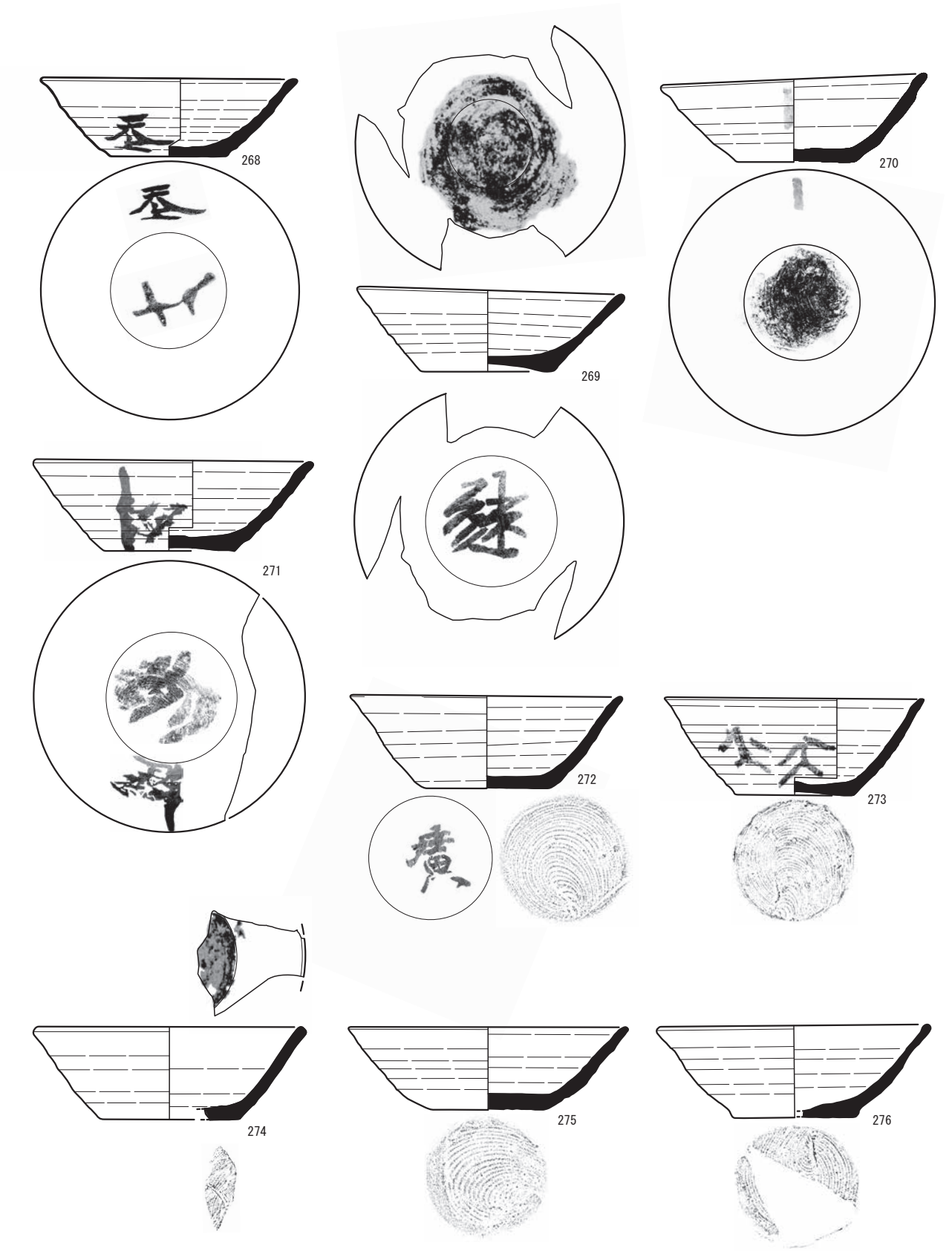
第53図　遺物実測図 ＳＧ23（５）



第54図　遺物実測図 ＳＧ23（６）

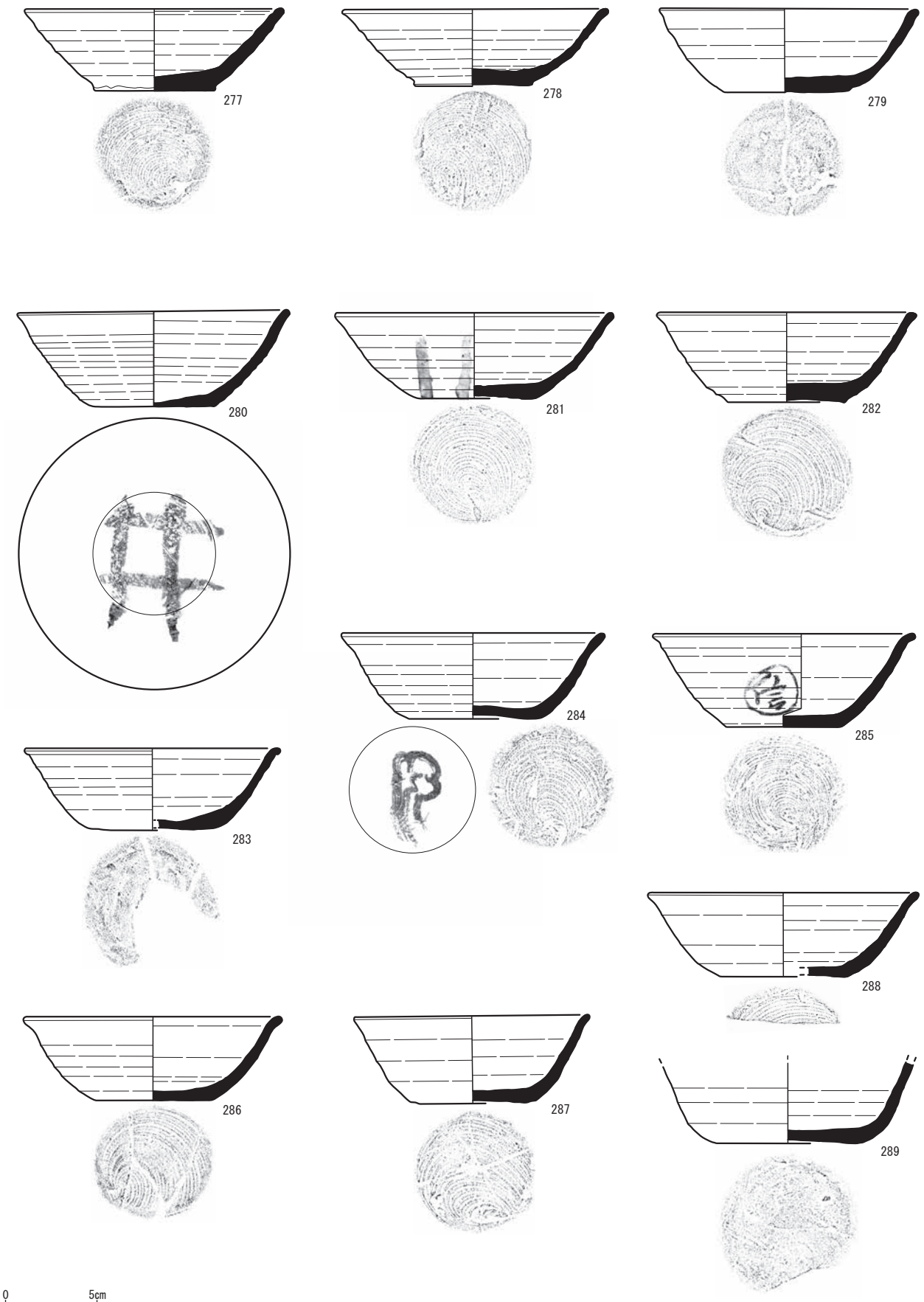


第55図　遺物実測図　ＳＧ23（７）

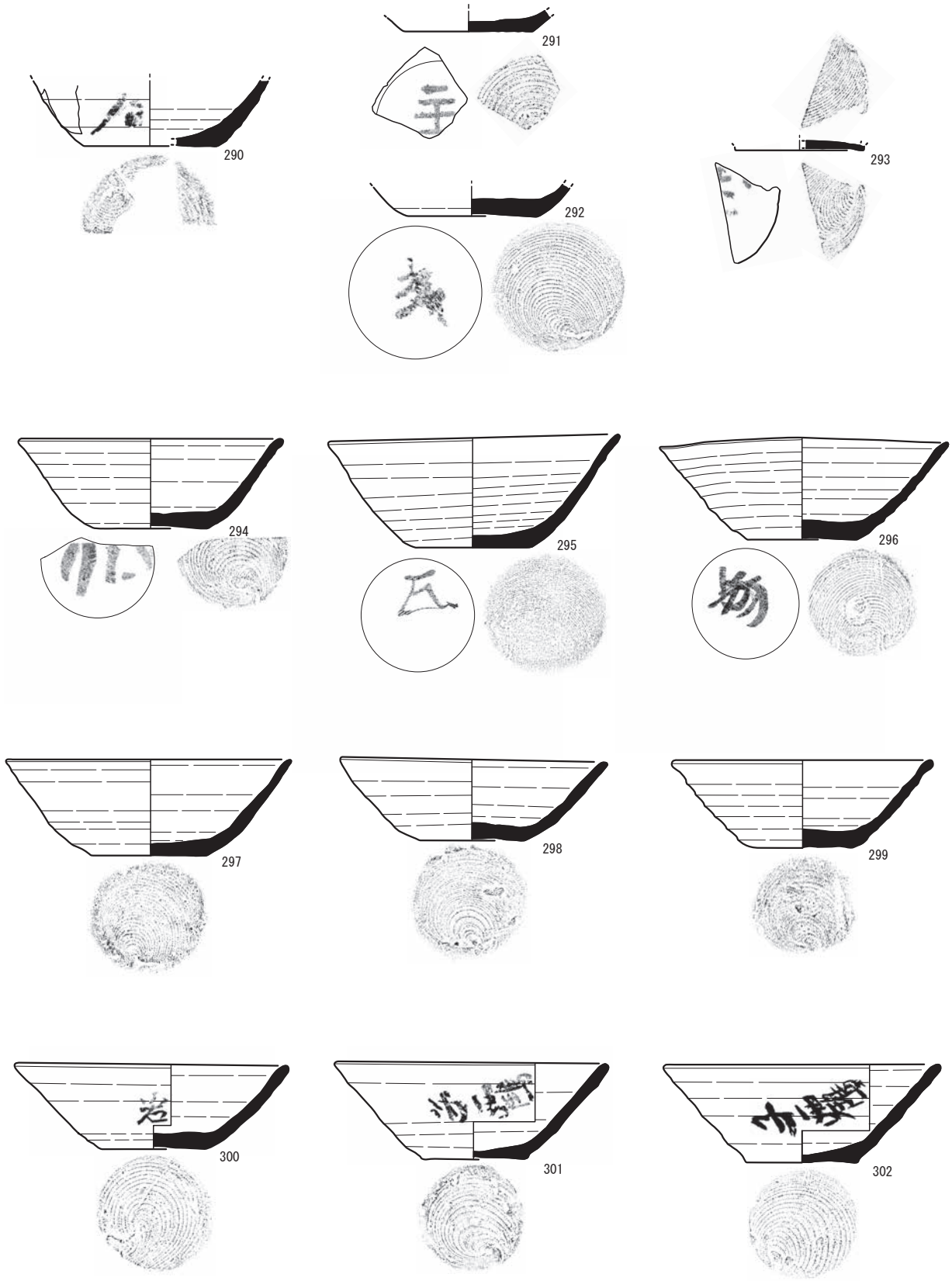


0 5cm
1：3

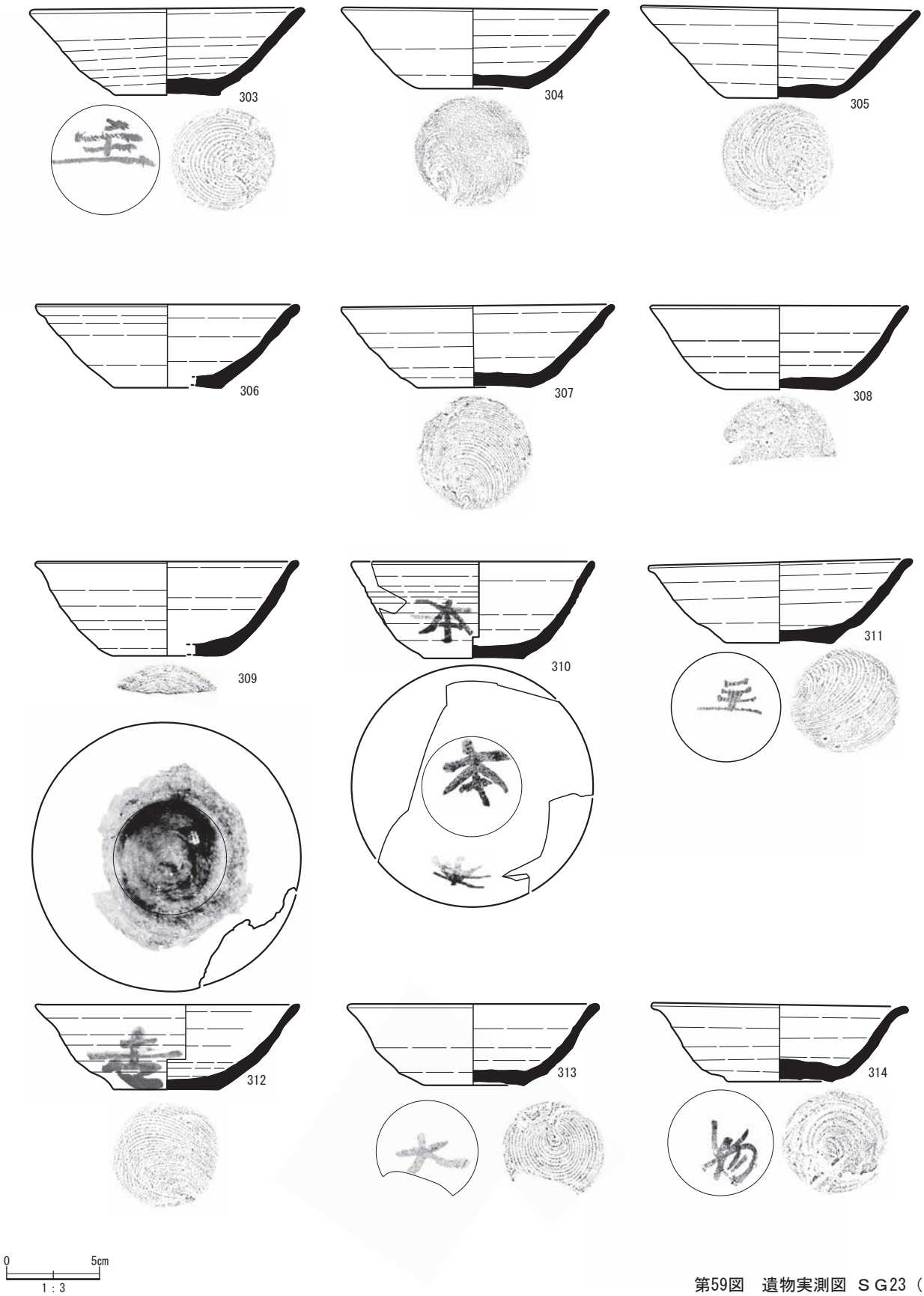
第56図　遺物実測図 ＳＧ23（８）



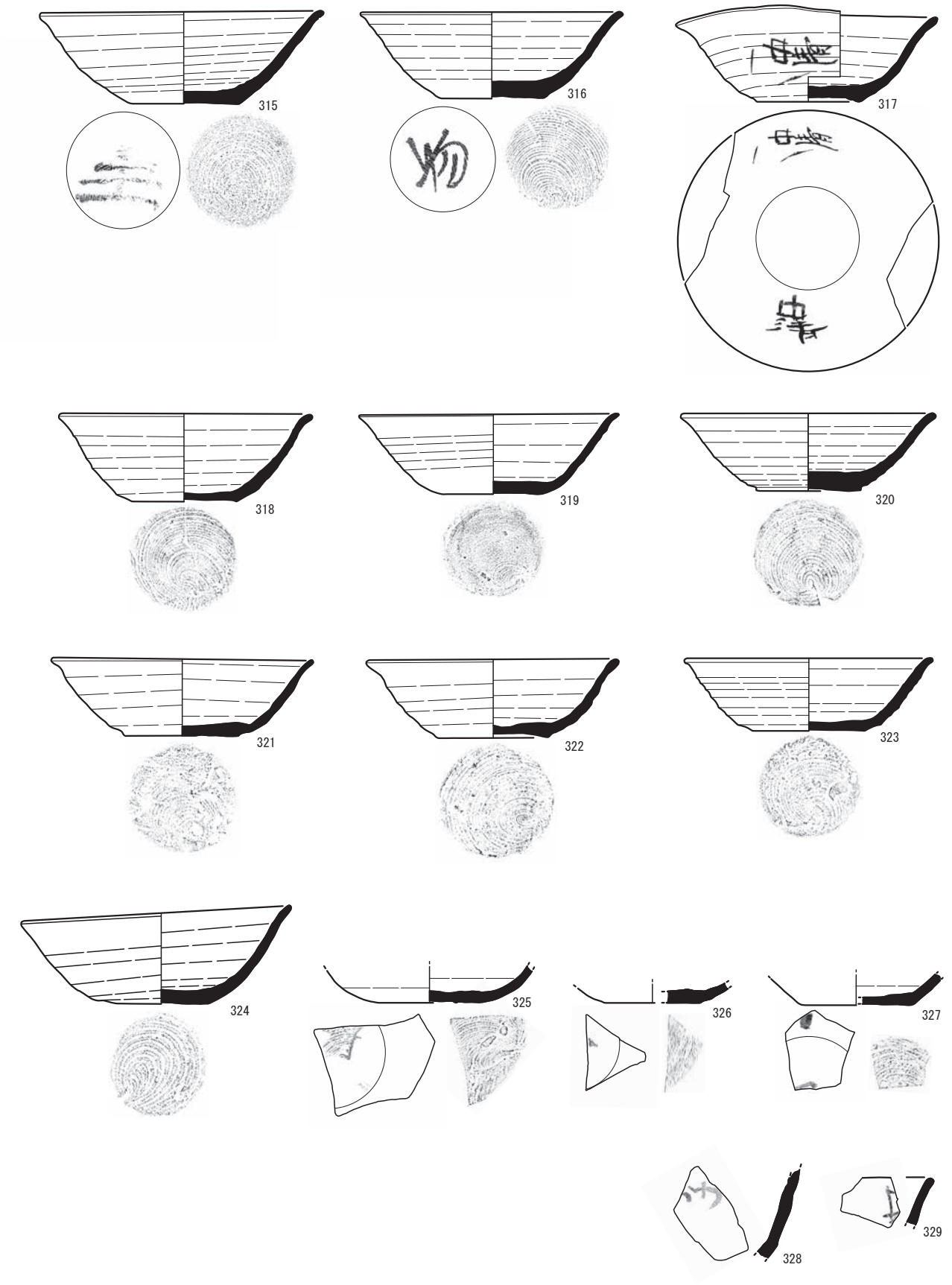
第57図　遺物実測図　ＳＧ23（９）



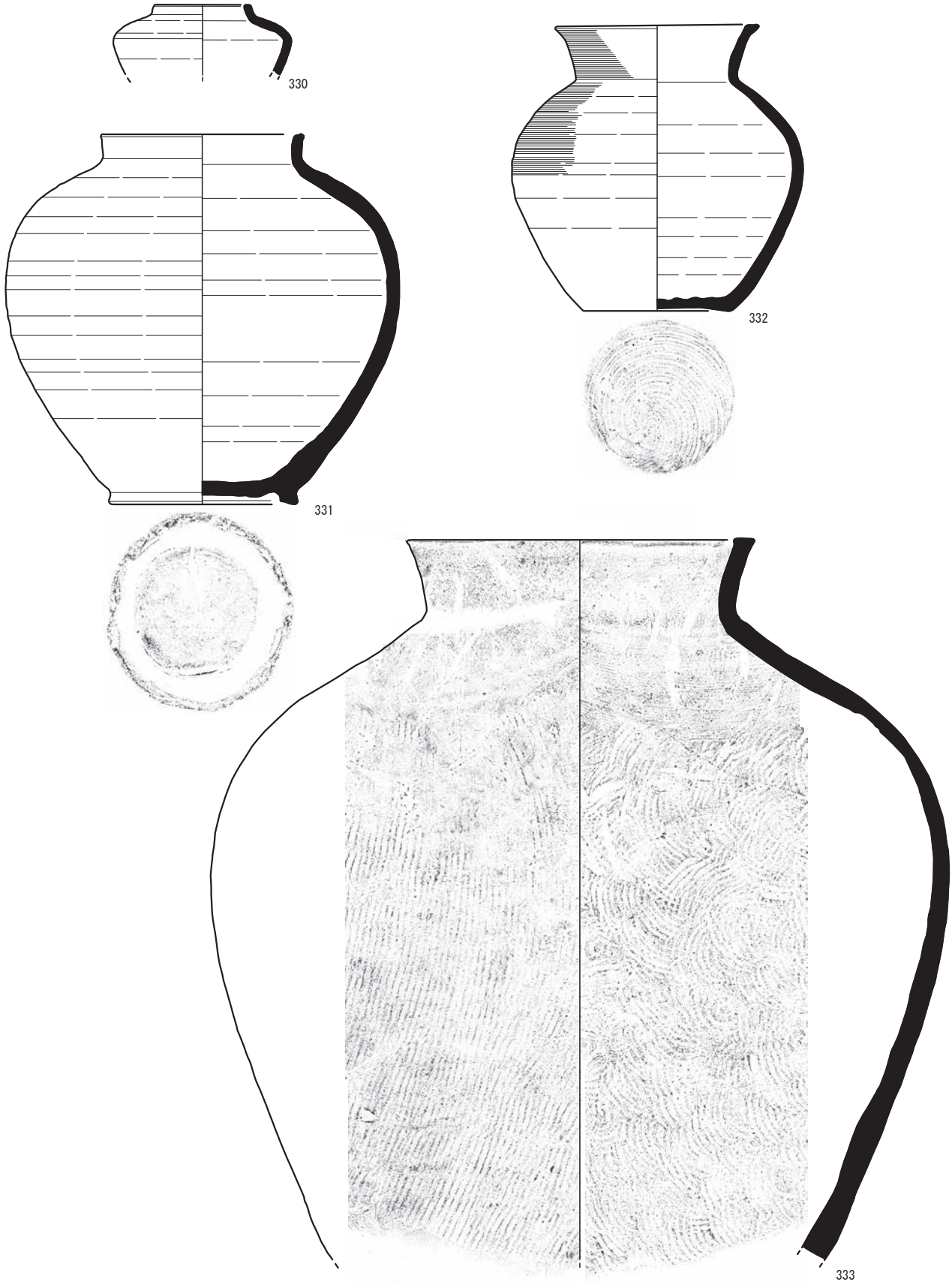
第58図　遺物実測図 ＳＧ23（10）



第59図　遺物実測図 ＳＧ23（11）

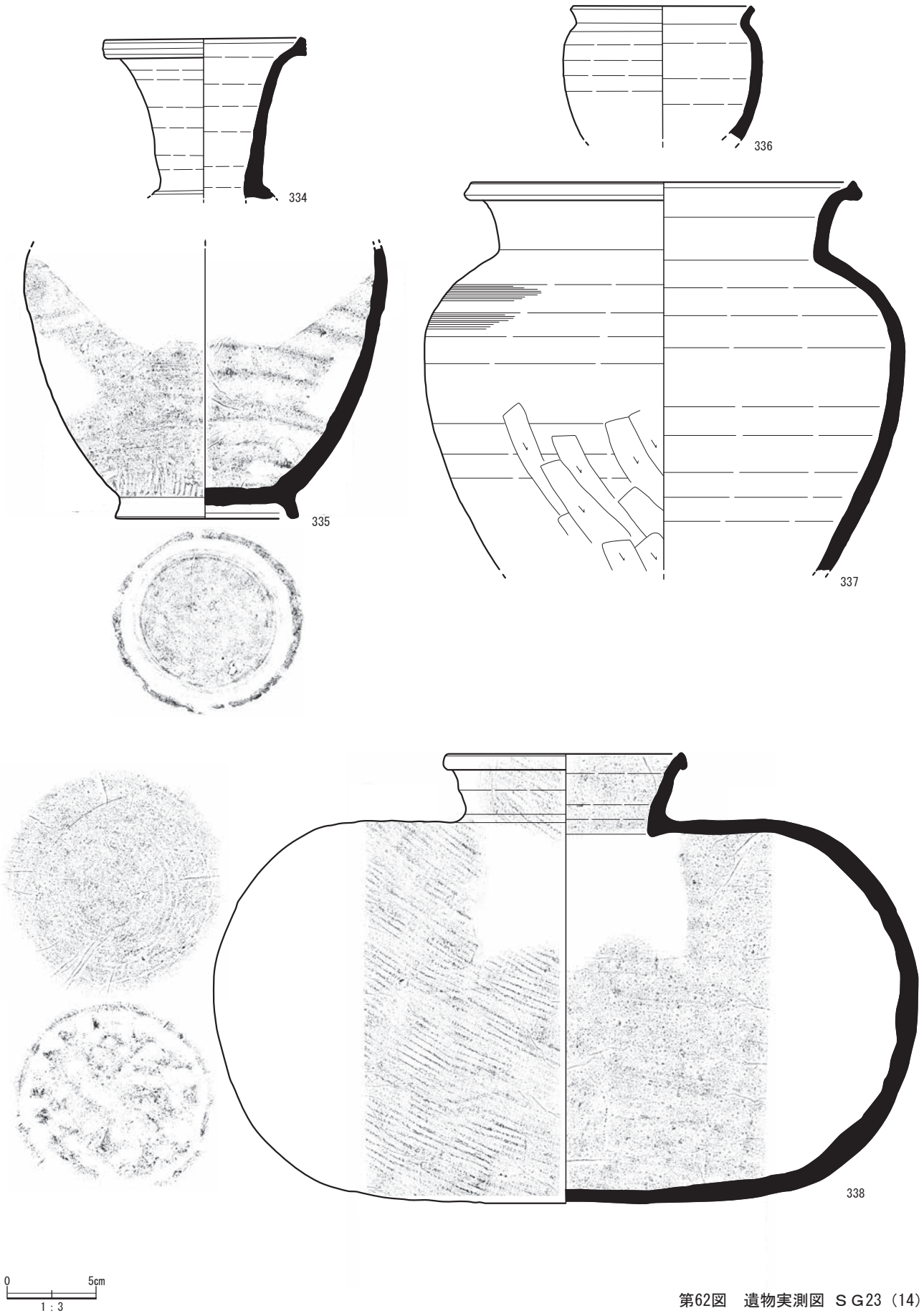


第60図　遺物実測図 ＳＧ23（12）

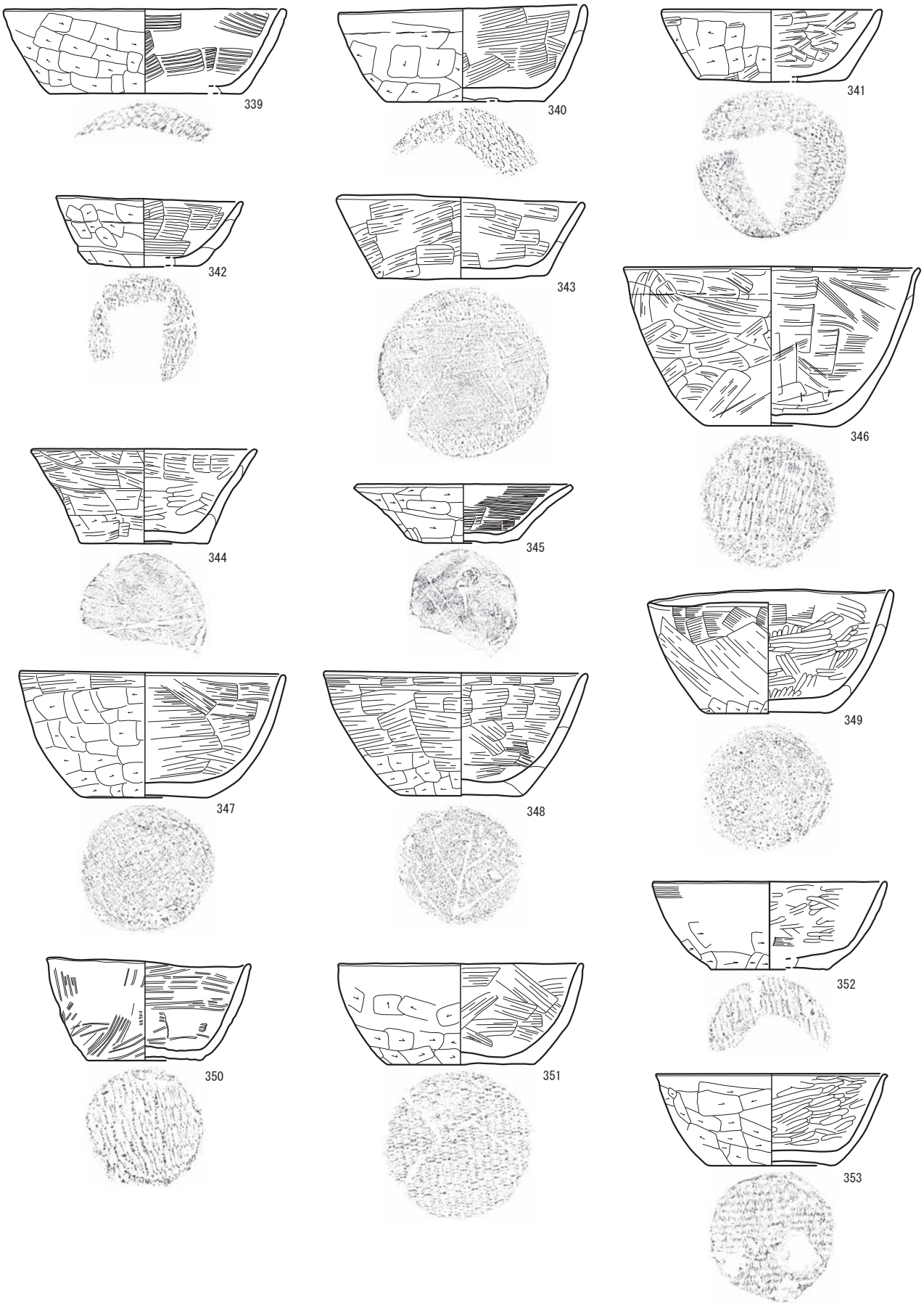


0 5cm
1：3

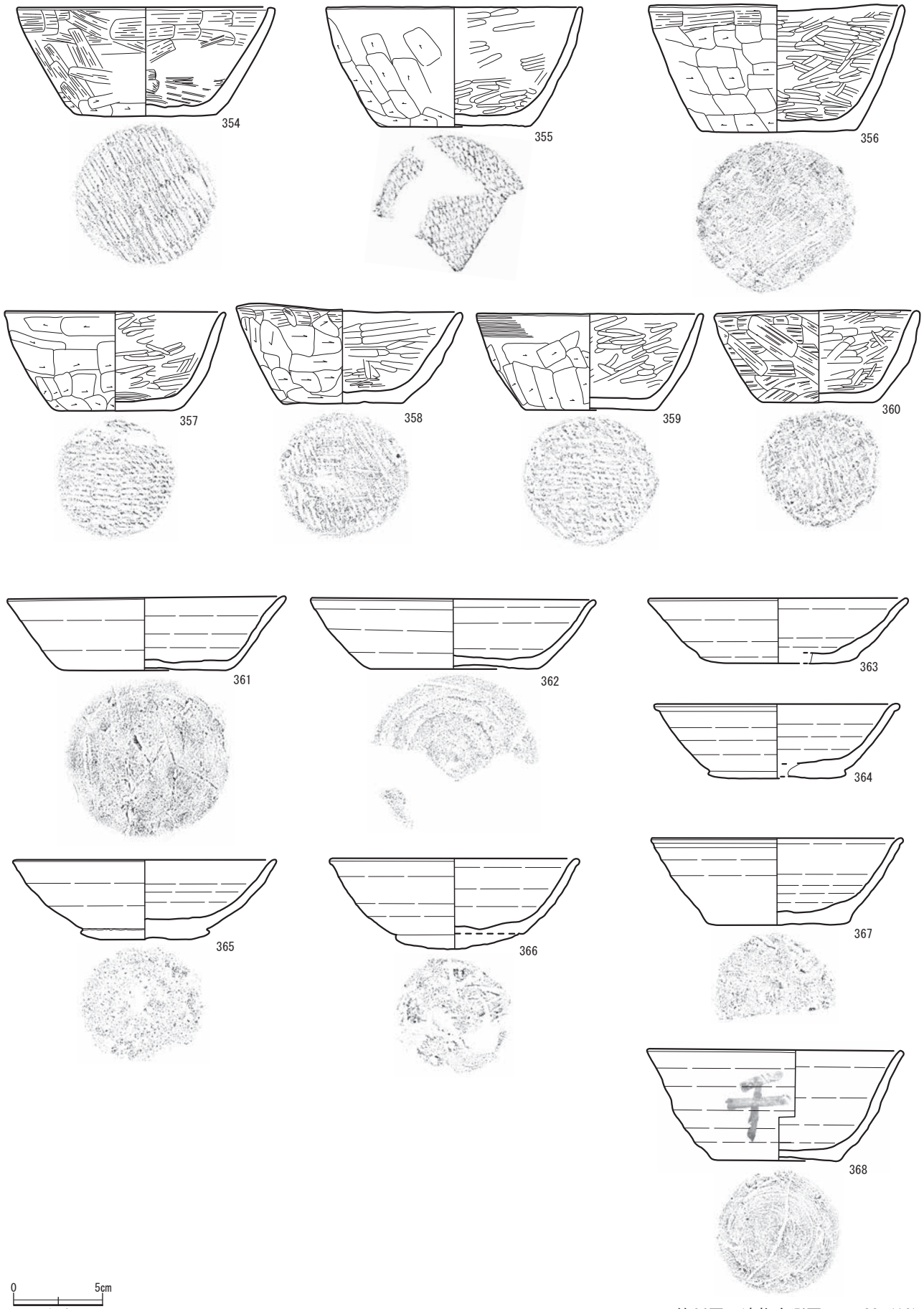
第61図　遺物実測図 ＳＧ23（13）



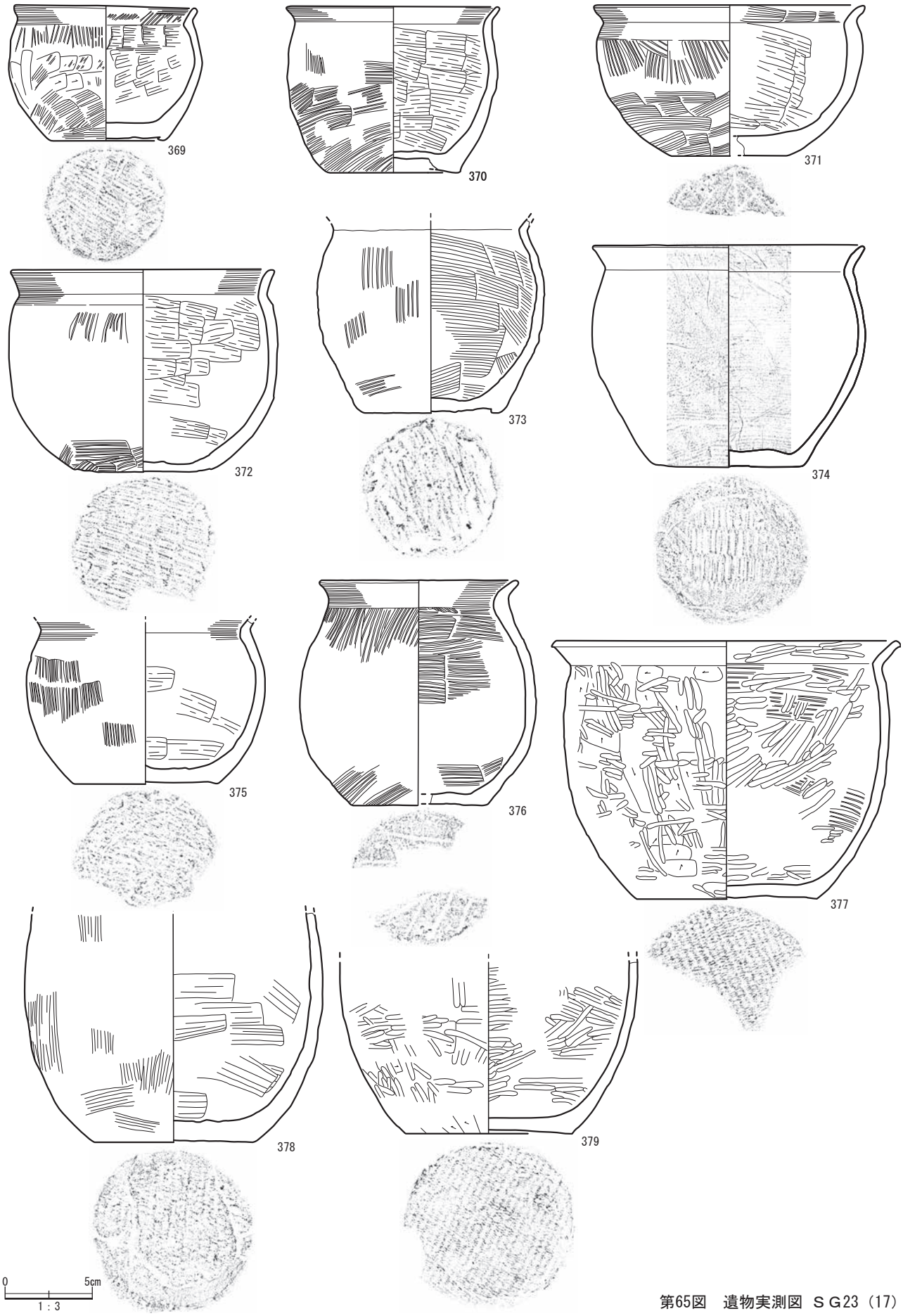
第62図　遺物実測図 ＳＧ23（14）



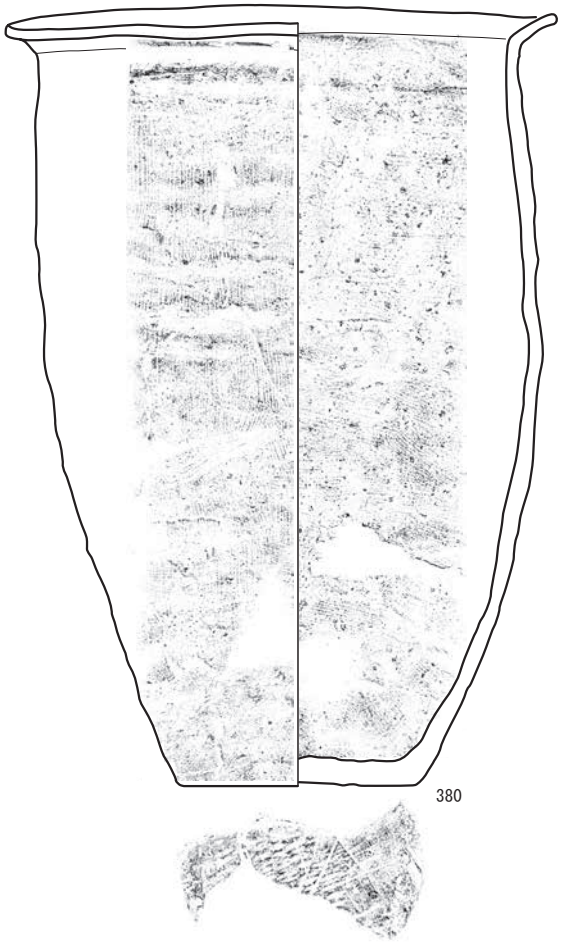
第63図　遺物実測図 ＳＧ23（15）

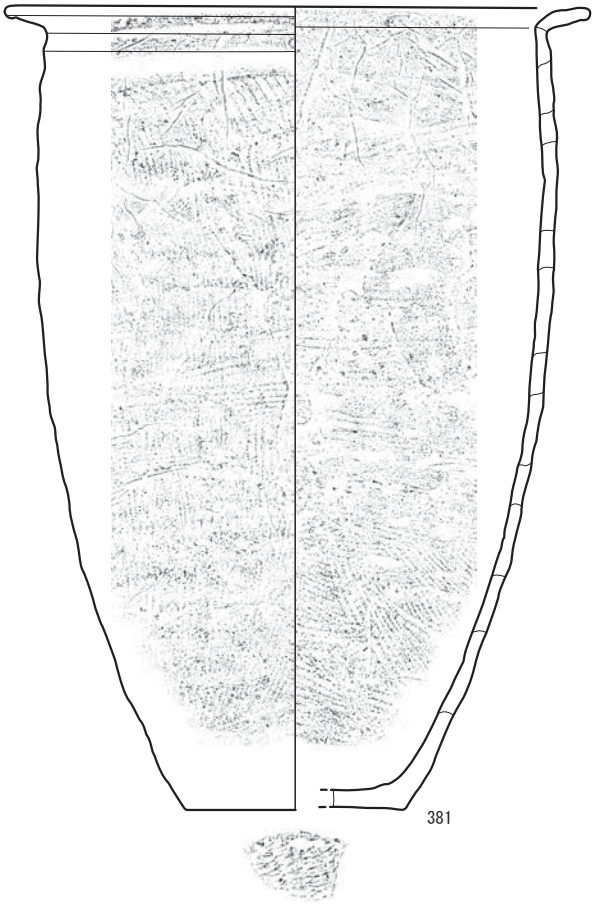


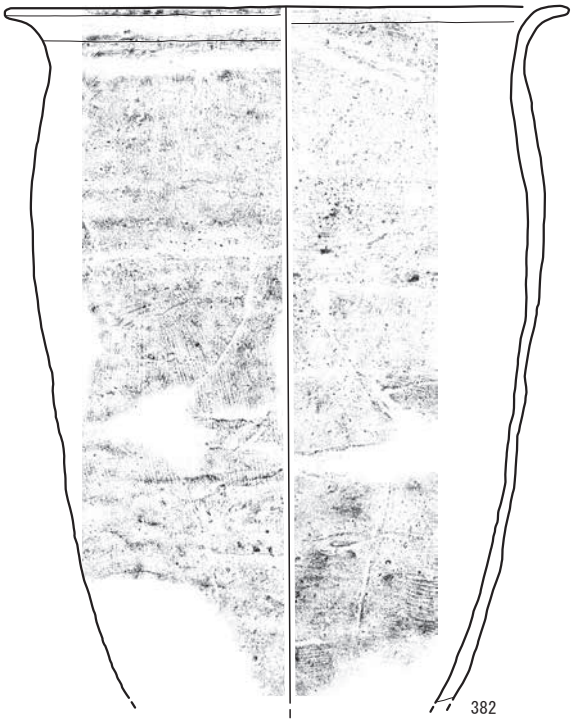
第64図　遺物実測図 ＳＧ23（16）

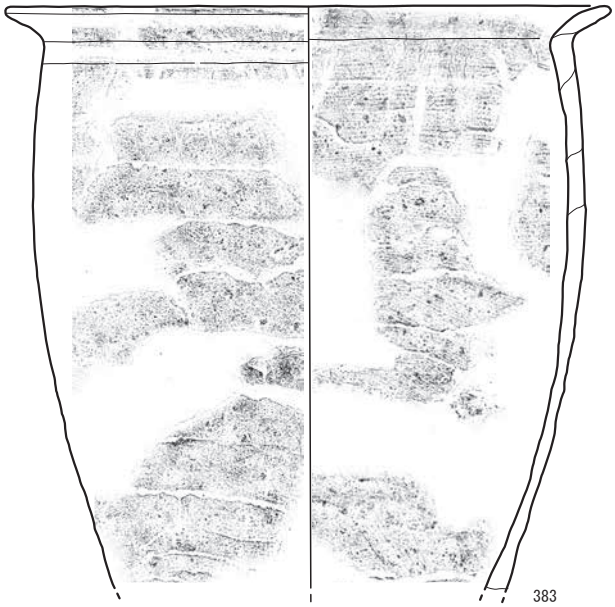


第65図　遺物実測図 ＳＧ23（17）



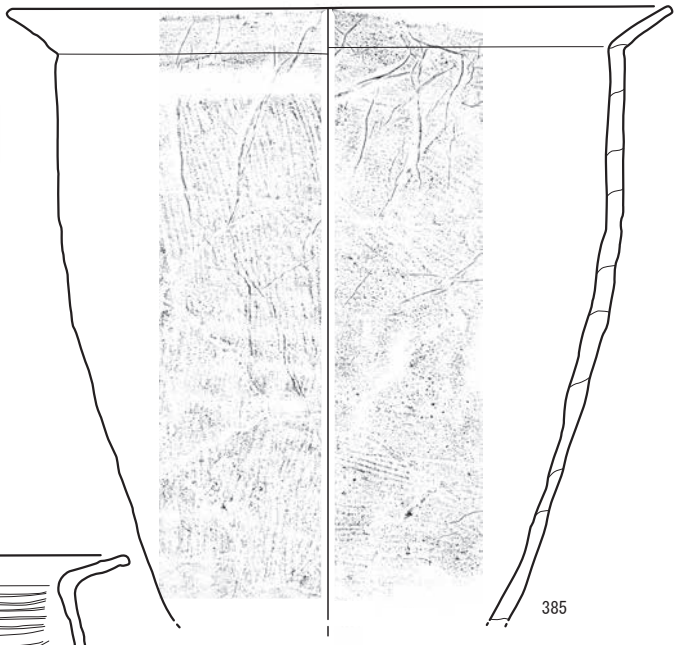


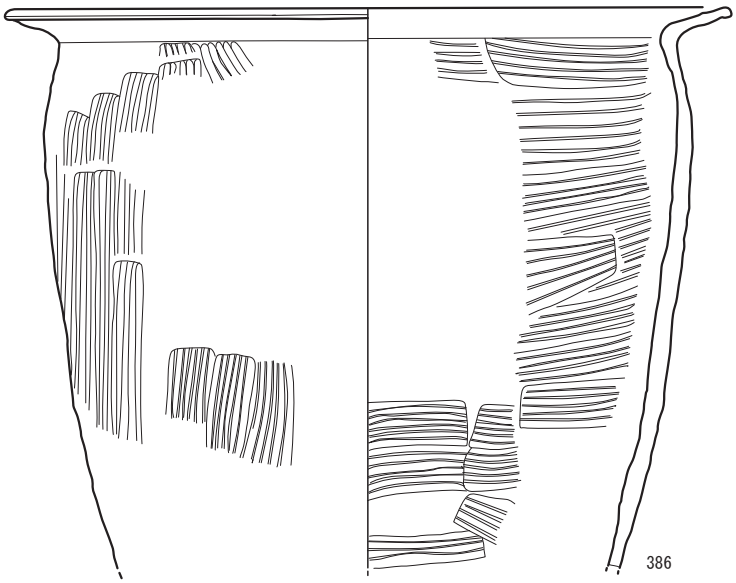


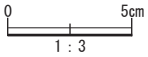


0 5cm
1：3

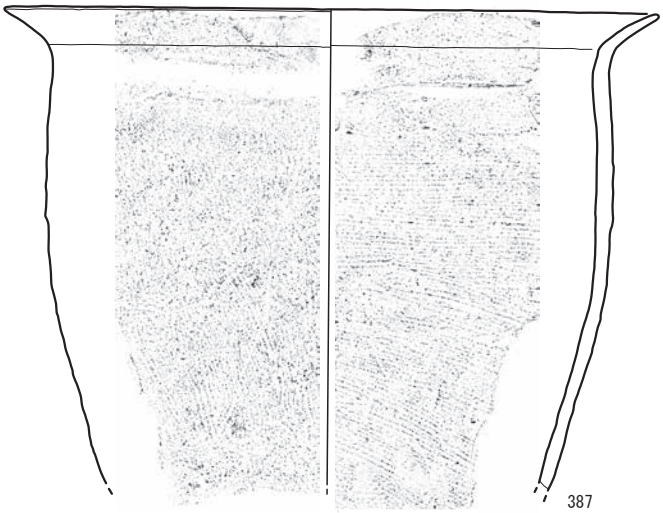
第66図　遺物実測図 ＳＧ23（18）

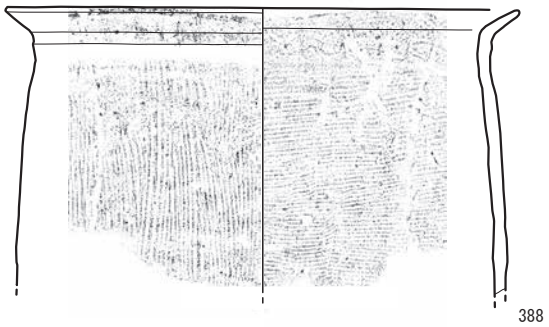


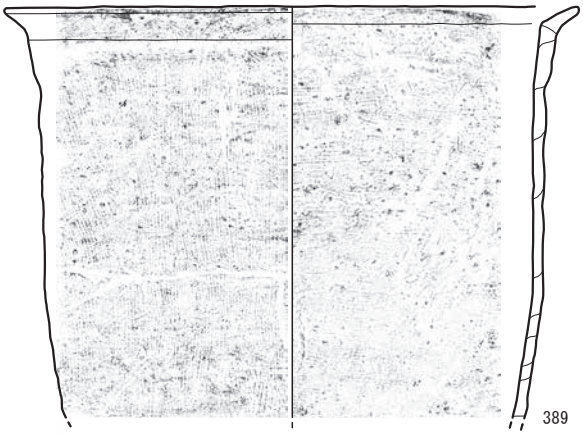


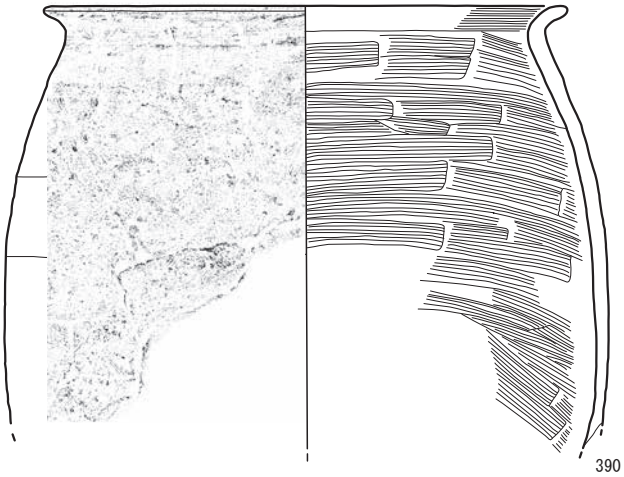


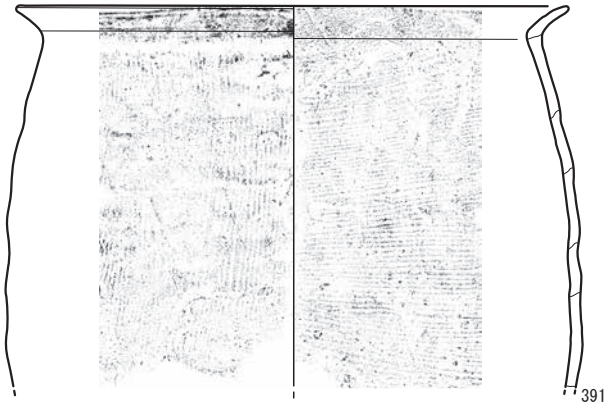
第67図　遺物実測図 ＳＧ23（19）

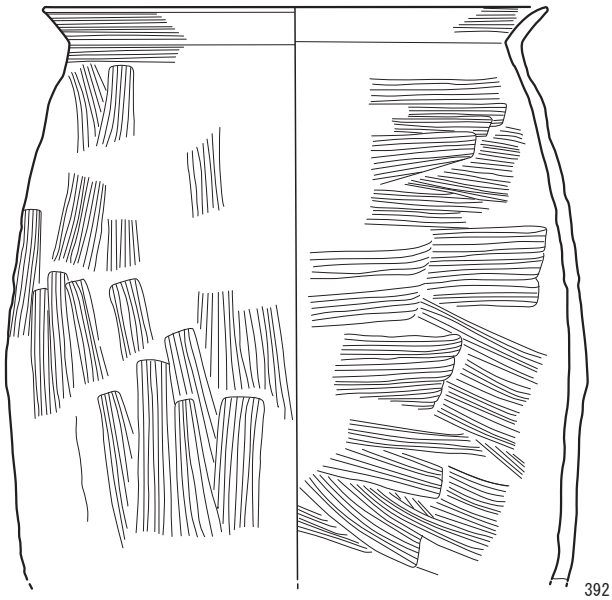


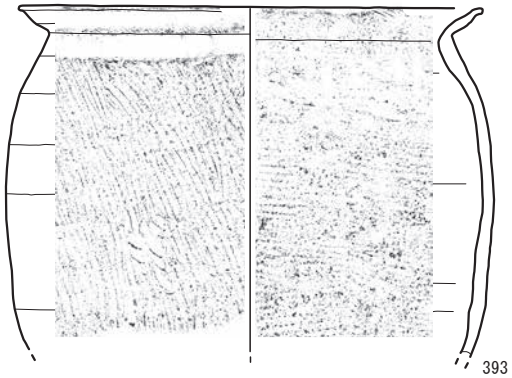






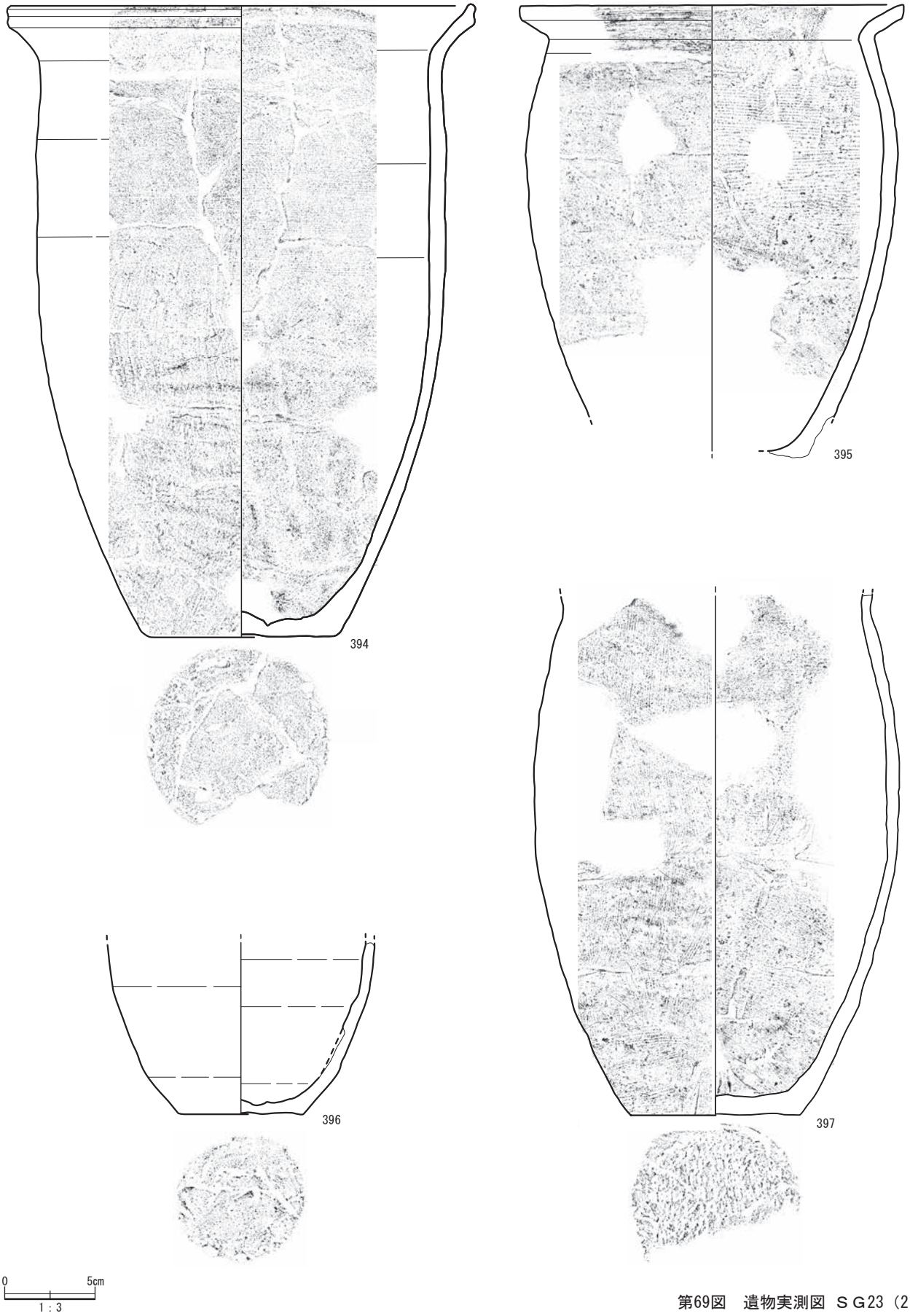




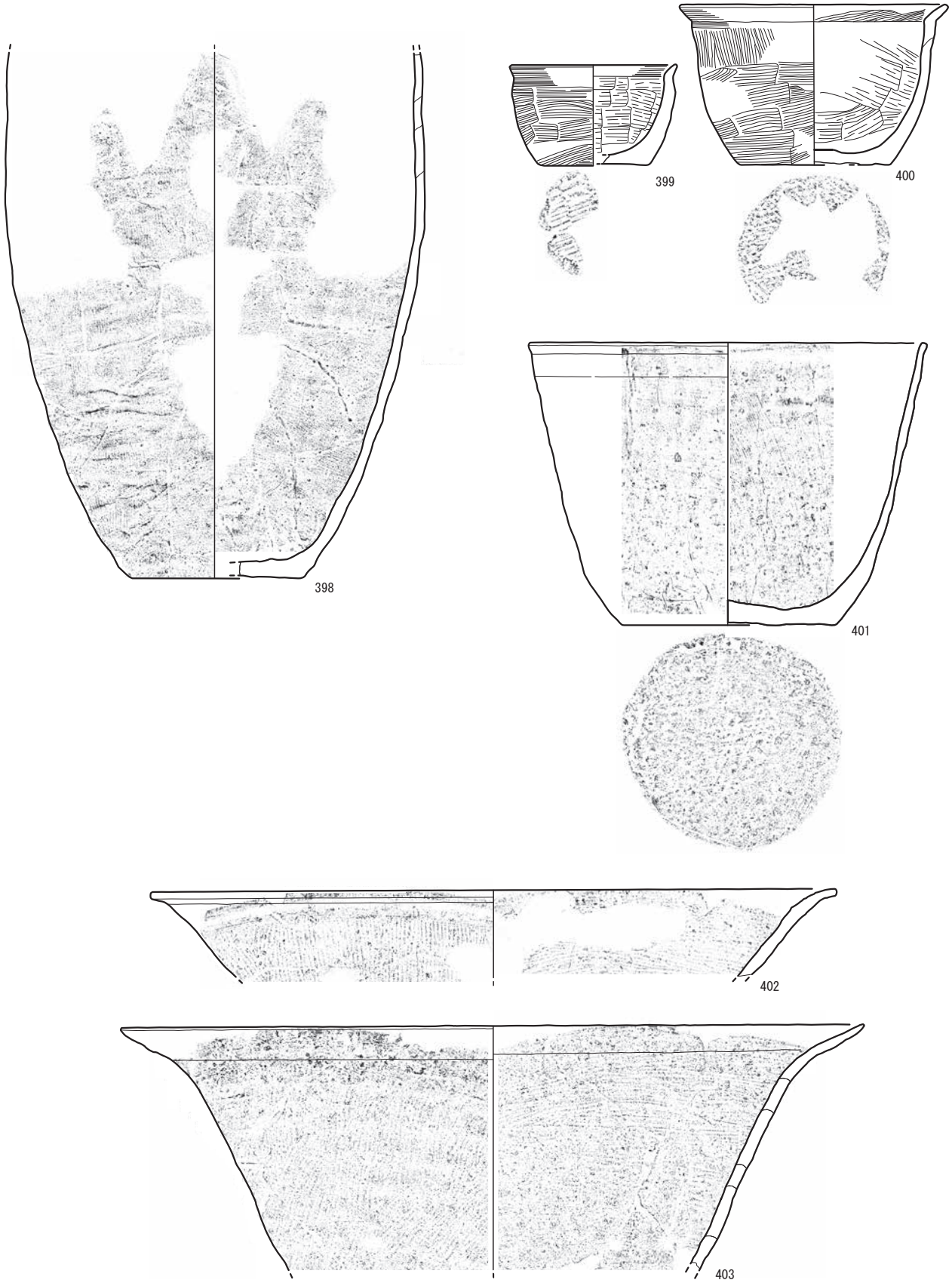


0 5cm
1：3

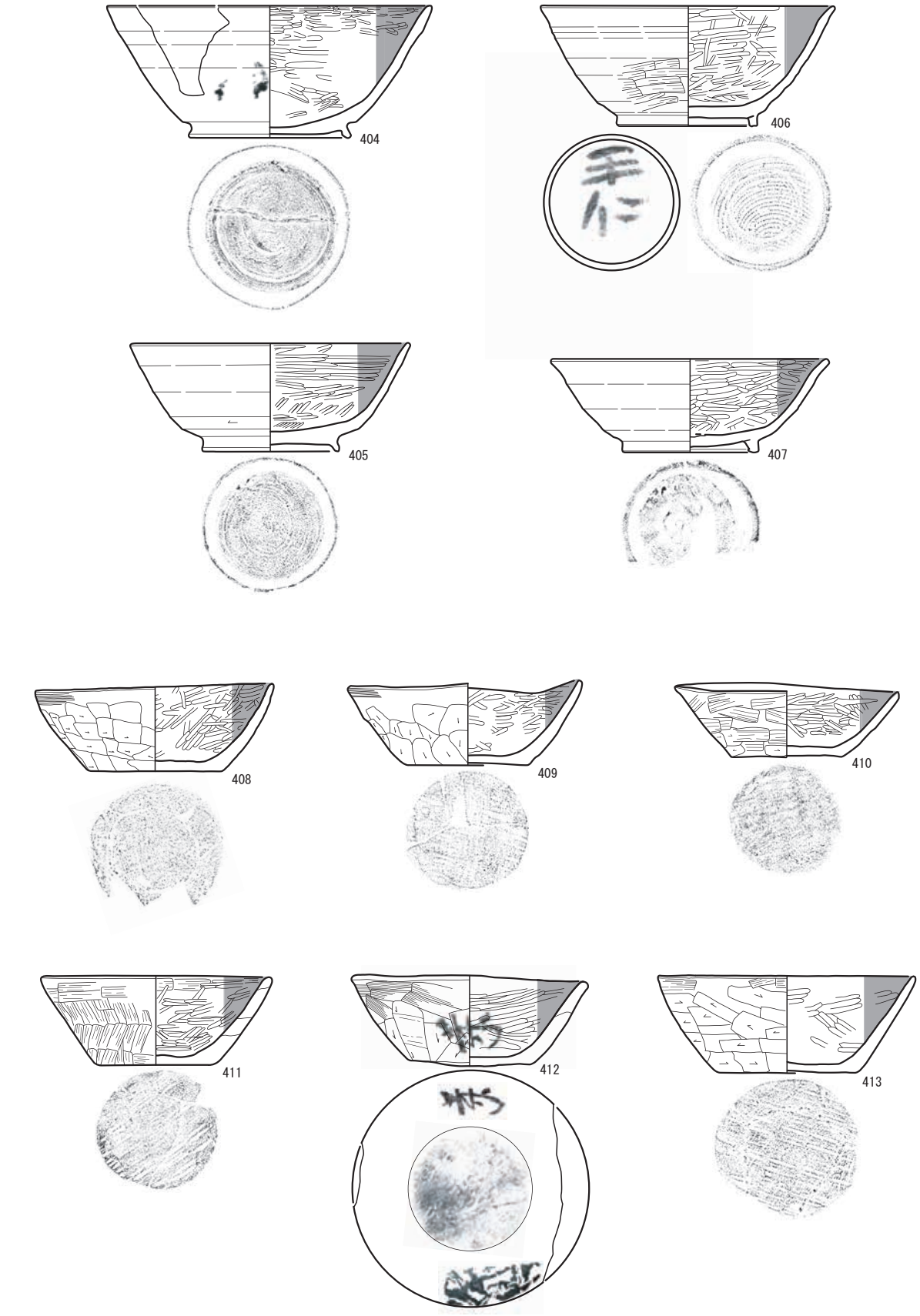
第68図　遺物実測図　ＳＧ23（20）



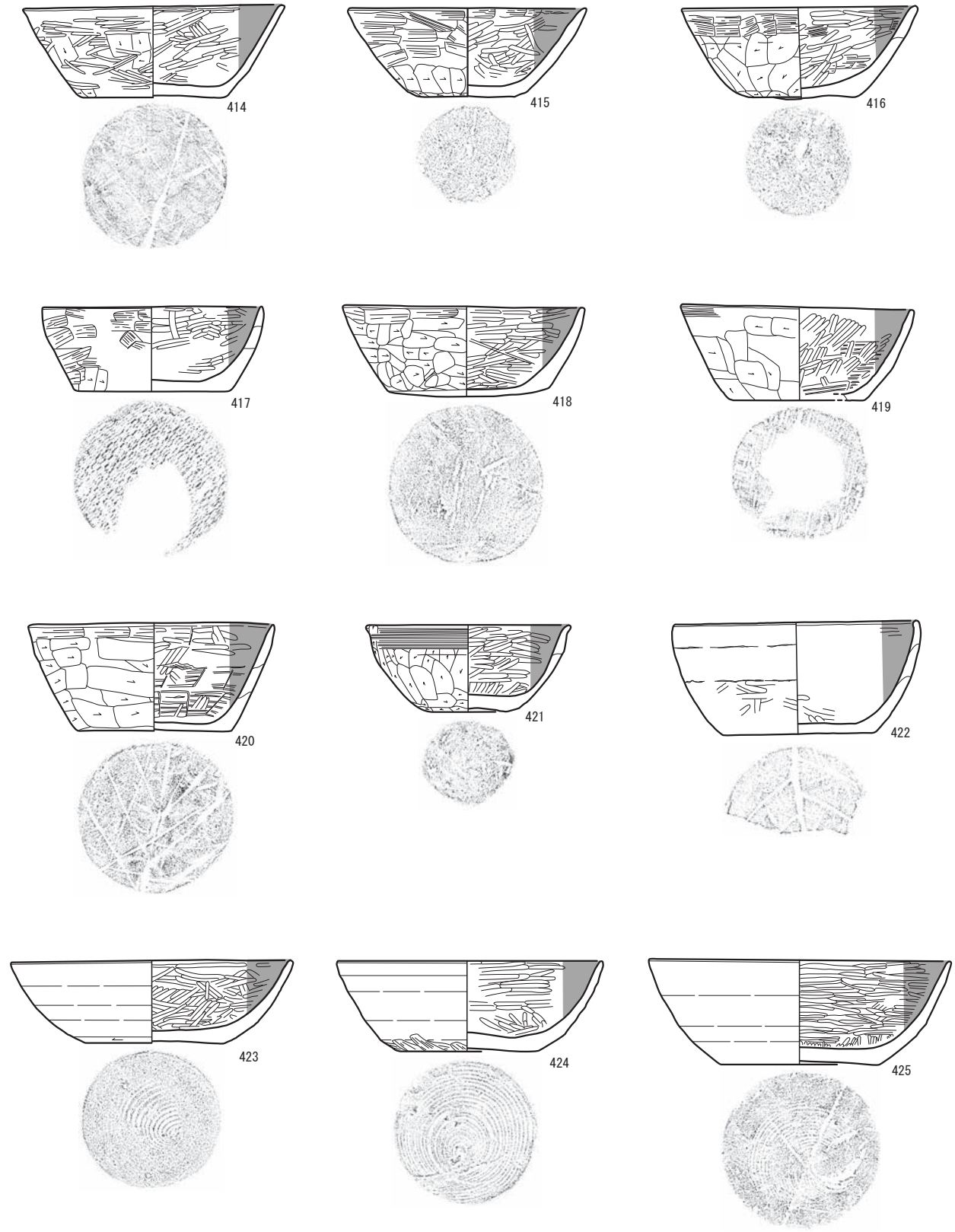
第69図　遺物実測図 ＳＧ23（21）



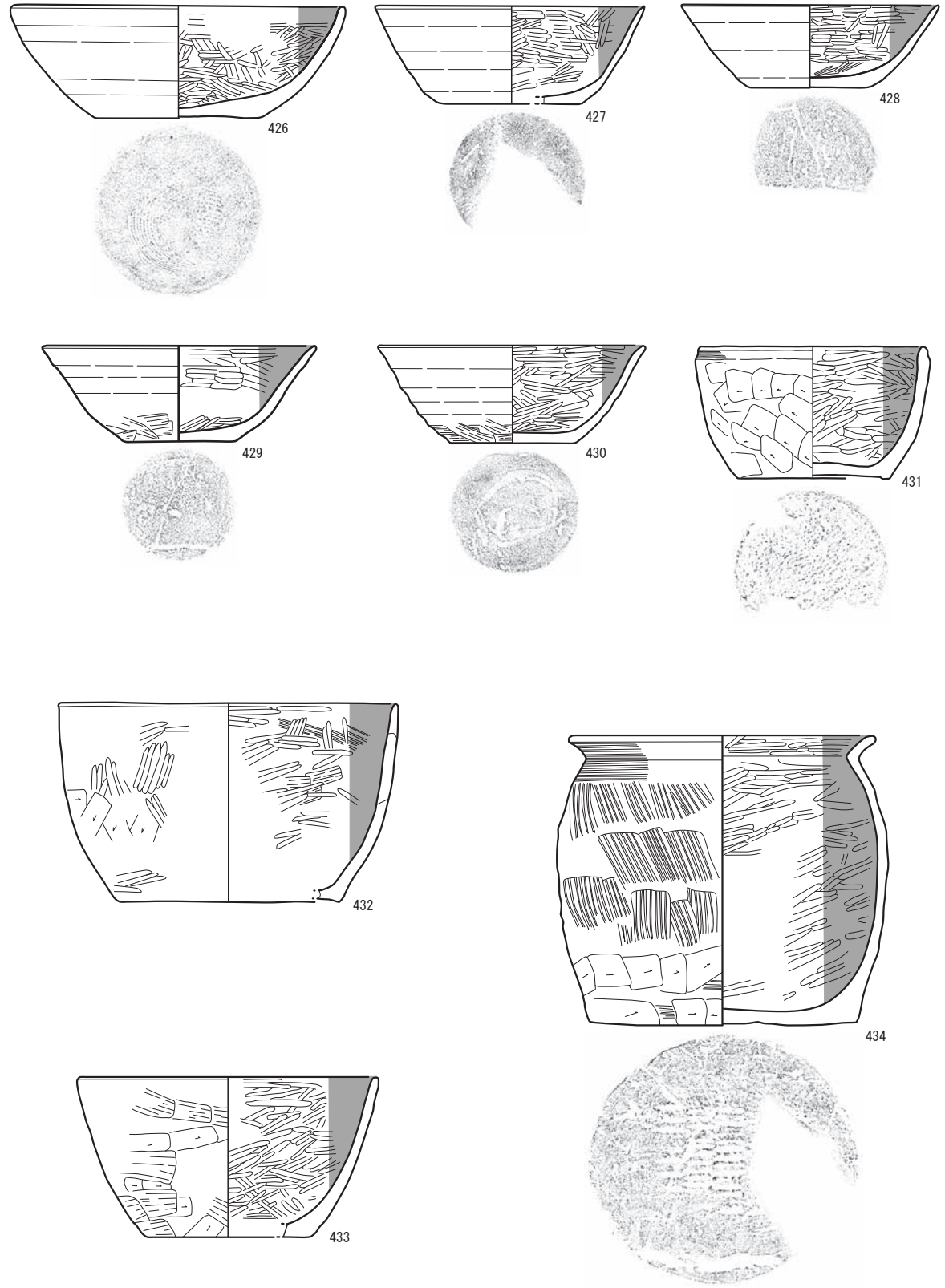
第70図　遺物実測図 ＳＧ23（22）



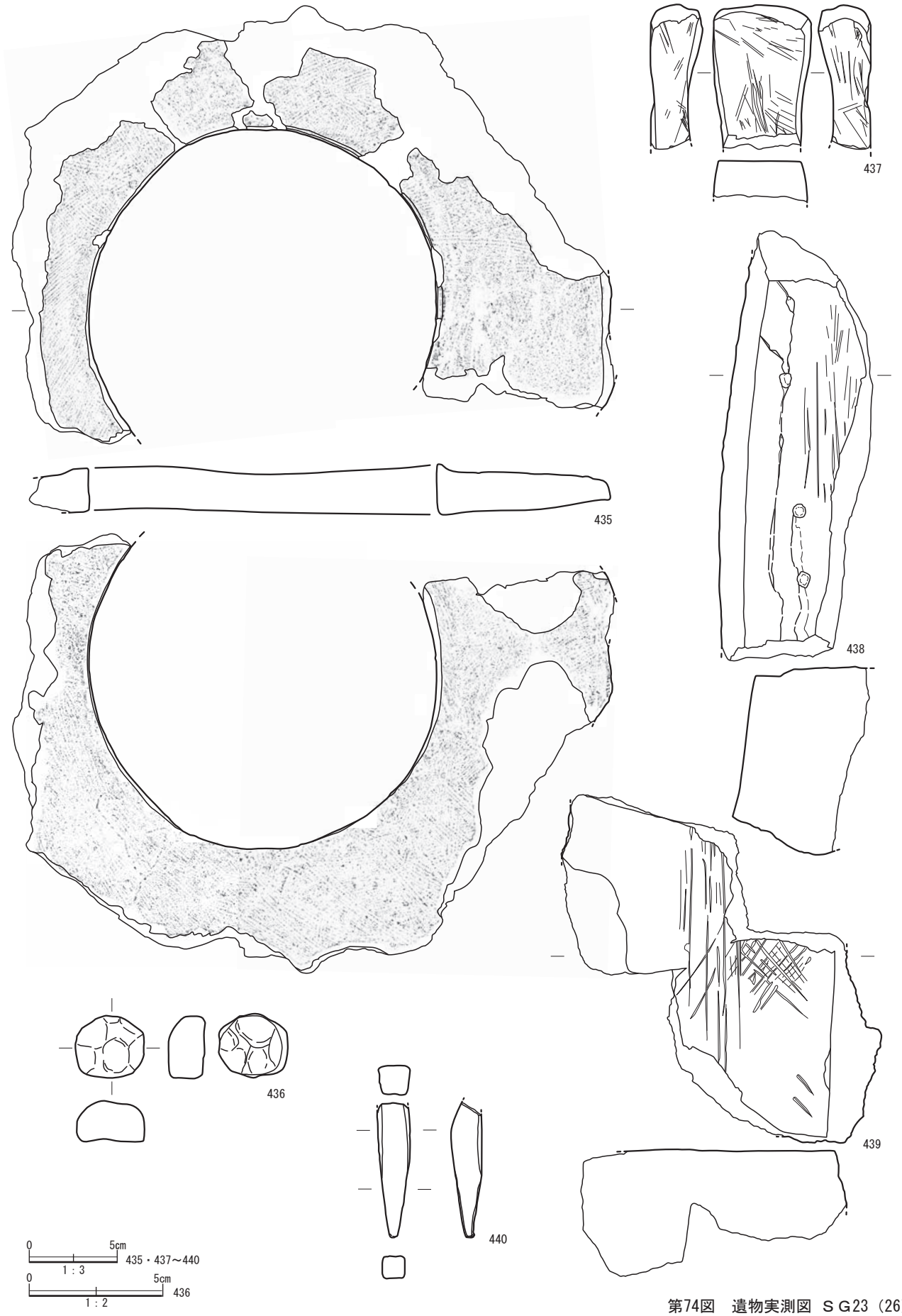
第71図　遺物実測図 ＳＧ23（23）



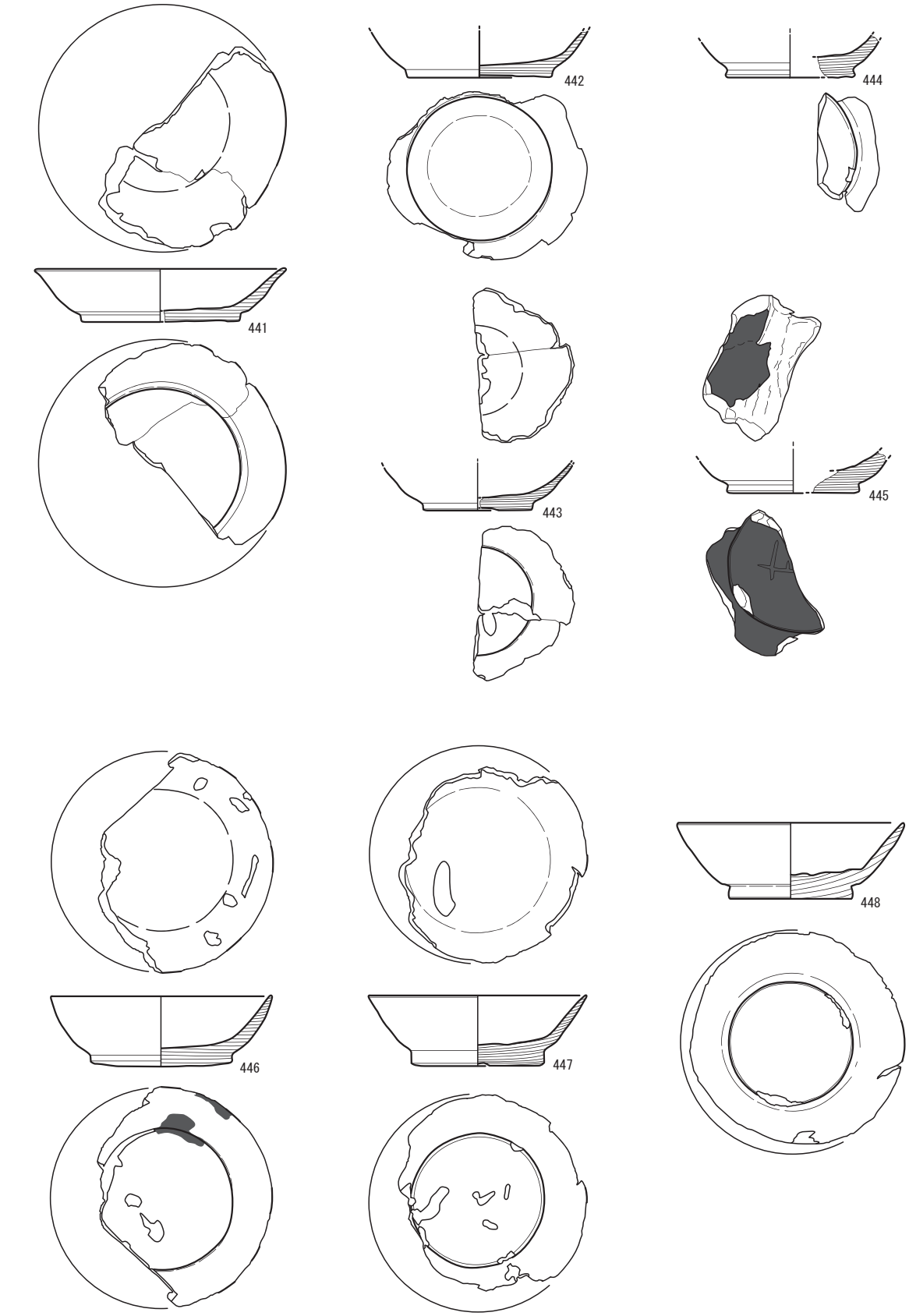
第72図　遺物実測図 ＳＧ23（24）



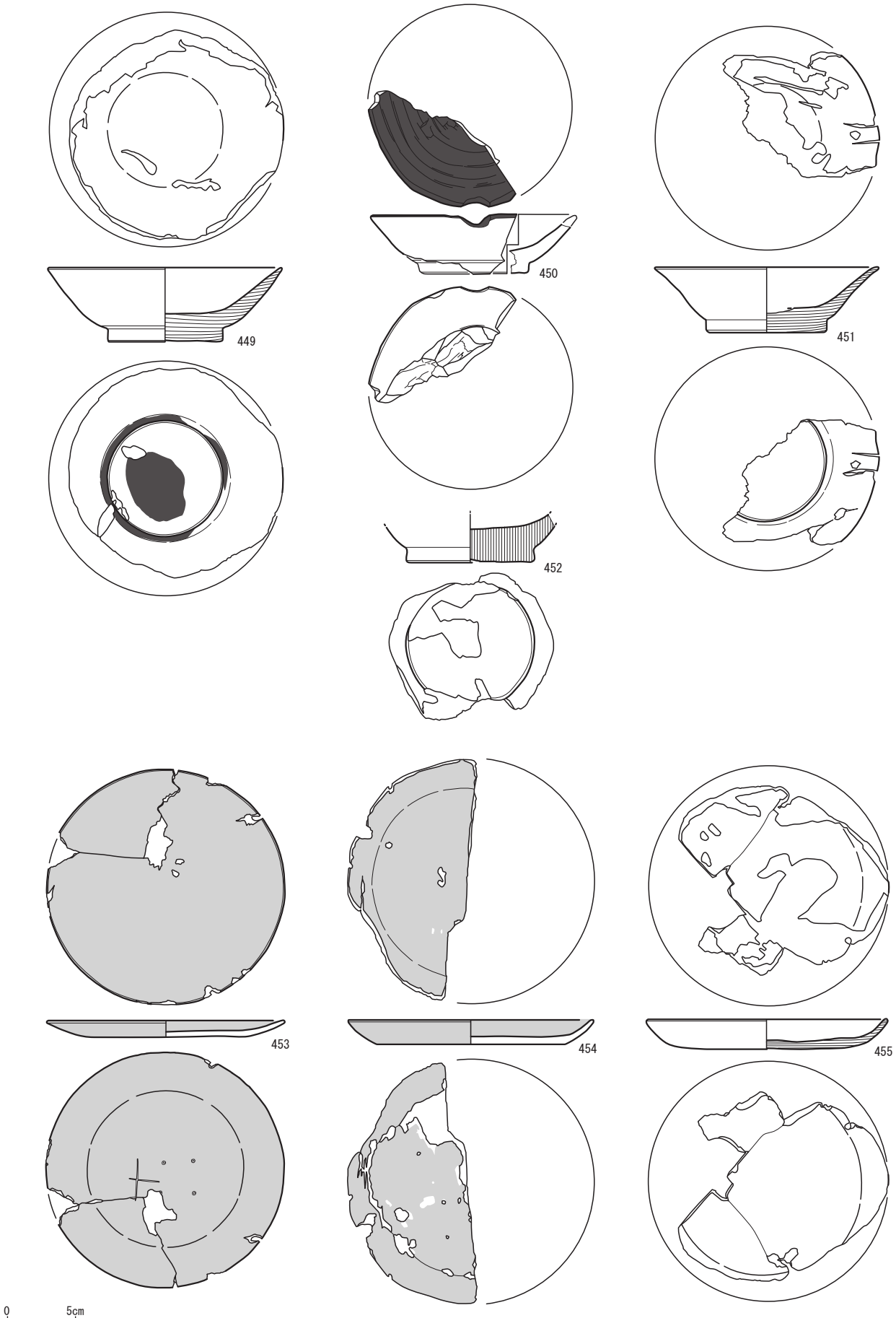
第73図　遺物実測図 ＳＧ23（25）



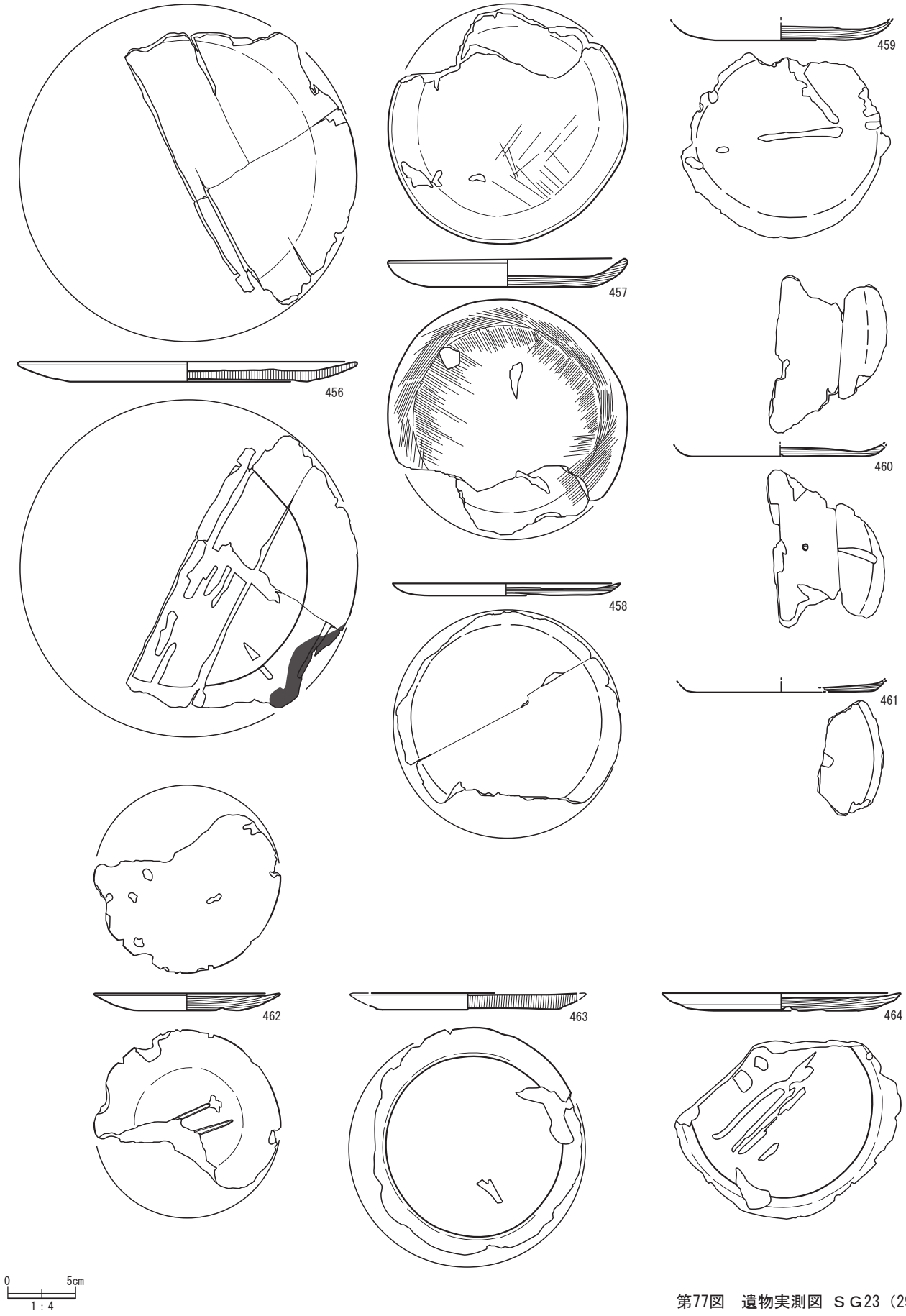
第74図　遺物実測図　ＳＧ23（26）



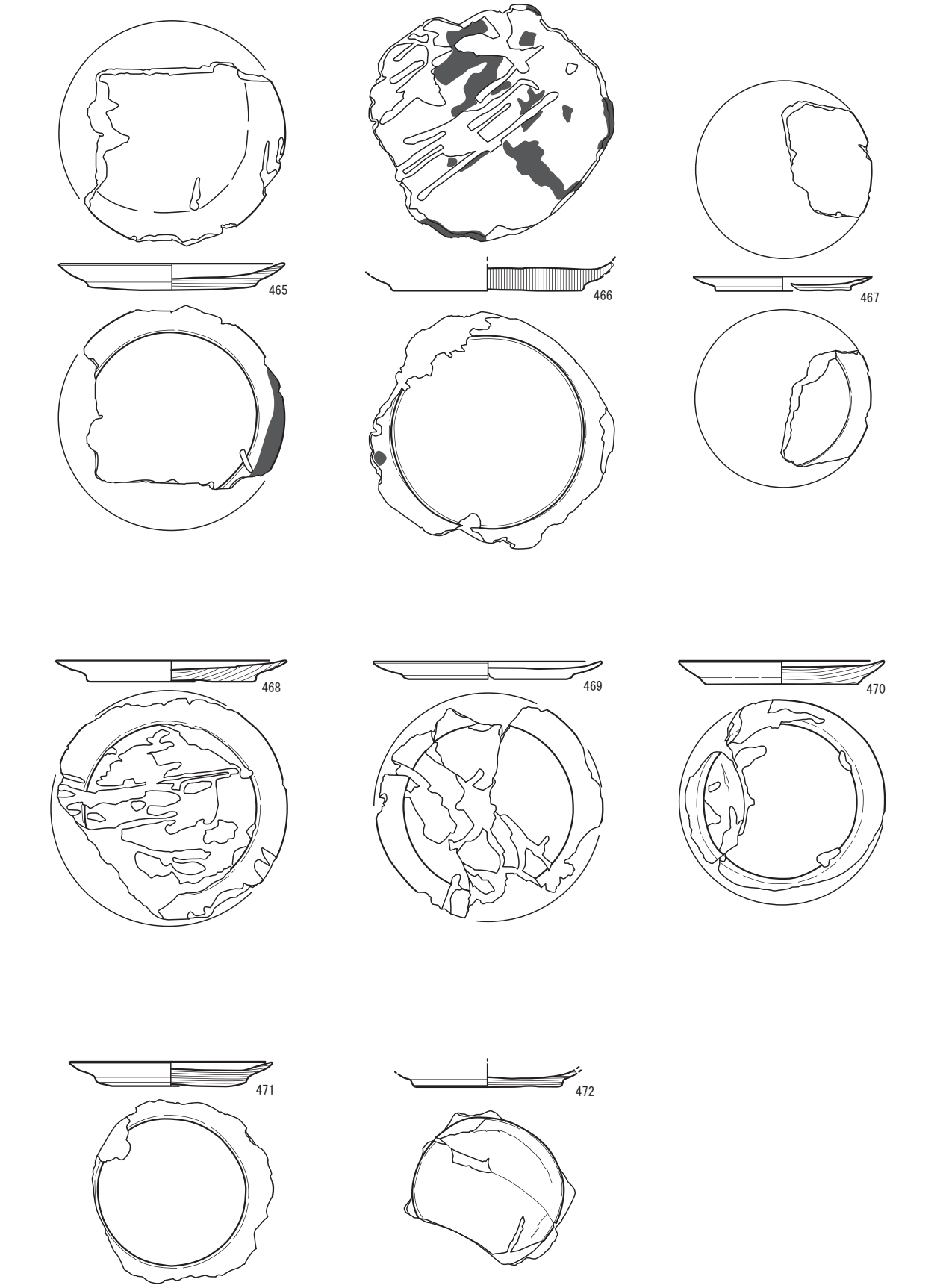
第75図　遺物実測図 ＳＧ23（27）



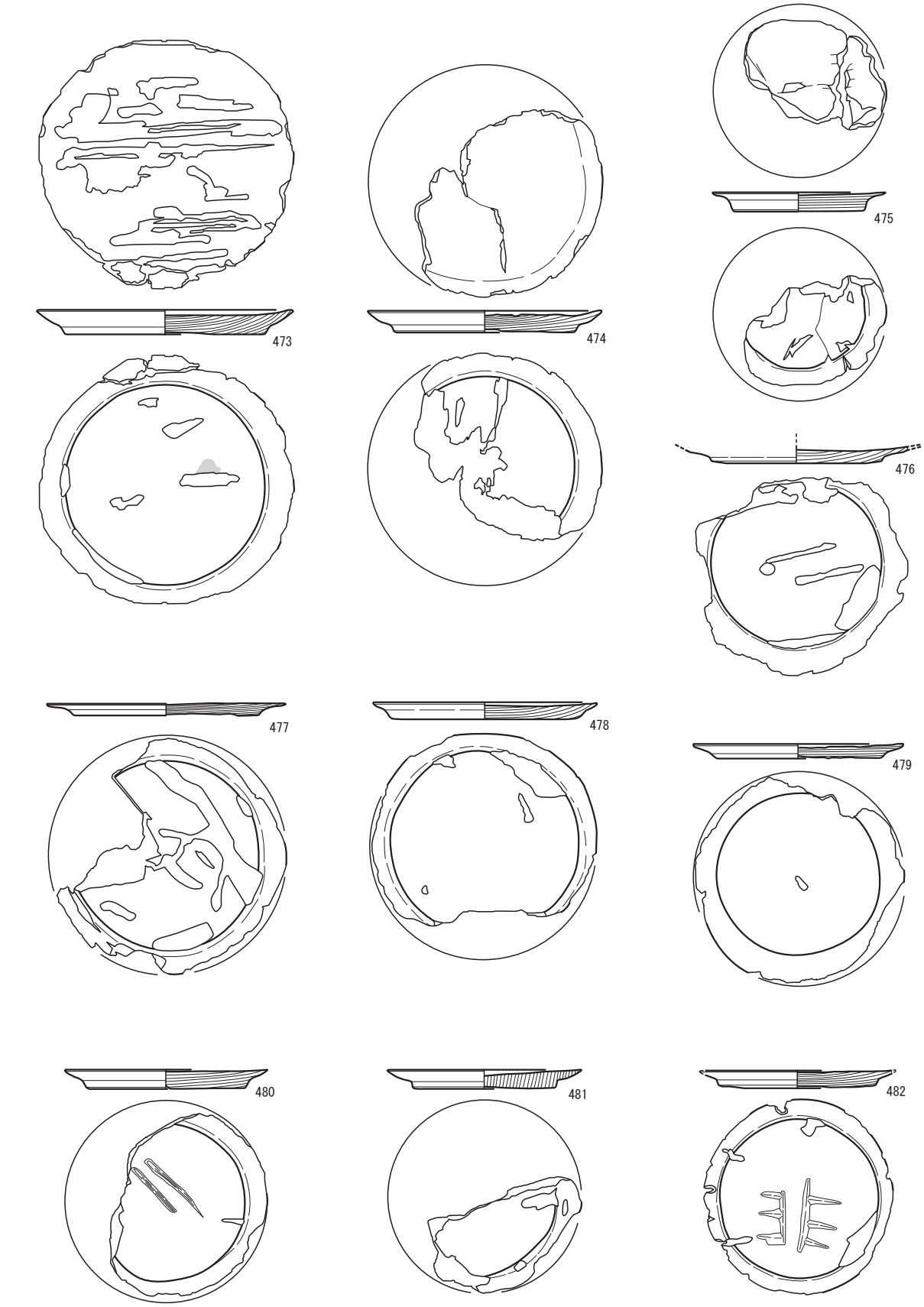
第76図　遺物実測図　ＳＧ23（28）



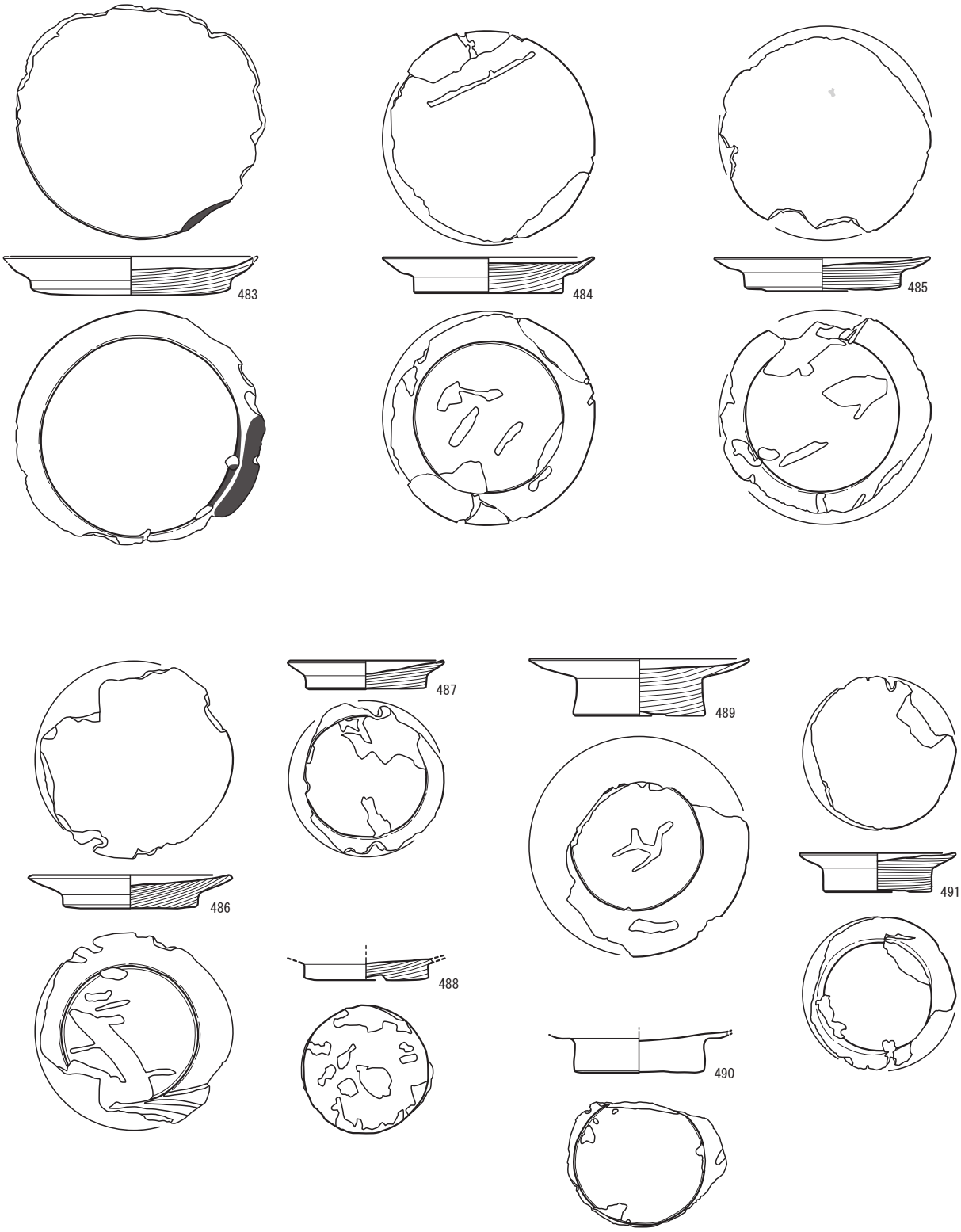
第77図　遺物実測図 ＳＧ23（29）



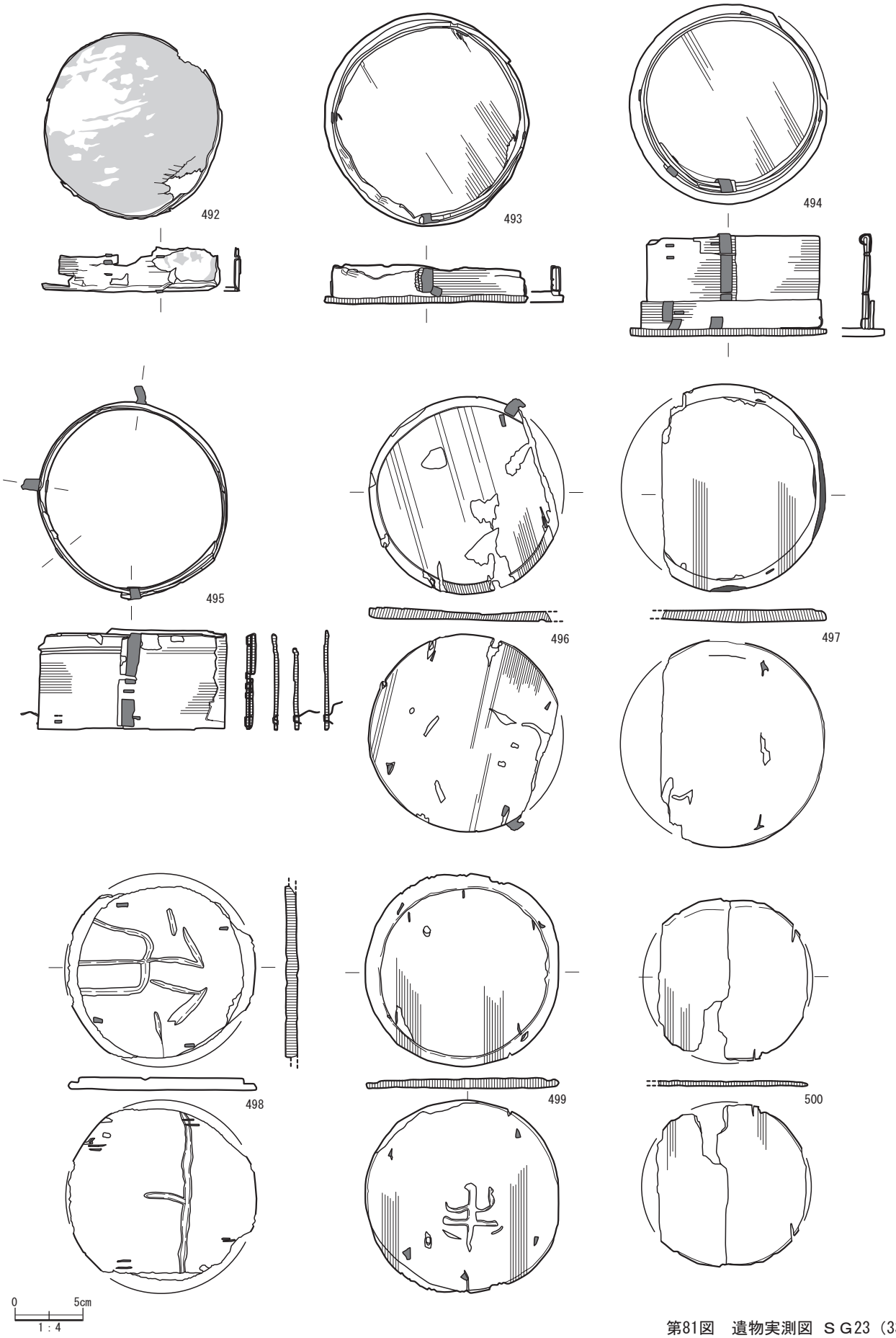
第78図　遺物実測図 ＳＧ23（30）



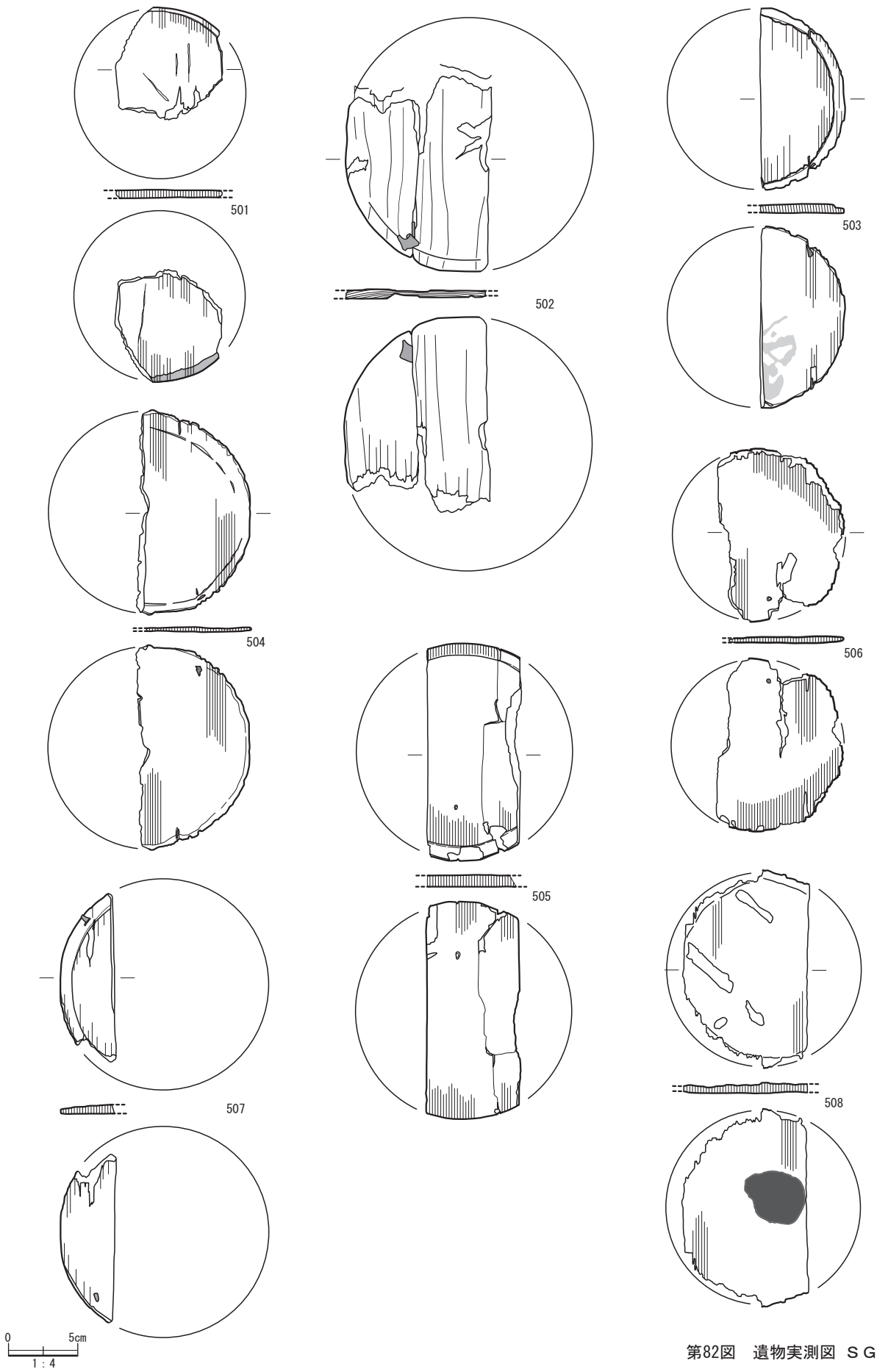
第79図　遺物実測図 ＳＧ23（31）



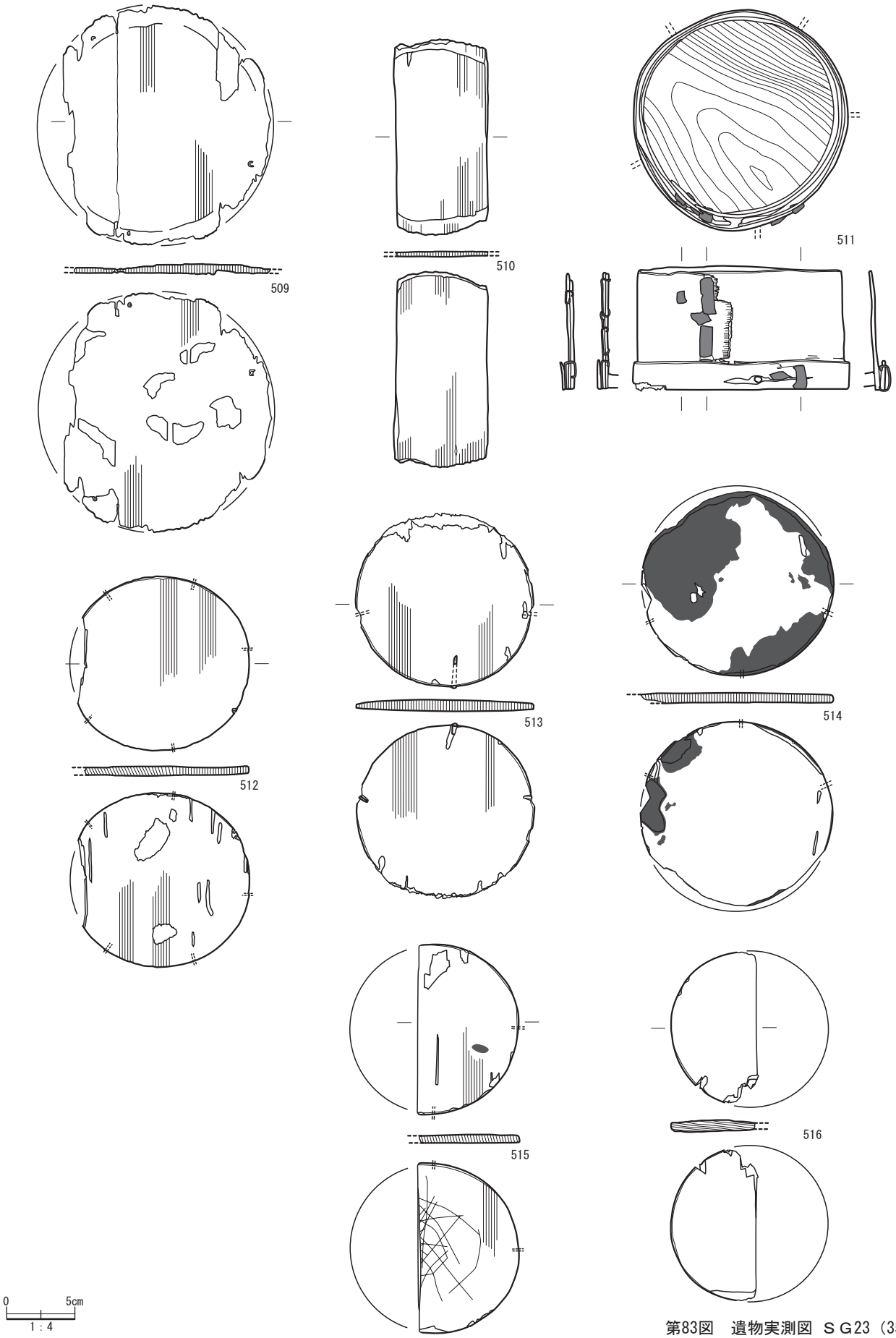
第80図　遺物実測図 ＳＧ23（32）



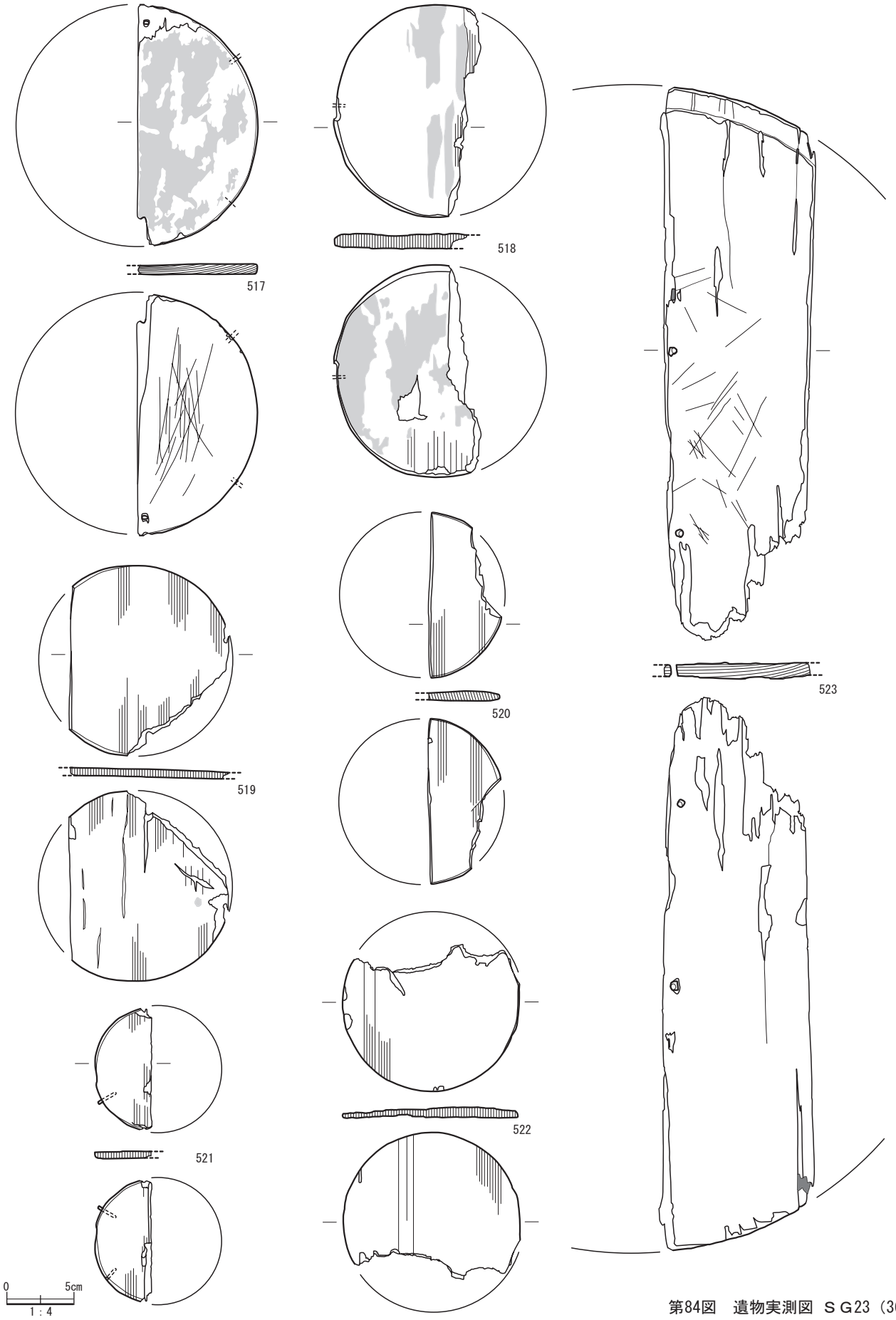
第81図　遺物実測図　ＳＧ23（33）



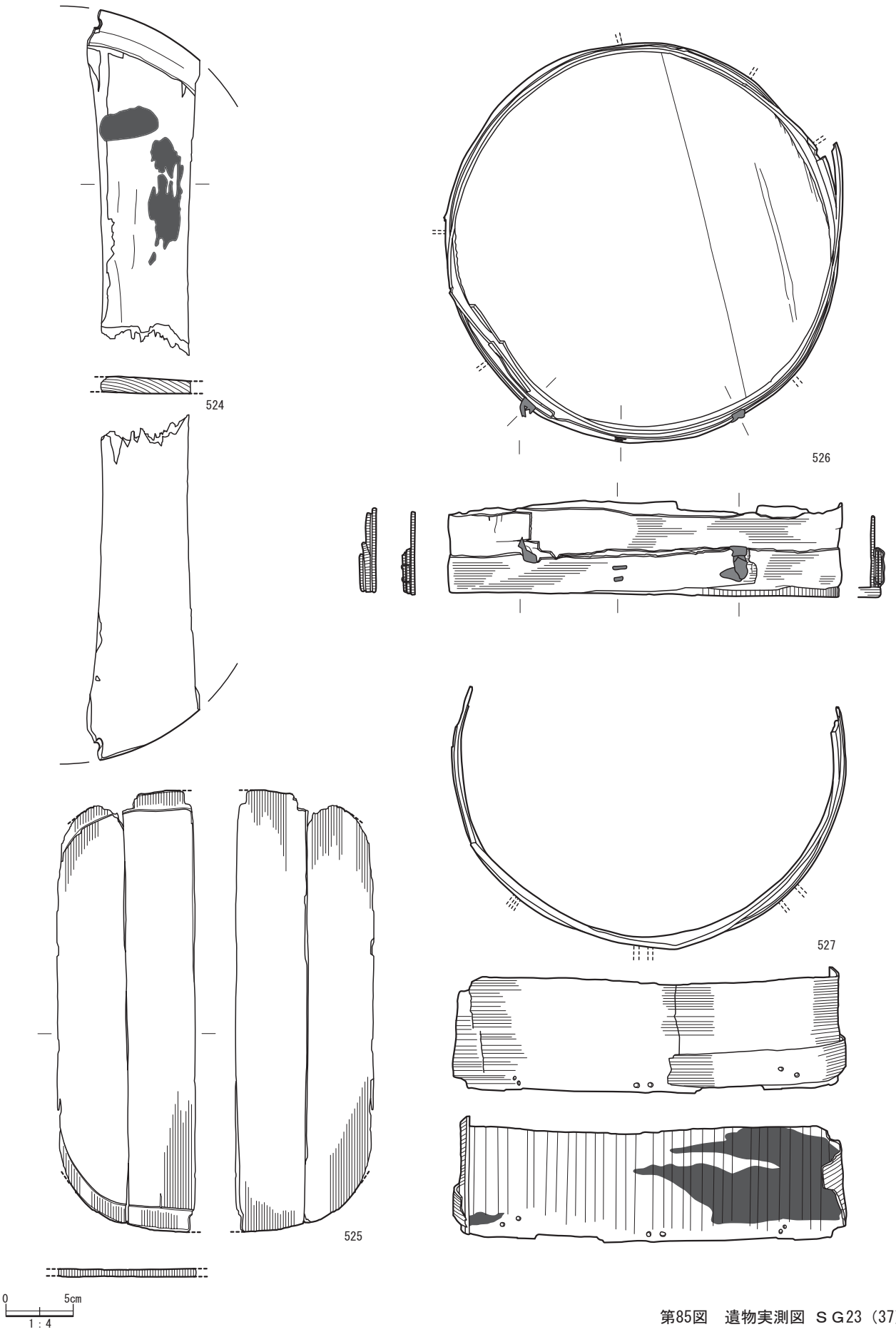
第82図　遺物実測図 ＳＧ23（34）



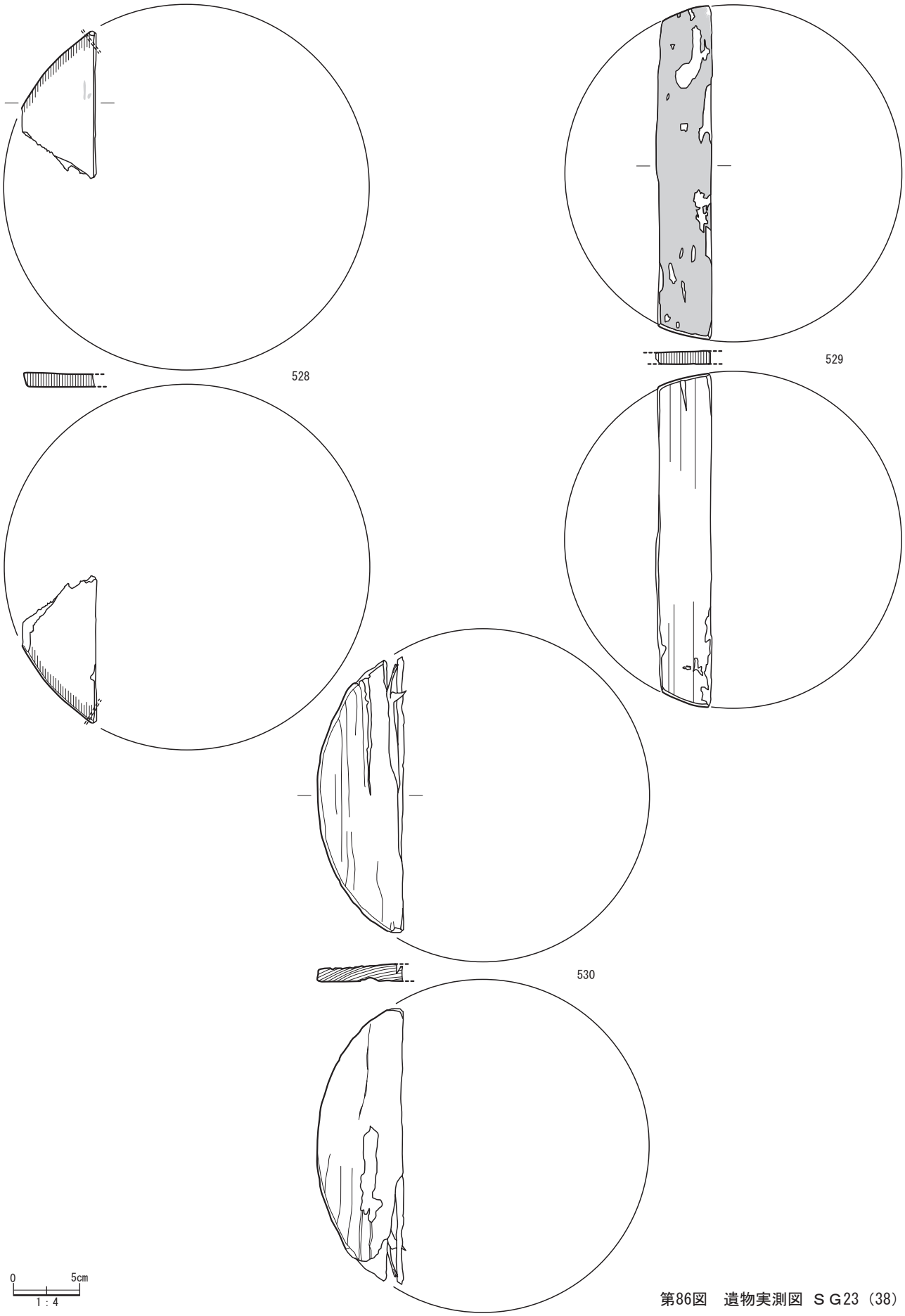
第83図　遺物実測図　ＳＧ23（35）



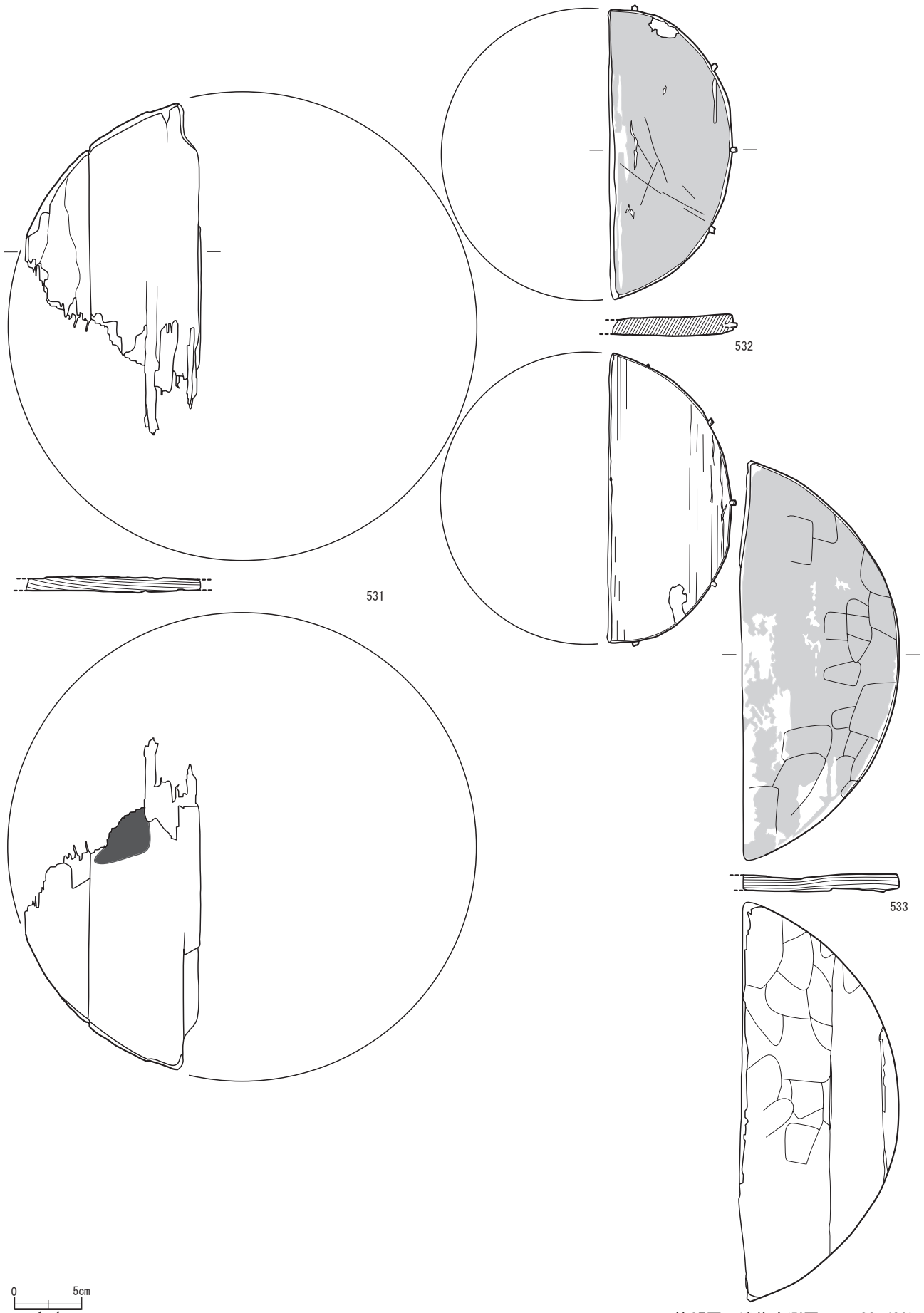
第84図　遺物実測図 ＳＧ23（36）



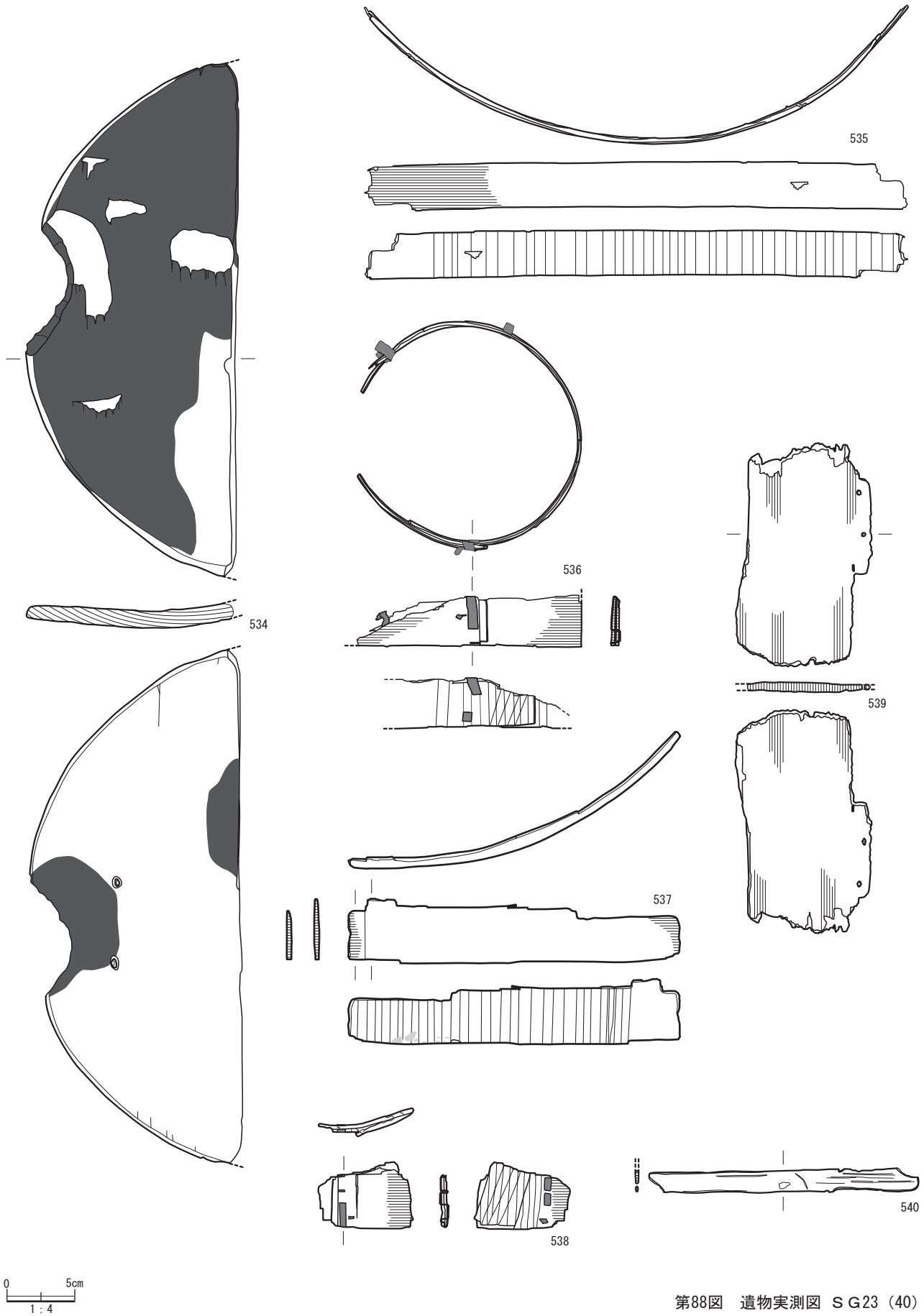
第85図　遺物実測図 ＳＧ23（37）



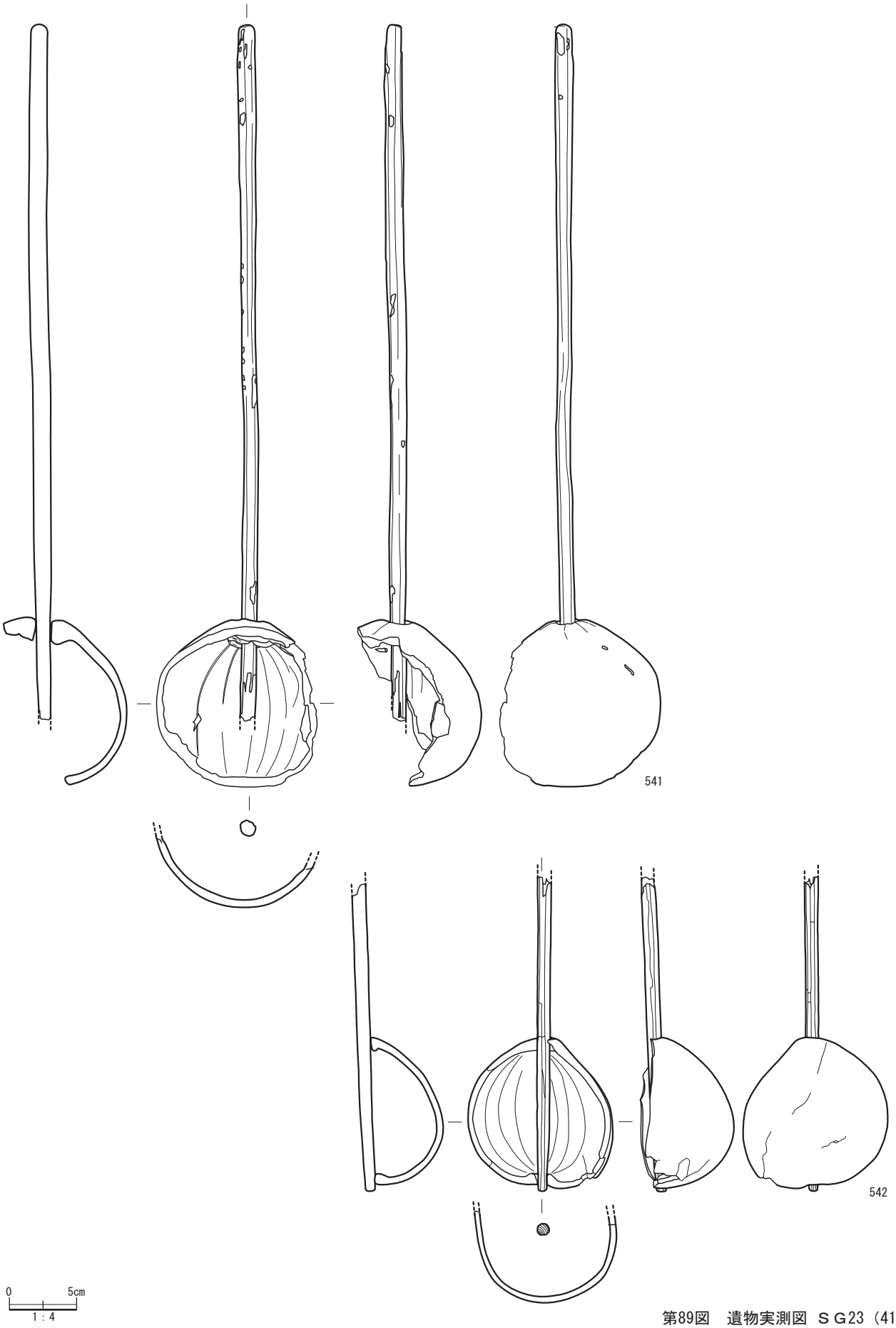
第86図　遺物実測図 ＳＧ23（38）



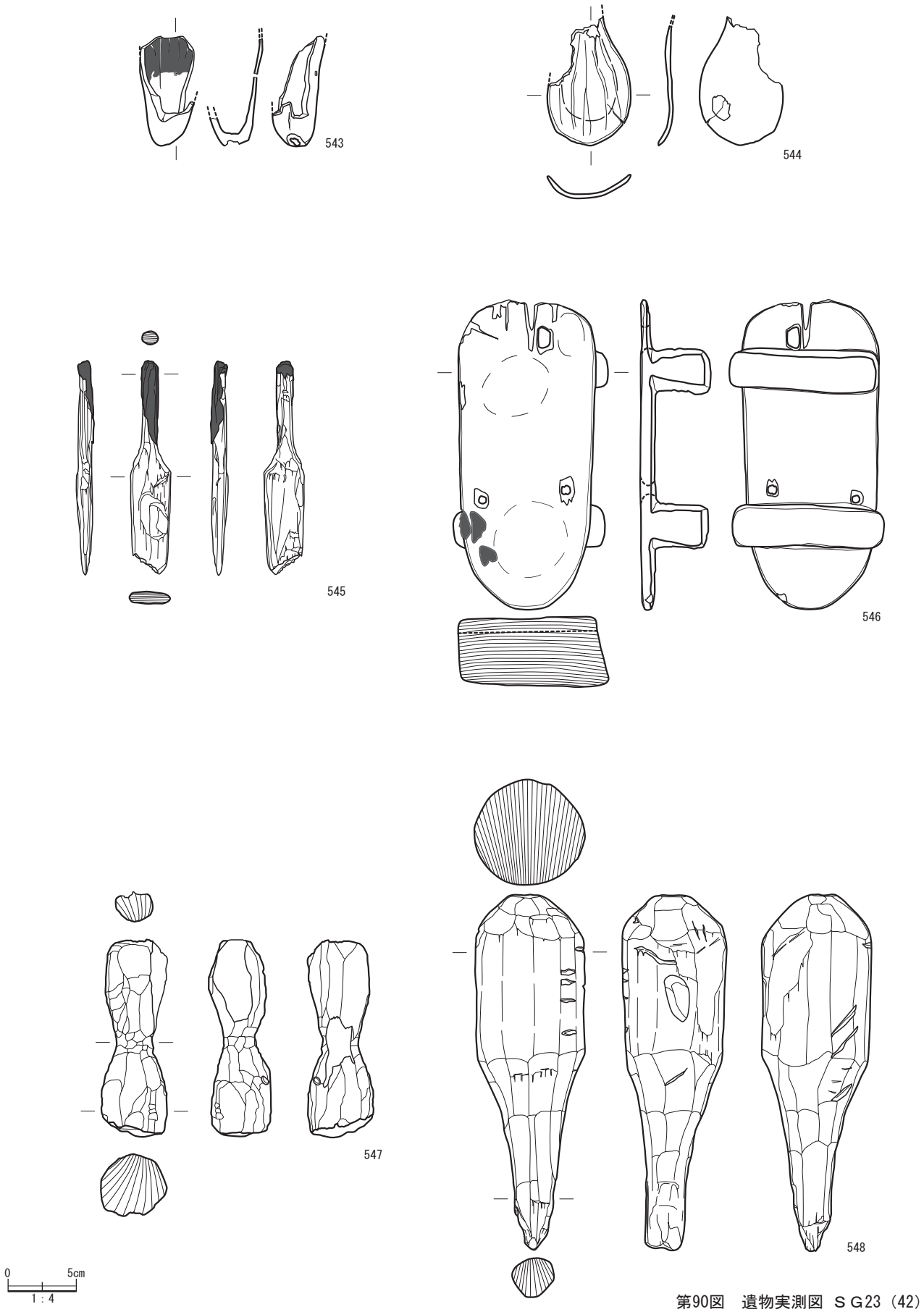
第87図　遺物実測図　ＳＧ23（39）



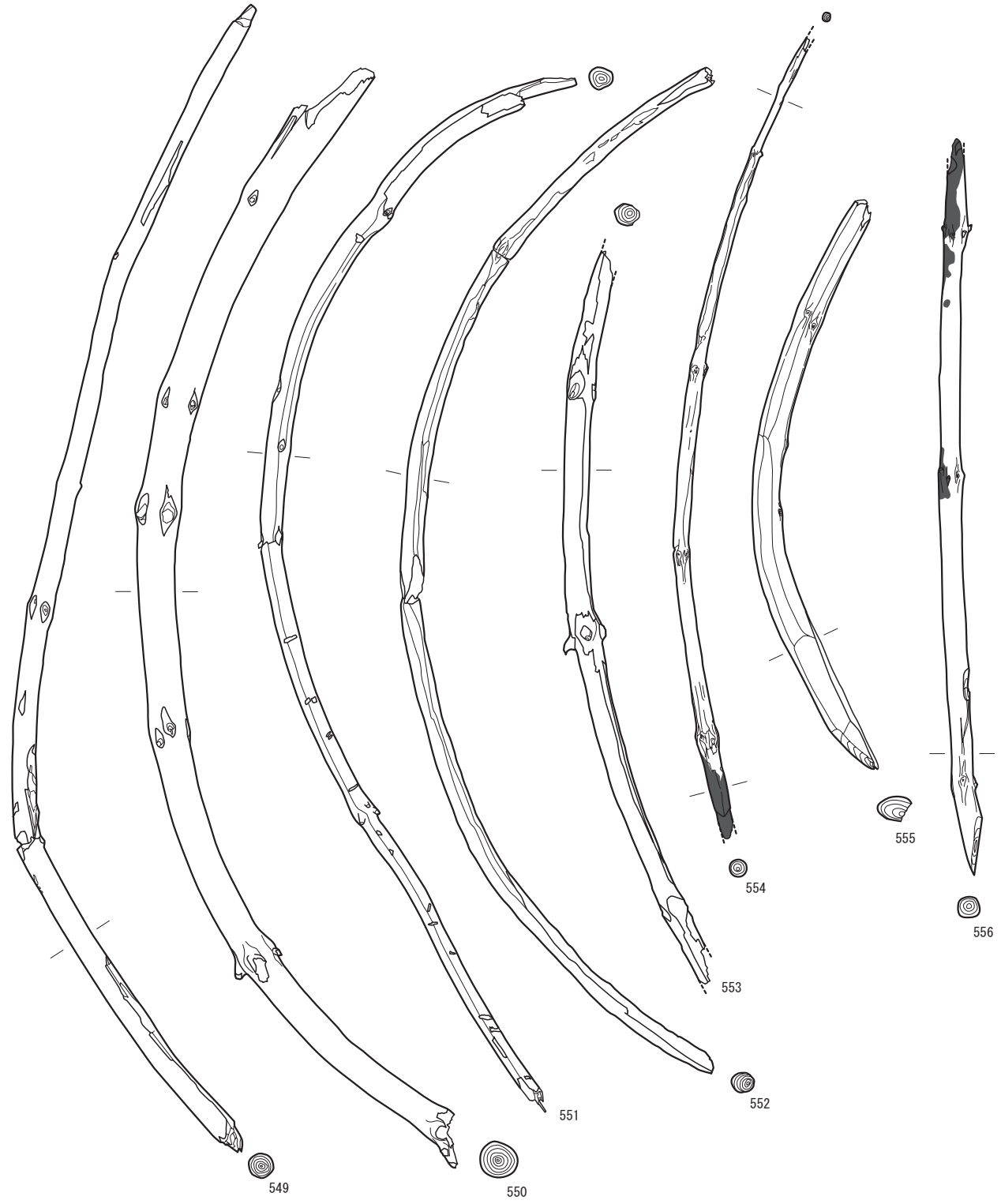
第88図　遺物実測図 ＳＧ23（40）



第89図　遺物実測図 ＳＧ23（41）

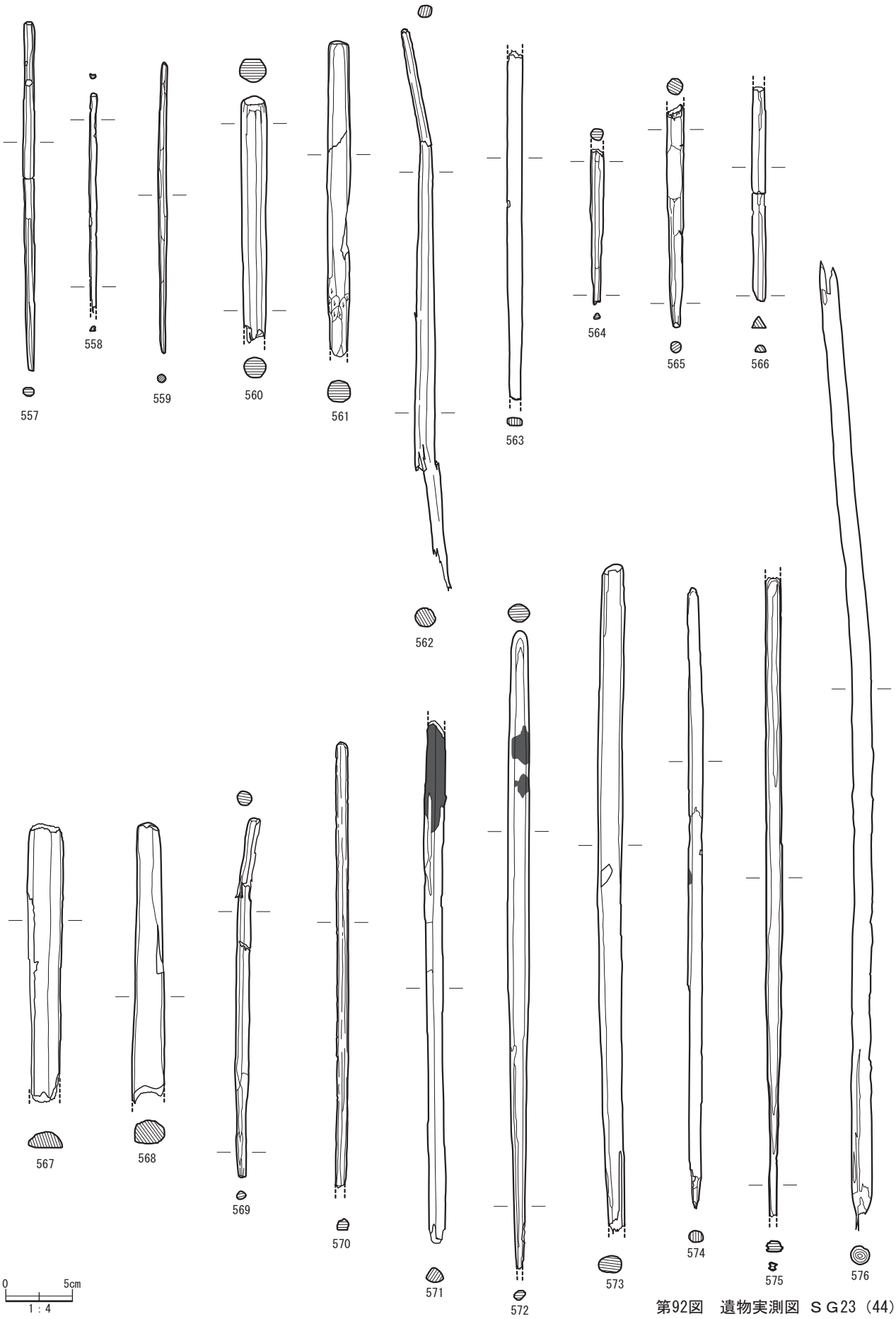


第90図　遺物実測図 ＳＧ23（42）

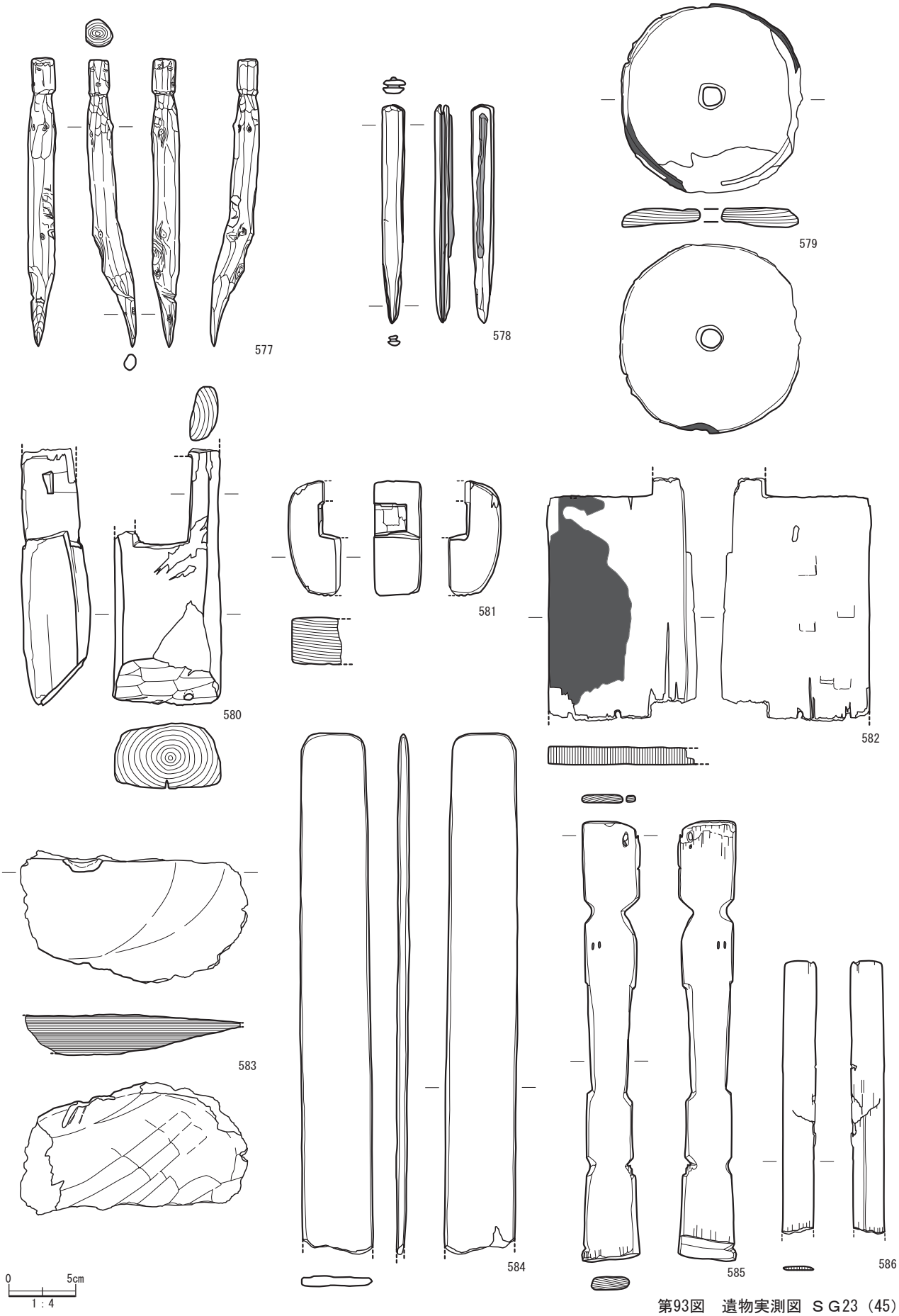


0 5cm
1：4

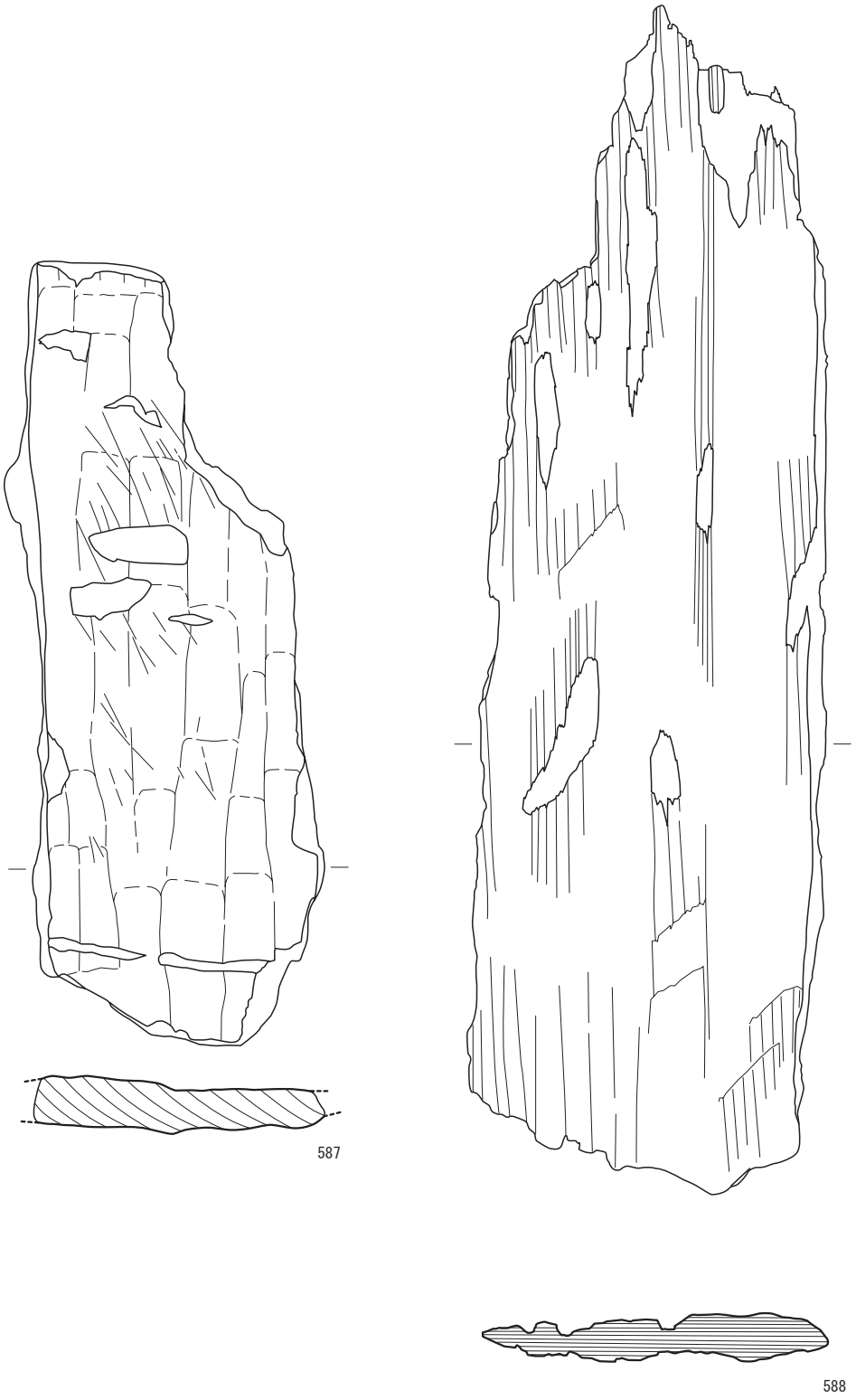
第91図　遺物実測図 ＳＧ23（43）



第92図　遺物実測図 ＳＧ23（44）



第93図　遺物実測図 ＳＧ23（45）

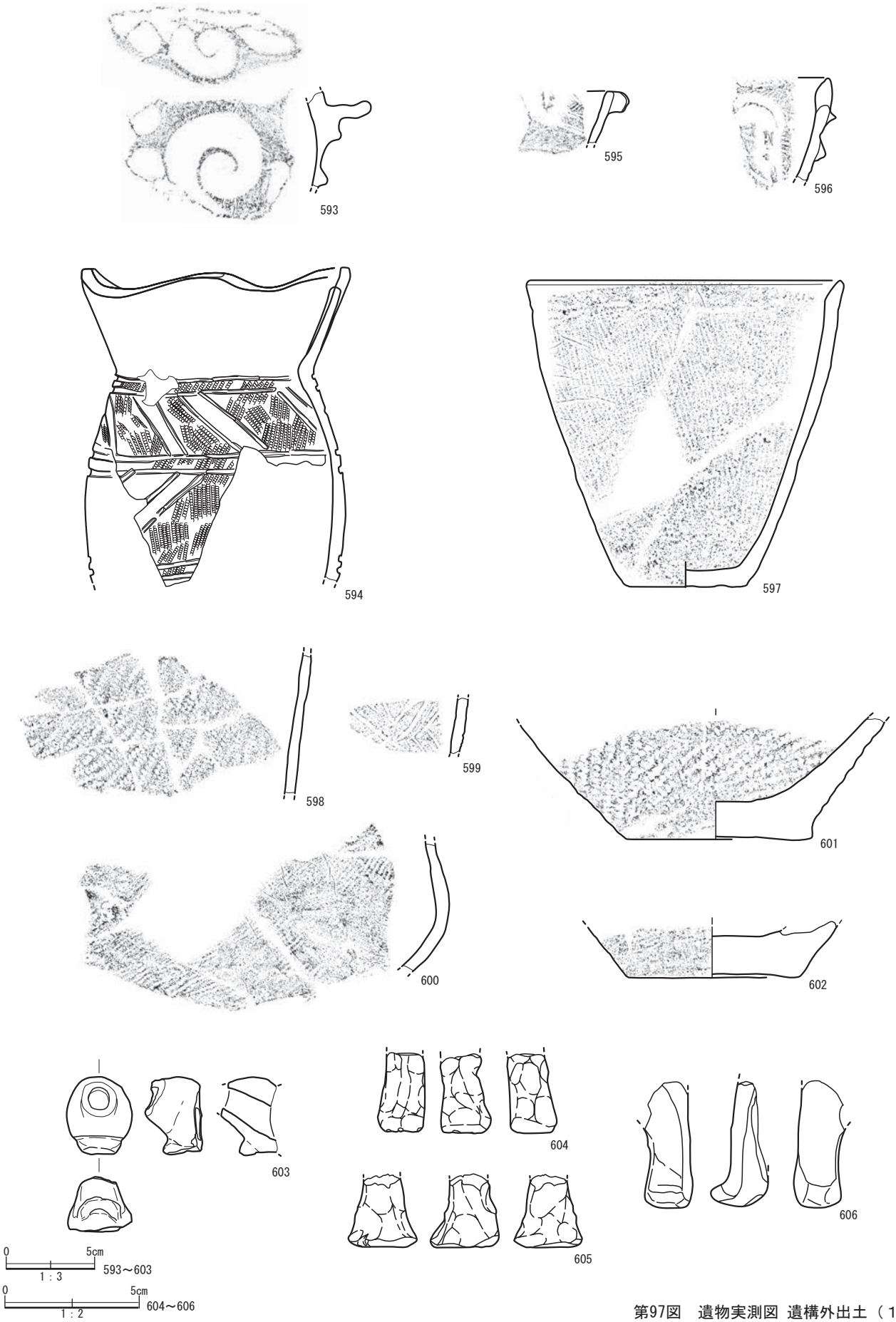


0 5cm
1：4

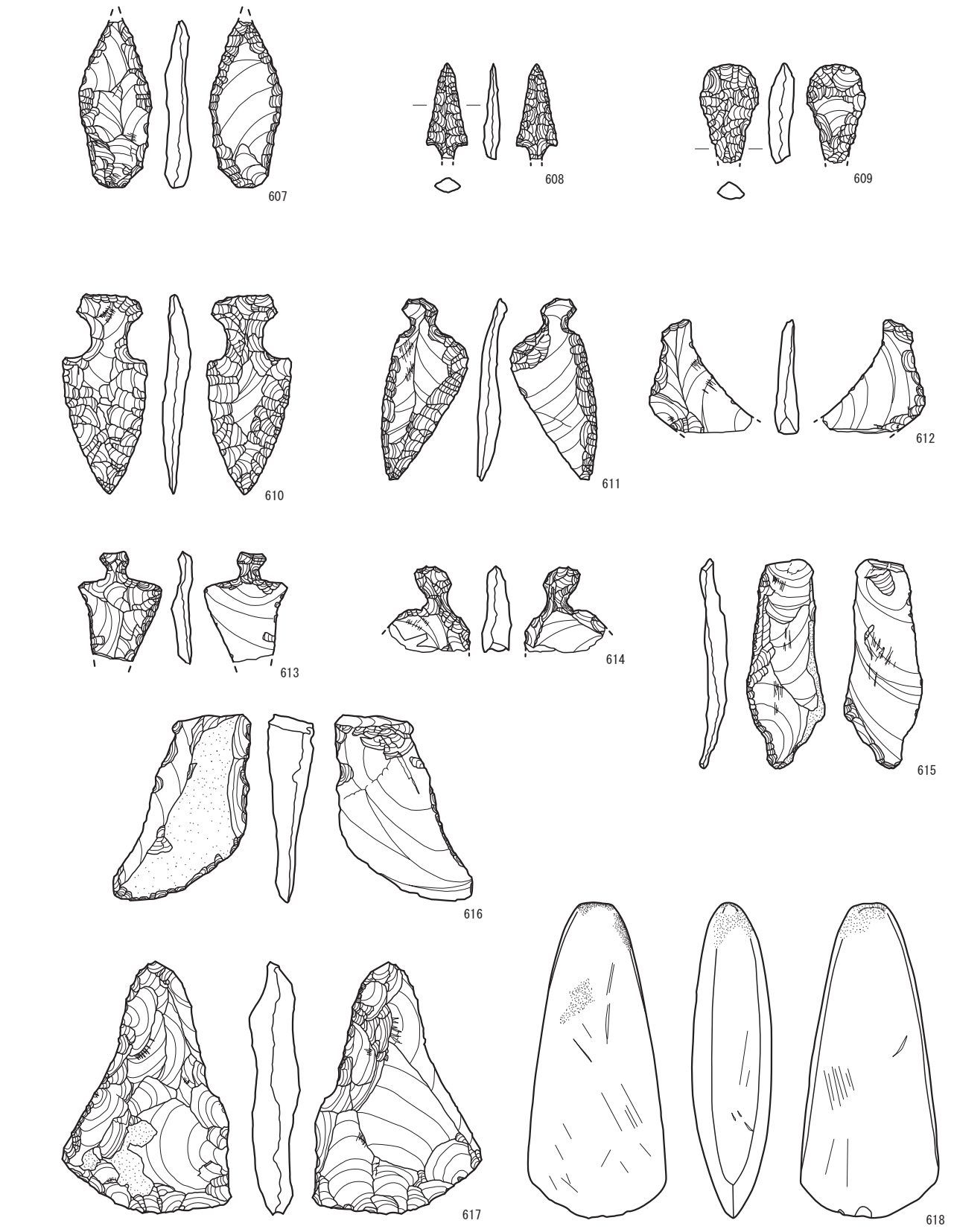
第94図　遺物実測図 ＳＧ23（46）

第95図　遺物実測図　ＳＧ23（47）

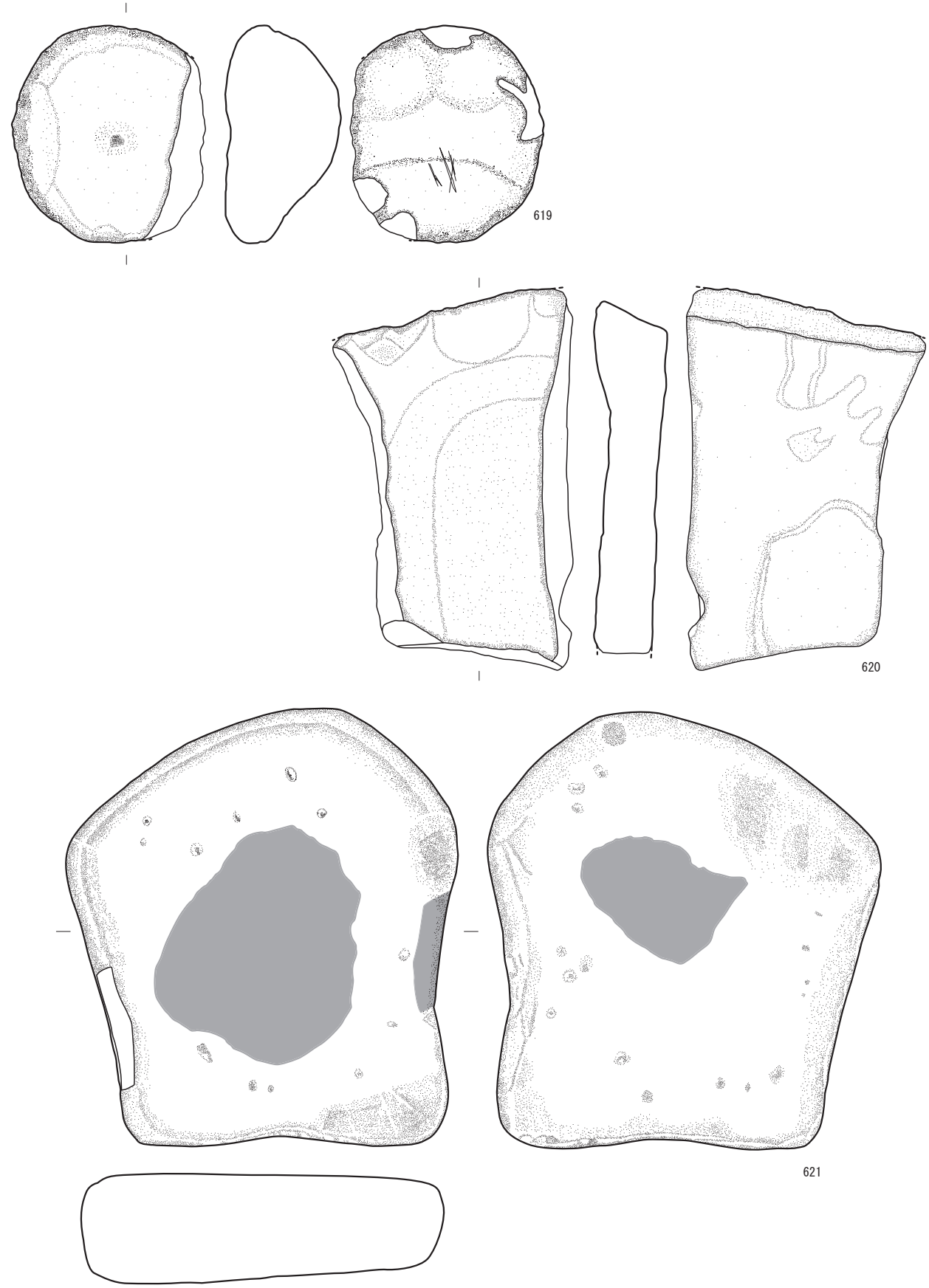
第96図　遺物実測図 ＳＧ23（48）



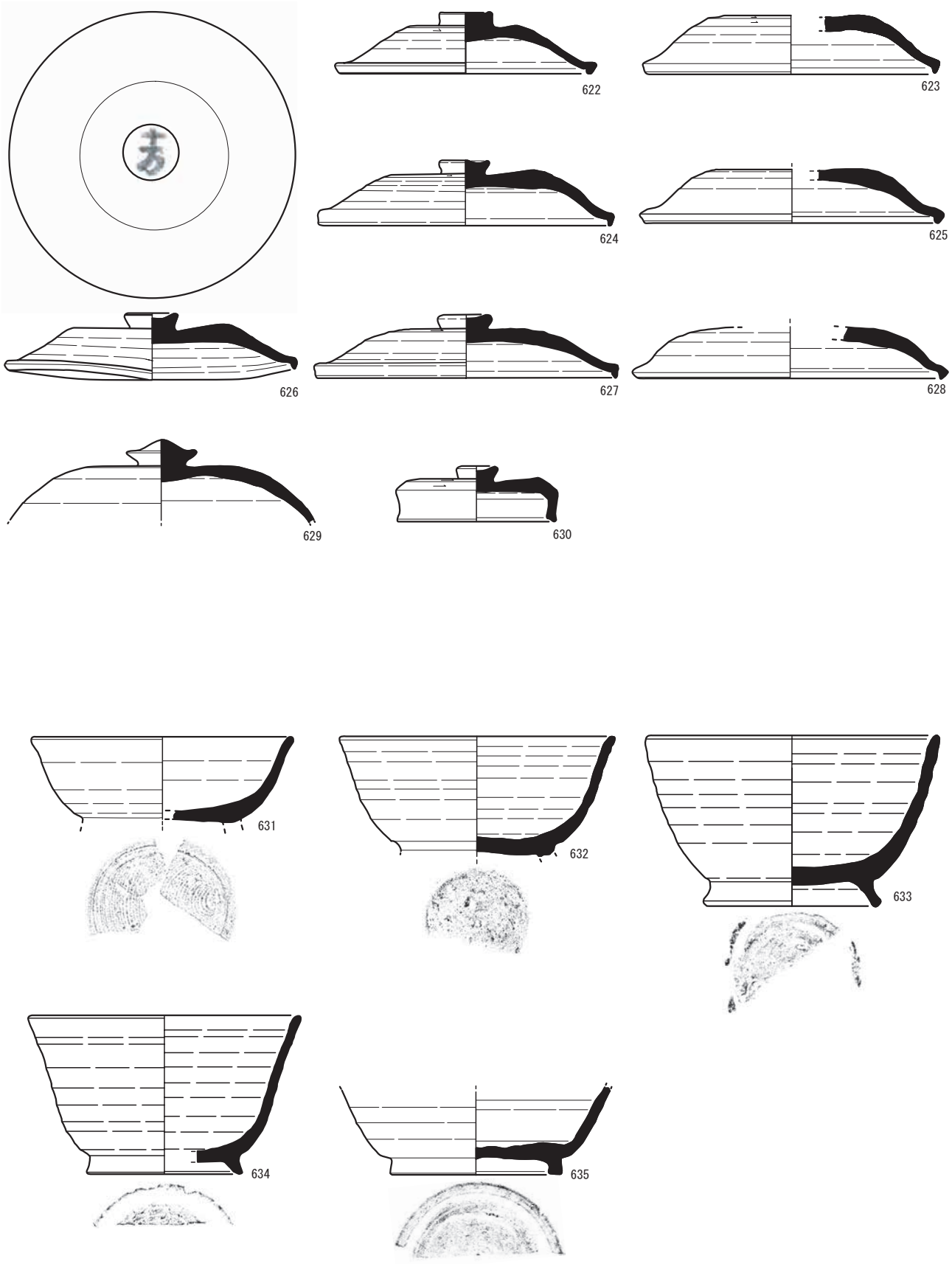
第97図　遺物実測図 遺構外出土（１）



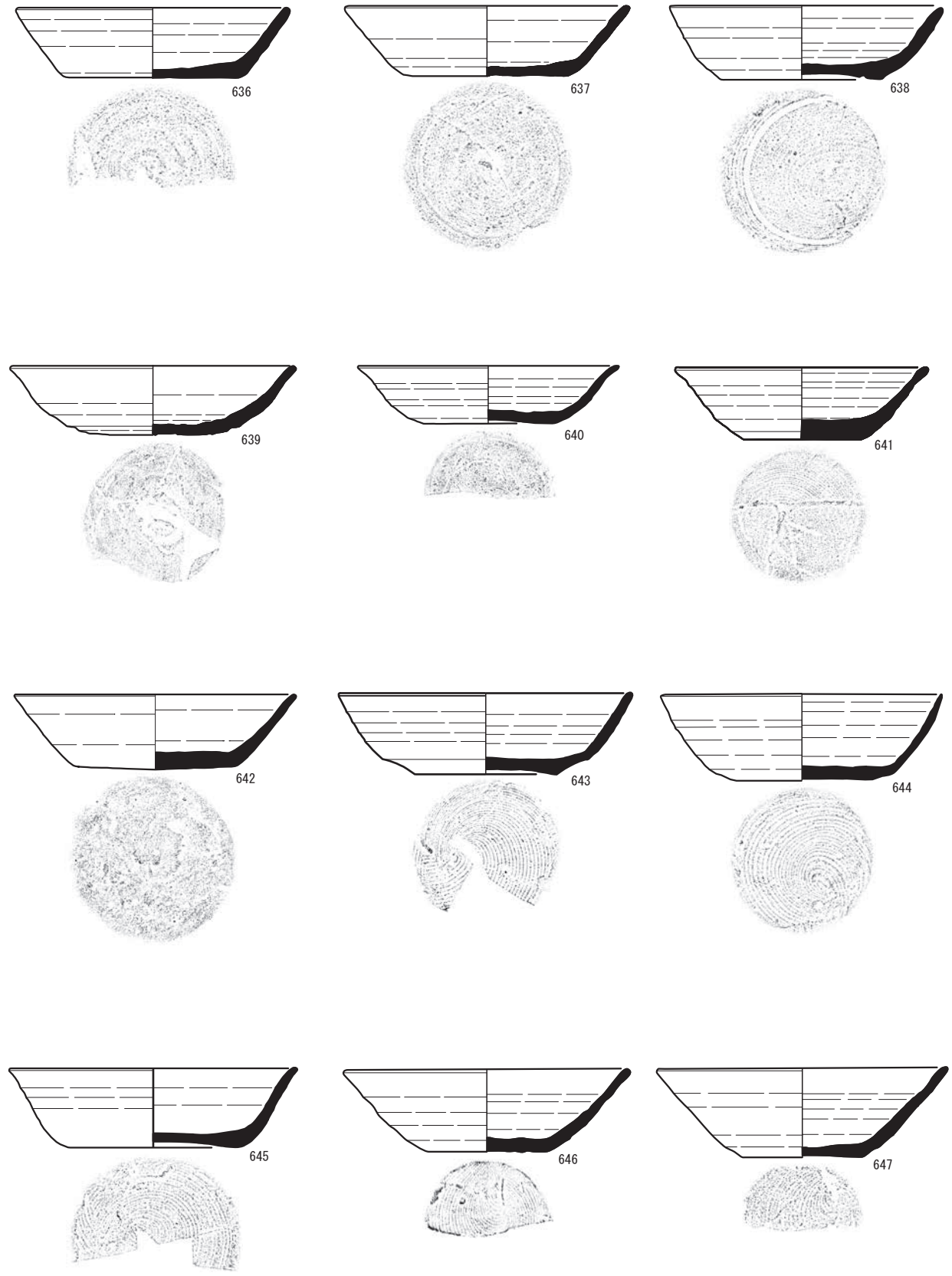
第98図　遺物実測図 遺構外出土（２）



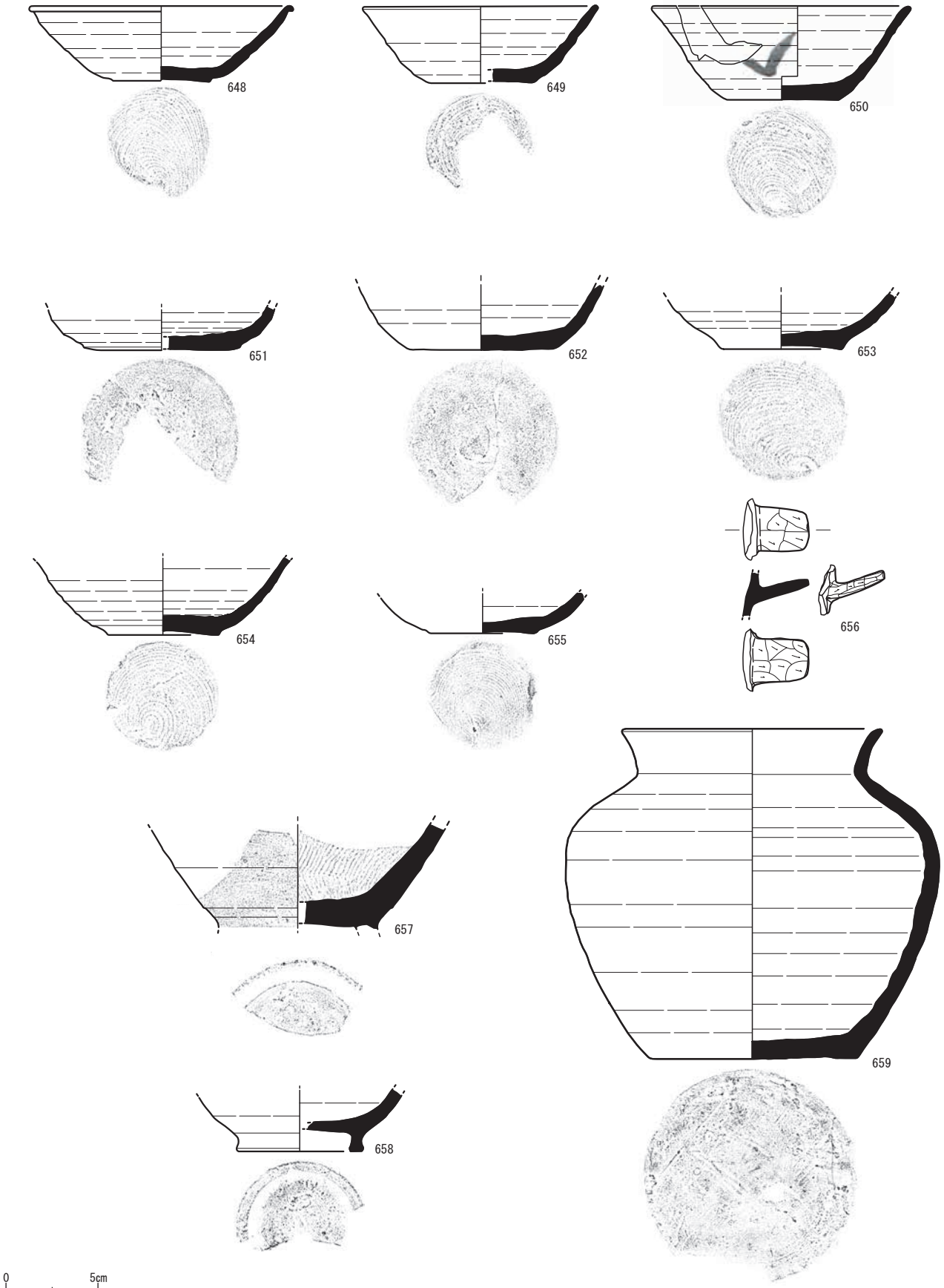
第99図　遺物実測図 遺構外出土（３）



第100図　遺物実測図 遺構外出土（４）



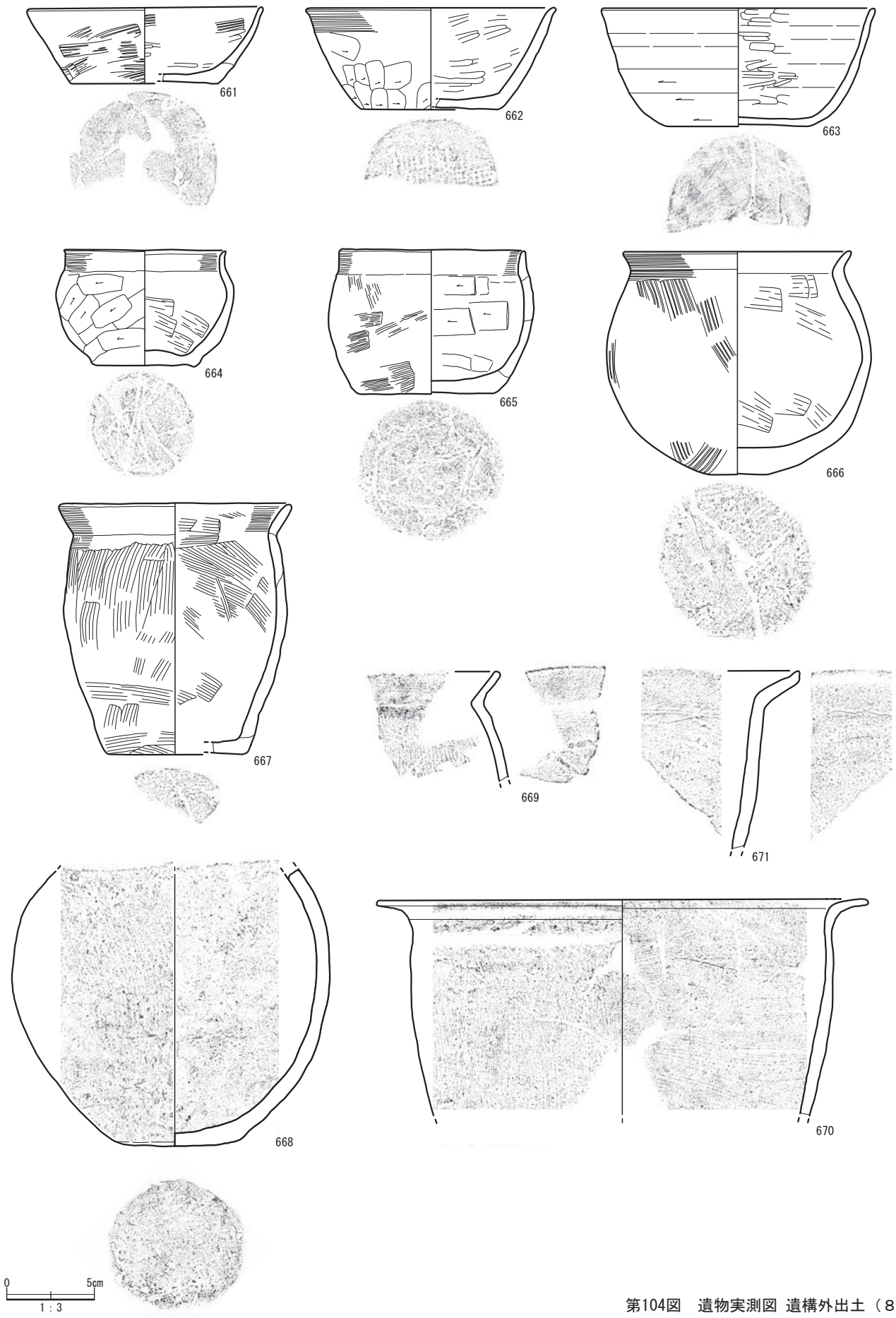
第101図　遺物実測図 遺構外出土（５）



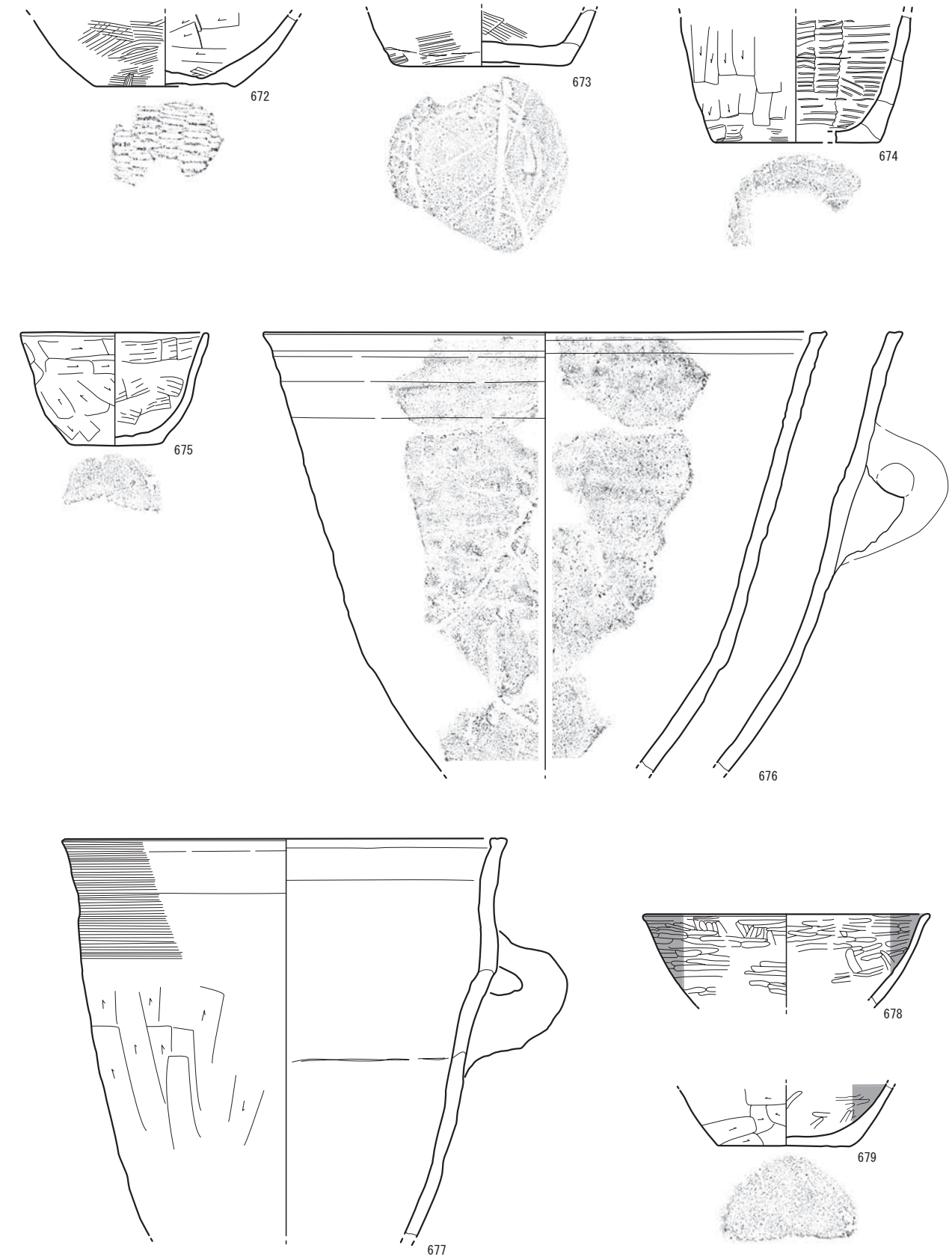
第102図　遺物実測図 遺構外出土（６）

0　5cm
1：3

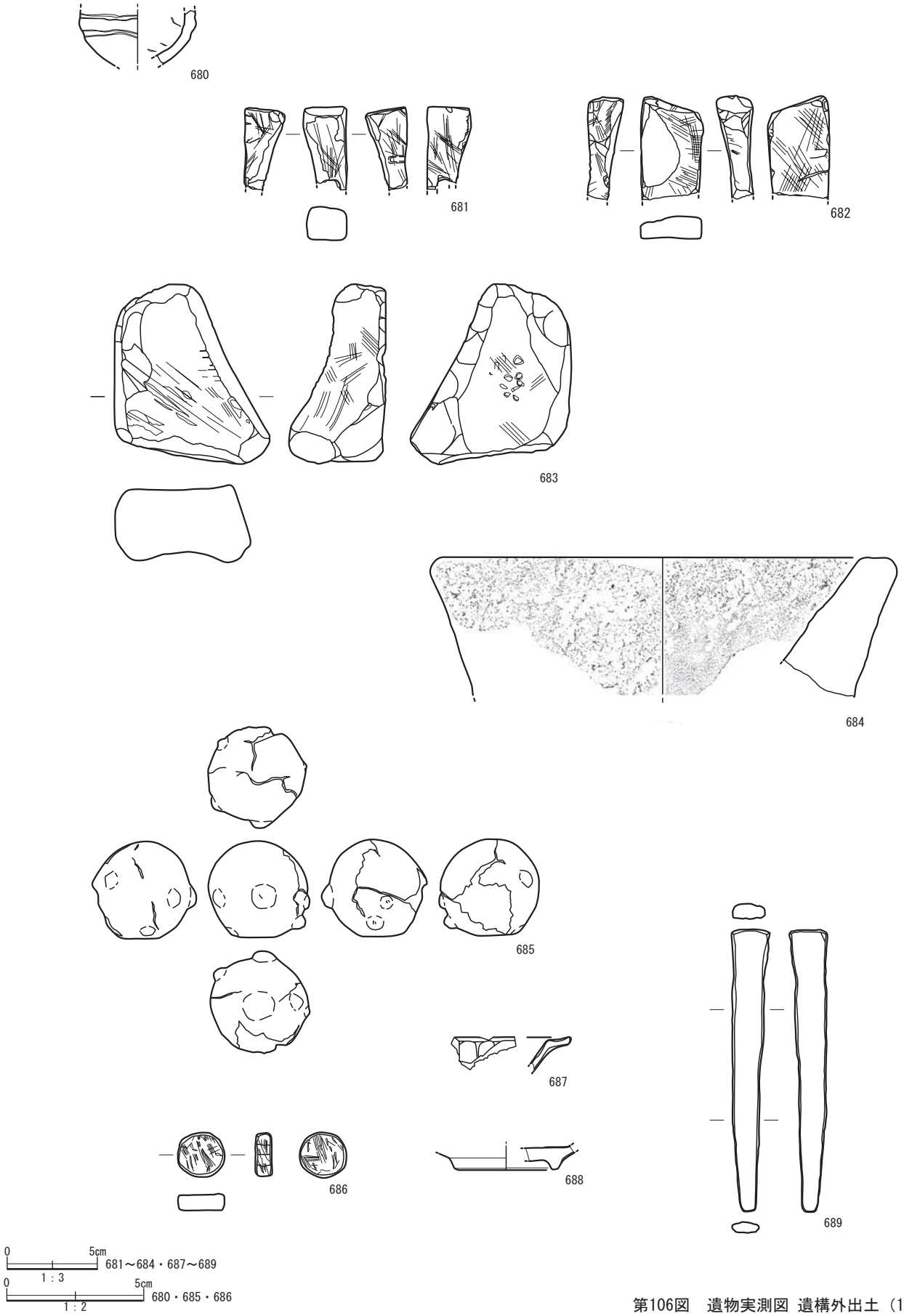
第103図　遺物実測図 遺構外出土（７）



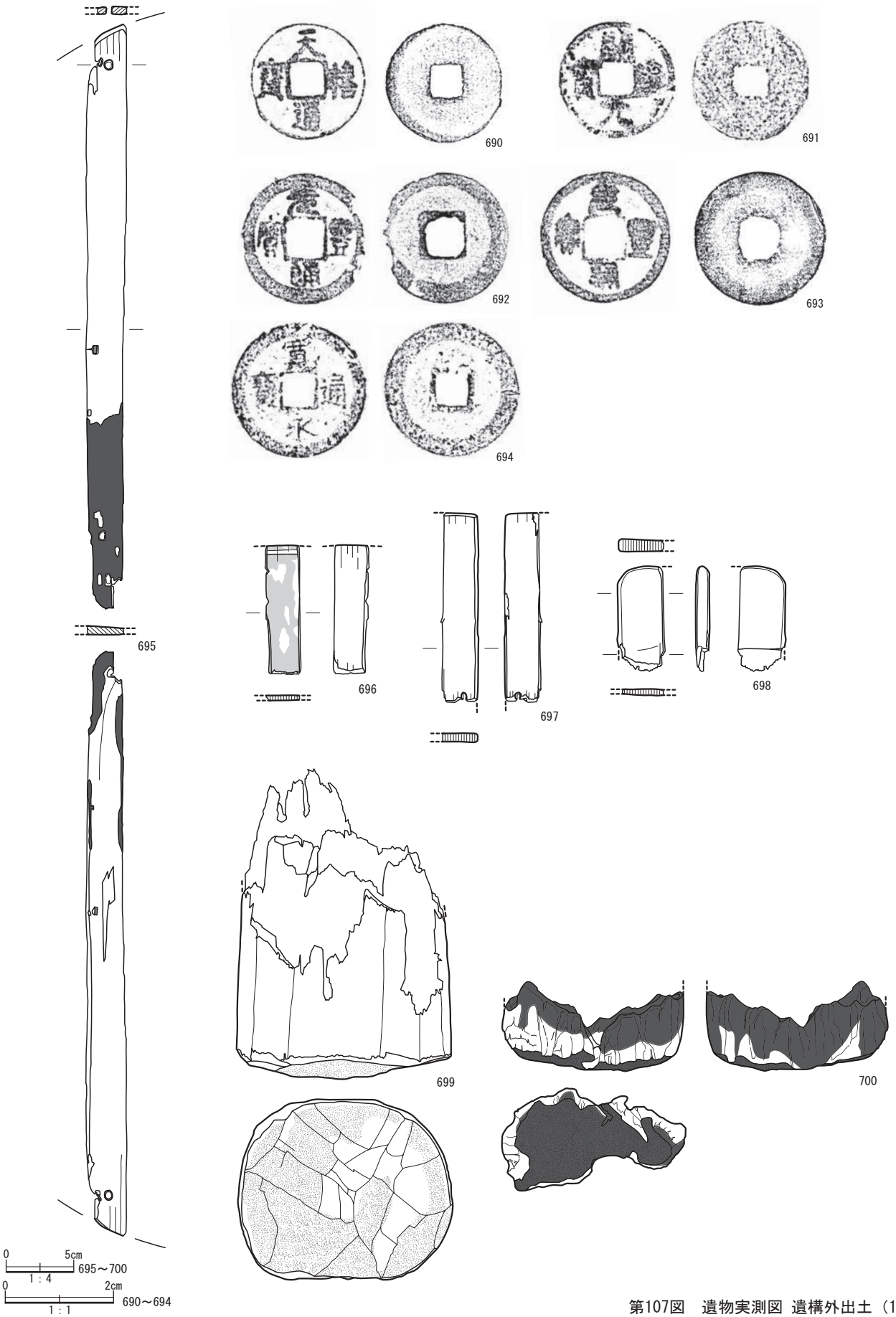
第104図　遺物実測図 遺構外出土（８）



第105図　遺物実測図 遺構外出土（９）



第106図　遺物実測図 遺構外出土（10）



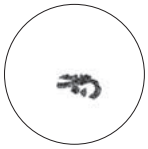
第107図　遺物実測図 遺構外出土（11）

202 底部「物」

296 底部「物」

314 底部「物」

316 底部「物」

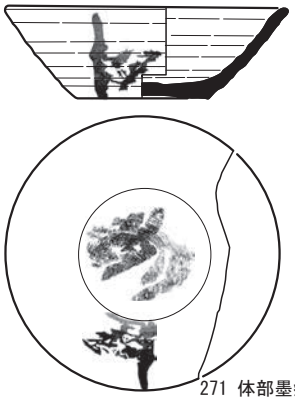

219 底部「物ヵ」

303 底部「主」

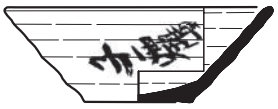
311 底部「主」

315 底部「主」

291 底部「主ヵ」


271 体部墨痕
底部「物ヵ」

301 体部「子鷹」

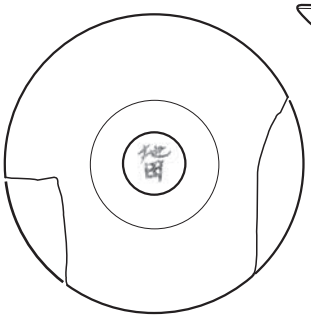

302 体部「子鷹」

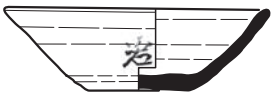
266 底部「大」

267 底部「大」

313 底部「大」

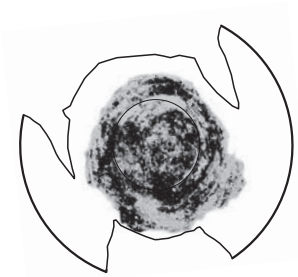
317 体部「中清」


197 摘み「他田」

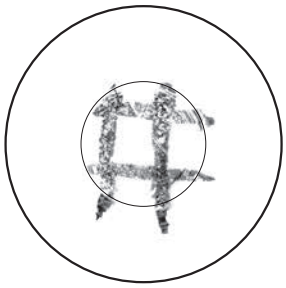

300 体部「若」

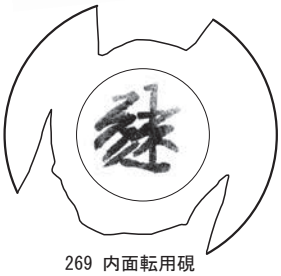
285 体部「信」

220 底部「山」



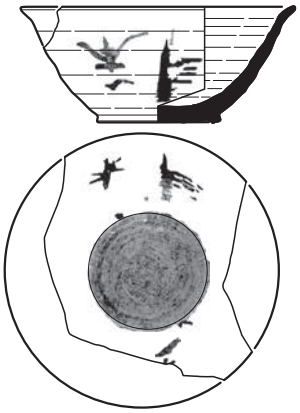
406 底部「王仁」


280 底部「廿」

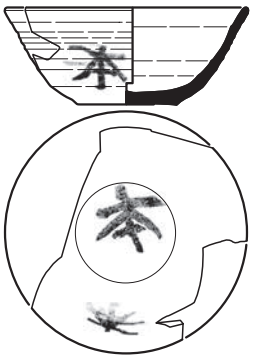

269 内面転用硯
底部「継」

0　10cm
1：4

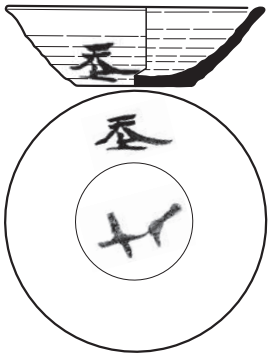
第108図　墨書・刻書土器集成図（1）



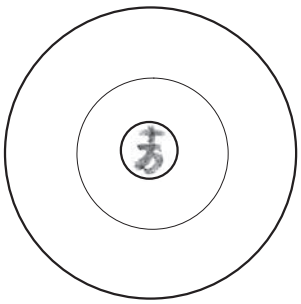
207 体部「本」・墨痕
底部転用硯



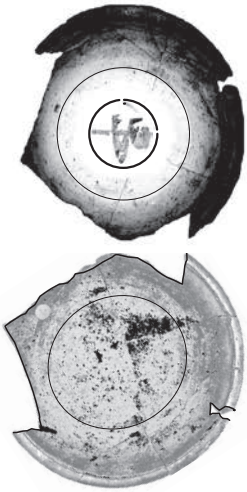
310 体部「本」
底部「本」



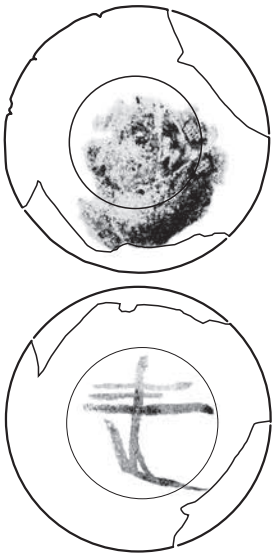
268 体部「天上」
底部「廾」



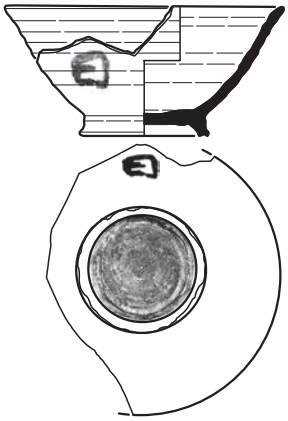
626 摘み「十万」



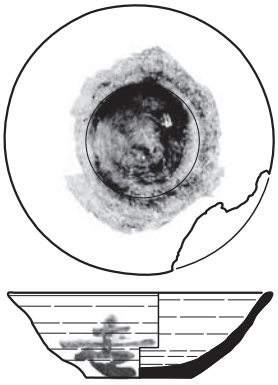
60 摘み「口」
内面転用硯



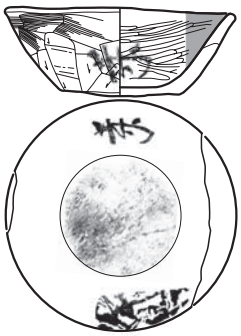
85 内面転用硯
底部「口」



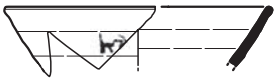
206 体部「日」
底部転用硯



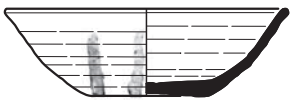
312 内面転用硯
体部「吉」



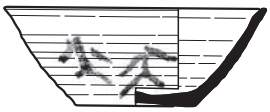
412 体部「寺ヵ」・墨痕
底部墨痕



89 体部「口上」



281 体部「ｉｉ」

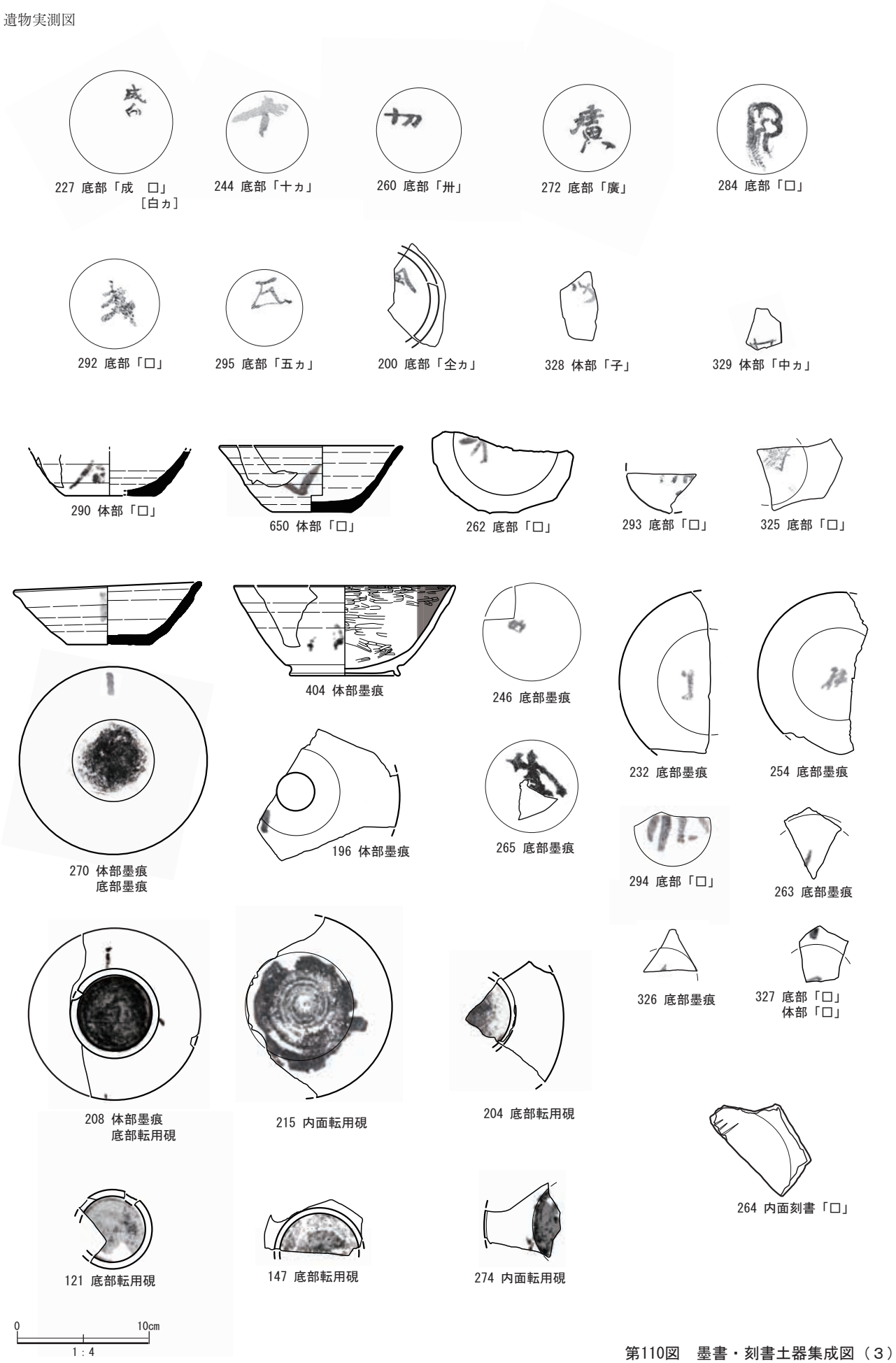


273 体部「口口」

368 体部「千」

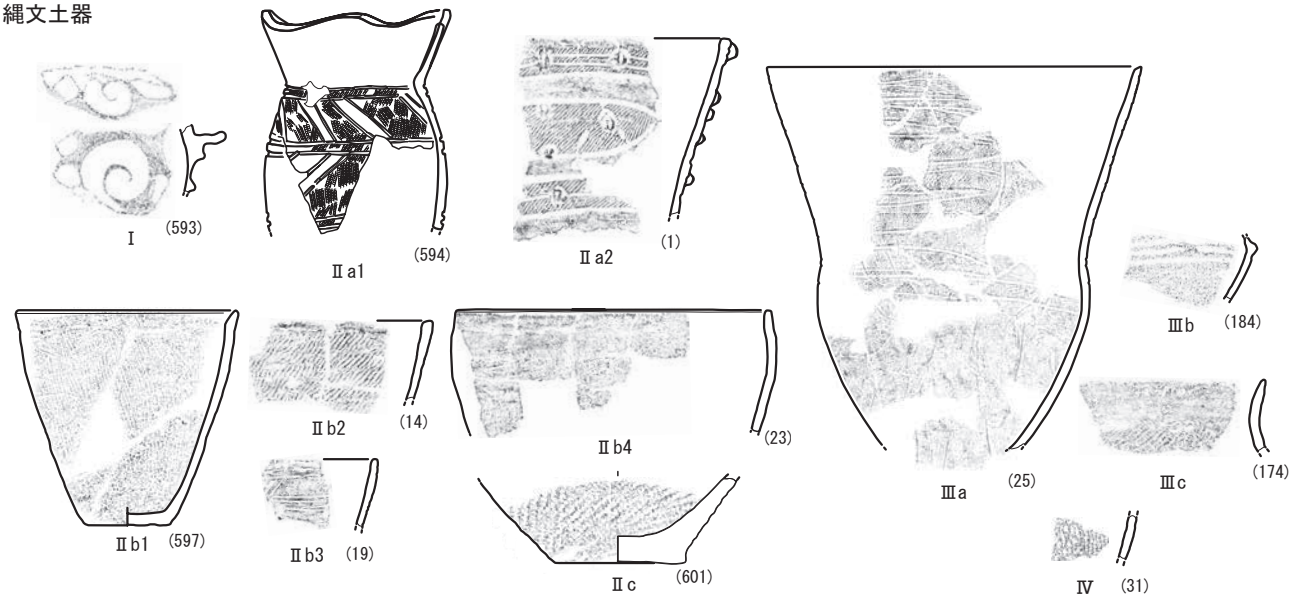
0　10cm
1：4

第109図　墨書・刻書土器集成図（２）

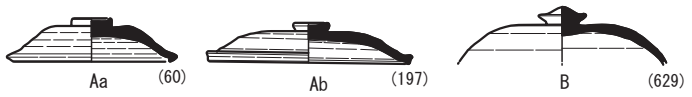


第110図　墨書・刻書土器集成図（３）

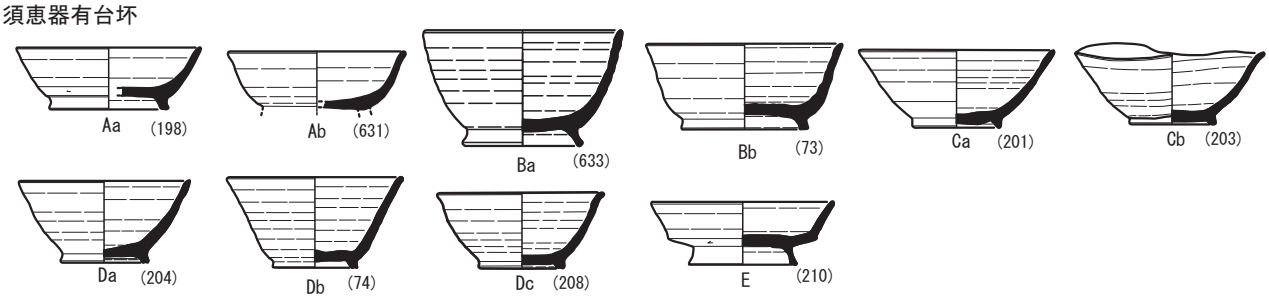
縄文土器



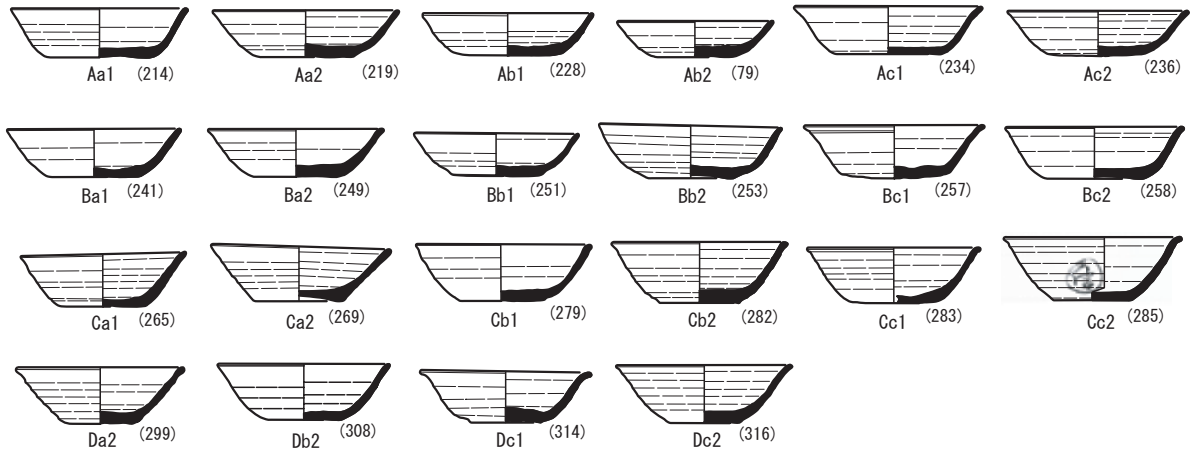
須恵器蓋



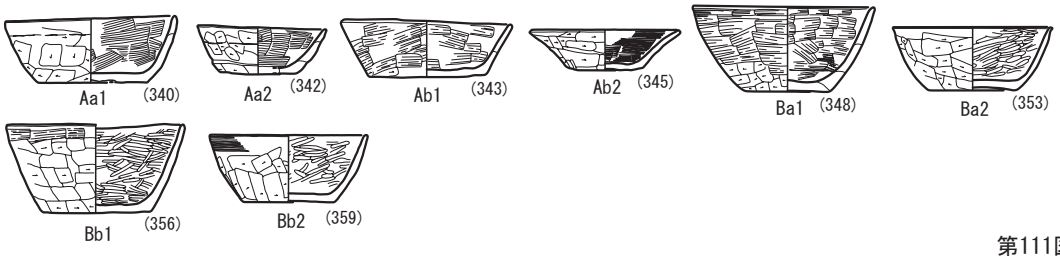
須恵器有台坏



須恵器無台坏



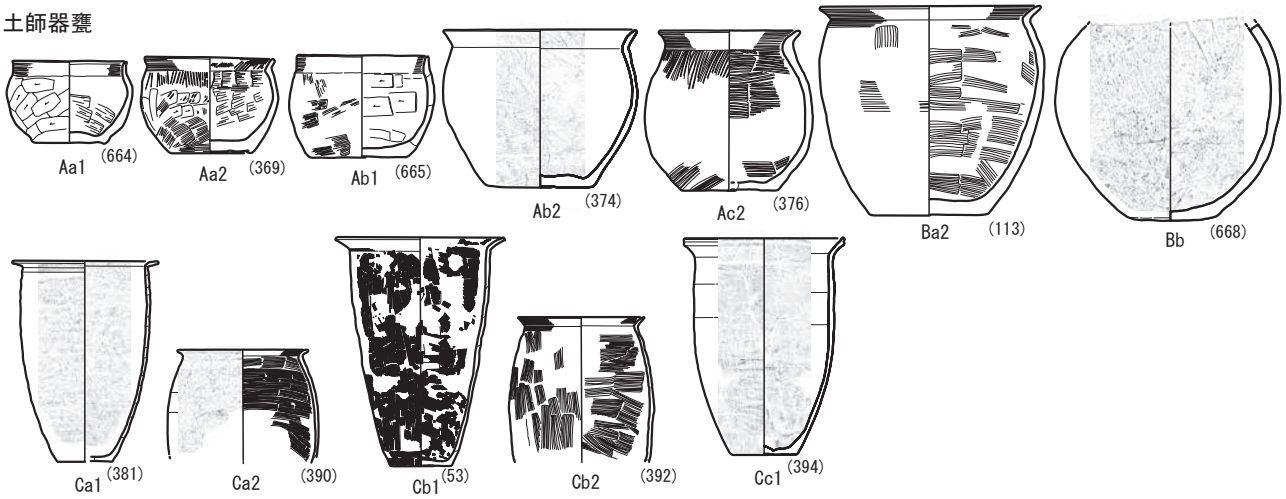
土師器無台坏(ケズリ、ナデ、ハケメ、ミガキ調整)



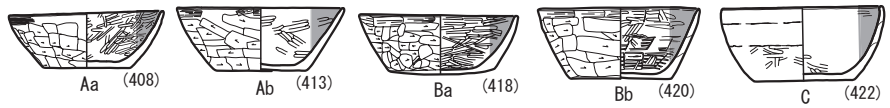
0 10cm
1 : 6

第111図　遺物分類図（１）

土師器甕

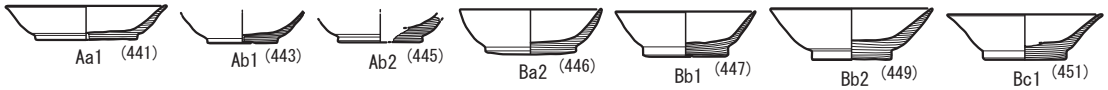


黒色土器無台坏（ケズリ、ナデ、ハケメ、ミガキ調整）

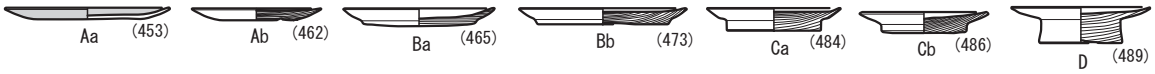


黒色土器無台坏（ロクロ整形）

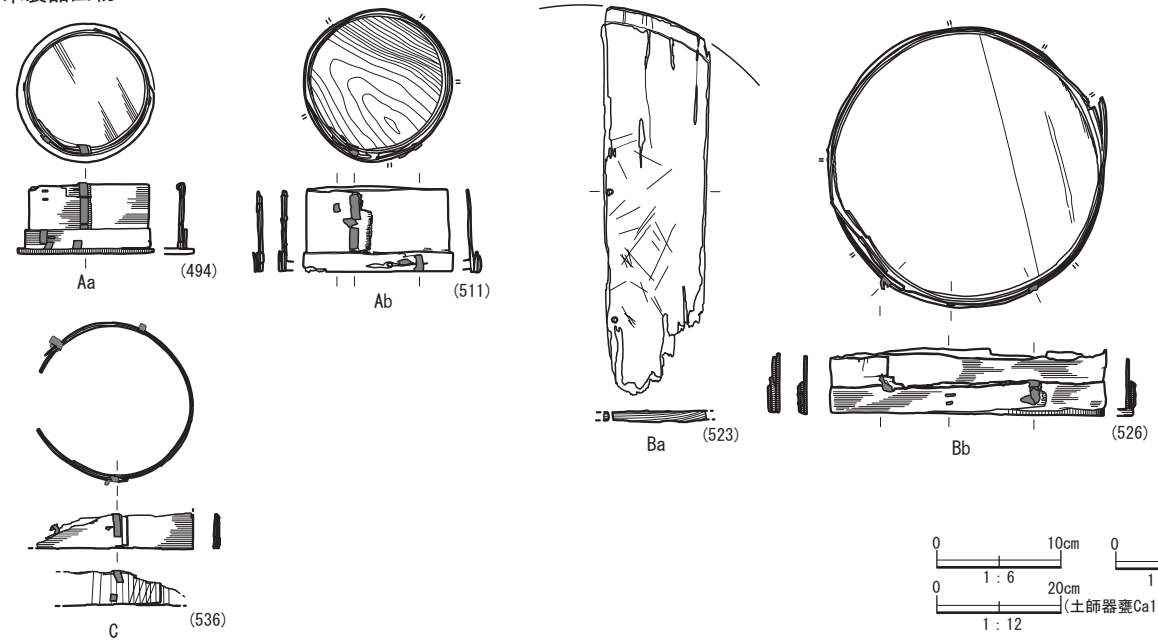
木製品椀



木製品皿



木製品曲物



第112図　遺物分類図（２）

表１　遺物観察表（１）

挿図番号	遺物番号	種別	器種	計測値（mm） 口径	底径	器高	器厚	調整・文様	出土地点	登録番号	備考	分類
31	1	縄文	深鉢			［139］	6	部位－口縁～体部 文様－平行沈線文＋貼瘤 地文－縄文ＬＲ	ST36－EK1		後期後葉	Ⅱa2
	2	縄文	深鉢			［46］	6	部位－口縁部 文様－入組帯状文＋貼瘤 地文－縄文ＬＲ	ST36		後期後葉	Ⅱa2
	3	縄文	深鉢			［108］	6	部位－口縁～体部 文様－入組文＋貼瘤	ST36		後期後葉	Ⅱa2
	4	縄文	深鉢			［58］	7	部位－口縁部 文様－平行沈線文＋貼瘤 地文－縄文ＬＲ	ST36		後期後葉	Ⅱa2
	5	縄文	深鉢			［105］	6	部位－頸～体部 文様－体部上半－平行沈線文＋貼瘤 体部下半－格子目文 地文－縄文ＬＲ	ST36 ST36－EK1		後期後葉	Ⅱa2
	6	縄文	深鉢			［50］	7	部位－口縁部 地文－条線文	ST36		後期後葉	Ⅱb1
	7	縄文	深鉢			［81］	7	部位－口縁部 地文－条線文	ST36		後期後葉	Ⅱb1
	8	縄文	深鉢			［66］	6	部位－口縁部 地文－条線文	ST36		後期後葉	Ⅱb1
	9	縄文	深鉢			［70］	7	部位－口縁部 地文－条線文	ST36		後期後葉	Ⅱb1
	10	縄文	深鉢			［69］	7	部位－口縁部 地文－条線文	ST36		後期後葉	Ⅱb1
	11	縄文	深鉢	（310）		［221］	7	部位－口縁～体部 文様－沈線文 地文－条線文	ST36 ST36－EK1	RP386	後期	Ⅱb1
32	12	縄文	深鉢			［32］	7	部位－口縁部 地文－縄文ＬＲ	ST36		後期　13・14と同一	Ⅱb2
	13	縄文	深鉢			［29］	8	部位－口縁部 地文－縄文ＬＲ	ST36		後期　12・14と同一	Ⅱb2
	14	縄文	深鉢			［62］	6	部位－口縁部 地文－縄文ＬＲ	ST36		後期　12・13と同一	Ⅱb2
	15	縄文	深鉢			［71］	7	部位－口縁部 地文－縄文ＬＲヵ	ST36		後期	Ⅱb2
	16	縄文	深鉢			［80］	6	部位－口縁部 地文－縄文ＬＲ	ST36Y		後期	Ⅱb2
	17	縄文	深鉢			［51］	7	部位－口縁部 文様－沈線文	ST36		後期後葉	Ⅱb3
	18	縄文	深鉢			［44］	6	部位－口縁部 文様－沈線文	ST36Y		後期後葉	Ⅱb3
	19	縄文	深鉢			［54］	6	部位－口縁部 文様－沈線文	ST36		後期後葉	Ⅱb3
	20	縄文	深鉢			［39］	6	部位－体部 文様－沈線文	ST36		後期後葉	Ⅱb3
	21	縄文	深鉢			［44］	6	部位－口縁部 地文－無文	ST36		後期後葉ヵ	Ⅱb4
	22	縄文	浅鉢			［50］	8	部位－口縁部 地文－無文	ST36		後期後葉	Ⅱb4
	23	縄文	深鉢	（250）		［97］	7	部位－口縁～体部 地文－無文	ST36		後期後葉	Ⅱb4
	24	縄文	深鉢		61	［22］	6	部位－底部	ST36		後期	Ⅱc
	25	縄文	深鉢	（296）		［304］	7	部位－口縁～体部 文様－入組文 地文－縄文ＬＲ	ST36 4－1		晩期後葉	Ⅲa
	26	土偶	－	長 ［32］	幅 ［15］	厚 ［15］	重量 8.0g	部位－脚部 文様－刺突	ST36		足首に押圧痕 後期後葉	
	27	土偶	－	長 ［46］	幅 ［32］	厚 ［19］	重量 26.4g	部位－胴部下半 文様－刺突文＋集合沈線文	ST36		後期後葉	
	28	石器	石匙	長 35.0	幅 55.1	厚 7.9	重量 10.7g	石材－頁岩	ST36			
33	29	縄文	深鉢			［32］	7	部位－体部 地文－縄文ＬＲ	ST5		晩期	Ⅲc
	30	縄文	深鉢			［27］	6	部位－口縁部 地文－縄文ＬＲ＋絡繰文	ST5		晩期以降	Ⅲc
	31	縄文	深鉢			［34］	7	部位－体部 地文－縄文ＬＲ	ST5		時期不明	Ⅳ
	32	縄文	深鉢			［52］	8	部位－体部 地文－縄文ＬＲ	ST5	RP33	時期不明	Ⅳ
	33	縄文	深鉢			［38］	7	部位－体部 地文－縄文ＬＲＲ	ST5		時期不明	Ⅳ
	34	弥生	深鉢			［41］	5	部位－口縁部 地文－縄文ＬＲ＋絡繰文	ST5		弥生	
	35	須恵器	蓋	（160）		31	7	外－ロクロ 内－ロクロ	ST5 11－9・10			Ab
	36	須恵器	無台坏	142	58	42	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	ST5 13－10			Ba2
	37	須恵器	無台坏	（138）	66	40	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	ST5 15－10			Ba2

表２　遺物観察表（２）

挿図番号	遺物番号	種別	器種	計測値（mm）口径	底径	器高	器厚	調整・文様	出土地点	登録番号	備考	分類
33	38	須恵器	無台坏	(128)	62	43	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	ST5			Bb2
	39	須恵器	無台坏		(74)	[11]	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	ST5			
	40	須恵器	小　型 短頸壺	(44)		[24]	3	外－ロクロ 内－ロクロ	ST5		外面・内面頸部自然釉	
	41	須恵器	甕			[65]	9	外－タタキ、カキメ 内－ハケ、アテ	ST5			
	42	須恵器	甕			[65]	9	外－タタキ 内－アテ	ST5			
34	43	土師器	甕	(240)		[145]	7	外－ハケ、ナデ 内－ハケ、ナデ	ST5	RP21		Ca1
	44	土師器	甕			[98]	4	外－ハケ、ナデ 内－ハケ、ナデ	ST5	RP22		Ca1
	45	土師器	甕		70	[53]	6	外－ハケ 内－ハケ 底－網代痕	ST5			
	46	土師器	甕		70	[71]	6	外－ハケ 内－ナデ、ヘラナデ 底－網代痕	ST5 13－10			
	47	土師器	堝	(326)		[132]	12	外－ハケ→ナデ 内－ハケ	ST5			
	48	石製品	砥石	長 [76]	幅 32	厚 25	重量 65.5g	砥面－4面 石材－凝灰岩	ST5	RQ18		
35	49	須恵器	有台坏		90	[17]	3	外－ロクロ、下部－ヘラケズリ 内－ロクロ 底－ヘラ切り、高台	ST7－EP1			
	50	須恵器	無台坏		(62)	[20]	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	ST7			
	51	土師器	甕	(140)		[96]	5	外－ハケ、ナデ 内－ハケ、ナデ	ST7	RP47		Ab1
	52	土師器	甕	(250)		[96]	6	外－ハケ、ナデ 内－ハケ、ナデ	ST7	RP42		Cb1
	53	土師器	甕	270	98	363	6	外－ハケ、ナデ 内－ハケ 底－木葉痕	ST7	RP46 RP48 RP49		Cb1
	54	土師器	甕		84	[63]	6	外－ハケ 内－ハケ 底－木葉痕	ST7	RP45	二次加熱有	
	55	土師器	甕		(94)	[129]	5	外－ケズリ 内－ハケ 底－木葉痕	ST7	RP50	外面粗砂付着	
	56	土師器	甕		92	[106]	6	外－ハケ、ナデ 内－ハケ→ナデ 底－木葉痕	ST7	RP41 RP44		
36	57	土師器	鉢	(140)	84	123	12	外－ハケ、ナデ 内－ハケ、ナデ 底－木葉痕	ST7			
	58	黒色土器	無台坏	(160)	(84)	68	5	外－ケズリ、ミガキ 内－ミガキ 底－ヘラケズリ	ST7 SD11 6－6		内面黒色処理	C
	59	石製品	砥石	長 65	幅 28	厚 16	重量 31.5g	砥面－4面 石材－凝灰岩	ST7－EP1			
	60	須恵器	蓋	125		34	5	外－ロクロ 内－ロクロ	ST13	RP65	摘み墨書「□」 内面転用硯	Aa
	61	土師器	甕	(118)		[64]	4	外－ハケ、ナデ 内－ハケ、ナデ、ヘラナデ	ST13			Aa2
	62	土師器	甕	(218)		[169]	4	外－ハケ、ナデ 内－ハケ、ナデ	ST13	RP72		Cb1
	63	土師器	甕			[187]	8	外－ハケ 内－ハケ、ナデ	ST13	RP67 RP69		
	64	土師器	甕		(90)	[90]	5	外－ハケ 内－ハケ、ヘラナデ 底－ヘラナデ	ST13	RP81		
	65	土師器	甕			[137]	5	外－タタキ、ケズリ 内－アテ、ナデ	ST13	RP68		
37	66	縄文	小型壺		58	[77]	6	部位－略完形 文様－匹字文	ST20	RP7	晩期、大洞Ａ２式	Ⅲa
	67	須恵器	蓋	(158)		[28]	6	外－ロクロ 内－ロクロ 天井－回転ヘラケズリ	ST20 12－11 10～12－9			Aa
	68	須恵器	蓋	156		[31]	5	外－ロクロ 内－ロクロ 天井－回転ヘラケズリ	ST20 12－10		歪み有	Aa
	69	須恵器	蓋	(154)		[28]	4	外－ロクロ 内－ロクロ 天井－回転ヘラケズリ	ST20 12－10			Aa
	70	須恵器	蓋	160		[22]	4	外－ロクロ 内－ロクロ 天井－回転ヘラケズリ	ST20	RP276		Ab
	71	須恵器	蓋	154		[22]	4	外－ロクロ 内－ロクロ 天井－回転ヘラケズリ	ST20 12－10		歪み有	Ab

表３　遺物観察表（３）

挿図番号	遺物番号	種別	器種	計測値（mm） 口径	底径	器高	器厚	調整・文様	出土地点	登録番号	備考	分類
37	72	須恵器	蓋	140		［26］	8	外－ロクロ 内－ロクロ	ST20	RP265	内面媒付着	B
	73	須恵器	有台坏	（156）	100	68	6	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切、高台	ST20 SG23(13－11) 11･12－8～10	RP270	外面自然釉	Bb
	74	須恵器	有台坏	（140）	67	72	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－高台	ST20 12－10			Db
	75	須恵器	無台坏	（140）	（70）	27	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り→ナデ	ST20 11－10			Aa2
	76	須恵器	無台坏	（132）	64	35	3	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	ST20		歪み有 体部－部焼成不良	Aa2
	77	須恵器	無台坏	（142）	56	33	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	ST20	RP275 RP281	焼成不良	Aa2
	78	須恵器	無台坏	136	66	38	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	ST20 SK19			Aa2
	79	須恵器	無台坏	（124）	（60）	29	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	ST20			Ab2
	80	須恵器	無台坏	134	74	32	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	ST20	RP268	内面焼成不良	Ab2
	81	須恵器	無台坏	137	85	35	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	ST20			Ac1
	82	須恵器	無台坏	（128）	70	36	6	外－ロクロ、下部－ヘラケズリ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	ST20 11･12－9･10			Ac1
38	83	須恵器	無台坏	（130）	84	31	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	ST20 ST20Y	RP277	内外面媒付着	Ac1
	84	須恵器	無台坏	125	68	36	5	外－ロクロ、下部－回転ヘラケズリ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	ST20 12－10		内外面・底部媒付着	Ac1
	85	須恵器	無台坏	140	80	34	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	ST20	RP266	底部外面墨書「□」 底部内面転用硯	Ac1
	86	須恵器	無台坏	（160）	74	33	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	ST20	RP279	焼成不良	Ac2
	87	須恵器	無台坏	132	（70）	30	3	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	ST20 12－10			Ac2
	88	須恵器	無台坏		64	［23］	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	ST20 12－10			
	89	須恵器	無台坏?	（142）		［31］	4	外－ロクロ 内－ロクロ	ST20 12－10		体部墨書「□上」	
	90	須恵器	壺			［34］	7	外－ロクロ 内－ロクロ	ST20	RP272 RP273 RP274	ミニチュア土器	
	91	須恵器	壺			［82］	5	外－ロクロ 内－ロクロ	ST20 SG23(13－12) SK19 12－10			
	92	須恵器	壺		68	［78］	6	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	ST20 SK19 12－10			
	93	須恵器	壺		100	［187］	7	外－ロクロ、カキメ 内－ロクロ 底－高台	ST20 12－10		外面火ハネ有	
	94	須恵器	甕	165	124	220	8	外－ロクロ、カキメ 内－ロクロ 底－ケズリ→ナデ	ST20 SK19 SG23 12－10･11			
39	95	須恵器	甕	（284）		［218］	10	外－ロクロ、タタキ 内－ロクロ、アテ	ST20 11･12－9･10 SG23(13－11)			
	96	須恵器	甕		120	［424］	7	外－ナデ、タタキ 内－ナデ、アテ 底－不明	ST20 SK19 SG23 12･13－10･11	RP267 RP271 RP278	歪み有	
	97	須恵器	甕			［699］	10	外－タタキ 内－アテ→ナデ	ST20 SG23 12－9･10	RP5		
40	98	土師器	無台坏	（118）	（56）	44	6	外－ケズリ、ナデ 内－ミガキ、ナデ	ST20			Ba2
	99	土師器	甕	（164）		［76］	5	外－ハケ、ナデ 内－ハケ、ナデ	ST20			

表４　遺物観察表（４）

挿図番号	遺物番号	種別	器種	計測値（mm） 口径	底径	器高	器厚	調整・文様	出土地点	登録番号	備考	分類
40	100	土師器	甕		64	［42］	6	外－ハケ 内－ヘラナデ 底－網代痕	ST20 12－10			
	101	土師器	甕		(72)	［78］	6	外－ハケ 内－ハケ、ヘラナデ 底－木葉痕	ST20			
	102	土師器	甕		(88)	［265］	7	外－ハケ 内－ハケ 底－木葉痕	ST20 SK19 SG23 12－10		媒付着 二次加熱有	
	103	土師器	甕	(290)		［178］	5	外－ハケ、ナデ 内－ハケ、ヘラナデ	ST20		外面媒付着	Ca1
	104	黒色土器	無台坏	148	70	70	4	外－ケズリ、ミガキ、ナデ 内－ミガキ 底－木葉痕	ST20		内面黒色処理	C
	105	土製品	紡錘車	直径 (58)	軸径 (6)	高 32	重量 46.9g		ST20	RP305		
	106	石製品	砥石	長 ［69］	幅 44	厚 12	重量 40.4g	砥面－２面 石材－凝灰岩	ST20			
	107	石製品	砥石	長 98	幅 33	厚 16	重量 79.6g	砥面－4面 石材－凝灰岩	ST20	RQ269		
	108	石製品	砥石	長 ［112］	幅 35	厚 13	重量 46.1g	砥面－4面 石材－凝灰岩	ST20			
41	111	須恵器	無台坏	140	50	50	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SK19 12－10･11			Da2
	112	須恵器	甕		124	［259］	7	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラケズリ	SK19 ST20 SG23 12－10･11	RP284	歪み有 外面自然釉	
	113	土師器	甕	176	94	166	8	外－ハケ、ナデ 内－ハケ、ナデ 底－木葉痕	SK19 13－12	RP282	二次加熱有 外面剥落	Ba2
	114	土師器	甕			［192］	5	外－ハケ 内－ハケ	SK19 ST20 12－10	RP283		
	115	土師器	甕		76	［18］	13	外－ハケ 内－ヘラナデ 底－網代→ナデ	SK19	RP287		
42	116	須恵器	無台坏	(140)	(64)	43	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	ST14	RP110		Bc1
	117	須恵器	壺	171	(115)	262	7	外－ロクロ、カキメ、ヘラナデ 内－ロクロ 底－ケズリ?	ST14	RP109		
	118	土師器	甕	220	90	353	7	外－ハケ、ナデ 内－ハケ 底－ヘラナデ、木葉痕	ST14Y			Ca1
	119	土師器	鉢		70	［69］	4	外－ハケ 内－ハケ 底－木葉痕	ST14	RP111		
	120	土師器	鉢		72	［52］	5	外－ハケ 内－ハケ、ヘラナデ 底－木葉痕	ST14Y		外面摩滅	
43	121	須恵器	有台坏	(138)	60	60	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切、高台	ST21 SG23	RP291	底部転用硯 外面自然釉	Dc
	122	須恵器	無台坏	(128)	(64)	40	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	ST21 D区X－O			Ca1
	123	須恵器	無台坏	(140)	(60)	46	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	ST21 11－10			Dc2
	124	土師器	甕	(188)		［165］	6	外－ハケ、ヘラナデ 内－ハケ、ヘラナデ	ST21	RP292		Ba2
	125	土師器	甕		88	［37］	5	外－ハケ、ヘラナデ 内－ヘラナデ、ケズリ 底－木葉痕	ST21	RP293		
	126	土師器	甕			［13］	12	底－木葉痕	ST21	RP294		
	127	石製品	砥石	長 129	幅 27	厚 26	重量 131.4g	砥面－4面 石材－砂岩	ST21			
	128	須恵器	甕			［54］	14	外－タタキ 内－アテ	SD4			
	129	土師器	甕		70	［31］	8	外－不明 内－ヘラナデ? 底－不明	SD4	RP261		
44	130	土師器	無台坏	140	62	52	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SM24	RP299		
	131	土師器	甕	230	120	347	6	外－ハケ、ケズリ、ナデ 内－ハケ、ナデ	SM24	RP302	甕棺 底部を意図的に破壊？	Ca1
	132	土師器	甕	268	98	360	8	外－ハケ、ケズリ、ナデ 内－ナデ 底－網代痕	SM24	RP303	甕棺 底部穿孔 内外面二次加熱有 全体が楕円形に歪む	Cb1

表５　遺物観察表（５）

挿図番号	遺物番号	種別	器種	計測値（mm） 口径	底径	器高	器厚	調整・文様	出土地点	登録番号	備考	分類
44	133	黒色土器	無台坏	139	55	47	4	外－ロクロ、下部－ヘラケズリ 内－ミガキ 底－回転糸切	SM24	RP300	内面黒色処理 二次加熱有	B
	134	黒色土器	無台坏	150	60	53	5	外－ロクロ、下部－ヘラケズリ 内－ミガキ 底－回転糸切	SM24	RP301	内面黒色処理 二次加熱有 外面剥落	C
45	135	石製品	石臼	長 ［101］	幅 ［132］	厚 59	重量 794.1g	石材－火山礫凝灰岩	SE1			
	136	石製品	砥石	長 133	幅 ［95］	厚 ［56］	重量 648.9g	砥面－2面 石材－砂岩	SE1			
	137	土師器	甑			［81］	7	外－ヘラナデ 内－ヘラナデ	SK41			
	138	縄文	深鉢			［56］	6	部位－体部 地文－条線文	SK49		内面ケズリ 後期	Ⅱb1
	139	縄文	深鉢			［48］	6	部位－頸部 文様－沈線 地文－縄文ＬＲ	SK49		擦消し縄文 後期	Ⅱb3
	140	縄文	円盤状 土製品	長 36	幅 42	厚 7	重量 12.7g	文様－平行沈線文 地文－縄文ＬＲ	SK49		後期	
	141	土師器	無台坏	（140）		［40］	4	外－ロクロ 内－ロクロ	SK85	RP316		
	142	土師器	無台坏?	（140）		［35］	5	外－ロクロ 内－ロクロ	SK85 SK85Y		折返し口縁	
	143	黒色土器	無台坏?	（158）		［43］	4	外－ロクロ 内－ミガキ	SK85		内面一部に黒色処理	A
	144	土師器	甕			［65］	7	外－ハケ 内－ハケ	SK88			
	145	土師器	甕		（80）	［38］	6	外－ハケ 内－ハケ 底－網代痕	SK89			
	146	土師器	甕	（240）		［150］	6	外－ハケ、ナデ 内－ハケ→ナデ	SK93Y			Ca1
	147	須恵器	有台坏		（68）	［27］	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切?、高台	SK95		底部転用硯	
	148	石製品	砥石	長 ［79］	幅 49	厚 36	重量 168.2g	砥面－２面 石材－凝灰岩	SK95	RQ324	未製品のまま使用	
	149	土師器	甕		（104）	［36］	14	外－ケズリ 内－ハケ 底－ケズリ	SK96 14－9		外面被熱・剥落	
46	150	須恵器	無台坏	138	64	44	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SX6	RP34		Ba2
	151	黒色土器	無台坏	（149）	（76）	49	6	外－ケズリ、ナデ 内－ミガキ、ヘラナデ 底－ケズリ	SX6	RP35	内面黒色処理	Aa
	152	黒色土器	有台坏	146	72	68	5	外－ロクロ 内－ミガキ 底－高台	SX6	RP37	内面黒色処理	
	153	土師器	甕	238		［192］	6	外－ハケ、ナデ 内－ハケ、ナデ	SX6 13－10	RP36 RP38		Ca1
	154	土師器	甕	238		［200］	6	外－ロクロ、カキメ 内－ロクロ、カキメ	SX6 13－10	RP39	二次加熱有 摩滅激しい	Cc1
	155	縄文	浅鉢			［62］	6	部位－口縁部 文様－平行沈線文 地文－縄文ＬＲ	SX15	RP54	波状口縁 後期中葉	Ⅱa1
	156	縄文	深鉢			［53］	6	部位－口縁部 地文－縄文ＲＬ	SX15	RP55	後期	Ⅱb2
	157	縄文	深鉢			［102］	7	部位－口縁～体部 地文－縄文ＬＲ	SX15	RP57	胎土に雲母片 後期～晩期	Ⅱb2
	158	縄文	深鉢		120	［52］	8	部位－底部 底－網代痕	SX15	RP60	指圧痕 後期	Ⅱc
	159	石器	凹石	長 111	幅 63	厚 57	重量 564.9g	石材－安山岩	SX15	RQ63		
	160	縄文	鉢			［35］	6	部位－口縁部 文様－平行沈線文 地文－縄文ＬＲ	SX16		キャリパー型 晩期後葉	Ⅲa
47	162	石製品	勾玉	長 28	幅 10	厚 8	重量 4.7g	石材－凝灰岩	SD2(5－4)	RQ15		
	163	石器	磨製石斧	長 ［52］	幅 ［44］	厚 27	重量 83.3g	石材－砂岩	SD2(5－4)			
	164	石製品	石棒	長 ［153］	幅 92	厚 78	重量 1638g	石材－礫岩	SD2(6－4)			
	165	石製品	石皿	長 ［206］	幅 ［138］	厚 76	重量 2600g	石材－礫岩	SD2(6－4)	RQ108	表面媒付着	
48	166	石器	磨石	長 ［128］	幅 ［59］	厚 37	重量 362.1g	石材－安山岩	SD2(6－4)			
	167	須恵器	無台坏		（81）	［40］	3	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	SD2(4－3)	RP121		
	168	須恵器	無台坏		（72）	［12］	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	SD2(5－4)			
	169	須恵器	無台坏		（74）	［37］	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り→ナデ	SD2(4－4) 4－3			

表６　遺物観察表（６）

挿図番号	遺物番号	種別	器種	計測値（mm） 口径	底径	器高	器厚	調整・文様	出土地点	登録番号	備考	分類
48	170	須恵器	壺			[57]	10	外－ロクロ 内－ロクロ	SD2(4－4)	RP119	外面自然釉	
	171	須恵器	甕			[67]	7	外－タタキ 内－アテ	SD2(4－4)	RP117		
	172	須恵器	甕			[82]	9	外－ハケ、タタキ 内－ハケ、アテ	SD2(5－4)			
	173	陶器	甕			[63]	13	外－不明 内－ナデ	SD2(4－4)	RP116	信楽　15世紀 外面に火ハネ、付着物 内面釉	
	174	縄文	深鉢			[56]	7	部位－口縁～頸部 地文－縄文ＬＲ	SD66		晩期	Ⅲc
	175	石器	削器	長 56.2	幅 43.1	厚 5.2	重量 11.3g	石材－頁岩	SD66			
	176	土師器	小型甕		(62)	[37]	8	外－不明 内－不明 底－不明	SD87(15－11)		二次加熱有	
	177	黒色土器	無台坏	(112)		[37]	4	外－ロクロ 内－ミガキ	SD87(15－11)		内面黒色処理	A
	178	陶器	擂鉢			[59]	13	外－ロクロ 内－ロクロ	SD87(15－11)		唐津　17世紀前半 外面上部に鉄釉 内面卸目8条	
	179	鉄製品	毛抜き	長 [76]	幅 8	厚 1	重量 2.8g		SD87	RM312		
	180	土師器	甕		(94)	[46]	7	外－ハケ 内－ハケ 底－木葉痕	SD92			
49	181	縄文	深鉢			[52]	8	部位－体部 文様－隆帯文 地文－不明	SG23Y(17－11)		中期（大木８a式）	Ⅰ
	182	縄文	深鉢			[45]	6	部位－体部 文様－渦巻文	SG23(13－12)		中期（大木９式）	Ⅰ
	183	縄文	鉢			[46]	5	部位－口縁部 文様－平行沈線文 地文－不明	SG23(13－12)		口縁部にＢ突起 晩期後葉	Ⅲa
	184	縄文	鉢			[50]	5	部位－体部上半 文様－平行沈線文＋貼瘤 地文－不明	SG23(13－11)		No185と同一 晩期後葉	Ⅲb
	185	縄文	鉢			[57]	6	部位－口縁部 文様－平行沈線文＋貼瘤 地文－不明	SG23(16－11)		No184と同一 晩期後葉	Ⅲb
	186	弥生	甕?			[37]	4	部位－口縁部 文様－交互刺突文	SG23(14－12)		弥生後期（天王山式）	
	187	石器	削器	長 85.2	幅 58.5	厚 17.2	重量 87.1g	石材－頁岩	SG23(13－12)			
	188	石器	削器	長 62.0	幅 90.0	厚 8.0	重量 33.6g	石材－頁岩	SG23(15－12)			
	189	石器	掻器	長 65.6	幅 33.2	厚 13.6	重量 33.4g	石材－頁岩	SG23(15－12)			
	190	石器	石箆	長 124.0	幅 38.9	厚 29.5	重量 139.6g	石材－頁岩	SG23(13－12)			
	191	石器	磨製石斧	長 [39]	幅 [39]	厚 29	重量 72.4g	石材－安山岩	SG23(14－12)			
	192	石器	凹石	長 [74]	幅 42	厚 33	重量 138.8g	石材－砂岩	SG23(12－11)			
	193	石製品	石棒	長 [161]	幅 115	厚 [69]	重量 1733g	石材－砂岩	SG23(13－12)	RQ243		
	194	石製品	玉	長径 34		短径 30	重量 29.5g	石材－砂岩	SG23(16－11)			
50	195	須恵器	蓋	(148)		[30]	5	外－ロクロ 内－ロクロ 天井－回転ヘラケズリ	SG23(13－12)		切り離し回転糸切 内面媒付着	Aa
	196	須恵器	蓋	160		29	5	外－ロクロ 内－ロクロ 天井－回転ヘラケズリ	SG23 (11･12－11)		摘み:宝珠形 体部墨痕	Ab
	197	須恵器	蓋	158		32	6	外－ロクロ 内－ロクロ 天井－回転ヘラケズリ	SG23Y (16－11) SG23(14－12)	RP354	摘み墨書「他田」	Ab
	198	須恵器	有台坏	(146)	95	49	5	外－ロクロ、下部－ケズリ 内－ロクロ 底－回転糸切、高台	SG23(13－12) ST20 11－9 12－10		外面自然釉	Aa
	199	須恵器	有台坏		96	[40]	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切、高台	SG23(14－12)	RP138	内面自然釉	
	200	須恵器	有台坏		(86)	[24]	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り、高台	SG23(15－12)		底部墨書「全ヵ」	
	201	須恵器	有台坏	(156)	70	61	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切、高台	SG23 (14･15－12)		焼成不良	Ca
	202	須恵器	有台坏	151	60	64	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切、高台	SG23 (13－11･12)	RP190	底部墨書「物」 歪み有	Ca
	203	須恵器	有台坏	150	(68)	58	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切、高台	SG23(14－12)	RP153	歪み有	Cb

表7　遺物観察表（7）

挿図番号	遺物番号	種別	器種	計測値（mm） 口径	底径	器高	器厚	調整・文様	出土地点	登録番号	備考	分類
50	204	須恵器	有台坏	(136)	(70)	65	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切、高台	SG23(11－11)		底部転用硯	Da
	205	須恵器	有台坏	(138)	68	67	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り、高台	SG23(13－11)	RP185		Db
	206	須恵器	有台坏	(148)	68	69	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切、高台	SG23(12－11)		体部墨書「日」 底部転用硯	Db
51	207	須恵器	有台坏	(145)	65	61	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切、高台	SG23(13－11)	RP232	体部墨書「本」・墨痕 底部転用硯	Dc
	208	須恵器	有台坏	132	68	60	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切、高台	SG23(13－12)	RP212	体部墨痕 底部転用硯	Dc
	209	須恵器	有台坏	(170)	84	78	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切、高台	SG23			Dc
	210	須恵器	有台坏	(146)	(86)	50	4	外－ロクロ、下部－ヘラケズリ 内－ロクロ 底－回転糸切、高台	SG23 (13･16－11)		稜椀	E
	211	須恵器	無台坏	(138)	(74)	33	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	SG23(12－11)			Aa1
	212	須恵器	無台坏	(140)	(80)	32	3	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	SG23(12－11)		焼成不良	Aa1
	213	須恵器	無台坏	(146)	(82)	36	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	SG23 (13･14－12、16－11)			Aa1
	214	須恵器	無台坏	(140)	82	39	3	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	SG23Y (16－11)	RP357	内面底部転用硯	Aa1
	215	須恵器	無台坏	145	78	43	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	SG23 (11･12－11)		焼成不良	Aa1
	216	須恵器	無台坏	(142)	92	39	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	SG23(16－11)			Aa1
	217	須恵器	無台坏	(138)	(72)	33	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	SG23(13－12)		焼成不良	Aa1
	218	須恵器	無台坏	(146)	82	37	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	SG23(11－11)			Aa1
	219	須恵器	無台坏	148	74	37	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	SG23 (12－11、15－12)		底部墨書「物ヵ」	Aa2
52	220	須恵器	無台坏	136	74	31	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	SG23(13－12)	RP206	底部墨書「山」 歪み有	Aa2
	221	須恵器	無台坏	(146)	84	36	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	SG23(14－12)			Aa2
	222	須恵器	無台坏	150	85	34	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	SG23 (14－12、16･17－11)	RP219		Aa2
	223	須恵器	無台坏	(150)	(80)	35	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	SG23(13－12)			Aa2
	224	須恵器	無台坏	(149)	85	37	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	SG23Y (17－11)	RP382		Aa2
	225	須恵器	無台坏	144	76	36	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	SG23 (14－12、16･17－11)	RP220		Aa2
	226	須恵器	無台坏	(138)	70	34	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	SG23(13－11)			Ab1
	227	須恵器	無台坏	(138)	78	39	6	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	SG23(14－12)		底部墨書「成□」 「成白ヵ」 内面媒付着	Ab1
	228	須恵器	無台坏	(136)	75	34	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	SG23 (14･15－12)		内面媒付着	Ab1
	229	須恵器	無台坏	(138)	75	31	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	SG23(14－12)	RP215		Ab1
	230	須恵器	無台坏	(140)	70	32	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	SG23(14－12)			Ab1
	231	須恵器	無台坏	134	70	31	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	SG23 (13･14－12、16－11)			Ab1
53	232	須恵器	無台坏	(138)	(80)	32	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	SG23(15－12)	RP250	底部墨痕	Ac1

表８　遺物観察表（８）

挿図番号	遺物番号	種別	器種	計測値（mm） 口径	底径	器高	器厚	調整・文様	出土地点	登録番号	備考	分類
53	233	須恵器	無台坏	142	78	35	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	SG23(13－11)			Ac1
	234	須恵器	無台坏	(150)	88	38	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	SG23Y (17－11)	RP383		Ac1
	235	須恵器	無台坏	150	86	38	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	SG23Y (16－11)			Ac1
	236	須恵器	無台坏	(151)	72	31	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	SG23(14－12、 16－11)	RP218	歪み有	Ac2
	237	須恵器	無台坏	132	76	30	3	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	SG23(15－12)	RP249		Ac2
	238	須恵器	無台坏	(149)	78	33	3	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	SG23 (14･15－12)		焼成不良	Ac2
	239	須恵器	無台坏	(145)	70	33	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	SG23 (14･15－12)			Ac2
	240	須恵器	無台坏	(144)	84	37	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	SG23 (16－11、15－ 12)		焼成不良	Ac2
	241	須恵器	無台坏	(138)	74	38	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	SG23(13－12)			Ba1
	242	須恵器	無台坏	(138)	76	35	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	SG23(14－12)			Ba1
	243	須恵器	無台坏	130	64	32	3	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	SG23 (14－12、 16･17－11)			Ba1
54	244	須恵器	無台坏	(130)	62	36	3	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	SG23		底部墨書「十ヵ」	Ba1
	245	須恵器	無台坏	(128)	(75)	39	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23(13－11)			Ba2
	246	須恵器	無台坏	136	74	35	3	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23Y (16－11)	RP356	底部墨痕	Ba2
	247	須恵器	無台坏	(145)	(76)	40	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23(14－12)	RP217		Ba2
	248	須恵器	無台坏	(138)	(70)	37	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23(11－11)			Ba2
	249	須恵器	無台坏	(140)	67	38	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23 (14･15－12)		外面媒付着	Ba2
	250	須恵器	無台坏	142	84	38	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	SG23(13－12)		焼成不良	Bb1
	251	須恵器	無台坏	(131)	70	34	3	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	SG23(14－12)			Bb1
	252	須恵器	無台坏	(150)	(80)	40	6	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23 (14－12、 16－11)			Bb2
	253	須恵器	無台坏	145	67	42	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23 (13－12、 16－11)			Bb2
	254	須恵器	無台坏	(124)	(70)	38	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23Y (16－11)	RP359	底部墨痕	Bb2
	255	須恵器	無台坏	148	78	45	6	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	SG23(16－11)	RP380	焼成不良	Bc1
55	256	須恵器	無台坏	(143)	66	36	3	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	SG23(13－11)		内面媒付着 焼成不良	Bc1
	257	須恵器	無台坏	(144)	80	42	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	SG23Y (16－11)	RP346	焼成不良	Bc1
	258	須恵器	無台坏	(142)	76	41	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23Y (16－11)	RP352		Bc2
	259	須恵器	無台坏	132	72	37	3	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23Y (16－11)	RP360		Bc2
	260	須恵器	無台坏	143	62	37	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23(15－12)	RP247	底部墨書「卅」	Bc2
	261	須恵器	無台坏		66	[27]	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	SG23(13－12)	RP136		

表９　遺物観察表（９）

挿図番号	遺物番号	種別	器種	計測値（mm） 口径	底径	器高	器厚	調整・文様	出土地点	登録番号	備考	分類
55	262	須恵器	無台坏		(80)	[21]	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	SG23(14－12)		底部墨書「□」	
	263	須恵器	無台坏		(78)	[8]	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	SG23(16－11)		底部墨痕	
	264	須恵器	無台坏		(72)	[17]	6	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	SG23(16－11)		内面底部刻書「□」	
	265	須恵器	無台坏	131	70	42	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	SG23(13－12)	RP137	底部墨痕	Ca1
	266	須恵器	無台坏	137	65	38	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23(13－11)	RP97	底部墨書「大」	Ca2
	267	須恵器	無台坏	138	59	42	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23(14－12)	RP151	底部墨書「大」 口縁部媒付着	Ca2
56	268	須恵器	無台坏	137	62	42	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23(13－12)	RP146	体部墨書「天上」 底部墨書「廾」	Ca2
	269	須恵器	無台坏	143	70	44	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23 (14･15－12)	RP248	底部外面墨書「継」 底部内面転用硯 歪み有	Ca2
	270	須恵器	無台坏	142	62	45	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23(16－11)	RP325	底部・体部墨痕	Ca2
	271	須恵器	無台坏	149	70	49	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23(13－12)	RP202	底部墨書「物ヵ」 体部墨痕	Ca2
	272	須恵器	無台坏	145	66	50	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23 (13－11･12)		底部墨書「廣」	Ca2
	273	須恵器	無台坏	139	64	52	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23 (13－11･12)	RP179	体部墨書「□□」	Ca2
	274	須恵器	無台坏	(146)	(74)	49	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23		内面底部転用硯	Ca2
	275	須恵器	無台坏	150	62	44	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23 (13－11･12)			Ca2
	276	須恵器	無台坏	(146)	64	49	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23(13－11)			Ca2
57	277	須恵器	無台坏	140	66	44	6	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23 (13･15－12、16－11)	RP213	焼成不良	Ca2
	278	須恵器	無台坏	143	64	41	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23 (13－11･12)	RP229		Ca2
	279	須恵器	無台坏	139	64	45	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り→ナデ	SG23Y (16･17－11)	RP350 RP353	焼成不良	Cb1
	280	須恵器	無台坏	146	66	51	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23(13－12)	RP208 RP210	底部墨書「卄」	Cb2
	281	須恵器	無台坏	150	64	46	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23 (13･15－12)	RP197	体部墨書「｜｜」	Cb2
	282	須恵器	無台坏	140	64	48	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23 (13－11･12)	RP204		Cb2
	283	須恵器	無台坏	138	66	44	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	SG23Y (16－11)	RP347	焼成不良	Cc1
	284	須恵器	無台坏	142	68	46	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23(13－11)	RP237	底部墨書「□」	Cc2
	285	須恵器	無台坏	140	62	50	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23(11－11)		体部墨書「㊥」 口縁部内面媒付着	Cc2
	286	須恵器	無台坏	140	62	45	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23 (13－11･12、14－12)		焼成不良	Cc2
	287	須恵器	無台坏	(127)	65	47	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23			Cc2
	288	須恵器	無台坏	(146)	(68)	45	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23(13－12)		外面上部媒付着	Cc2
	289	須恵器	無台坏		76	[43]	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ケズリ	SG23Y (16－11)			
58	290	須恵器	無台坏		(68)	[33]	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23		体部墨書「□」 焼成不良	

表 10　遺物観察表（10）

挿図番号	遺物番号	種別	器種	計測値（mm） 口径	底径	器高	器厚	調整・文様	出土地点	登録番号	備考	分類
58	291	須恵器	無台坏		(66)	[5]	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23(12－11)		底部墨書「主ヵ」	
	292	須恵器	無台坏		68	[16]	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23(13－11)		底部墨書「□」	
	293	須恵器	無台坏		(66)		4	底－回転糸切	SG23(12－11)		底部墨書「□」 底部のハガレ	
	294	須恵器	無台坏	(136)	58	46	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23 (13－11･12)	RP131	底部墨書「□」	Da2
	295	須恵器	無台坏	150	58	56	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23 (13･15－12)	RP194	底部墨書「五ヵ」 焼成不良	Da2
	296	須恵器	無台坏	148	56	52	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23 (13－11･12)	RP195	底部墨書「物」	Da2
	297	須恵器	無台坏	146	58	49	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23 (11･12･ 14－11)		焼成不良	Da2
	298	須恵器	無台坏	137	54	42	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23(13－11)	RP156	内面媒付着 焼成不良	Da2
	299	須恵器	無台坏	134	50	45	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23(14－12)			Da2
	300	須恵器	無台坏	140	56	43	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23(13－12)	RP214	体部墨書「若」	Da2
	301	須恵器	無台坏	140	53	50	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23(13－11)	RP182	体部墨書「子鷹」	Da2
	302	須恵器	無台坏	142	57	50	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23(13－12)	RP207	体部墨書「子鷹」	Da2
59	303	須恵器	無台坏	146	55	46	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23 (13－11、 14－12)	RP221	底部墨書「主」	Da2
	304	須恵器	無台坏	142	59	42	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23(13－12)			Da2
	305	須恵器	無台坏	148	56	48	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23 (13－11･12)	RP125		Da2
	306	須恵器	無台坏	(140)	(57)	44	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23(13－11)			Da2
	307	須恵器	無台坏	145	62	43	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23(13－12)			Da2
	308	須恵器	無台坏	(137)	(60)	44	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23		内外面媒付着 焼成不良	Db2
	309	須恵器	無台坏	(140)	(60)	50	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23(13－11)			Db2
	310	須恵器	無台坏	(129)	53	51	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23(13－11･ 12、14－12、 16－11)		体部墨書「本」 底部墨書「本」	Db2
	311	須恵器	無台坏	140	58	43	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23(13－12)	RP211	底部墨書「主」	Db2
	312	須恵器	無台坏	140	56	45	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23(12－11)		体部墨書「吉」 内面底部転用硯	Db2
	313	須恵器	無台坏	(133)	54	43	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23		底部墨書「大」	Db2
	314	須恵器	無台坏	136	56	41	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	SG23 (13･14－12)	RP226	底部墨書「物」	Dc1
60	315	須恵器	無台坏	151	58	49	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23(13－12)	RP196	底部墨書「主」	Dc2
	316	須恵器	無台坏	140	56	46	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23(15－12)	RP260	底部墨書「物」	Dc2
	317	須恵器	無台坏	139	55	50	3	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23(13－11)	RP222 RP233	体部墨書２ヶ所「中清」 歪み有	Dc2
	318	須恵器	無台坏	135	56	47	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23 (13－11･12)			Dc2
	319	須恵器	無台坏	138	50	43	3	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23(11－11)			Dc2

表11　遺物観察表（11）

挿図番号	遺物番号	種別	器種	計測値（mm） 口径	底径	器高	器厚	調整・文様	出土地点	登録番号	備考	分類
60	320	須恵器	無台坏	(136)	56	42	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23(13－12)	RP135	底部内面媒付着	Dc2
	321	須恵器	無台坏	140	60	41	3	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23(12－11)			Dc2
	322	須恵器	無台坏	134	59	42	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23(14－12)	RP150		Dc2
	323	須恵器	無台坏	132	60	39	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切→ナデ	SG23 (13－11･12、 14･15－12)			Dc2
	324	須恵器	無台坏	144	50	48	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23		歪み有 焼成不良	Dc2
	325	須恵器	無台坏		(60)	[19]	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23(11－11)		底部墨書「□」	
	326	須恵器	無台坏		(51)	[10]	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	SG23(16－11)		底部墨痕	
	327	須恵器	無台坏		(60)	[16]	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23(15－12)		体部墨書「□」 底部墨書「□」	
	328	須恵器	無台坏?			[46]	6	外－ロクロ 内－ロクロ	SG23(13－11)		体部墨書「子」	
	329	須恵器	無台坏?			[24]	4	外－ロクロ 内－ロクロ	SG23(11－11)		体部墨書「中ヵ」	
61	330	須恵器	小型壺	(50)		[37]	4	外－ロクロ 内－ロクロ	SG23(13－12)			
	331	須恵器	壺	108	100	195	8	外－ロクロ 内－ロクロ 底－高台	SG23 (13－11･12)	RP227 RP240	外面体部自然釉	
	332	須恵器	壺	108	79	151	5	外－ロクロ、ナデ、カキメ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23(13－12)	RP198 RP205	外面体部・内面頸部自然釉	
	333	須恵器	壺	183		[385]	9	外－タタキ 内－アテ	SG23(13－11･ 12、16－11) 13－9 14－10	RP225 RP340	内面頸部・外面自然釉 歪み有	
62	334	須恵器	壺	112		[89]	6	外－ロクロ 内－ロクロ	SG23(13－12)	RP203	内外面一部自然釉 二次加熱有	
	335	須恵器	壺		102	[149]	6	外－カキメ、タタキ? 内－ナデ、輪積痕 底－高台	SG23(16－11) SD87 (15･16－11)	RP306		
	336	須恵器	小型甕	102		[73]	5	外－ロクロ 内－ロクロ	SG23(13－12、 12･16－11) 13－8			
	337	須恵器	甕	(220)		[214]	7	外－カキメ、ケズリ、タタキ 内－カキメ	SG23(16－11、 13･14－12) 8－8、13－9			
	338	須恵器	横瓶	(134)		248	10	外－タタキ 内－ナデ	SG23(13－11･ 12、14－12) 14－9		外面自然釉	
63	339	土師器	無台坏	(155)	(104)	46	6	外－ケズリ 内－ハケ、ナデ 底－網代痕	SG23 (13－11･ 12)			Aa1
	340	土師器	無台坏	135	85	51	6	外－ケズリ、輪積痕 内－ハケ 底－網代痕	SG23 (13－11･12、 14－12)			Aa1
	341	土師器	無台坏	120	82	40	6	外－ケズリ、ヘラナデ、ナデ 内－ヘラナデ 底－網代痕	SG23(14－12)			Aa1
	342	土師器	無台坏	102	60	37	6	外－ケズリ 内－ハケ 底－網代痕	SG23 (13－11･12、 14－12)		外面輪積痕	Aa2
	343	土師器	無台坏	136	93	45	5	外－ケズリ、ヘラナデ 内－ヘラナデ 底－網代痕→ヘラナデ	SG23 (13－11･12)	RP228		Ab1
	344	土師器	無台坏	124	70	52	4	外－ケズリ、ナデ 内－ミガキ、ヘラナデ 底－木葉痕→ヘラナデ	SG23(15－12)			Ab1
	345	土師器	無台坏	(120)	60	32	4	外－ケズリ 内－ハケ 底－ケズリ	SG23(16－11)	RP341	外面下部媒付着	Ab2
	346	土師器	無台坏	162	73	87	4	外－ケズリ、ヘラナデ 内－ヘラナデ 底－網代痕	SG23 (13－11･12)	RP234	外面下部媒付着	Ba1
	347	土師器	無台坏	146	70	68	5	外－ケズリ、ヘラナデ 内－ハケ、ナデ 底－網代痕	SG23(13－11)	RP183		Ba1
	348	土師器	無台坏	144	66	67	6	外－ケズリ、ヘラナデ 内－ハケ、ヘラナデ 底－木葉痕	SG23(13－12)	RP158	内外面媒付着	Ba1
	349	土師器	無台坏	134	70	67	6	外－ケズリ、ヘラナデ 内－ヘラナデ→ミガキ 底－ヘラケズリ	SG23(13－12)	RP193	外面媒付着	Ba1

表12　遺物観察表（12）

挿図番号	遺物番号	種別	器種	計測値（mm） 口径	底径	器高	器厚	調整・文様	出土地点	登録番号	備考	分類
63	350	土師器	無台坏	112	62	55	5	外－ハケ→ナデ 内－ハケ→ナデ 底－網代痕	SG23 （13･14－12）	RP154	外面媒付着	Ba2
	351	土師器	無台坏	134	80	55	6	外－ケズリ 内－ヘラナデ 底－網代痕	SG23 （13－11･12、 14－12）			Ba2
	352	土師器	無台坏	（128）	（64）	48	5	外－ケズリ、ナデ 内－ミガキ、ヘラナデ 底－網代痕	SG23 （13－11･12、 15－12）			Ba2
	353	土師器	無台坏	（127）	70	50	4	外－ケズリ 内－ミガキ 底－網代痕	SG23（15－12）			Ba2
64	354	土師器	無台坏	143	78	60	7	外－ケズリ、ナデ、ヘラナデ 内－ハケ、ナデ、ヘラナデ 底－網代痕	SG23 （13－11･12）	RP189	外面体部媒付着	Bb1
	355	土師器	無台坏	（142）	（84）	66	5	外－ケズリ 内－ミガキ 底－網代痕	SG23 （13･14－12）		底部媒付着	Bb1
	356	土師器	無台坏	142	86	71	6	外－ケズリ、ヘラナデ 内－ミガキ 底－網代痕	SG23 （13－11、 13･14－12）			Bb1
	357	土師器	無台坏	122	65	55	6	外－ケズリ 内－ミガキ、ハケ 底－網代痕	SG23 （13－11･12）			Bb2
	358	土師器	無台坏	125	68	52	7	外－ケズリ、ヘラナデ 内－ミガキ 底－網代痕	SG23（13－11）	RP186	内外面一部媒付着	Bb2
	359	土師器	無台坏	126	72	53	6	外－ケズリ、ナデ 内－ミガキ 底－網代痕	SG23 （13－11･12）			Bb2
	360	土師器	無台坏	114	64	51	8	外－ハケ→ナデ 内－ミガキ 底－網代痕	SG23（13－11）	RP184		Bb2
	361	土師器	無台坏	154	90	40	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	SG23（16－11）	RP311		
	362	土師器	無台坏	158	93	39	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	SG23Y（16－11）			
	363	土師器	無台坏	（144）	（70）	36	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ナデ	SG23Y（17－11）	RP348		
	364	土師器	無台坏	（136）	（76）	41	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ケズリ?	SG23Y（16－11）			
	365	土師器	無台坏	（146）	71	44	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ケズリ?	SG23Y（16－11）		底部粘土付着	
	366	土師器	無台坏	（138）	69	50	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ケズリ	SG23 （16･17－11）		底部粘土付着 内面媒付着	
	367	土師器	無台坏	（140）	67	48	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ケズリ	SG23Y（16－11）	RP351		
	368	土師器	無台坏	141	70	61	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	SG23（15－12）	RP258	体部墨書「千」	
65	369	土師器	甕	104	66	76	5	外－ハケ、ケズリ、ナデ 内－ハケ、ナデ、ヘラナデ 底－網代痕	SG23（14－12）	RP8		Aa2
	370	土師器	甕	120	（74）	94	5	外－ハケ、ナデ 内－ヘラナデ、ナデ 底－不明	SG23（16－11）	RP342	内面付着物有	Aa2
	371	土師器	甕	（152）	（66）	85	7	外－ハケ、ナデ 内－ハケ、ヘラナデ 底－木葉痕	SG23（13－12）	RP134		Aa2
	372	土師器	甕	（149）	78	114	5	外－ハケ、ナデ 内－ヘラナデ、ナデ 底－網代痕	SG23（16－11）			Ab1
	373	土師器	甕		78	［108］	5	外－ハケ 内－ハケ 底－網代痕	SG23（13－11）	RP181		Ab2
	374	土師器	甕	154	86	125	5	外－ハケ、ナデ 内－ハケ 底－網代痕	SG23（13－11）	RP224	内面上部・外面媒付着	Ab2
	375	土師器	甕		（82）	［92］	6	外－ハケ、ナデ 内－ヘラナデ、ナデ 底－網代痕	SG23Y（16－11）			Ab2
	376	土師器	甕	（112）	75	127	6	外－ハケ、ナデ 内－ハケ、ナデ 底－木葉痕	SG23 （13－11･12）			Ac2
	377	土師器	甕	197	102	145	5	外－ケズリ、ミガキ 内－ハケ、ミガキ 底－網代痕	SG23Y（17－11）	RP362	口縁・外面・底部の一部黒色処理	Ba2
	378	土師器	甕		90	［129］	7	外－ハケ 内－ヘラナデ 底－網代痕	SG23 （13－11･12）		二次加熱有	

表13　遺物観察表（13）

挿図番号	遺物番号	種別	器種	計測値（mm） 口径	底径	器高	器厚	調整・文様	出土地点	登録番号	備考	分類
65	379	土師器	甕		94	［96］	5	外－ミガキ、ケズリ 内－ミガキ 底－網代痕	SG23(16－11) 16－11	RP310		
66	380	土師器	甕	218	94	310	6	外－ハケ、ナデ 内－ハケ、ナデ 底－木葉痕	SG23(16－11)	RP328	二次加熱有 内外面媒付着 歪み有	Ca1
	381	土師器	甕	(232)	(86)	318	6	外－ハケ、ナデ 内－ハケ、ナデ 底－網代痕	SG23 (12･13－11、 13･14－12)			Ca1
	382	土師器	甕	224		［273］	6	外－ハケ、ナデ 内－ハケ、ナデ	SG23(16－11)	RP329 RP330 RP331	二次加熱有 外面媒付着	Ca1
	383	土師器	甕	(240)		［231］	7	外－ナデ? 内－ハケ、ナデ	SG23(15－12)		外面摩滅	Ca1
67	384	土師器	甕	(293)		［247］	7	外－ハケ、ナデ 内－ハケ、ナデ	SG23 (14･15－12、 15－13)			Ca1
	385	土師器	甕	(264)		［243］	7	外－ハケ、ナデ 内－ハケ、ナデ	SG23(14･15－ 12)			Ca1
	386	土師器	甕	(288)		［222］	6	外－ハケ 内－ハケ	SG23(16－11)			Ca1
68	387	土師器	甕	(260)		［188］	6	外－ハケ 内－ハケ	SG23(16－11)	RP335	外面媒付着	Ca1
	388	土師器	甕	204		［113］	5	外－ハケ、ナデ 内－ハケ、ナデ	SG23 (13－11･12)			Ca1
	389	土師器	甕	228		［162］	4	外－ハケ、ナデ 内－ハケ、ナデ	SG23(16－11)	RP329 RP330	二次加熱有	Ca1
	390	土師器	甕	(208)		［175］	6	外－ナデ 内－ハケ、ナデ	SG23 (15－11･12)			Ca2
	391	土師器	甕	220		［150］	4	外－ハケ 内－ハケ	SG23 (13－11･12)	RP124	器形－楕円形	Cb2
	392	土師器	甕	(200)		［226］	6	外－ハケ、ナデ 内－ハケ、ナデ	SG23 (13－11･12)			Cb2
	393	土師器	甕	184		［136］	5	外－ハケ、ナデ 内－ハケ、ナデ	SG23 (13－11･12)	RP180	外面媒付着	Cb2
69	394	土師器	甕	254	100	346	9	外－ロクロ、ケズリ 内－ロクロ、ナデ 底－ケズリ	SG23 (14･15－12、 16－11)			Cc1
	395	土師器	甕	(208)		［247］	7	外－ケズリ、カキメ 内－ハケ、ナデ	SG23 (13－11･12)	RP128	内外面媒付着	Cc1
	396	土師器	甕		68	［93］	6	外－ロクロ? 内－ロクロ? 底－ケズリ	SG23(17－11)	RP327	二次加熱有 内外面剥落	
	397	土師器	甕		92	［283］	6	外－ハケ 内－ハケ 底－網代痕	SG23 (13－11･12)			
70	398	土師器	甕		(90)	［275］	5	外－ハケ 内－ハケ 底－不明	SG23 (13－11･12)		二次加熱有	
	399	土師器	鉢	88	(56)	53	7	外－ハケ、ナデ、 内－ナデ、ヘラナデ 底－網代痕	SG23(15－12)			
	400	土師器	鉢	(142)	80	84	6	外－ハケ、ナデ 内－ハケ、ヘラナデ 底－網代痕	SG23(13－11)			
	401	土師器	鉢	210	112	148	5	外－ハケ 内－ハケ→ナデ 底－ハケメ	SG23(13－12)	RP192	底部媒付着	
	402	土師器	堝	(360)		［46］	6	外－ハケ、ナデ 内－ハケ	SG23 (14･15－12)			
	403	土師器	堝	(390)		［128］	6	外－ハケ、ナデ 内－ハケ	SG23 (13－11･12)	RP201	外面媒付着	
71	404	黒色土器	有台坏	168	83	68	4	外－ロクロ 内－ミガキ 底－ヘラ切り、高台	SG23 (13－11･12)	RP123	体部墨痕 高台部つまみ出し 内面黒色処理	
	405	黒色土器	有台坏	(145)	70	56	4	外－ロクロ、ヘラケズリ 内－ミガキ 底－ヘラ切り、高台	SG23 (13－11･12)	RP157	高台部つまみ出し 内面黒色処理	
	406	黒色土器	有台坏	152	72	62	4	外－ロクロ、ヘラナデ 内－ミガキ 底－回転糸切、高台	SG23 (13－11･12)	RP200	底部墨書「王仁」 内面黒色処理	
	407	黒色土器	有台坏	144	70	48	5	外－ロクロ 内－ミガキ 底－高台	SG23 (11･12－11)		内面黒色処理	
	408	黒色土器	無台坏	123	68	44	5	外－ケズリ、ナデ 内－ミガキ 底－ケズリ	SG23 (13－11･12)		内面黒色処理	Aa
	409	黒色土器	無台坏	120	63	42	5	外－ケズリ、ナデ 内－ミガキ 底－網代痕→ケズリ	SG23 (13－11･12)		内面黒色処理	Aa
	410	黒色土器	無台坏	(116)	58	38	4	外－ケズリ、ヘラナデ 内－ミガキ 底－ヘラナデ	SG23(13－12)		内面黒色処理	Ab
	411	黒色土器	無台坏	119	62	46	6	外－ケズリ、ヘラナデ 内－ミガキ、ヘラナデ 底－網代痕→ヘラナデ	SG23 (13－11･12)		内面黒色処理	Ab

表14　遺物観察表（14）

挿図番号	遺物番号	種別	器種	計測値（mm） 口径	底径	器高	器厚	調整・文様	出土地点	登録番号	備考	分類
71	412	黒色土器	無台坏	122	64	47	7	外－ケズリ、ヘラナデ 内－ミガキ 底－網代痕	SG23(13－11)	RP127	体部墨書「寺ヵ」 体部・底部墨痕 内面黒色処理	Ab
	413	黒色土器	無台坏	133	72	50	5	外－ケズリ、ヘラナデ 内－ミガキ 底－網代痕→ケズリ	SG23 (13･14－12)		内面黒色処理	Ab
72	414	黒色土器	無台坏	137	76	47	4	外－ケズリ、ミガキ 内－ミガキ 底－木葉痕	SG23(13－12)	RP209	内面・外面口縁付近・底部の一部黒色処理	Ab
	415	黒色土器	無台坏	(125)	50	46	6	外－ケズリ、ヘラナデ 内－ミガキ、ヘラナデ 底－ケズリ	SG23(13－11)	RP187	内面黒色処理	Ab
	416	黒色土器	無台坏	123	56	48	6	外－ケズリ、ヘラナデ 内－ハケ、ミガキ 底－ヘラケズリ	SG23(13－11)		内面黒色処理	Ab
	417	黒色土器	無台坏	(115)	80	44	5	外－ケズリ、ヘラナデ 内－ミガキ 底－網代痕	SG23(13－11)		内面黒色処理	Ba
	418	黒色土器	無台坏	126	84	47	6	外－ケズリ、ナデ、ヘラナデ 内－ミガキ 底－網代痕→ケズリ	SG23(13－12)	RP126 RP188	外面口唇部ケズリ→ナデ 内面黒色処理	Ba
	419	黒色土器	無台坏	122	70	49	5	外－ケズリ、ナデ 内－ミガキ、ハケ 底－網代痕	SG23 (13－11、 14－12)		内面黒色処理	Ba
	420	黒色土器	無台坏	128	80	56	5	外－ケズリ、ヘラナデ 内－ハケ、ミガキ、ナデ 底－木葉痕	SG23(13－11)	RP235	内面黒色処理	Ba
	421	黒色土器	無台坏	107	44	45	4	外－ケズリ、ナデ 内－ミガキ 底－ヘラケズリ	SG23 (13－11･12)		内面黒色処理	C
	422	黒色土器	無台坏	(128)	(78)	58	5	外－ミガキ、輪積痕 内－ミガキ 底－木葉痕	SG23(16－11)		内面黒色処理剥落 二次加熱有	C
	423	黒色土器	無台坏	148	72	43	6	外－ロクロ、下部－ヘラケズリ 内－ミガキ 底－回転糸切→ナデ	SG23Y(17－11)	RP345	内面黒色処理	A
	424	黒色土器	無台坏	139	73	47	5	外－ロクロ、ヘラナデ 内－ミガキ 底－回転糸切	SG23(13－11)		口縁～体部の一部媒付着 内面黒色処理	A
	425	黒色土器	無台坏	158	83	54	5	外－ロクロ 内－ミガキ 底－回転糸切	SG23(13－12)		内面黒色処理	A
73	426	黒色土器	無台坏	165	82	56	6	外－ロクロ 内－ミガキ 底－回転糸切	SG23Y(17－11)	RP381	内面黒色処理	A
	427	黒色土器	無台坏	133	70	48	3	外－ロクロ 内－ミガキ 底－ヘラナデ?	SG23(13－11･12、15－12)		内面黒色処理	B
	428	黒色土器	無台坏	(128)	60	41	3	外－ロクロ 内－ミガキ 底－ヘラ切り→ヘラナデ?	SG23(14－12)		内面黒色処理	C
	429	黒色土器	無台坏	135	56	47	4	外－ロクロ、ヘラナデ 内－ミガキ 底－ケズリ	SG23(13－11･12)	RP159	内面黒色処理 歪み有	C
	430	黒色土器	無台坏	132	62	48	4	外－ロクロ、ヘラナデ 内－ナデ 底－ヘラ切り→ヘラナデ	SG23(13－12)	RP199	内面黒色処理	C
	431	黒色土器	鉢	(112)	76	65	6	外－ケズリ、ナデ 内－ミガキ 底－網代痕	SG23(16－11)	RP372	内面黒色処理	
	432	黒色土器	鉢	(168)	(110)	98	6	外－ケズリ、ミガキ、ナデ 内－ハケ、ミガキ、ヘラナデ	SG23(13－11)		内面黒色処理	
	433	黒色土器	鉢	(149)	(80)	79	6	外－ケズリ、ヘラナデ 内－ミガキ 底－ケズリ→ナデ	SG23 (13･14－12、 16－11)		内面黒色処理	
	434	黒色土器	甕	(152)	132	143	5	外－ハケ、ケズリ、ナデ 内－ミガキ 底－網代痕	SG23(13－11･12、14－12、16－11)		内面黒色処理	
74	435	土師器	カマドの台？	外径 (402)	内径 (194)	最大幅 104	最大厚 28	外－ハケ 内－ハケ	SG23(16－11)			
	436	土製品	不明	長 23	幅 25	厚 14	重量 10.3g		SG23(17－11)			
	437	石製品	砥石	長 [80]	幅 55	厚 [28]	重量 168.4g	砥面－３面 石材－凝灰岩	SG23(13－11)			
	438	石製品	砥石	長 [240]	幅 [85]	厚 [105]	重量 2400g	砥面－１面 石材－礫岩	SG23(12－11)			
	439	石製品	砥石	長 [195]	幅 [178]	厚 [76]	重量 2051g	砥面－１面 石材－礫岩	SG23(13－12)	RQ230		
	440	鉄製品	鏨	長 [75]	幅 18	厚 17	重量 87.6g		SG23(16－11)	RM319		
97	593	縄文	深鉢			[52]	3	部位－口縁部 文様－渦巻文	13－10	RP83	中期（大木９式）	Ⅰ
	594	縄文	長胴壺	(149)		[178]	6	部位－口縁～体部 文様－平行沈線文＋斜行沈線文 地文－縄文ＬＲ	8－8	RP100	４単位波状口縁 加曾利Ｂ式併行 後期中葉	Ⅱa1

表15　遺物観察表（15）

挿図番号	遺物番号	種別	器種	計測値（mm） 口径	底径	器高	器厚	調整・文様	出土地点	登録番号	備考	分類
97	595	縄文	深鉢？			［28］	5	部位－口縁部 文様－平行沈線文＋貼瘤 地文－縄文ＬＲ	4－1		後期後葉	Ⅱa2
	596	縄文	深鉢			［57］	6	部位－口縁部 文様－沈線文＋貼瘤 地文－縄文Ｌ	3－1		波状口縁 後期後葉	Ⅱa2
	597	縄文	深鉢	176	（66）	170	7	部位－口縁～底部（略完形） 地文－条線文	13･14－11･12		後期後葉	Ⅱb1
	598	縄文	深鉢			［76］	5	部位－体部 地文－縄文ＬＲ	8－8	RP101	後期	Ⅱb2
	599	縄文	深鉢			［31］	6	部位－体部 文様－沈線文	4－2		後期	Ⅱb3
	600	縄文	壺			［70］	7	部位－体部 地文－縄文Ｌ	C区Ｘ－0		後期以降	Ⅱb2
	601	縄文	深鉢		104	［67］	9	部位－底部 地文－縄文ＬＲ	8－8	RP102	後期	Ⅱc
	602	縄文	深鉢		95	［31］	23	部位－底部 地文－不明	9－8	RP103	外面摩滅 時期不明	Ⅳ
	603	縄文	注口	長［31］		高［43］		部位－注口	8－8		下部に隆帯の貼り付け 後期中葉	
	604	土偶	脚部	長［29］	幅［17］	厚［18］	重量8.5g	指圧痕	3－2			
	605	土偶	脚部	長［26］	幅［25］	厚［25］	重量12.0g	指圧痕	3－2			
	606	土偶	脚部	長［47］	幅［18］	厚［21］	重量10.6g	指圧痕	4－2			
98	607	石器	尖頭器	長［59.0］	幅26.3	厚9.1	重量13.8g	石材－頁岩	13－9	RQ315		
	608	石器	石鏃	長［34.0］	幅14.9	厚5.8	重量1.8g	石材－頁岩	13－10	RQ82		
	609	石器	石錐	長［34.8］	幅21.0	厚9.0	重量7.3g	石材－頁岩	11－10			
	610	石器	石匙	長70.5	幅30.1	厚8.7	重量14.5g	石材－頁岩	14－10	RQ314		
	611	石器	石匙	長64.7	幅27.2	厚6.3	重量11.0g	石材－頁岩	4－2	RQ384		
	612	石器	石匙	長［40.0］	幅［37.4］	厚［8.6］	重量8.5g	石材－頁岩	7－6	RQ73		
	613	石器	石匙	長［38.0］	幅30.1	厚6.2	重量5.9g	石材－頁岩	5－2	RQ385		
	614	石器	石匙	長［30.4］	幅［29.3］	厚9.9	重量6.0g	石材－頁岩	C区Ｘ－0			
	615	石器	削器	長［74.6］	幅［26.9］	厚［8.9］	重量17.3g	石材－頁岩	C区Ｘ－0			
	616	石器	削器	長63.0	幅36.0	厚15.6	重量37.4g	石材－頁岩	6－4			
	617	石器	石篦	長89.0	幅62.6	厚17.6	重量82.8g	石材－頁岩	2－3･4			
	618	石器	磨製石斧	長112	幅49	厚28	重量211.1g	石材－砂岩	2－3	RQ13		
99	619	石器	凹石	長116	幅［104］	厚61	重量899.7g	石材－石英閃緑岩	13－10			
	620	石製品	石皿	長［205］	幅［128］	厚40	重量1175g	石材－砂岩	12－12			
	621	石製品	石皿	長232	幅210	厚61	重量4800g	石材－礫岩	17－11		表裏面媒付着	
100	622	須恵器	蓋	（134）		33	3	外－ロクロ 内－ロクロ 天井－回転ヘラケズリ	11－10			Aa
	623	須恵器	蓋	（154）		［31］	5	外－ロクロ 内－ロクロ 天井－回転ヘラケズリ	12－8		外面口縁付近・内面自然釉	Aa
	624	須恵器	蓋	158		35	5	外－ロクロ、ヘラケズリ 内－ロクロ 天井－回転ヘラケズリ	11－9	RP88	切り離し回転糸切	Aa
	625	須恵器	蓋	157		［29］	7	外－ロクロ 内－ロクロ 天井－回転ヘラケズリ	11－9		口縁部自然釉 切り離しヘラ切り	Aa
	626	須恵器	蓋	154		36	5	外－ロクロ 内－ロクロ 天井－回転ヘラケズリ	11－9	RP4	摘み墨書「十万」 口縁部自然釉 歪み有 切り離し回転糸切	Aa
	627	須恵器	蓋	（160）		34	5	外－ロクロ、ヘラケズリ 内－ロクロ 天井－回転ヘラケズリ	11－9		焼成不良	Ab
	628	須恵器	蓋	（163）		［28］	6	外－ロクロ 内－ロクロ	11･12－9･10		内面自然釉	Ab
	629	須恵器	蓋			［44］	6	外－ロクロ 内－ロクロ 天井－回転ヘラケズリ	12－8･9 11･12－9		摘み－宝珠形	B
	630	須恵器	蓋	85		30	4	外－ロクロ 内－ロクロ	11－9	RP6	短頸壺の蓋 側面自然釉	
	631	須恵器	有台坏	（142）		［46］	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切、高台	10･11－9		底部媒付着 高台部欠損	Ab

表16　遺物観察表（16）

挿図番号	遺物番号	種別	器種	計測値（mm） 口径	底径	器高	器厚	調整・文様	出土地点	登録番号	備考	分類
100	632	須恵器	有台坏	148		[65]	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－高台	11·12－9 12·13－10 ST20		外面自然釉	Ba
	633	須恵器	有台坏	(158)	(91)	92	6	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り、高台	11－9		内面焼成不良	Ba
	634	須恵器	有台坏	(146)	(82)	85	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り、高台	10－10 11－9·10			Bb
	635	須恵器	有台坏		(92)	[46]	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り、高台	13·14－12			
101	636	須恵器	無台坏	(142)	87	36	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	2－4	RP9		Aa1
	637	須恵器	無台坏	(148)	86	36	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	2－4	RP11		Aa1
	638	須恵器	無台坏	142	84	38	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	8－9	RP104	焼成不良	Ab1
	639	須恵器	無台坏	148	70	36	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	12－10·11	RP84		Ac1
	640	須恵器	無台坏	(135)	(66)	30	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	10－10			Ac1
	641	須恵器	無台坏	(132)	62	38	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	9－8·9	RP112		Ac2
	642	須恵器	無台坏	146	85	39	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	12－9	RP86	焼成不良	Ba1
	643	須恵器	無台坏	(152)	74	42	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	12－8·10 11－9			Ba2
	644	須恵器	無台坏	146	72	45	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	12－9	RP87		Bb2
	645	須恵器	無台坏	(150)	88	41	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	11－9			Bc2
	646	須恵器	無台坏	(148)	(62)	43	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	15－10	RP307		Ca2
	647	須恵器	無台坏	(150)	(62)	46	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	14－9	RP308		Ca2
102	648	須恵器	無台坏	142	52	40	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	15－10			Ca2
	649	須恵器	無台坏	(125)	56	41	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	15－10			Da2
	650	須恵器	無台坏	139	60	50	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	10－9	RP93	体部墨書「□」	Da2
	651	須恵器	無台坏		84	[23]	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り→ナデ	C区X－0			
	652	須恵器	無台坏		80	[34]	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ヘラ切り	12－9			
	653	須恵器	無台坏		65	[29]	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	C区X－0		焼成不良	
	654	須恵器	無台坏		58	[41]	4	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	14－8·10	RP309		
	655	須恵器	無台坏		57	[21]	5	外－ロクロ 内－ロクロ 底－回転糸切	13－10			
	656	須恵器	双耳坏			[23]	3	外－ケズリ 内－ロクロ	X－0		取手部分	
	657	須恵器	壺			[55]	8	外－ロクロ、ケズリ 内－ハケ 底－高台	C区X－0			
	658	須恵器	壺		68	[33]	6	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ナデ、高台	13·14－12			
	659	須恵器	甕	(140)	112	176	7	外－ロクロ 内－ロクロ 底－ケズリ→ナデ	10－10 11－9·10 SG23(13－12)	RP92		
103	660	須恵器	甕	340		[519]	9	外－タタキ 内－アテ→ナデ	10－9·10 ST21	RP297 RP298		

表17　遺物観察表（17）

挿図番号	遺物番号	種別	器種	計測値（mm） 口径	底径	器高	器厚	調整・文様	出土地点	登録番号	備考	分類
104	661	土師器	無台坏	132	82	42	4	外－ハケ、ケズリ、ミガキ 内－ハケ、ミガキ 底－ケズリ→ミガキ	13－9 14·15－10		底部媒付着	Aa1
	662	土師器	無台坏	(140)	(76)	57	6	外－ケズリ、ナデ 内－ミガキ 底－網代痕	12·13－10			Ba1
	663	土師器	無台坏	(154)	80	67	5	外－ロクロ、回転ヘラケズリ 内－ロクロ、ミガキ 底－ヘラケズリ	12－9			
	664	土師器	甕	(91)	56	65	5	外－ケズリ、ナデ 内－ヘラナデ 底－木葉痕	9－9	RP113	二次加熱有 外面剥落	Aa1
	665	土師器	甕	104	77	81	5	外－ハケ、ナデ 内－ケズリ、ヘラナデ、ナデ 底－ケズリ	11－9		二次加熱有 外面剥落	Ab1
	666	土師器	甕	(128)	33	125	6	外－ハケ、ナデ 内－ヘラナデ 底－ケズリ	12－10 ST20	RP295	二次加熱有 外面摩滅	Ab2
	667	土師器	甕	(131)	(78)	141	6	外－ハケ、ナデ 内－ハケ、ナデ 底－木葉痕	12－9			Ba2
	668	土師器	甕		72	[154]	7	外－ハケ 内－ナデ 底－ケズリ	12－9	RP85	外面媒付着	Bb
	669	土師器	甕			[61]	5	外－ハケ、ナデ 内－ハケ、ナデ	C区X－0			B2
	670	土師器	甕	(276)		[121]	7	外－ハケ、ナデ 内－ハケ、ナデ	13·14－9			Ca1
	671	土師器	甕			100	8	外－ケズリ、ナデ 内－ナデ	12－9			Cc1
105	672	土師器	甕		(74)	[37]	6	外－ハケ 内－ハケ、ヘラナデ 底－網代痕	10－9			
	673	土師器	甕		94	[30]	7	外－ハケ、輪積痕 内－ハケ 底－木葉痕	12·13－10		二次加熱有 内外面剥落 底部媒付着	
	674	土師器	甕		(88)	[67]	6	外－ハケ、ケズリ 内－ハケ、ナデ 底－木葉痕	12－9		内外面媒付着	
	675	土師器	鉢	(100)	(49)	60	4	外－ケズリ、ナデ 内－ヘラナデ 底－ヘラナデ	C区X－0			
	676	土師器	甑？	(300)		[232]	8	外－ケズリ、ナデ 内－ハケ？、ナデ	G区X－0		取手付	
	677	土師器	甑？	(236)		[210]	8	外－ケズリ、ナデ 内－ナデ、輪積痕	G区X－0		取手付	
	678	黒色土器	無台坏?	(152)		[49]	4	外－ミガキ 内－ミガキ	13－10	RP24	内外面黒色処理	D
	679	黒色土器	甕？		(69)	[32]	5	外－ケズリ 内－ミガキ 底－ケズリ	13－10		内面黒色処理	
106	680	ﾐﾆﾁｭｱ土器				[19]	4		4－1			
	681	石製品	砥石	長 [45]	幅 24	厚 22	重量 27.7g	砥面－4面 石材－凝灰岩	11－9		穿孔?	
	682	石製品	砥石	長 [56]	幅 34	厚 20	重量 34.5g	砥面－4面 石材－凝灰岩	10·11－9			
	683	石製品	砥石	長 98	幅 83	厚 51	重量 401.0g	砥面－3面 石材－砂岩	12－11			
	684	石製品	石鉢	口径 (255)	器高 [75]	厚 [43]	重量 576.2g	石材－緑色片岩	6－5	RQ79		
	685	石製品	玉	径 36		重量 47.6g		瘤６ヶ所有り 石材－砂岩	2－3	RQ14		
	686	石製品	円盤状石製品	長径 17	短径 16	厚 6	重量 1.6g	石材－不明	2－4	RQ12		
	687	青磁	盤			[18]	5	内面鎬蓮弁文 胎土色－灰白５Y8/1 釉調色－明緑灰5G7/1	12－12		13世紀 龍泉窯	
	688	青磁	稜花皿		(57)	[13]	5	高台内釉掻き取り 胎土色－灰白5Y7/1 釉調色－明オリーブ灰2.5GY7/1	E区X－0		15世紀後半 龍泉窯	
	689	鉄製品	鏃	長 153	幅 21	厚 10	重量 73.9g		7－7	RM16		
107	690	金属製品	古銭	径 22.0		厚 1.4	重量 2.6g	銭名－天禧通寶 鋳造国－北宋 鋳造年－天禧年間	2－4	RM3		
	691	金属製品	古銭	径 22.5		厚 1.0	重量 2.0g	銭名－紹元通寶？ 鋳造国－胡朝？ 鋳造年－聖元年間？	7－7			
	692	金属製品	古銭	径 24.5		厚 1.3	重量 2.5g	銭名－元豊通寶 鋳造国－日本（肥前長崎） 鋳造年－1659年	4－4	RM1	貿易銭	
	693	金属製品	古銭	径 24.5		厚 1.0	重量 2.6g	銭名－元豊通寶 鋳造国－日本（肥前長崎） 初鋳年－1659年	7－8	RM2	貿易銭	
	694	金属製品	古銭	径 25.3		厚 1.5	重量 3.9g	銭名－寛永通寶 鋳造国－日本 鋳造年－元文期	7－4			

表18　木製品観察表（1）

挿図番号	遺物番号	種別	器種	木取り等	樹種	計測値（mm）				出土地点	登録番号	備考	分類
41	109	木製品	容器－挽物－椀？	縦木取り	広葉樹	底径 (84)		器高 [25]		ST20	RW304	炭化、高台のみ	
	110	木製品	刳物	板目	針葉樹	長 [131]	幅 99		厚 [26]	ST20			
46	161	木製品	木札（付札）	柾目	針葉樹	長 [67]	幅 25		厚 4	SX16	RW17	上部のみ	
75	441	木製品	容器－挽物－椀	縦木取り	広葉樹	口径 (168)	底径 (106)	器高 36	厚 6	SG23 (11－11)			Aa1
	442	木製品	容器－挽物－椀	縦木取り	広葉樹		底径 98	器高 [31]	厚 4	SG23 (13－11)	RW170		Aa1
	443	木製品	容器－挽物－椀	縦木取り	広葉樹		底径 (72)	器高 [32]	厚 4	SG23 (13－11)	RW176		Ab1
	444	木製品	容器－挽物－椀	縦木取り	広葉樹		底径 (88)	器高 [88]	厚 8	SG23 (15－12)			Ab2
	445	木製品	容器－挽物－椀	縦木取り	広葉樹		底径 (90)	器高 [30]	厚 10	SG23 (12－11)		内面焼焦痕 底部に刻み文字	Ab2
	446	木製品	容器－挽物－椀	縦木取り	広葉樹	口径 (150)	底径 96	器高 48	厚 7	SG23 (15－12)	RW255	外面の口縁一部と高台に 焼焦痕	Ba2
	447	木製品	容器－挽物－椀	縦木取り	広葉樹	口径 (148)	底径 86	器高 48	厚 5	SG23 (13－11)	RW175		Bb1
	448	木製品	容器－挽物－椀	縦木取り	ケヤキ	口径 (152)	底径 82	器高 51	厚 7	SG23 (17－11)	RW365		Bb1
76	449	木製品	容器－挽物－椀	縦木取り	ケヤキ	口径 (172)	底径 82	器高 54	厚 9	SG23 (13－12)	RW160	底部焼焦痕	Bb2
	450	木製品	容器－挽物－椀	縦木取り	広葉樹	口径 (150)	底径 (80)	器高 43	厚 10	SG23 (12－11)		内面焼焦 片口状に加工（焼焦による）	Bb2
	451	木製品	容器－挽物－椀	縦木取り	広葉樹	口径 (164)	底径 (84)	器高 48	厚 5	SG23 (15－12)			Bc1
	452	木製品	容器－挽物ー椀	横木取り	広葉樹		底径 94	器高 [35]	厚 10	SG23 (11－11)			B2
	453	木製品	容器－挽物－皿	不明	ケヤキ	口径 173	底径 115	器高 12	厚 4	SG23 (13－11)	RW174	内外面に黒漆 ロクロ刺痕3ヶ所残	Aa
	454	木製品	容器－挽物－皿	縦木取り	ケヤキ	口径 (180)	底径 (138)	器高 18	厚 5	SG23 (17－11)	RW313	内外面に黒漆	Aa
	455	木製品	容器－挽物－皿	縦木取り	広葉樹	口径 (176)	底径 (138)	器高 22	厚 4	SG23 (11－11)			Aa
77	456	木製品	容器－挽物－皿	横木取り	広葉樹	口径 (248)	底径 (176)	器高 14	厚 6	SG23 (14－12)	RW141	外面焼焦痕	Aa
	457	木製品	容器－挽物－皿	縦木取り	ケヤキ	口径 174	底径 118	器高 21	厚 8	SG23 (16－11)	RW338	内面と底面に工具による 削痕	Aa
	458	木製品	容器－挽物－皿	縦木取り	広葉樹	口径 (168)	底径 140	器高 9	厚 4	SG23 (15－12)	RW252		Aa
	459	木製品	容器－挽物－皿	縦木取り	広葉樹		底径 120	器高 [13]	厚 5	SG23 (13－11)	RW173		Aa
	460	木製品	容器－挽物－皿	縦木取り	広葉樹		底径 (136)	器高 [8]	厚 4	SG23 (14－12)		底部にロクロ穴痕	Aa
	461	木製品	容器－挽物－皿	縦木取り	広葉樹		底径 (130)	器高 [8]	厚 2	SG23 (12－11)			Aa
	462	木製品	容器－挽物－皿	縦木取り	ケヤキ	口径 137	底径 80	器高 12	厚 10	SG23 (16－11)	RW320	底部に工具痕or刻み文字	Ab
	463	木製品	容器－挽物－皿	横木取り	広葉樹	口径 (174)	底径 132	器高 12	厚 8	SG23 (14－12)	RW152		Ab
	464	木製品	容器－挽物－皿	縦木取り	広葉樹	口径 (176)	底径 134	器高 13	厚 5	SG23 (15－12)	RW251③		Ab
78	465	木製品	容器－挽物－皿	縦木取り	広葉樹	口径 (160)	底径 120	器高 19	厚 5	SG23 (13－11)	RW178	外面焼焦痕	Ba
	466	木製品	容器－挽物－皿	横木取り	広葉樹		底径 132	器高 [16]	厚 6	SG23 (15－12)	RW256	内外面焼焦痕	Ba
	467	木製品	容器－挽物－皿	縦木取り	ケヤキ	口径 (126)	底径 (96)	器高 10	厚 2	SG23 (16－11)			Ba
	468	木製品	容器－挽物－皿	縦木取り	ケヤキ	口径 (164)	底径 120	器高 15	厚 4	SG23 (16－11)	RW358		Ba
	469	木製品	容器－挽物－皿	縦木取り	ケヤキ	口径 (162)	底径 120	器高 12	厚 3	SG23 (17－11)			Ba
	470	木製品	容器－挽物－皿	縦木取り	ケヤキ	口径 (146)	底径 108	器高 17	厚 12	SG23 (16－11)	RW343		Ba

表19　木製品観察表（2）

挿図番号	遺物番号	種別	器種	木取り等	樹種	計測値（mm）				出土地点	登録番号	備考	分類
78	471	木製品	容器－挽物－皿	縦木取り	広葉樹	口径 (144)	底径 105	器高 17	厚 4	SG23 (13－11)	RW167		Ba
	472	木製品	容器－挽物－皿	縦木取り	広葉樹		底径 (104)	器高 [11]	厚 3	SG23 (15－12)			Ba
79	473	木製品	容器－挽物－皿	縦木取り	ケヤキ	口径 (178)	底径 138	器高 17	厚 5	SG23 (17－11)	RW334		Bb
	474	木製品	容器－挽物－皿	縦木取り	広葉樹	口径 (162)	底径 (124)	器高 15	厚 5	SG23 (13－11)	RW168②		Bb
	475	木製品	容器－挽物－皿	縦木取り	広葉樹	口径 (120)	底径 (90)	器高 16	厚 2	SG23 (13－12)			Bb
	476	木製品	容器－挽物－皿	縦木取り	ケヤキ		底径 118	器高 [11]	厚 4	SG23 (17－11)	RW364		Bb
	477	木製品	容器－挽物－皿	縦木取り	広葉樹	口径 (166)	底径 128	器高 8	厚 2	SG23 (13－11)	RW239		Bb
	478	木製品	容器－挽物－皿	縦木取り	ケヤキ	口径 (155)	底径 130	器高 12	厚 10	SG23 (17－11)	RW361		Bb
	479	木製品	容器－挽物－皿	縦木取り	広葉樹	口径 (146)	底径 112	器高 10	厚 3	SG23 (15－12)	RW253		Bb
	480	木製品	容器－挽物－皿	縦木取り	広葉樹	口径 (140)	底径 108	器高 13	厚 3	SG23 (13－11)	RW168①	底面に刻み文字	Bb
	481	木製品	容器－挽物－皿	横木取り?	広葉樹	口径 (134)	底径 (97)	器高 13	厚 5	SG23 (12－11)			Bb
	482	木製品	容器－挽物－皿	縦木取り	広葉樹	口径 (136)	底径 110	器高 12	厚 3	SG23 (14－12)	RW148	刻み文字	Bb
80	483	木製品	容器－挽物－皿	縦木取り	ケヤキ	口径 (170)	底径 132	器高 26	厚 5	SG23 (14－12)	RW149	内外面一部焼焦痕	Ca
	484	木製品	容器－挽物－皿	縦木取り	ケヤキ	口径 (140)	底径 98	器高 24	厚 3	SG23 (16－11)	RW332		Ca
	485	木製品	容器－挽物－皿	縦木取り	広葉樹	口径 (143)	底径 102	器高 22	厚 5	SG23 (13－12)	RW165	内面に黒漆	Cb
	486	木製品	容器－挽物－皿	縦木取り	広葉樹	口径 (132)	底径 86	器高 22	厚 6	SG23 (13－12)	RW162		Cb
	487	木製品	容器－挽物－皿	縦木取り	広葉樹	口径 (104)	底径 86	器高 19	厚 4	SG23 (13－11)	RW95		Cb
	488	木製品	容器－挽物－皿?	縦木取り	ケヤキ		底径 82	器高 [14]	厚 3	SG23 (16－11)	RW322	高台のみ	Cb
	489	木製品	容器－挽物－皿	縦木取り	ケヤキ	口径 (168)	底径 86	器高 38	厚 5	SG23 (17－11)	RW344		D
	490	木製品	容器－挽物－皿?	横木取り	広葉樹？		底径 86	器高 [27]	厚 4	SG23 (14－12)	RW142		D
	491	木製品	容器－挽物－皿	縦木取り	広葉樹	口径 (103)	底径 72	器高 26	厚 5	SG23 (12－11)			D
81	492	木製品	容器－曲物	柾目－底板 柾目－側板	針葉樹	径 137	体部厚 2	器高 32	底部厚 7	SG23 (14－12)	RW231	側板の内外面・底板の内面に付着物あり（黒漆？）	Aa
	493	木製品	容器－曲物	柾目－底板 柾目－側板	針葉樹	径 155	体部厚 2	器高 [29]	底部厚 7	SG23 (15－11)		樺皮４ヶ所	Aa
	494	木製品	容器－曲物	柾目－底板 柾目－側板	アスナロ属	径 127	体部厚 5	器高 75	底部厚 6	SG23 (16－11)	RW333	１列外３段綴じ 底部４ヶ所樺皮紐で結合	Aa
	495	木製品	容器－曲物－側板	柾目	アスナロ属	径 138	体部厚 3	器高 74		SG23 (17－11)	RW323①	１列外４段以上の綴じ No496の側板	Aa
	496	木製品	容器－曲物－底板	柾目	アスナロ属	径 144			底部厚 6	SG23 (17－11)	RW323②	樺皮紐結合４ヶ所 No495の底板	Aa
	497	木製品	容器－曲物－底板	柾目	針葉樹	径 (152)			底部厚 9	SG23 (15－12)	RW257	樺皮２ヶ所 炭化樹液付着	Aa
	498	木製品	容器－曲物－底板	柾目	針葉樹	径 (138)			底部厚 9	SG23 (11－11)		内面に刻み文字 樺皮４ヶ所	Aa
	499	木製品	容器－曲物－底板	柾目	針葉樹	径 (140)			底部厚 7	SG23 (14－12)	RW140	外面に刻み文字 穿孔1ヶ所	Aa
	500	木製品	容器－曲物－底板	柾目	針葉樹	径 (118)			底部厚 3	SG23 (14－12)	RW147		Aa
82	501	木製品	容器－曲物－底板	柾目	針葉樹	長 [80]			底部厚 6	SG23 (13－12)		外面一部焼焦痕	Aa
	502	木製品	容器－曲物－底板	板目	スギ	長 [140]			底部厚 7	SG23 (11－11)		樺皮１ヶ所	Aa
	503	木製品	容器－曲物－底板	柾目	針葉樹	径 (130)			底部厚 6	SG23 (12－11)		樺皮２ヶ所、樹液付着	Aa

表20　木製品観察表（3）

挿図番号	遺物番号	種別	器種	木取り等	樹種	計測値（mm）				出土地点	登録番号	備考	分類
82	504	木製品	容器－曲物－底板	柾目	針葉樹	径 （146）			底部厚 3	SG23 （14－12）	RW144	樺皮２ヶ所、樹液付着	Aa
	505	木製品	容器－曲物－底板	柾目	アスナロ属	径 （156）			底部厚 8	SG23 （16－11）			Aa
	506	木製品	容器－曲物－底板	柾目	針葉樹	径 （124）			底部厚 4	SG23 （11－11）		穿孔1ヶ所?	Aa
	507	木製品	容器－曲物－底板	柾目	アスナロ属	長 ［120］			底部厚 6	SG23 （15－12）		樺皮１ヶ所	Aa
	508	木製品	容器－曲物－底板	柾目	アスナロ属	（142）			底部厚 7	SG23 （17－11）	RW349	外面に焼焦痕	Aa
83	509	木製品	容器－曲物－底板	柾目	アスナロ属	径 （175）			底部厚 6	SG23 （16－11）	RW367	周縁部に穿孔３ヶ所	Aa
	510	木製品	容器－曲物－底板	柾目	アスナロ属	長 ［142］			底部厚 4	SG23 （12－11）			Aa
	511	木製品	容器－曲物	柾目－底板 柾目－側板	針葉樹	径 160	体部厚 3	器高 90	底部厚 10	SG23 （14－12）	RW143	横皮ひも２列３段の綴じ 木釘５ヶ所	Ab
	512	木製品	容器－曲物－底板	柾目	針葉樹	径 130			底部厚 7	SG23 （13－12）	RW96	木釘痕５ヶ所	Ab
	513	木製品	容器－曲物－底板	柾目	広葉樹	径 130			底部厚 8	SG23 （13－12）	RW163	木釘痕３ヶ所	Ab
	514	木製品	容器－曲物－底板	柾目	針葉樹	径 （140）			底部厚 7	SG23 （13－12）	RW172	炭化、内外面焼焦痕 木釘痕3ヶ所	Ab
	515	木製品	容器－曲物－底板	柾目	針葉樹	径 （123）			底部厚 6	SG23 （13－12）	RW164	外面削痕？内面一部焼焦痕 木釘痕2ヶ所	Ab
	516	木製品	容器－曲物－底板	板目	針葉樹	径 （109）			底部厚 9	SG23			Ab
84	517	木製品	容器－曲物－底板	板目	広葉樹	径 （180）			底部厚 7	SG23 （11－11）		内面黒漆、木釘痕２ヶ所 外面削痕、穿孔２ヶ所	Ab
	518	木製品	容器－曲物－底板	柾目	アスナロ属	径 （158）			底部厚 11	SG23 （15－11）		内外面黒漆、木釘１ヶ所?	Ab
	519	木製品	容器－曲物－底板	柾目	アスナロ属	径 （143）			底部厚 6	SG23 （14－12）	RW155	外面一部黒漆、木釘１ヶ所?	Ab
	520	木製品	容器－曲物－底板	柾目	針葉樹	径 （123）			底部厚 7	SG23 （11－11）			Ab
	521	木製品	容器－曲物－底板	柾目	アスナロ属	長 ［90］			底部厚 5	SG23 （14－12）		木釘２ヶ所 木釘木飛び出し痕あり	Ab
	522	木製品	容器－曲物－底板	柾目	アスナロ属	径 131			底部厚 7	SG23 （16－11）	RW321		Ab
	523	木製品	容器－曲物?	板目	クロベ	長 ［406］	幅 ［111］		厚 11	SG23 （13－12）		樺皮2ヶ所、穿孔2ヶ所 転用？、内面削痕	Ba
85	524	木製品	容器－曲物?	板目	針葉樹	長 ［242］	幅 ［83］		厚 12	SG23		内面焼焦痕	Ba
	525	木製品	容器－曲物－底板	柾目	スギ	長 ［327］	幅 ［102］		厚 6	SG23 （16－11）	RW374 RW371		Ba
	526	木製品	容器－曲物	柾目－底板 柾目－側板	針葉樹	径 290	体部厚 3	器高 ［70］	底部厚 7	SG23 （15－12）	RW246	側板に木釘孔６ヶ所 樺皮３ヶ所	Bb
	527	木製品	容器－曲物－側板	柾目	針葉樹	幅 外板［25］ 内板［83］			厚 外板2 内板3	SG23 （13－12）	RW161	外側木釘穴２ヶ所 内側木釘穴６ヶ所 内側側板の内面に焼焦痕	Bb
86	528	木製品	容器－曲物?	柾目	針葉樹	長 ［111］	幅 ［55］		厚 10	SG23 （13－11）		内面黒漆、木釘１ヶ所	Bb
	529	木製品	容器－曲物－底板	板目	アスナロ属	長 ［250］			底部厚 10	SG23		内面黒漆	Bb
	530	木製品	容器－曲物?	板目	広葉樹？	長 ［207］			厚 12	SG23 （12－11） （13－11）		残存状態悪く、もろい	Bb
87	531	木製品	容器－曲物?	板目	針葉樹	長 ［240］			厚 11	SG23 （13－11）		外面焼焦痕	Bb
	532	木製品	容器－曲物－底板	柾目	針葉樹	長 ［215］			底部厚 13	SG23 （13－12）	RW139	内面黒漆、木釘痕５ヶ所 内面に削痕	Bb
	533	木製品	容器－曲物－底板	板目	針葉樹	長 ［296］			底部厚 12	SG23 （13－11）		内面黒漆	Bb
88	534	木製品	容器－曲物?	板目	アスナロ属	長 ［377］			厚 13	SG23 （11－11）		半円状に削り出し 穿孔２ヶ所、内外面焼焦痕	Bb
	535	木製品	容器－曲物－側板	柾目	針葉樹	長 ［398］	幅 ［33］		厚 3	SG23 （15－12）			C
	536	木製品	容器－曲物－側板	柾目	アスナロ属	径 168	体部厚 6	器高 ［36］		SG23 （16－11）	RW339	樺皮３ヶ所	C

表21　木製品観察表（4）

挿図番号	遺物番号	種別	器種	木取り等	樹種	計測値（mm）				出土地点	登録番号	備考	分類
88	537	木製品	容器－曲物－側板	柾目	針葉樹	長 [243]	幅 [45]		厚 4	SG23 （13－11）	RW223	内面に黒漆？	C
	538	木製品	容器－曲物－側板	柾目	アスナロ属	長 [70]	幅 [49]		厚 5	SG23 （16－11）	RW321	樺皮紐結合	C
	539	木製品	容器－曲物－底板	柾目	針葉樹	長 [162]			底部厚 7	SG23 （13－11）		穿孔２ヶ所	C
	540	木製品	容器－曲物－側板	柾目	針葉樹	長 [198]	幅 （16）		厚 3	SG23		穿孔1ヶ所（木釘穴？）	C
89	541	木製品	食事具 刳物－柄杓	柄－割り材 身－ひょうたん	柄－スギ 身－ﾕｳｶﾞｵ属	器最大幅 [118]	器高 [91]	柄の長さ [517]	柄の径 13	SG23 （14－12）	RW171	身の上部欠損	
	542	木製品	食事具 刳物－柄杓	柄－割り材 身－ひょうたん	柄－スギ 身－ﾕｳｶﾞｵ属	器最大幅 [107]	器高 [69]	柄の長さ [233]	柄の径 10	SG23 （16－11）	RW337	身の上部欠損、柄折れ	
90	543	木製品	食事具－匙型		ユウガオ属	長 [80]	幅 [40]		厚 4	SG23 （11－11）		内側に炭化物付着	
	544	木製品	食事具－匙型		ユウガオ属	長 [90]	幅 61		厚 3	SG23 （13－12）			
	545	木製品	食事具－杓子形木器	板目	針葉樹	長 [156]	幅 30		厚 9	SG23 （14－12）		焼焦痕 表裏面剥落	
	546	木製品	服飾品－下駄	板目	スギ	長 225	幅 110		厚 51	SG23 （16－11）	RW373	左足用の連歯下駄、焼焦痕、親指痕、台の下面に刃物痕	
	547	木製品	農具－木鍾	割り材	クヌギ節	長 144	幅 48			SG23 （16－11）	RW336	加工具	
	548	木製品	農具－横槌	丸太材	針葉樹	長 260	上部太 80	下部太 30		SG23 （13－12）	RW242		
91	549	木製品	武器－弓	芯持ち材	イヌガヤ	長 770	太さ 17			SG23			
	550	木製品	武器－弓?	芯持ち材	イヌガヤ	長 [735]	太さ 25			SG23 （14－12）			
	551	木製品	武器－弓	芯持ち材	イヌガヤ	長 [697]	太さ 18			SG23 （14－12）			
	552	木製品	武器－弓	芯持ち材	イヌガヤ	長 [673]	太さ 10			SG23 （13－12）			
	553	木製品	武器－弓	芯持ち材	イヌガヤ	長 [492]	太さ 17			SG23			
	554	木製品	武器－弓	芯持ち材	イヌガヤ	長 [540]	太さ 12			SG23 （13－12）		焼焦痕	
	555	木製品	武具－弓	芯持ち材	イヌガヤ	長 [380]	太さ 23			SG23 （13－12）		先尖状 弓の転用か？	
	556	木製品	武器－弓？	芯持ち材	イヌガヤ	長 [493]	太さ 15			SG23 （13－12）		焼焦痕、切断痕	
92	557	木製品	食事具－箸	割り材	針葉樹	長 261	径 8			SG23 （13－12、 13－11）			
	558	木製品	食事具－箸	割り材	針葉樹	長 [160]	径 5			SG23			
	559	木製品	食事具－箸	割り材削出	スギ	長 218	径 6			SG23 （17－11）	RW363		
	560	木製品	不明－棒状	割り材	針葉樹	長 [185]	太さ 19			SG23 （15－11）		柄杓の柄？	
	561	木製品	不明－棒状	割り材	針葉樹	長 [236]	太さ 16			SG23 （15－11）		ケズリ痕 柄杓の柄？	
	562	木製品	不明－棒状	割り材削出	針葉樹	長 [420]	太さ 15			SG23 （16－11）		柄杓の柄？	
	563	木製品	不明－棒状	柾目	針葉樹	長 [261]	幅 11		厚 6	SG23 （12－11）		板棒状	
	564	木製品	不明－棒状	割り材削出	広葉樹？	長 [117]	太さ 10			SG23 （13－12）			
	565	木製品	不明－棒状	割り材	針葉樹	長 [167]	太さ 12			SG23 （15－12）			
	566	木製品	不明－棒状	割り材	広葉樹？	長 [160]	幅 10		厚 8	SG23 （12－11、 13－11）			
	567	木製品	不明－棒状	割り材削出	針葉樹	長 [209]	幅 [27]		厚 12	SG23 （16－11）	RW377		
	568	木製品	不明－棒状	割り材	針葉樹	長 [202]	幅 24		厚 17	SG23 （13－11）			
	569	木製品	不明－棒状	割り材	スギ	長 270	太さ 10			SG23 （15－12）		上部半欠損 柄杓の柄？	

表22　木製品観察表（5）

挿図番号	遺物番号	種別	器種	木取り等	樹種	計測値（mm）			出土地点	登録番号	備考	分類
						長	幅	厚				
92	570	木製品	不明－棒状	割り材削出	針葉樹	[334]	9	8	SG23（16－11）	RW378		
	571	木製品	不明－棒状	割り材	針葉樹	[391]	13	11	SG23		焼焦痕 断面三角形	
	572	木製品	不明－棒状	割り材	スギ	[477]	太さ 13		SG23（11－11）		焼焦痕	
	573	木製品	不明－棒状	割り材	スギ	[501]	18	13	SG23			
	574	木製品	不明－棒状	割り材	針葉樹	464	11	9	SG23		焼焦痕 先端部加工	
	575	木製品	不明－棒状	割り材	針葉樹	[479]	12	8	SG23（15－12）		先尖状	
	576	木製品	不明－棒状	芯持ち材	針葉樹	[726]	太さ 14		SG23（13－12）		焼焦痕	
93	577	木製品	祭祀具－人形	芯持ち材	イヌガヤ	215	20		SG23（11－12）	RW264		
	578	木製品	祭祀具？ 不明	板目	広葉樹？	162	16	12	SG23（11－11）		板と板を接着	
	579	木製品	不明－有孔木製品	板目	広葉樹	145		底部厚 15	SG23（13－12）	RW166	皿転用、炭化、表裏面焼焦痕、 中央部に穿孔、表裏面剥落	
	580	木製品	不明－建築部材	芯持ち材	ハンノキ属	[190]	79	48	SG23（16－11）		穿孔１ヶ所、ほぞ穴あり	
	581	木製品	不明－部材？	板目	スギ	850	[38]	35	SG23（13－12）		加工痕（鑿痕）	
	582	木製品	不明－板状	柾目	針葉樹	[168]	[110]	13	SG23（17－11）	RW355	表面焼焦痕、穿孔１ヶ所 穴１ヶ所、裏面に削跡	
	583	木製品	不明－板状	柾目	広葉樹	[170]	[100]	22	SG23（15－12）	RW251①		
	584	木製品	不明－板状	板目	広葉樹	[392]	53	9	SG23（13－11）	RW130		
	585	木製品	板状具？（部材）	板目	広葉樹	328	43	10	SG23（12－11）	RW263	曲物底板転用、抉り有り 樺皮３ヶ所	
	586	木製品	不明－板状	柾目	針葉樹	[203]	23	3	SG23（13－11）			
94	587	木製品	不明－建築材？	柾目	針葉樹	[460]	[70]	30	SG23		板状	
	588	木製品	不明－板状	板目	広葉樹	[677]	[202]	26	SG23			
95	589	木製品	不明	割り材削出	広葉樹	[871]	[235]	30	SG23		Ｕ字状の切り込み	
	590	木製品	不明－板状	板目	広葉樹	[726]	[270]	35	SG23			
96	591	木製品	不明－容器？	割り材削出	針葉樹？	[842]	[165]	40	SG23		穿孔１ヶ所 Ｕ字状の切込み２ヶ所	
	592	木製品	刳物？－容器？	割り材削出	広葉樹	[567]	[155]	32	SG23		内面削痕、焼焦痕	
107	695	木製品	容器－曲物?	板目	広葉樹?	[431]	[29]	6	E区		内外面焼焦痕 穿孔２ヶ所、樺皮２ヶ所	Ba
	696	木製品	不明－板状	柾目	針葉樹	[95]	[25]	4	11－9		内面に黒漆 曲物の底板？	
	697	木製品	不明－板状	柾目	針葉樹	[140]	[21]	7	6－6	RW98	穿孔1ヶ所	
	698	木製品	部材（加工木）	柾目	スギ	[78]	[33]	9	6－6			
	699	木製品	建築部材－柱	丸太材	広葉樹	[227]	太さ 158		5－7	RW105	底部に砂付着	
	700	木製品	建築部材－柱	丸太材	広葉樹	[65]	[135]		5－6	RW115	焼焦痕	

写 真 図 版

第２次調査区遠景（北から）

A・B 区完掘状況（北東から）

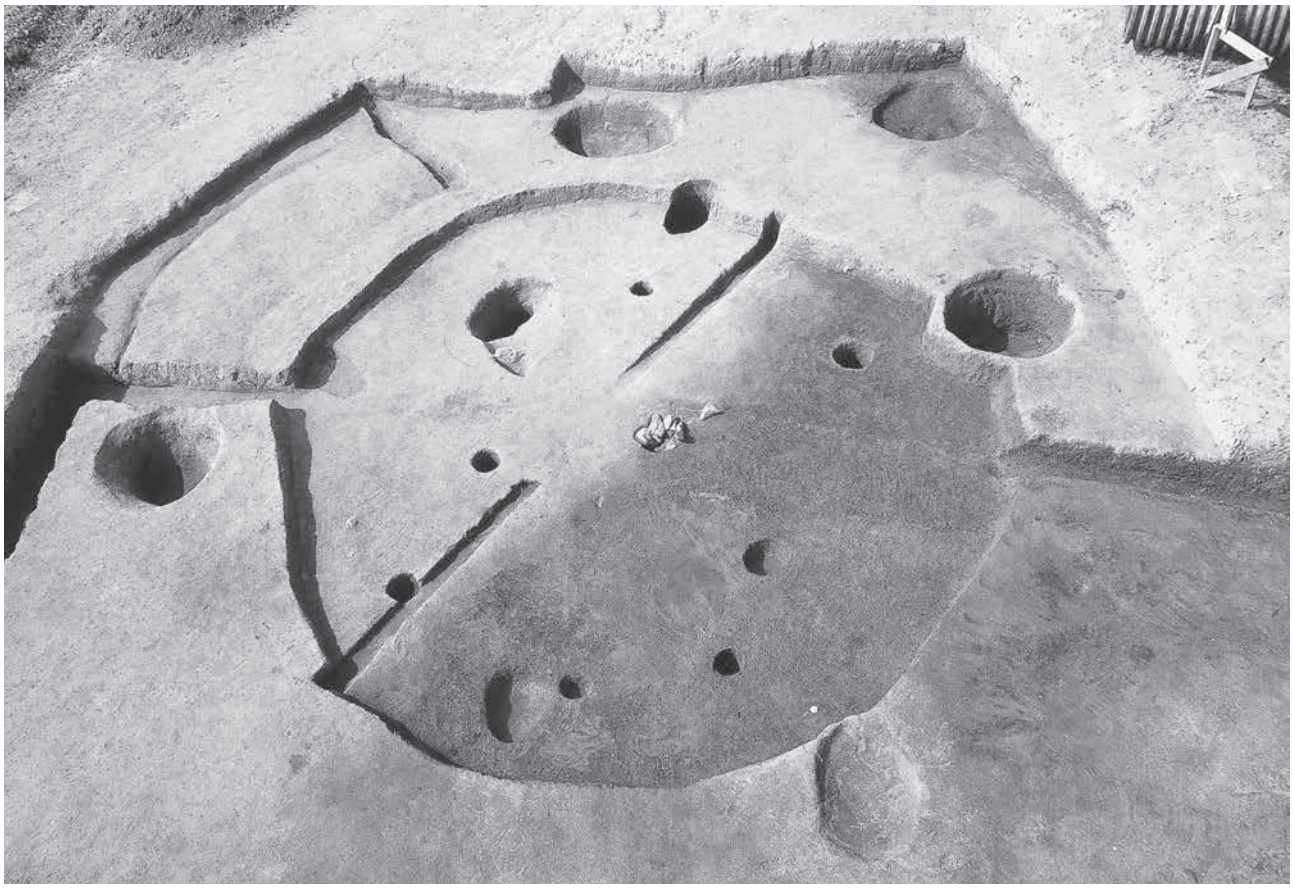
C 区完掘状況（南西から）

D 区完掘状況（東から）

E 区完掘状況（東から）

F 区完掘状況（南西から）

G 区完掘状況（北東から）



ST36完掘状況（北東から）

ST36土層断面から（東から）

ST36-EL3 完掘状況（東から）

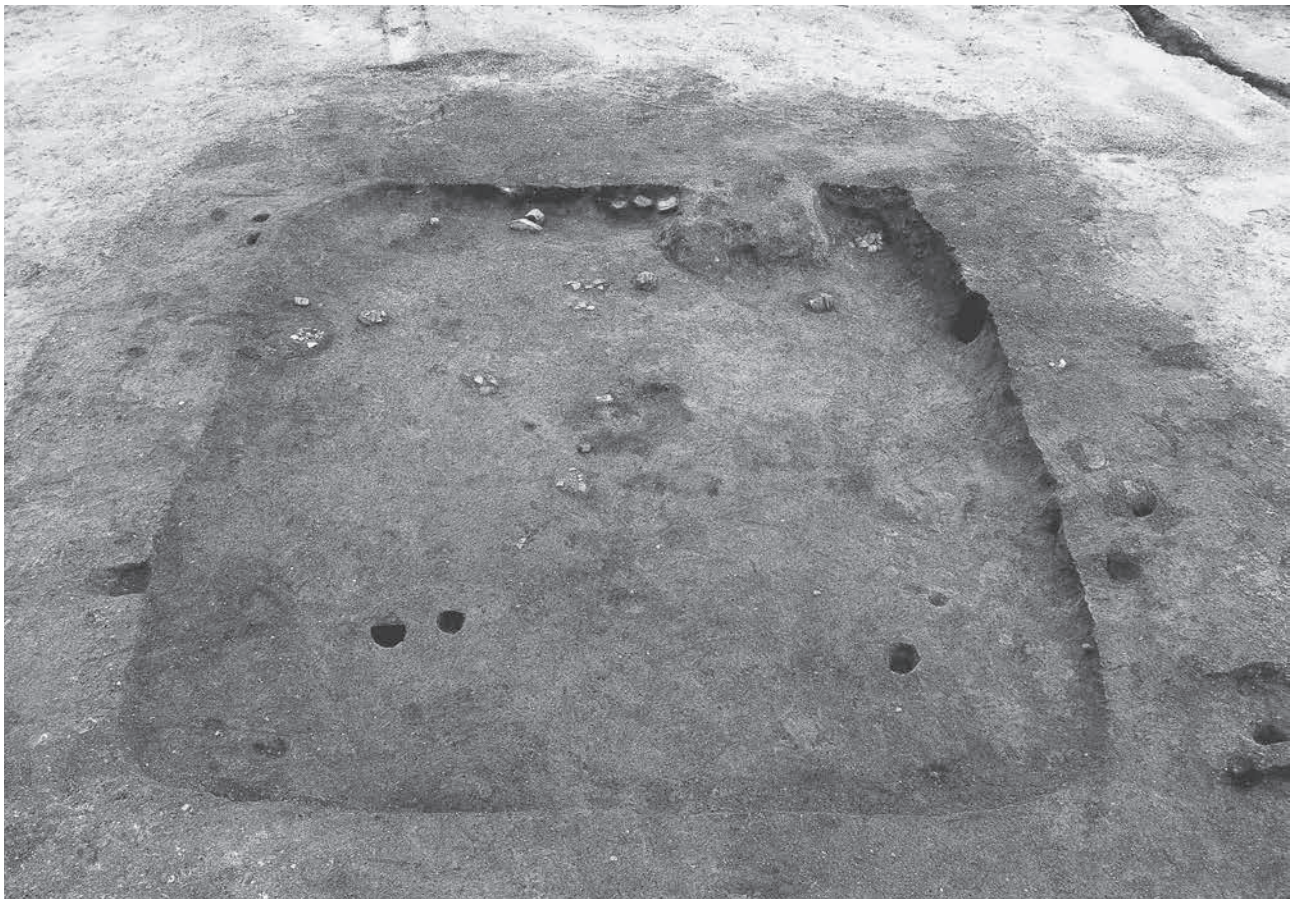
ST36-EK1遺物出土状況（西から）

ST36遺物出土状況（東から）
ST36竪穴住居

ST5完掘状況（北から）

ST5–EL検出状況（北から）

ST5–EL土層断面（北東から）
ST5竪穴住居



ST7完掘状況（北から）

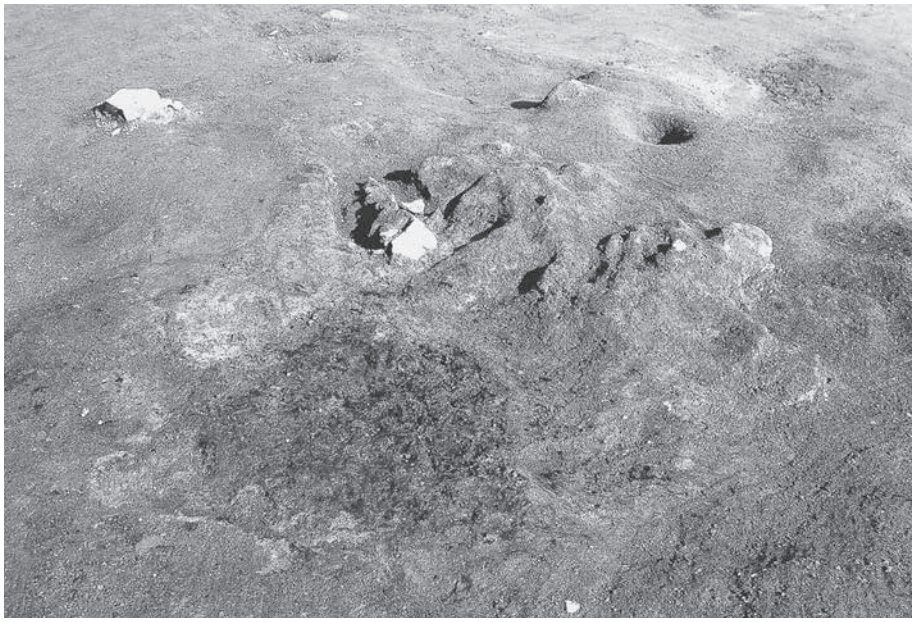
ST7遺物出土状況（北から）

ST7-EL土層断面（北東から）

ST7-EL完掘状況（北から）

ST7竪穴住居

ST13-EL遺物出土状況
（北西から）



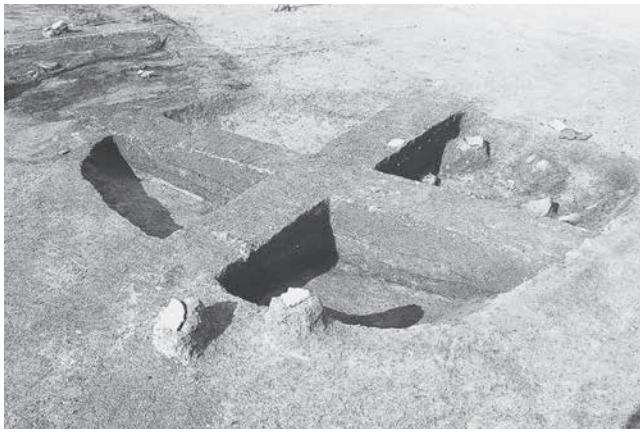
ST13-EL完掘状況（西から）

ST13完掘状況（西から）
ST13竪穴住居

ST20完掘状況（西から）

ST20遺物出土状況（西から）

ST20炭化物検出状況（南西から)



SK19土層断面（南東から）

SK19完掘状況（西から）

ST20竪穴住居、SK19土坑

ST14土層断面（南から）

ST14-EL土層断面（東から）

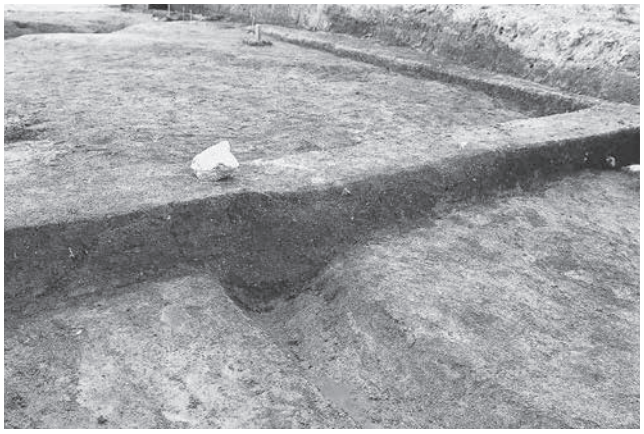
ST14完掘状況（北西から）
ST14竪穴住居

ST21土層断面（北東から）

ST21−EL完掘状況（西から）

ST21完掘状況（西から）
ST21竪穴住居

SD4完掘状況（北西から）



SD4土層断面a-a’（東から）

SD4土層断面b-b'（南から）

SD4遺物出土状況（西から）

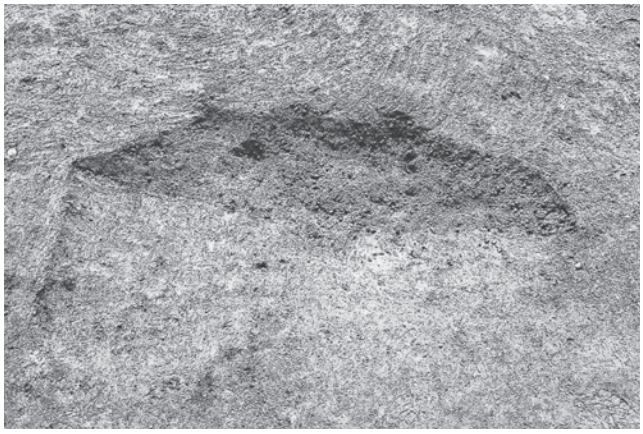
SD4周溝

SM24祭祀遺構完掘状況（北東から）

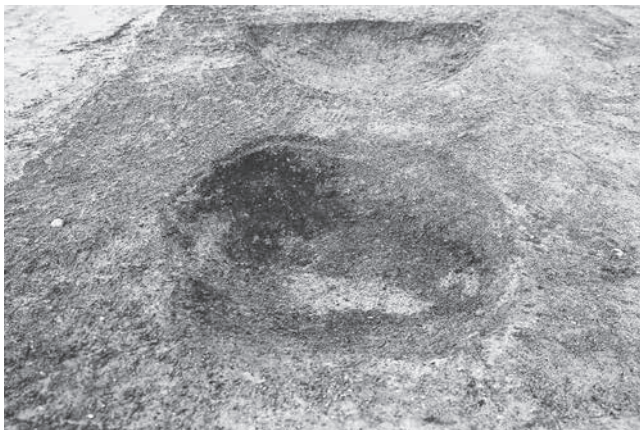
SE1井戸土層断面（南東から）

SE1井戸完掘状況（南から）

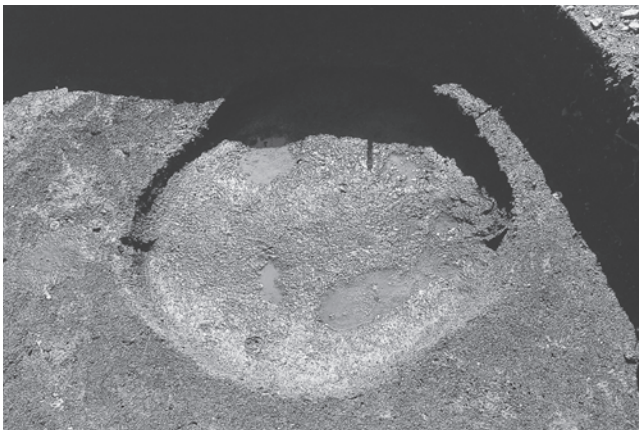
SH67墓坑土層断面（北東から）



SH67墓坑完掘状況（北東から）



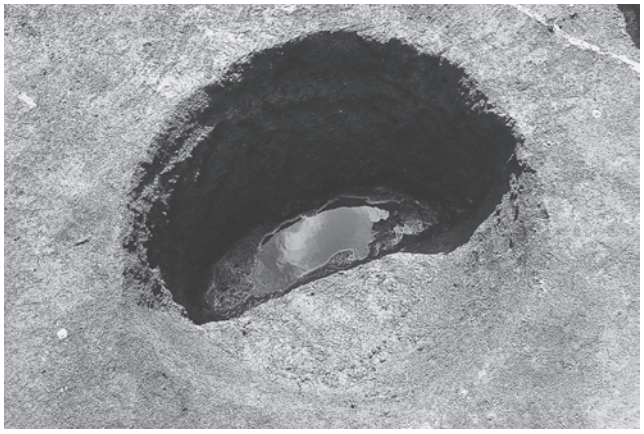
SK18土坑完掘状況（南東から）



SK37土坑完掘状況（東から）

SK38土坑完掘状況（北東から）

SK41土坑土層断面（南西から）



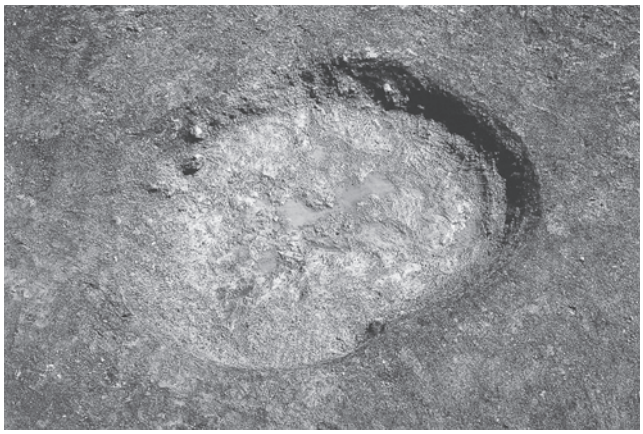
SK41土坑完掘状況（東から）

SK43土坑完掘状況（北西から）

SK45土坑土層断面（東から）

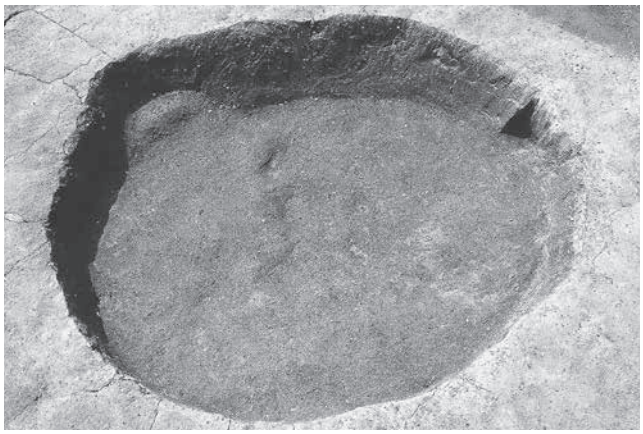
SK45土坑完掘状況（東から）

SK49土坑土層断面（東から）



SK78土坑完掘状況（西から）

SK85土坑遺物出土状況（西から）



SK85土坑完掘状況（東から）

SK88土坑土層断面（南から）

SK88土坑遺物出土状況（西から）

SK89土坑土層断面（南東から）

SK89土坑完掘状況（西から）

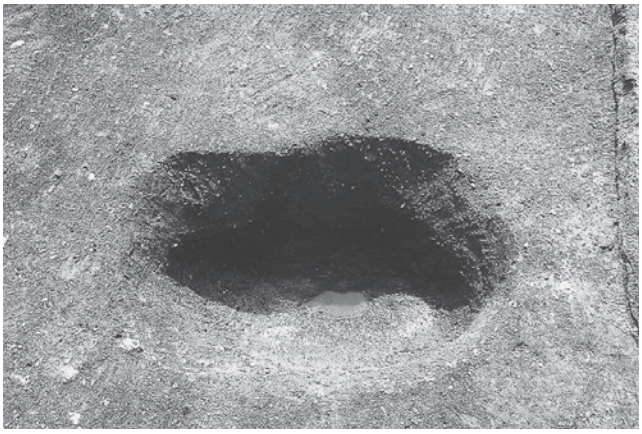
SK93土坑土層断面（東から）

SK93土坑完掘状況（西から）

SK95土坑土層断面（南から）

SK95土坑完掘状況（南から）

SK96土坑土層断面（南西から）



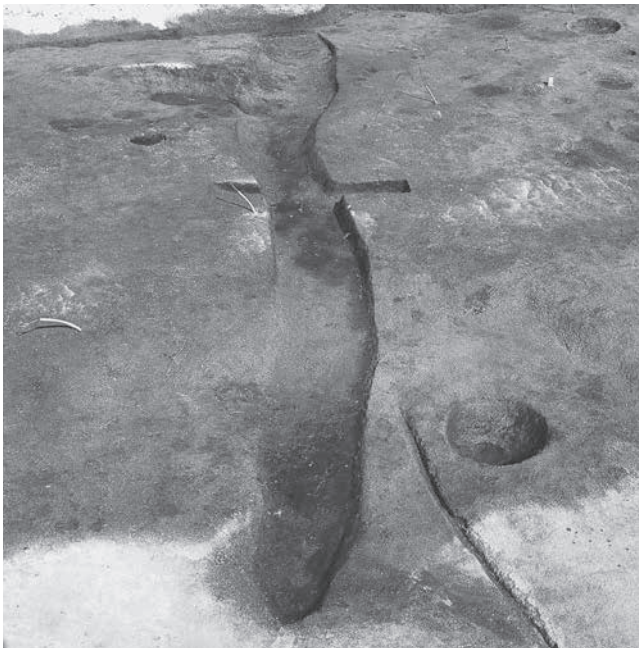
SK96土坑完掘状況（北東から）

SX6性格不明遺構完掘状況（北から）

SX15性格不明遺構完掘状況（北から）

B区−SD2完掘状況（北西から）

SD2土層断面a-a'（南西から）



F区−SD2完掘状況（南から）

SD2土層断面c-c'（東から）

SD2−RQ15出土状況（北東から）
SD2溝

SD3溝完掘状況（南東から）

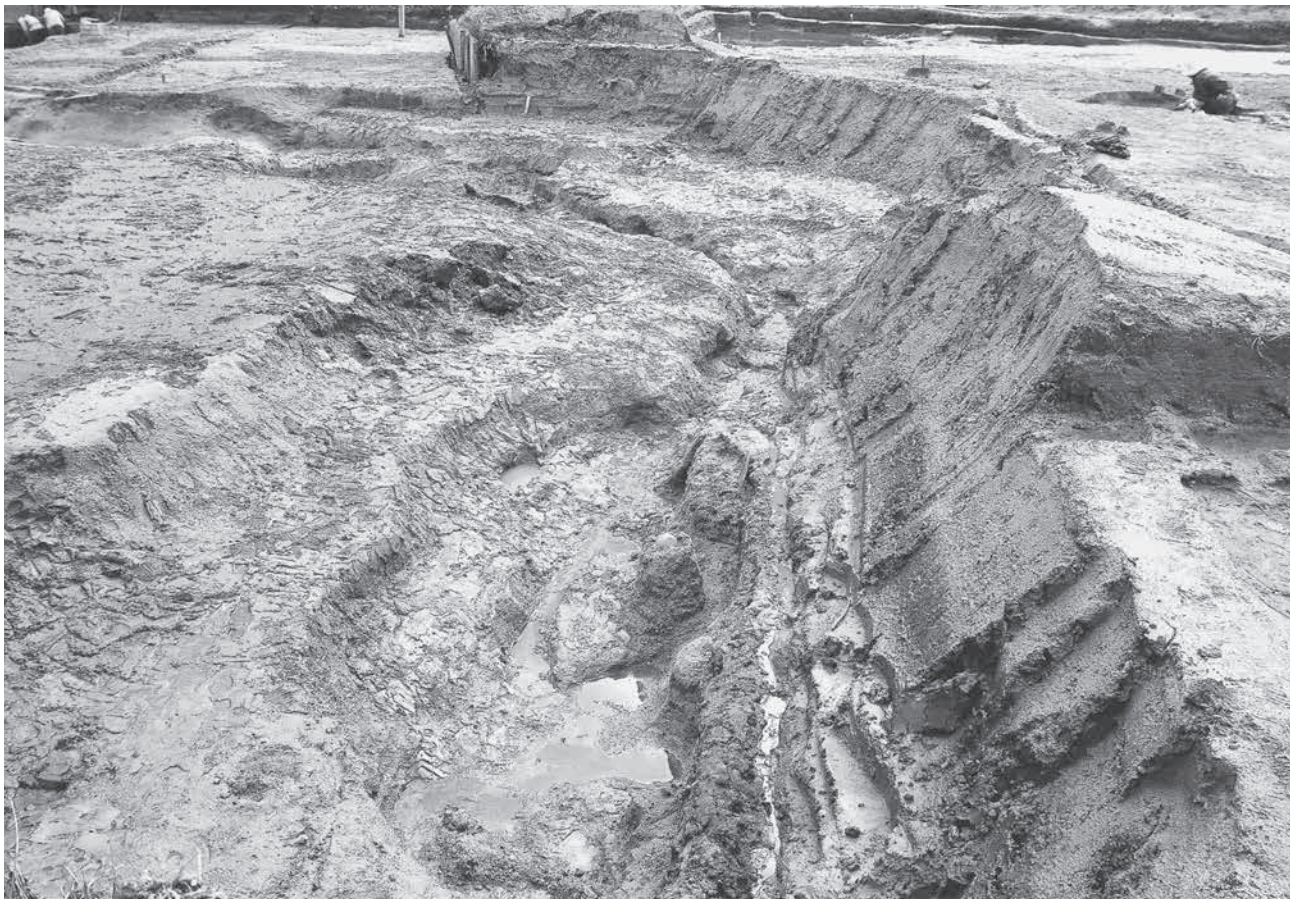
SD11溝完掘状況（南東から）

SD64・65・66溝完掘状況（北から）

SD73溝完掘状況（北東から）

SD86・87溝完掘状況（南から）

SD91溝完掘状況（東から）



E区−SG23河川完掘状況（北西から）

G区−SG23河川完掘状況（北東から）

SG23土層断面a-a'（東から）

SG23土層断面c-c'（南西から）

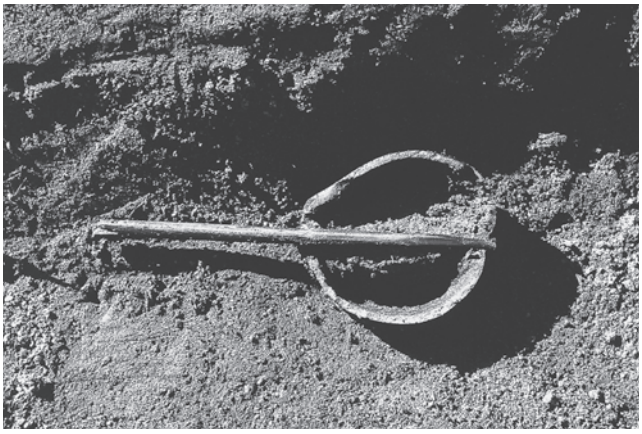
E区−SG23遺物出土状況（西から）

G区−SG23遺物出土状況（東から）

SG23−RW148・149、RP150・151出土状況（北西から）

SG23−RW242他出土状況（北西から）

SG23−RP331・325・328 ～ 320出土状況（北から）

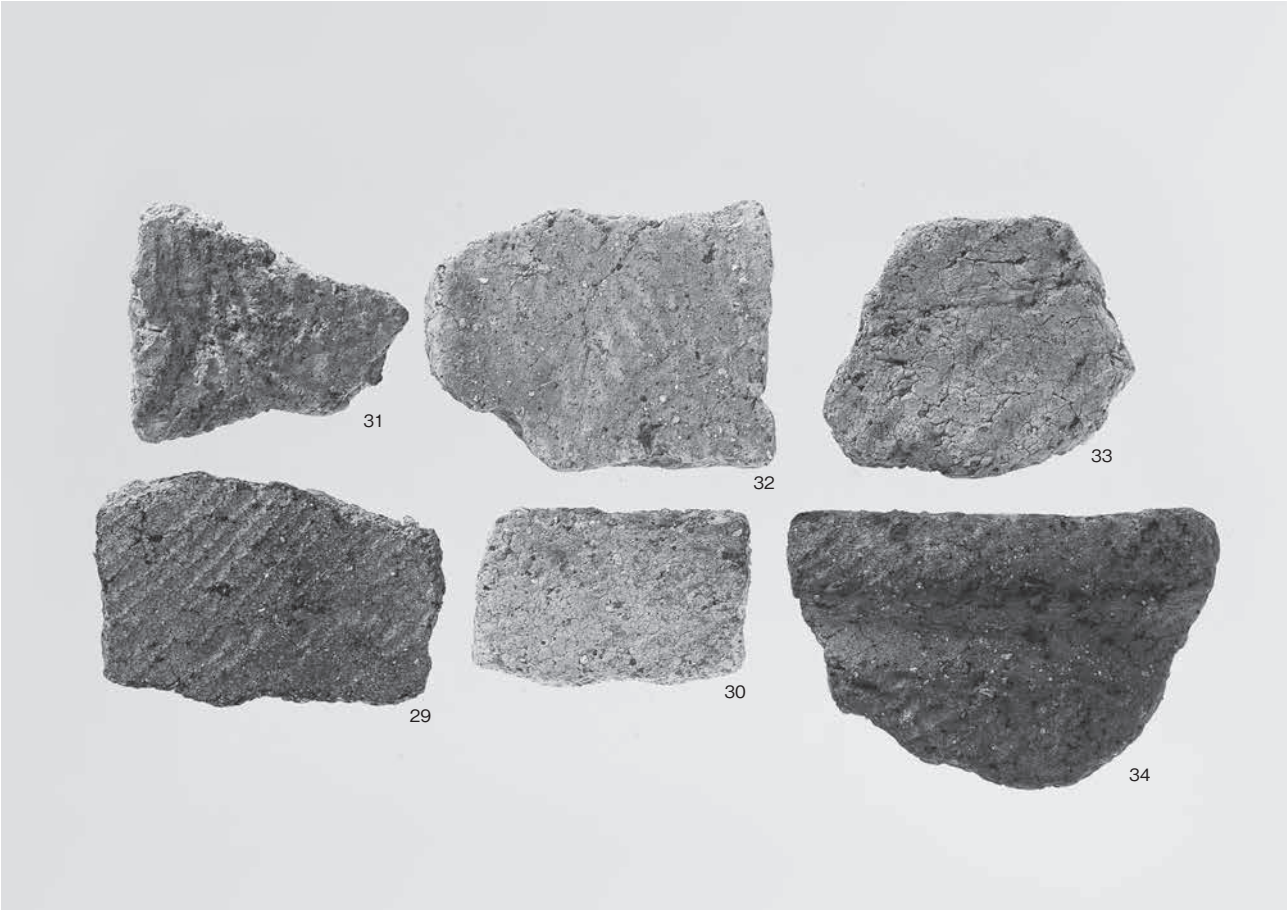


SG23−RW337出土状況（東から）

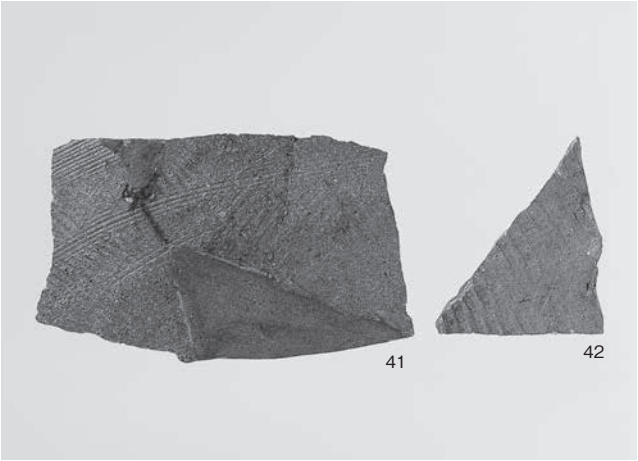
SG23河川

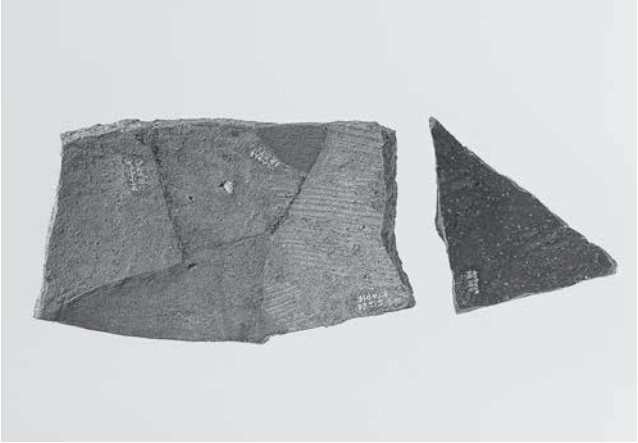
ST36竪穴住居出土土器（1）

ST36竪穴住居出土土器（2）



ST5竪穴住居出土土器（1）





ST5竪穴住居出土土器（2）

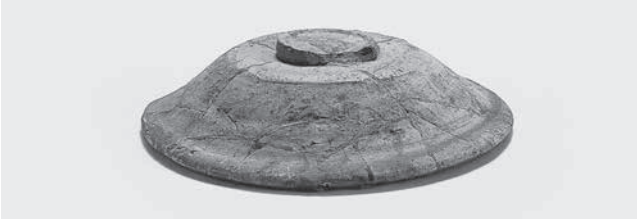
ST7竪穴住居出土土器（1）

56

58

57

ST7竪穴住居出土土器（2）



60

61

62

ST13竪穴住居出土土器（1）

63

64

65

ST13竪穴住居出土土器（2）

66

67

68

69

70

71

72

73

74

75

76

ST20竪穴住居出土土器（1）

77

78

79

80

81

82

83

84

85

86

ST20竪穴住居出土土器（2）

87

88

89

90

91

92

93

94

ST20竪穴住居出土土器（3）

95

96

97

ST20竪穴住居出土土器（4）

98

99

100

101

104

102

103

ST20竪穴住居出土土器（5）

SK19土坑出土土器

116

117

118

119

120

ST14竪穴住居出土土器

121

126

122

123

125

124

ST21竪穴住居出土土器

128

129

SD4周溝出土土器

130

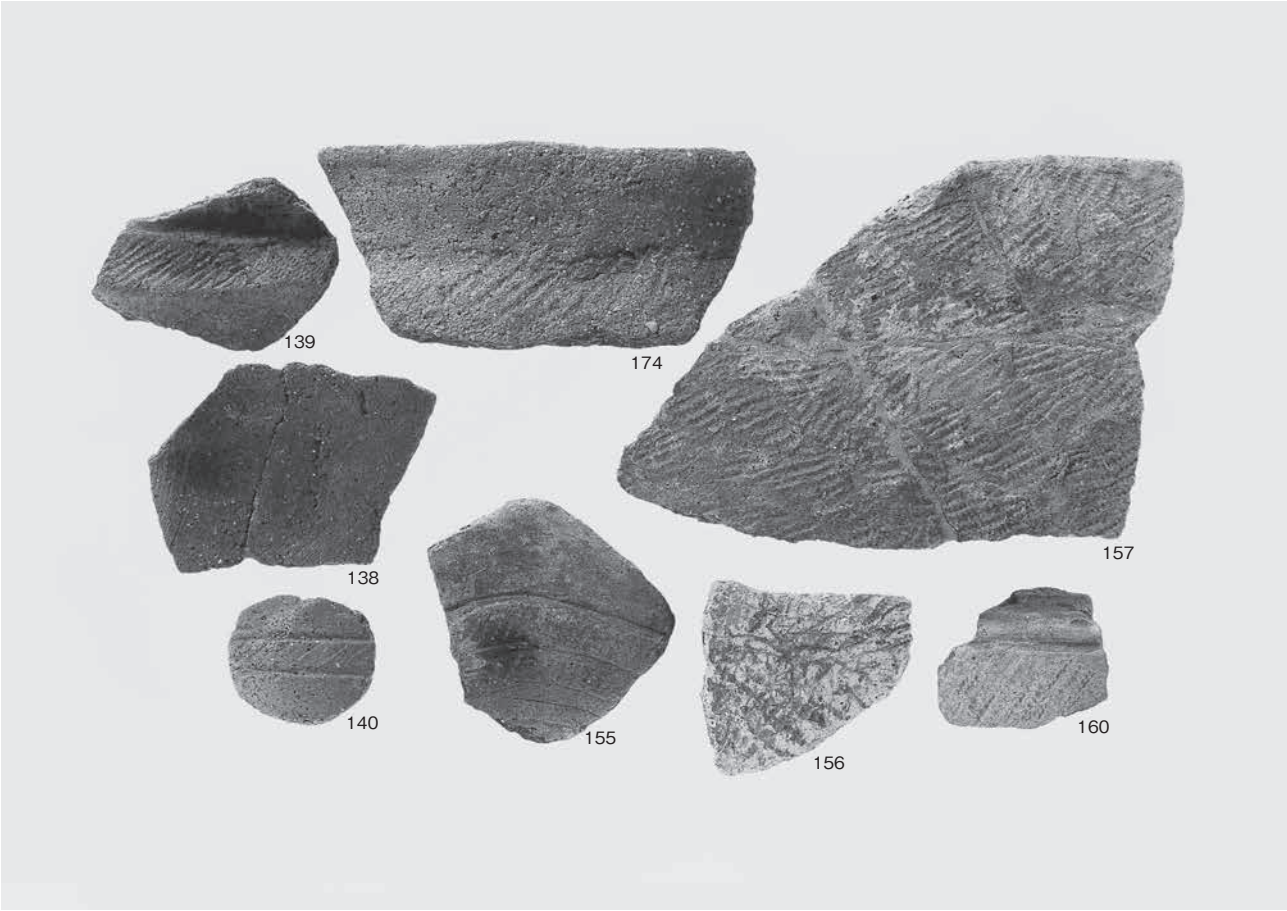
131

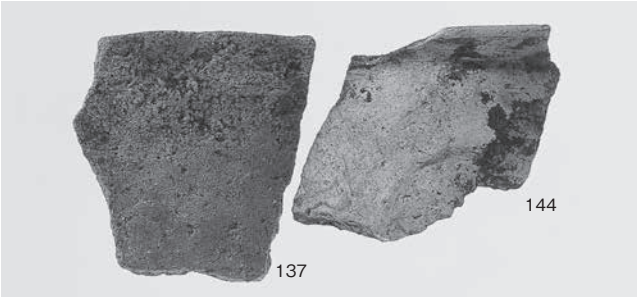
132

133

134

SM24祭祀遺構出土土器





SK土坑、SX性格不明遺構、SD溝出土土器（1）

146

147

149

150

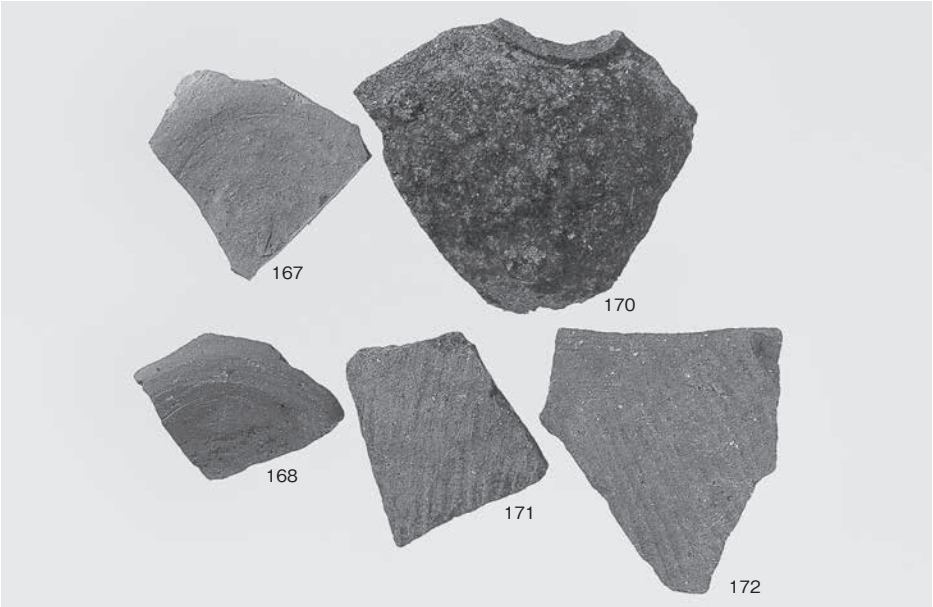
152

151

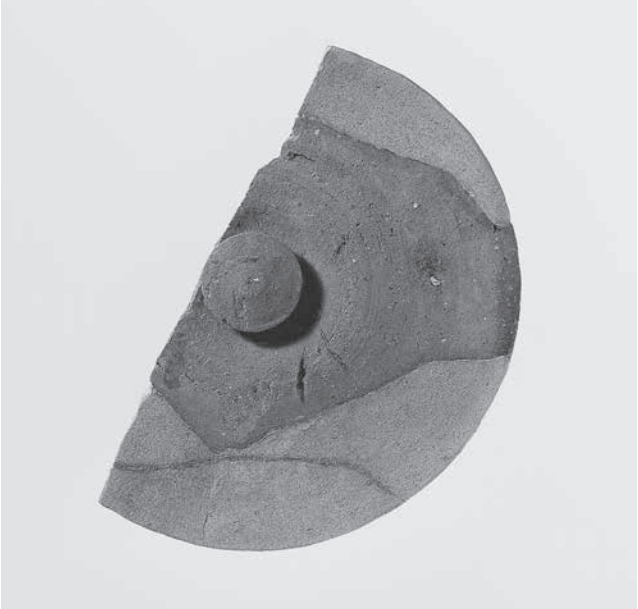
153

154

SK土坑、SX性格不明遺構、SD溝出土土器（2）



SK土坑、SX性格不明遺構、SD溝出土土器（3）



SG23河川出土土器（1）

195

198

199

200

201

203

202

204

SG23河川出土土器（2）

SG23河川出土土器（3）

211

212

213

214

215

216

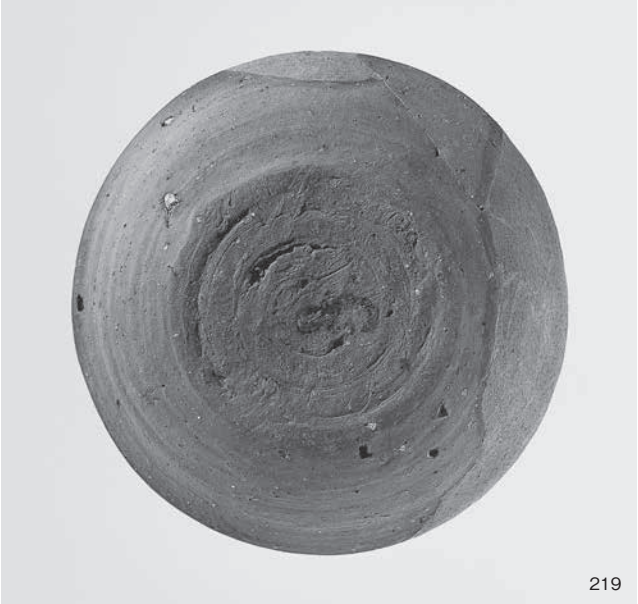
217

218

221

222

SG23河川出土土器（4）



SG23河川出土土器（5）

226

228

229

230

231

233

234

232

235

236

SG23河川出土土器（6）

237

238

239

240

241

242

243

245

244

247

SG23河川出土土器（7）

248

246

249

250

251

252

253

254

SG23河川出土土器（8）

255

256

257

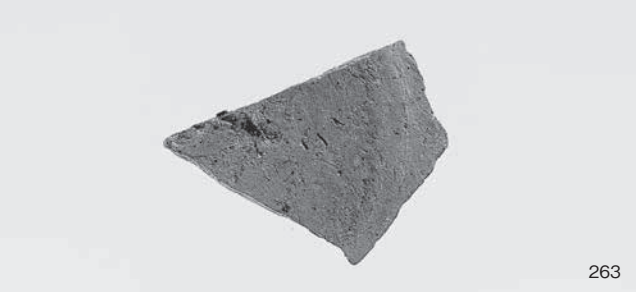
258

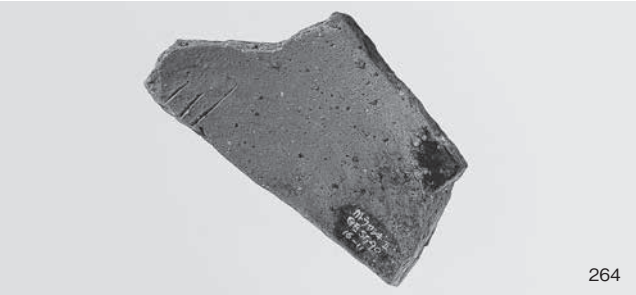
259

261

262

260


263


264

SG23河川出土土器（9）

265

266

267

268

SG23河川出土土器（10）

269

270

271

SG23河川出土土器（11）

272

273

275

276

274

277

SG23河川出土土器（12）

278

279

280

281

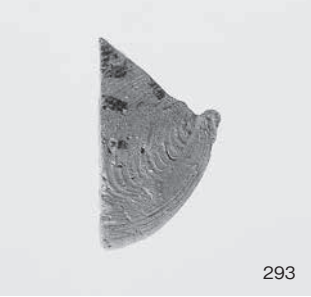
282

283

286

287

SG23河川出土土器（13）



SG23河川出土土器（14）

294

295

297

296

298

299

SG23河川出土土器（15）

300

301

302

303

SG23河川出土土器（16）

304

305

306

307

308

309

310

311

SG23河川出土土器（17）

312

313

314

315

SG23河川出土土器（18）

316

317

318

319

320

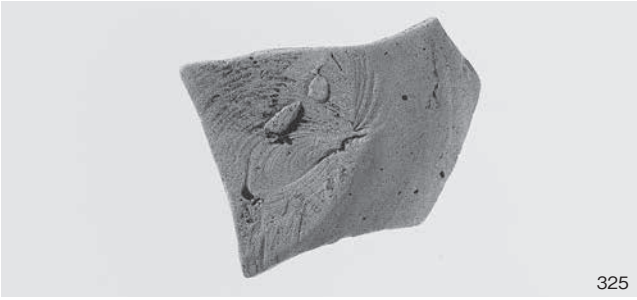
321

322

323

SG23河川出土土器（19）

324


325

326

327

328

329

330

332

331

333

SG23河川出土土器（20）

334

336

335

337

338

SG23河川出土土器（21）

339

340

341

342

343

344

345

346

347

348

349

350

SG23河川出土土器（22）

351

352

353

354

355

356

357

358

359

360

361

362

SG23河川出土土器（23）

363

364

365

366

367

369

370

368

371

SG23河川出土土器（24）

372

373

374

375

376

377

378

379

SG23河川出土土器（25）

380

381

382

383

SG23河川出土土器（26）

384

385

386

387

388

389

SG23河川出土土器（27）

390

391

393

392

394

395

SG23河川出土土器（28）

SG23河川出土土器（29）

402

403

404

406

SG23河川出土土器（30）

405

407

408

409

410

411

413

412

414

415

SG23河川出土土器（31）

416

417

418

419

420

421

422

423

424

425

426

427

SG23河川出土土器（32）

428

429

430

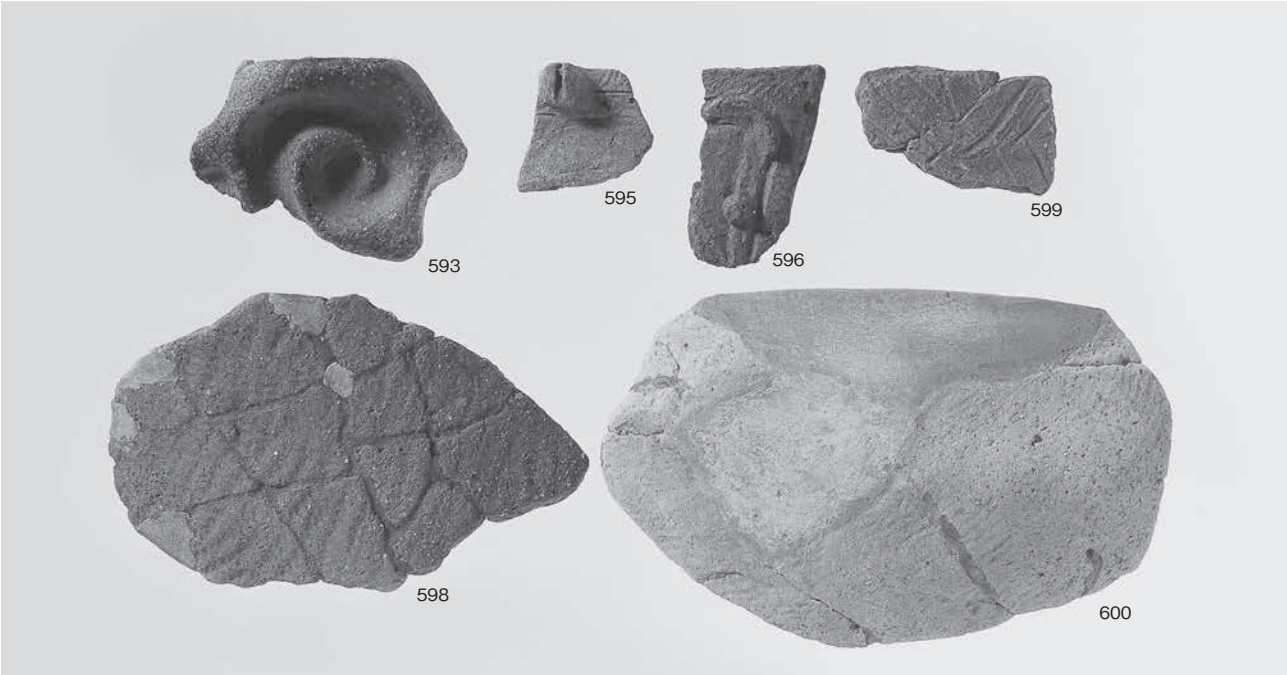
431

432

434

433

SG23河川出土土器（33）



遺構外出土土器（1）

622

623

624

625

627

626

628

遺構外出土土器（2）

629

630

631

632

633

634

635

636

遺構外出土土器（3）

637

638

639

640

641

642

643

644

645

646

647

648

遺構外出土土器（4）

649

651

650

652

653

654

655

656

657

658

遺構外出土土器（5）

659

660

遺構外出土土器（6）

661

662

663

664

665

666

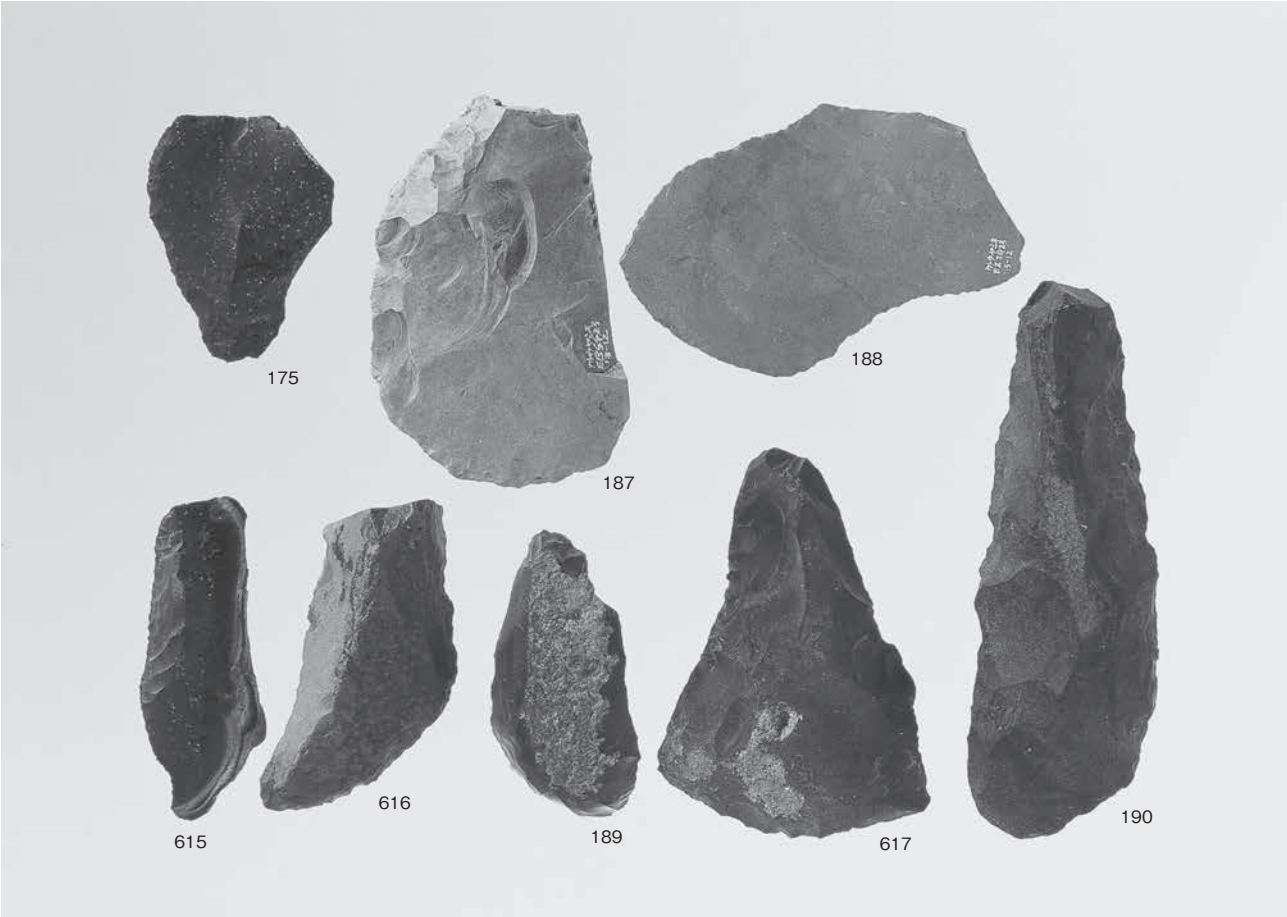
667

668

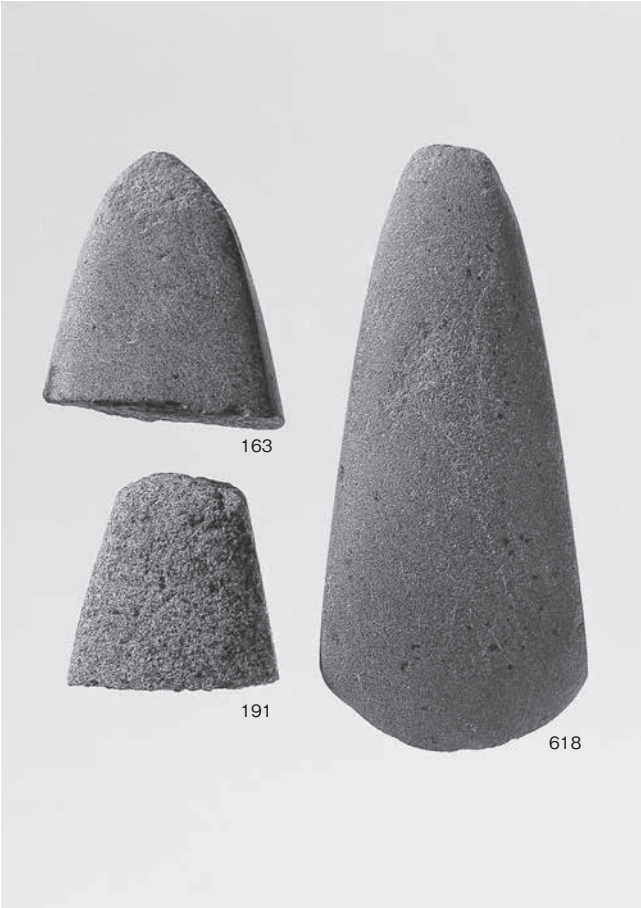
遺構外出土土器（7）

遺構外出土土器（8）

石器（1）



石器（2）



石器（3）

165

620

621

164

193

石皿、石棒

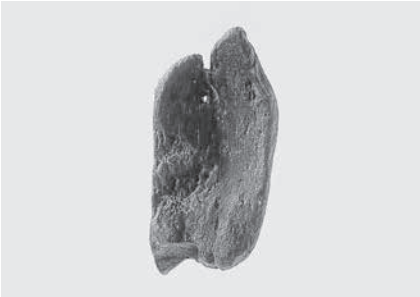
26　27　605　604　606

土偶

109

110

441



442

443

444

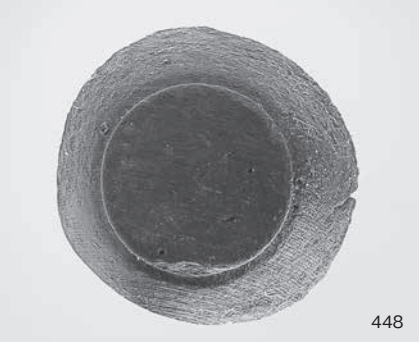
445

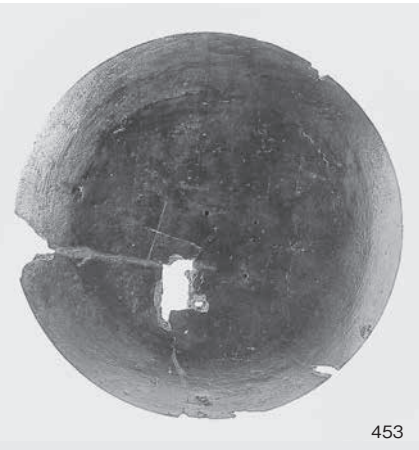
450

452

木製品（1）

446

447

448



449

451

453

木製品（2）

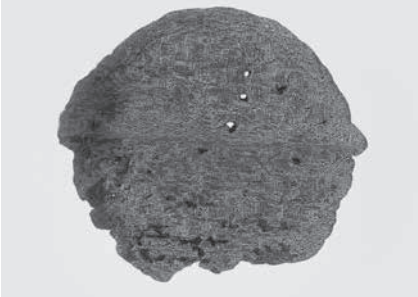
454

456

455

457

458



459

460

木製品（3）

461

464

465

462

463

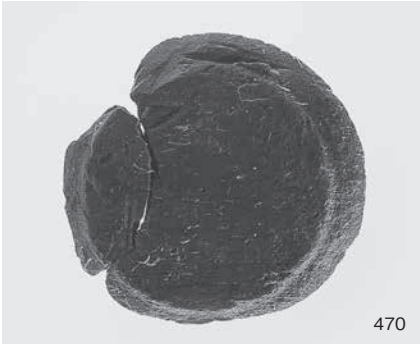
466

468

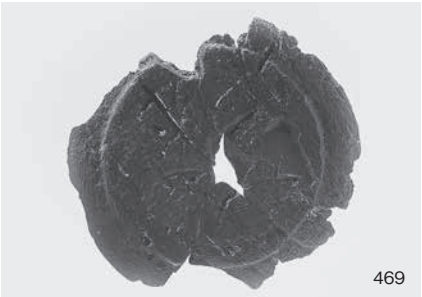
木製品（4）

467

472



470



469

474

471

473

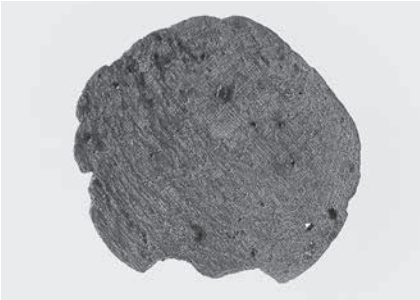
475

木製品（5）

木製品（6）

484

489



485

486

487

488

490

491

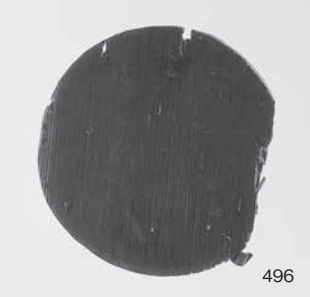
木製品（7）

492

493

494

495


496

497

498

499

500

501

木製品（8）

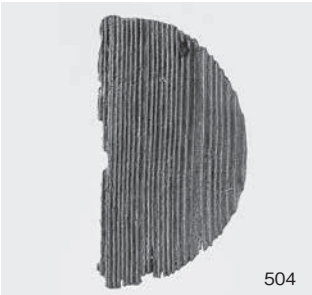
502

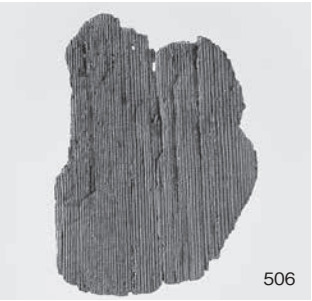
503

505

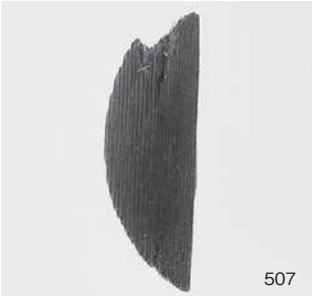
510

504

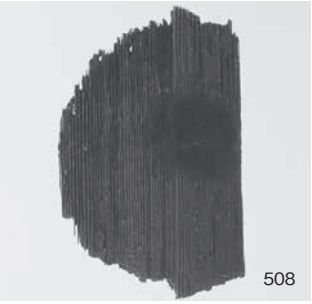




506



507



508

509

木製品（9）

511

516

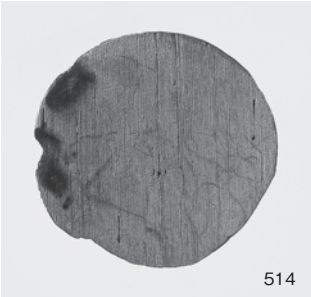
517

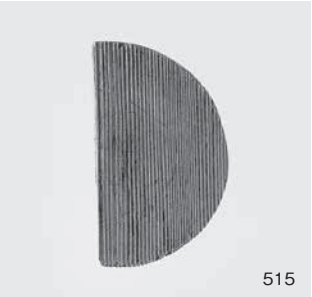
512

513

518

519


514


515

520

木製品（10）

521

522

523

525

695

526

524

527

木製品（11）

528

534

529

530

531

532

533

535

536

538

539

537

540

木製品（12）

541

542

544

543

545

546

548

547

木製品（13）

549

550

551

552

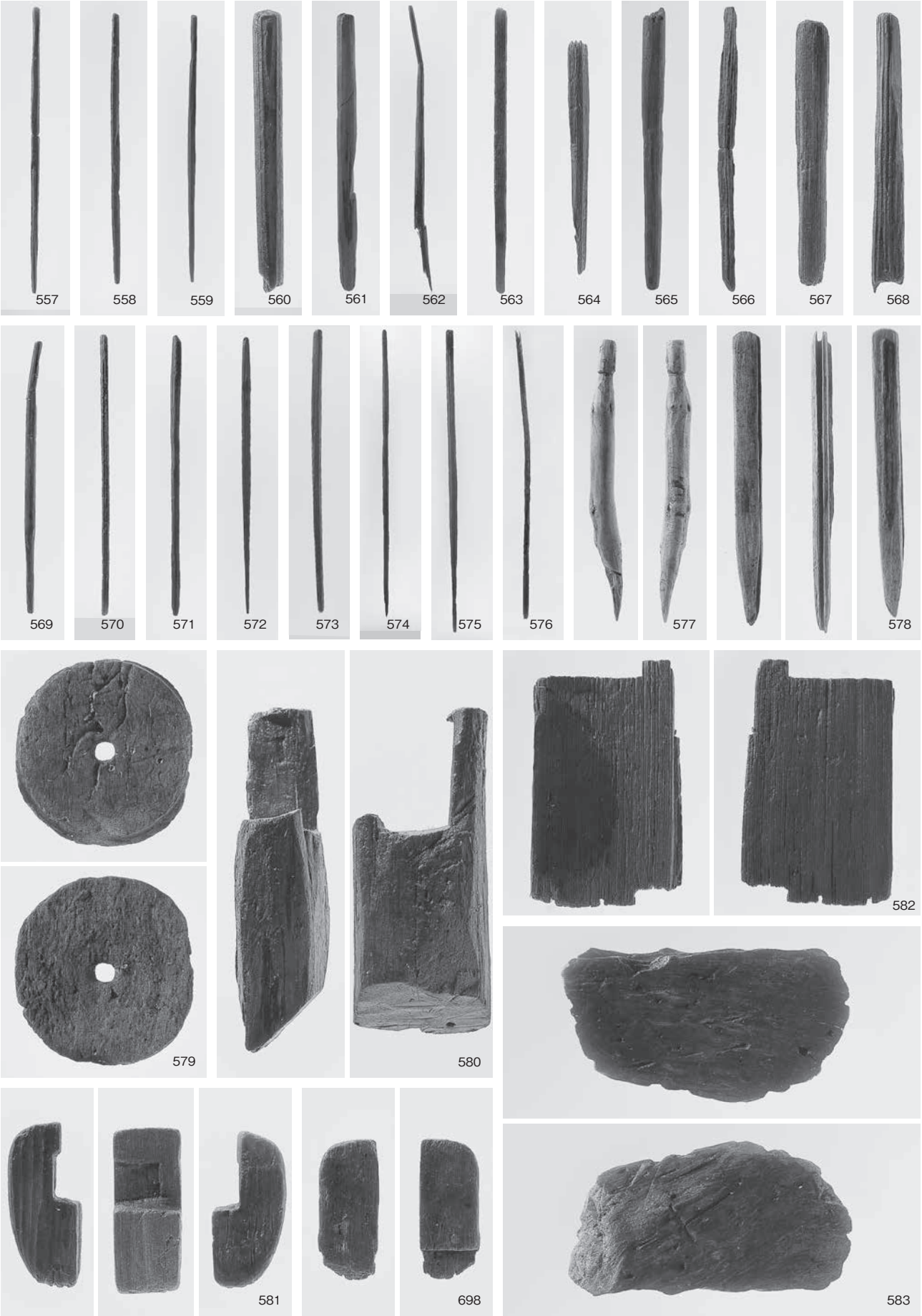
553

554

555

556

木製品（14）


557
558
559
560
561
562
563
564
565
566
567
568
569
570
571
572
573
574
575
576
577
578
579
580
581
582
583
698

木製品（15）

161

584

585

586

696

697

587

588

木製品（16）

589

590

591

592

699

700

木製品（17）

105

680

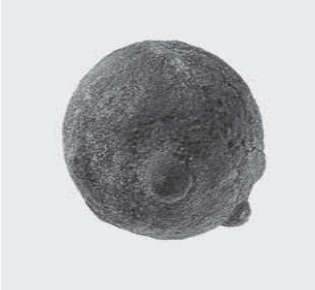
436

435

162

194

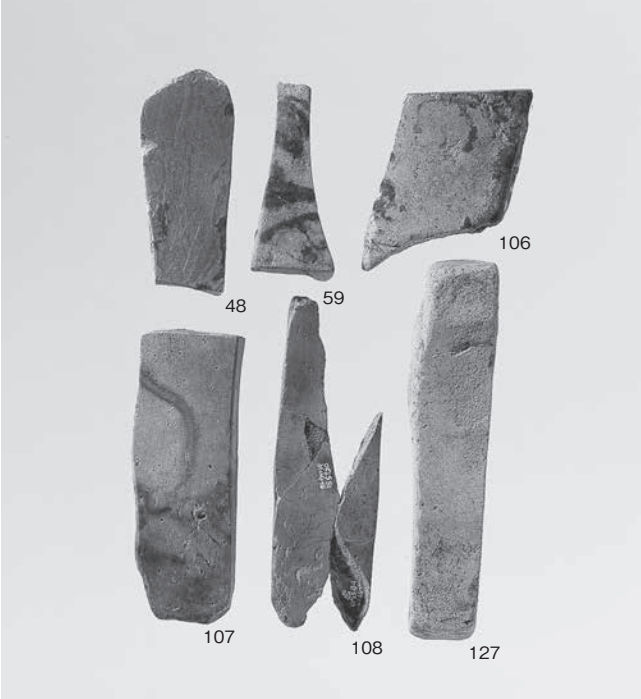
686



685

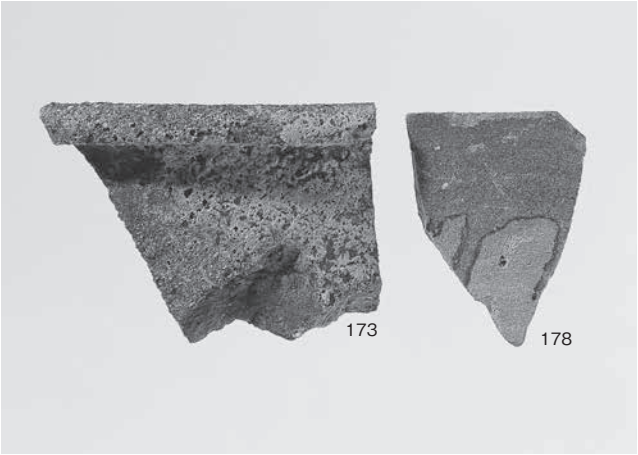
684

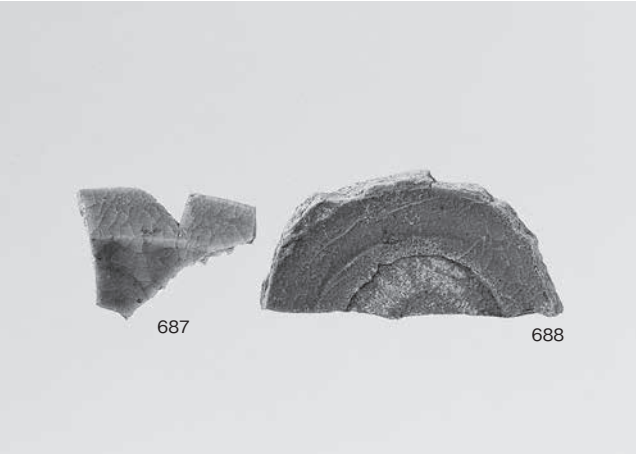
土製品、石製品

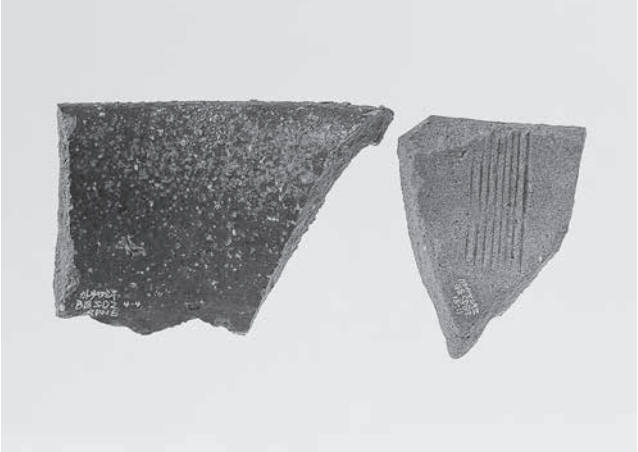


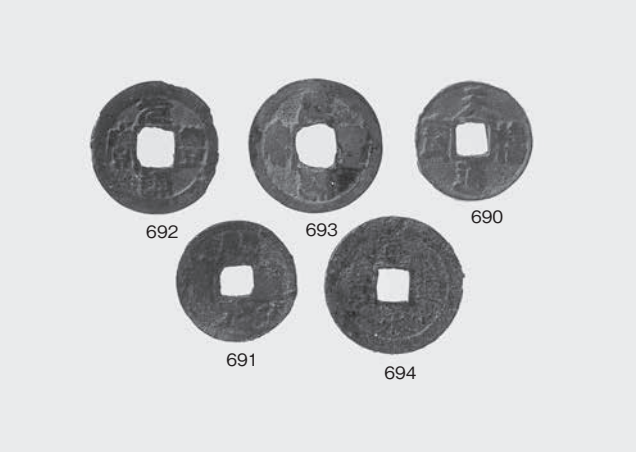
石臼、砥石（1）

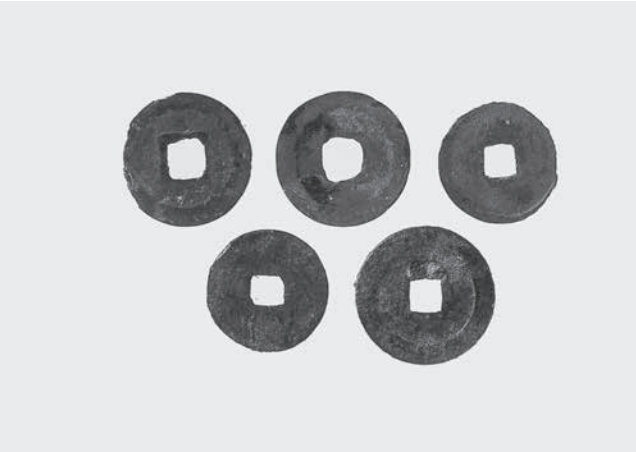
砥石（2）











陶磁器、金属製品、古銭

付　　編

加藤屋敷遺跡の墨書土器について

山形大学人文学部　三上喜孝

一　釈文

判読できた文字のうち、主要なものについて考察する。

（1）「物」

四点出土した。いずれも須恵器の底部外面に墨書されている。字形は四点とも同一である可能性がある。

（2）「主」

三点出土した。いずれも須恵器の底部外面に墨書されている。三点とも、横に広がる扁平な字形が特徴的である。

（3）「子鷹」

二点出土した。いずれも須恵器の体部外面に横位で墨書されている。同一人の筆による可能性がある。

（4）「大」

三点出土した。いずれも須恵器の底部外面に墨書されている。

（5）「中清」

一点出土した。須恵器の体部外面の二カ所に墨書されている。一方は倒位で、一方は横位である。

（6）「他田」

一点出土した。須恵器の蓋のつまみ部分に墨書されている。

（7）「王仁」

一点出土した。黒色土器の底部外面に墨書されている。

（8）その他

「若」「山」「井」「継」「㊐」などがある。

二　記載様式の特徴

次に、本遺跡出土の墨書土器の記載様式上の特徴について考察したい。

本遺跡出土の墨書土器で顕著な特徴は、同一文字の筆跡が同一であると考えられること、そして、同一の文字が同一の部位に記される傾向が強いことである。すなわち、同一の文字は同一人物により、同一の部位に記された可能性が高い。

多くは底部外面に書かれているが、体部外面に書かれているものもある。「子鷹」や「中清」がそれにあたるが、両者は、あるいは個人名をあらわしているのかも知れない。もしそうだとすれば、個人名を記す場合に体部に記すことが意識されていたと考えることもでき、墨書の内容と、部位には、一定の関連があるものととらえることができるであろう。

また、興味深いのは、「王仁」銘墨書土器である。これは、書き出しの「王」の文字が、底部外面の際（きわ）のところから書き始められている点が特徴的だが、この特徴は、同じ南陽市の庚壇遺跡の刻書土器の「王仁」と類似している特徴である（『山形県埋蔵文化財センター調査報告書第一六一集　庚壇遺跡発掘調査報告書』財団法人山形県埋蔵文化財センター、二〇〇七年）。出土遺跡が異なり、墨書と刻書という違いがあるにもかかわらず、同一の文字が類似した書かれ方をしている点は、注目すべきであろう。

三　文字内容に関する考察

次に、墨書土器の文字内容について考察したい。

八世紀から九世紀を中心に全国各地から出土する墨書土器に記されている文字は、実に多様である。地名や人名、内容物を記したものや、吉祥的な文字を記したものなどさまざまであるが、書かれている文字にどのような意味があるのか、あるいは、なぜその文字を記したのか、など、明らかでないものも多い。

本遺跡出土の墨書土器でまず明確にその意味がわかる文字内容としては、「他田」（須恵器蓋）がある。これは、「他田舎人」あるいは「他田部」というウジ名の一部を記したものであると考えられる。

他田舎人、他田部は、敏達天皇の訳語田幸玉宮の名にちなんだウジ名である。いずれも東国を中心に分布している。他田舎人は、信濃国の筑摩郡や小県郡で郡司層のウジ名として知られ、埴科郡家と推定される千曲市の屋代遺跡群出土の七世紀代の木簡にも、「他田舎人」のウジ名がみえる（『長野県屋代遺跡群出土木簡』（財）長野県埋蔵文化財センター、一九九六年）。他田部は、天平勝宝四年（七五二）十月の正倉院宝物黄絁に上野国新田郡の擬少領として「他田部君足」がみえるほか、秋田城跡出土木簡に「他田部粮万呂」（第一六号）がみえており（秋田城跡調査事務所『秋田城出土文字資料集Ⅱ』、一九九二年）、出羽国における分布が確認される。

このように、ウジ名の一部が墨書されている例がみられることからすると、「物」という墨書も、物部というウジ名の一字を記したものと推定される。「物部」も、出羽地域での分布が確認できるウジ名である。

興味深いのは「王仁」の墨書である。同じ字種が、南陽市の庚壇遺跡からも出土している（刻書土器）ことからすると、「王仁」は個人名というよりも、特定の集団をあらわしたものとみることができるであろう。周知のように『古事記』応神天皇条には、百済から『論語』や『千字文』を伝えた伝説上の人物として「王仁」の名がみえる。本遺跡にみえる「王仁」は、あるいはその後裔を称する渡来系氏族の集団であろうか。

四　まとめ

最後に、本遺跡出土の墨書土器の特徴を簡単にまとめておきたい。

（1）同一文字の筆跡や部位が同じである点が顕著な特徴である。

（2）集団名を記したと思われる墨書（他田、物、王仁など）から、当該地域における氏族集団の分布を知ることができる。

こうした特徴は、地域社会において「土器に墨書する行為」や「土器に墨書することの意味」を考える上で、有益な示唆を与えてくれるだろう。今後、類例を積み重ねることにより、こうした特徴の意味するところをさらに検討していく必要がある。

報告書抄録

ふ り が な	かとうやしきいせきだい１・２じはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	加藤屋敷遺跡第１・２次発掘調査報告書
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第179集
編著者名	氏家信行　伊藤純子
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒999-3161　山形県上山市弁天二丁目15番１号　TEL　023-672-5301
発行年月日	西暦2009年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
かとうやしきいせき 加藤屋敷遺跡	やまがたけん 山形県 なんようし 南陽市 おおあざかわとい 大字川樋 あざかとうやしき 字加藤屋敷	6213	平成17年度 登録	38° 09′ 24″	140° 19′ 30″	第１次調査 20060517 ～ 20061216 第２次調査 20070717 ～ 20070928	4400㎡ 1600㎡	一般国道13号 上山バイパス 改築事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
かとうやしきいせき 加藤屋敷遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居	1	縄文土器 石器	遺跡は縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代、中・近世の複合遺跡である。奈良・平安時代の竪穴住居６棟の他、多くの土器や木製品が出土した河川、方形に巡る溝、祭祀遺構が確認された。 遺物では、「物」、「主」、「子鷹」などの文字が書かれた墨書土器や木製品の椀、皿、曲物などが河川から多量に出土した。 （文化財認定箱数：181）
		古墳時代	周溝	1		
		奈良・平安時代	竪穴住居	6	須恵器	
			祭祀遺構	1	土師器	
			井戸	1	木製品	
			河川	1		
			土坑			
		中世	溝		陶磁器	
		近世	墓坑		陶器	
			溝		古銭	

要　　約	遺跡は、鷹戸山と岩部山に囲まれた緩やかな傾斜地に立地する縄文時代、古墳時代、奈良･平安時代、中・近世の複合遺跡である。 中央に石組の炉がある縄文時代後期末の竪穴住居や、古墳時代の可能性がある方形に巡る溝、奈良末から平安時代の竪穴住居や土坑、河川、溝、祭祀遺構などが確認され、河川からは多量の土器と木製品が出土した。また、墨書土器には、集団名を記したと思われる「他田」、「物」、「王仁」などがあり、氏族集団がいたことが窺える。但し、集落の中心は北西側の未調査区部分にあると考えられる。

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第179集

加藤屋敷遺跡第1・2次発掘調査報告書

2009年3月31日

発行　財団法人　山形県埋蔵文化財センター
〒999-3161　山形県上山市弁天二丁目15番1号
電話　023-672-5301
印刷　中央印刷株式会社
〒990-0051　山形県山形市銅町一丁目1番5号
電話　023-631-5533